

# 教育・研究年報

Annual Report

第 15 号

2020 年度

(令和 2 年 4 月～令和 3 年 3 月)



徳島文理大学 香川薬学部

Kagawa School of Pharmaceutical Sciences  
Tokushima Bunri University



## 香川薬学部年報第 15 号の発刊にあたって

徳島文理大学香川薬学部 学部長 宮澤 宏

令和 2 (2020) 年度は、新型コロナウイルスの世界的パンデミックにより、香川薬学部においても研究、教育、社会貢献に大きな制約を受けました。教育に関しては、4 月 2 週間の休講の後、6 月中旬まではオンライン授業で、それ以降は全て対面授業で行いました。

香川薬学部は、化学と生物学を基盤とする確かな知識、生命科学を基礎とする薬学的思考力、薬学人としての豊かな人間性と倫理観および柔軟な社会性を備えた人材（薬剤師）の育成を理念に掲げ平成 16 年 4 月に開設されました。平成 18 年 4 月には薬剤師養成のための薬学教育が 6 年制へ移行したことに伴い、6 年制の薬学科と 4 年制の薬科学科の 2 学科を併設し、新たに出発しました。そして、薬学科（6 年制）では、社会的要請に応えるべく、高度化する医療に対応できる高い資質を持つ薬剤師、疾病の予防と治療に貢献できる薬剤師を養成するために充実した医療薬学教育を行ってきています。薬科学科（4 年制）では、薬学的素養を身につけ社会のあらゆる分野で活躍できる多様な人材、特にサイエンティストとして基礎科学に貢献するとともにライフサイエンス領域で活躍できる人材の養成教育を行ってききましたが、平成 23 年度からは地域のニーズに合わせ、6 年制薬学科の 1 学科体制に変更しました。香川薬学部は、開設の理念を継承し研究マインドをもち、社会的要請に応えられる職業人を養成し、国民の健康増進に貢献できる多様な人材育成教育を行っていています。一方、研究体制の充実を図るために、平成 18 年 4 月、6 年制への移行に伴い香川薬学部附属研究所（神経科学研究所）が設置されました。

平成 19 年度に、開設以来、教育・研究、社会貢献に邁進してきた香川薬学部の活動を振り返り、教育、研究、大学管理運営、および社会貢献の観点から香川薬学部の活動を纏めた教育・研究年報を刊行しました。創刊号以来、令和 3 年に第 15 号を発刊する運びとなりました。香川薬学部内外との交流と活動の幅を広げるためにも有用と存じます。

年報 15 号から、冊子体での発行を取りやめ本学部ホームページ（[kp.bunri-u.ac.jp](http://kp.bunri-u.ac.jp)）でいつでもご覧いただけるように e-Book 形式にしました。香川薬学部の活動をご理解いただくとともにお気づきになった点やご意見やご要望を頂けましたらありがたく存じます。

令和 2 年 4 月に、一般社団法人 薬学教育評価機構（JABPE）による 6 年制薬学教育に対する薬学教育評価基準に「適合」と認定されました。



今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくごお願い申し上げます。

# 目次

香川薬学部年報第15号の発刊にあたって

学部長 宮澤 宏

I.	香川薬学部概況		
➤	沿革・組織	.....	1
➤	教育理念と現況	.....	3
➤	入学者選抜	.....	5
➤	授業科目 (学部・院)	.....	7
➤	主要諸元		
◇	主要機器リスト (中央機器室、講座別)		24
◇	施設面積、図書館、職員数、学生数		27
◇	外部資金獲得状況		29
II.	各講座・研究所の業績概況		
	1) 講座		
	解析化学講座	.....	31
	生命物理化学講座	.....	41
	生薬・天然物化学講座	.....	49
	薬化学講座	.....	57
	分子生物学講座	.....	61
	生体防御学講座	.....	69
	衛生薬学講座	.....	73
	薬理学講座	.....	77
	病態生理学講座	.....	81
	薬物治療学講座	.....	89
	薬物動態学講座	.....	93
	製剤学講座	.....	101
	医療薬学講座	.....	105
	薬学教育講座	.....	113
	中央機器室	.....	117
	神経科学研究所	.....	121
	社会貢献	.....	127
	人事異動	.....	129
	Annual Report (英語版)	.....	133

# I. 香川薬学部概況



## 沿 革

1895 (明治28年) 村崎サイ、徳島市に私立裁縫専修学校を創立

1966 (昭和41年) 徳島女子大学開設、家政学部設置

1968 (昭和43年) 音楽学部設置

1972 (昭和47年) 徳島文理大学と改称、薬学部設置

1983 (昭和58年) 香川県大川郡志度町に香川キャンパスを開学

文学部設置 (香川キャンパス)

1989 (平成元年) 工学部設置 (香川キャンパス)

1995 (平成7年) 学園創立百周年記念式典挙行

2000 (平成12年) 総合政策学部設置 (徳島キャンパス)

2004 (平成16年) 香川薬学部 創薬学科開設 (以下、香川薬学部の沿革)

10 講座体制でスタート、リサーチ アンド メディア ライブラリー (16号館) 4階に各教員室を置く、18号館2階・6階に共同研究室を設け、講義棟 (13号館) 1階に香川薬学部事務室を置く  
薬品倉庫の完成

2005 (平成17年) 大学院 香川薬学研究科 [博士課程] 設置

香川薬学部研究棟 (20号館)、実習棟 (21号館) 完成

中央機器室を研究棟2階に設置

ラジオアイソトープ (RI) 実験施設、実験動物研究施設設置

薬用植物園完成

学園創立110周年記念式典挙行

2006 (平成18年) 香川薬学部 薬学科 (6年制) 設置

香川薬学部 薬科学科 (4年制) 設置

模擬薬局を講義棟 (13号館) 5階に設置

神経科学研究所設置

2007 (平成19年) 神経科学研究所を4部門に拡充

2010 (平成22年) 大学院 香川薬学科薬科学専攻を設置

2012 (平成24年) 香川薬学部 薬学科のみの募集に変更

大学院薬学研究科 (4年制) 薬学専攻博士課程設置

2014 (平成26年) 香川薬学部開設10周年記念式典挙行

2015 (平成27年) 学園創立120周年記念式典挙行

2019 (令和元年) ラジオアイソトープ (RI) 実験施設廃止

2020 (令和2年) 学園創立125周年記念式典挙行

薬学教育評価機構 (JABPE) 6年制薬学教育評価基準「適合」認定



## 組 織

(2020年4月1日現在)

徳島文理大学 香川薬学部

薬学科

(2006年設置：新課程)

徳島文理大学 大学院

薬学研究科 薬学専攻 (2012年設置)

### 設置

医療薬学講座	(2004年4月)
生薬・天然物化学講座	(2004年4月)
解析化学講座	(2004年4月)
薬化学講座	(2016年4月)
生体防御学講座	(2005年5月)
薬物治療学講座	(2004年4月)
製剤学講座	(2006年4月)
薬学教育講座	(2012年4月)
分子生物学講座	(2004年4月)
衛生薬学講座	(2005年9月)
薬理学講座	(2004年4月)
生命物理化学講座	(2016年4月)
病態生理学講座	(2005年10月)
薬物動態学講座	(2006年9月)
神経科学研究所	(2006年4月)
中央機器室	(2004年4月)
薬用植物園	(2004年4月)
実験動物研究施設	(2005年4月)
事務室	



# 徳島文理大学香川薬学部の教育・研究

## I. 教育方針・目標

### 1. 香川薬学部

人間教育を基盤として、研究に基づく教育と教育に刺激された研究を通じて、社会的要請に対応する専門職業人の養成と、基礎科学の振興に貢献する人材の育成に努めることが大学薬学部に課せられた第一の使命である。

近年の医療に目を転じると、病気の診断・治療、医薬品の創製（創薬）など医療技術の急速な進展により、医療は新しい時代に入ったことは明白である。そこで、2004年4月の香川薬学部創設に当たっては、豊かな人間性と医療人・薬学人としての倫理観、使命感を携えて社会の中広い分野で活躍できる人材の育成教育を基本教育理念とした。具体的には新しい医療に対応できる高い専門性を備えた薬剤師でありながら、創薬、食品、化粧品、環境関連業種などのライフサイエンス領域で活躍できる人材養成を目的として創薬学科を開設した。

2006年に、現代の高度な薬物治療を担う力量のある薬剤師を養成するために、学校教育法の一部改正がなされ、薬剤師養成のための薬学教育についてはその修業年限が6年となった。そこで、香川薬学部薬学科（入学定員90名）においては6年間の薬剤師養成教育を行い、医療の担い手にふさわしい質の高い薬剤師（医療人）を養成し、時代の要請に応じていく。

また、薬学は習得学問領域が広く、ライフサイエンス分野の基礎を形成する。疾病の予防・治療の将来を展望すると、予防への取り組み強化は必然であり、予防すなわち広義での健康の維持が重要となる。ライフサイエンスは健康維持に関する基礎学問である。歴史的にみて、薬学習得者の、創薬を始めとするライフサイエンス領域（バイオ、食品、化粧品等）への貢献度が高いことを鑑みると、今後もライフサイエンス分野における職業人養成に関して、薬学部に対する社会的要請は必須であると考えられる。さらに、前述の如く、より高度な薬学研究者・技術者が基礎科学振興に重要な役割を果たしてきたことを考慮すると、それら研究者・技術者育成のための基礎を4年間で教育することも薬学部には課せられた使命である。こうした観点から、本学部の4年制薬科学科に於いては、専門性の高いライフサイエンス部門の人材養成を目指すとともに、創薬学科の精神を引き継ぎ、将来の薬学を担う研究者・技術者を養成していく。

### 2. 薬学科

薬のサイエンティストであり医療人である薬剤師の養成のため、一般教養、基礎薬学、医療薬学、実務実習の充実を大きな柱とする。

#### ① 一般教養の充実

薬剤師は医療チームの一員として患者と接する機会が従前に比べ飛躍的に増大する。患者への対応はヒューマニズムを基本とする。本学には文学部および音楽学部が配置されており、これらの学部と連携した教育と並行して、薬学概論、人間関係論、医療コミュニケーション入門、医療倫理学等医療の担い手としての心構えを教育し、人間性・社会性に富み、教養豊かな人格を備えた、倫理観・使命感に溢れた薬剤師を育成する。

#### ② 基礎薬学

薬学が薬という物質と生体との相互作用を研究する学問である以上、薬という物質、及び生体について熟知していなければならない。基礎薬学（物理系、化学系、生物系）は次節の医療薬学を充実させるための文字どおりの基礎、あるいは支えになるので、焦点を絞って（重点的に）行う。

#### ③ 医療薬学

##### (ア) 高度な医療

分子生物学、分子遺伝学、細胞生物学の進歩は、生物製剤の増加、遺伝子治療、再生医療等の高度の医療をもたらした。薬剤師はすべて、これらの領域の進歩をフォローできる力量を備えている必要がある。従って、本学部ではこれらの分野の教育・研究を充実させる。

##### (イ) 薬物治療

薬で正しく治療するためには、薬の作用について正しい理解が必須である。現在薬理学の分野においても分子レベルの研究が大勢を占めており、個体レベルでの研究者が払底しているのが現状である。そこで、特に個体動物を対象とする薬理学研究に従事する人材を育成する。さらに、個体レベルでの薬理作用の理解のもとに、実際の医療現場での薬物治療に関して医療チームの一員として、AMEDおよび適正な薬物使用、薬歴管理、薬害防止に関わる事項を、医療従事者とコミュニケーションができる実力が身につくような教育と研究（薬理学、分子薬理学、薬物動態学、薬物治療学、製剤学、臨床薬剤学、医薬品安全性学など）を充実させる。

#### ④ 実務実習

事前学習1ヶ月、薬局実習2.5ヶ月、病院実習2.5ヶ月、計6ヶ月の長期の実習を行うことにより、医療チームの一員としての薬剤師に必要な臨床知識（適正な薬物使用、薬歴管理、薬害防止に関わる事項、対話能力等）を会得させる。

#### ⑤ 薬事法規・規制

医薬品にはその性格上、様々な規制が存在する。医薬品の適正使用にはそれら規制の意味とそれに基づく行政について理解することが重要である。本学には総合政策学部が設置されており、同学部と連携して、医薬品に関する規則や、公共政策に関する教育・研究を推進する。

## II. 教育課程の編成の考え方・特色

### 1. 教育課程編成の考え方

薬学科のカリキュラムは6年制教育に対応した「薬学教育モデル・コアカリキュラム」に厳密に準拠し、科目編成を行った。

- ① 充実した長期実務実習（事前学習、病院および薬局実習）教育を行う。
- ② 卒業後も一生学び、生命科学、医療技術の最新の進歩をフォローできる基礎学力の身に付いた薬剤師を養成する。
- ③ 医療現場で医療チームの一員として全ての医療スタッフと対話できる薬剤師を養成する。
- ④ 医療現場あるいは薬局で患者とスムーズな対話ができる薬剤師を養成する。
- ⑤ 文学部、音楽学部と連携して豊かな情操教育を行い、ヒューマニズムに溢れた薬剤師を養成する。
- ⑥ 医薬品には様々な規制・基準があり、これらは公共政策学において取り扱われるものである。総合政策学部との連携により、この分野の教育を充実させる。

### 2. 教育課程の特色

- ① 一般教養、医療薬学、実務実習教育を充実させることにより、質の高い薬剤師を養成することを目的とする。
- ② 総合政策学部との連携により、薬事行政に関する教育を充実させることができる。
- ③ 総合大学であることの利点は、文学部や音楽学部と連携することによって、一般総合科目教育を充実させることが可能となる点である。このことは薬剤師に必要な人間性・社会性を涵養するために大きな利点となる。
- ④ 実務実習は調整機構を介することにより、医療の担い手に相応しい薬剤師に必要な臨床知識習得を、適切かつ公平に医療機関、薬局と緊密に連携することで達成する。

### 3. 教育方法および履修指導方法

- ① 薬学は物質科学から生命科学に亘る広い基礎知識を必要とするが、ほとんどの入学生が高等学校において、理科は2科目しか履修していない。また、数学の学力が不十分な学生も多い。そこで、1年次に数学、物理学、化学、生物学の講義を充実させる。
- ② 2年次、3年次では、午前中は講義、午後は実習を中心に行うこととし、講義で得た知識を実験により体得させ、理解を深めるものとする。
- ③ 4年次は、医療系科目の授業と事前学習を行う。事前学習は、実務実習モデル・コアカリキュラムの内容を修得させ、さらにコミュニケーションスキルの上達に努め、病院・薬局実習に備える。
- ④ 5・6年次には、「大学と実習施設との連携体制整備計画」にしたがって病院・薬局実習を実施し、また、特別実習で専門的な研究に従事することにより、薬学の知識を深化させる。なお、実務実習については、病院薬局実務実習中国・四国地区調整機構を通して実施する。

## 入学者選抜

香川薬学部では、多様な受験生に対応できるよう、令和3年度入試（令和2年度実施）においても、さまざまな入試メニューを用意し、志願者の募集にあたっている。

### (1) アドミッション・ポリシー

「2013年度入学試験要項」に記載する香川薬学部のアドミッション・ポリシーを以下のように改訂した。

「今日の高度に専門化が進んだ医療に携わる薬剤師には、専門職としての薬および病気についての深い知識だけではなく、患者に寄り添う豊かな人間性が強く求められています。香川薬学部では、先進的なチーム医療において「薬のスペシャリスト（専門家）」として貢献でき、病気の苦しみを理解して医療にあたることのできる薬剤師を養成します。このために、本学の建学精神である自立協同を土台として、基礎および専門科目の十分な学力、優れた問題解決力、共感力に富んだコミュニケーション力を習得できるよう、医療 IT 技術を活用した少人数グループによる教育をおこないます。このような高い学識、技能と医療の心を身につけ、地域に密着して活躍する薬剤師を目指すため、意欲・探求心が旺盛で明朗な人材を求めます。」

### 求める学生像

香川薬学部は、以下のように薬と身体のしくみについて旺盛な好奇心を持ち、少人数グループ学習に必要な協調性と気配りを身につけた、明朗で健やかな学生を求めています。

- 1) 病院や薬局で薬剤師として活躍したい人
- 2) 地域の人々の健康をまもることで社会に貢献したいと考えている人
- 3) 難病の治療薬を開発してみたいという夢や意欲のある人
- 4) 身体のしくみを学び、薬の効き方を知ることに関心がある人
- 5) 化学や生物などの実験に関心があり、「なぜ、どうして」の質問ができる人
- 6) 周囲からの助言を受け入れ、共に学び、目標に向けて努力を続け、達成することに喜びを感じることでできる人

### (2)入試制度の変更点

- 1) 香川薬学部・薬学科の試験区分定員を以下のように変更した。  
(AO 10→5名、推薦 25→20名、一般入試 I期 A・B20→30名、その他の区分は変更なしで定員 90名、平成 28年度から実施)
- 2) 香川薬学部・薬科学科の募集停止（平成 24年度より）
- 3) 特待生入試要項の変更（平成 23年度より）  
一般入試 I期 A 日程入試および大学入試センター試験利用入試 I期の成績優秀者各 3名を特待生候補とする。
- 4) 地域貢献特待生入試要項の変更（平成 24年度より）  
指定した地域（香川・高知・愛媛・岡山・兵庫・広島・島根・鳥取・山口・鹿児島県）からの志願者で、大学入試センター試験の成績優秀者（14→10名へ変更）を地域貢献特待生として選考する。
- 5) AO入試のエントリー期間を I期から VI期に区切って句切って募集することとなった（平成 26年度より）  
また、平成 28年度から学力把握方法として、出身学校長作成の調査書の全体の評定平均値が 3.6以上あるいは、「理科」、「数学」のいずれかが 3.8以上であること

とした。

### (3)各試験区分の状況

#### 1) 総合型選抜入試（募集人員は 10）

本年度実施する本入試は、従来の AO 入試を発展させたもので、体験型、作文型および資格利用型からなる。志願者へ事前に送付の薬学・生命科学関連の新聞記事から選択したテーマについてのプレゼンテーションと質疑応答や、教員の指導の下に化学実験とそのまとめに取り組むなかで、従来の入試とは異なり、時間をかけて薬学を志す意志を相互に確認し入学への合意形成を目指した。学力把握のためには、面談や実験における口頭試験結果や出願時に提出される調査書などを利用している。合格者に対しては、よりスムーズに大学教育に順応してもらうため、AO 入試導入時から、いわゆる「入学前教育」を実施している。今年度は各人に化学・生物・数学の高校教科書と問題集を送り、毎月レポートの提出を求めている。科目別に担当する教員を決め、提出物には指導上のコメントを付して返却している。

さらにスクーリングも 2 回実施する計画である。昨年度は多くの対象者の参加を得て、生命科学関連の記事についてのプレゼンテーションとグループディスカッションや入学後に備えた模擬授業、履修指導、在校生・卒業生との懇談などを行った。

#### 2) 指定校制推薦入試（専願で、募集人員は学校推薦型選抜として薬学科 20）

20年度入試から、薬学科については志願者に求める高等学校全科目または理科の評定平均値を変更するとともに、薬科学科でも特別推薦入試を開始した。出願資格等の詳細は、該当する高等学校に通知している。

合格者には、**総合型選抜**入試合格者と同じ「入学前教育」を行っている。

#### 3) 公募制推薦入試 I期、II期（募集人員は学校推薦型選抜として薬学科 20）

香川薬学部では 21年度から II期にも参入し徳島キャンパス薬学部と同じ時間帯に実施している。I期のほうは、従来薬学部と二日続きの異なる日に選考していたが、一昨年度から同じ日の午前（薬学部）と午後（本学部）に分かれての実施に変更された。

II期の選考科目は（20年度入試で変更した）I期と同じ 1科目にしぼり、「化学 I、II」「生物 I、II」「英語 I、II」の 3科目のうちから 1科目選択とした。これに加えて面接を行なった。出願条件のうち、高等学校全科目の評定平均値は、全学共通で 3.0以上である。

（平成 19年度までは、薬学部と同じで、英語・化学の 2科目と面接を課していた。）

選択科目に生物を加えた理由は、化学と生物が、化学物質である薬品と、ヒトへの薬品の作用を扱う薬学の基礎となるいわば両輪であり、化学が得意な人だけでなく生物の得意な人にも門戸を広げるためである。

また、英語だけでも受験できるようにした理由は、一般には中学校から学び始める英語の修得状況は、他の科目に対する取り組み方や勉強習慣をみる指標になりうるとの判断にもとづき、薬剤師や薬学関係の業務に従事する場合に必要な読解力や表現力、患者や他の医療スタッフ、顧客とのコミュニケーション能力などを重視し、文系の力を備えた方にも門戸を広げたいからである。

（このような方については、入学後、化学・生物学・物理学などの理系科目は、授業と補講により、2 年次

になるときは薬学教育に必要なレベルに到達できるような教育支援体制を整えている。

合格者で入学手続きした者も、前述の「入学前教育」の対象としている。

#### 4) 一般入試・I期 A 日程、B 日程（募集人員は一般選抜の一般として薬学科 35）

平成 20 年度入試から試験科目を 3 科目から 2 科目にしていたが、令和 3 年度入試から、A 日程の試験科目を 3 科目とした。

A 日程では「化学 I、II」、「英語 I、II」および「数学 I・A、数学 II・B」の合計 3 科目、

B 日程では「英語 I、II」または「数学 I・A、数学 II・B」から選択、「化学 I、II」または「生物 I、II」のどちらかを選択して合計 2 科目とした。

（平成 19 年度までは、薬学部と同じで、英語・数学・化学の 3 科目を課していた。）

薬学における基礎学力として求められる化学の重要性はいうまでもないが、B 日程で、選択科目に生物を新規導入し、英語を必修扱いたしたのは、(3) に記したように、読解力、表現力、コミュニケーション能力を重視し、なおかつ薬学基礎の両輪である化学と生物（薬とヒトへの薬の作用）にも素養のある人を募集するため、A、B 両日程で異なる層の受験生の志願を期待した。

22 年度入試から特待生制度が始まり、I 期 A 日程およびセンター試験利用入試 I 期の薬学科受験者が特待生選考試験へエントリーできることとなった。

#### 5) 一般入試・II 期、III 期（募集人員は一般選抜の一般として薬学科 35）

試験日が異なるほか、II 期では「化学 I、II」が必修で、ほかに「英語 I、II」または「数学 I・A、数学 II・B」の合計 2 科目、III 期では「英語 I、II」または「数学 I・A、数学 II・B」から選択、「化学 I、II」または「生物 I、II」のどちらかを選択して合計 2 科目とした。

#### 6) 大学入学共通テスト利用入試（募集人員は、一般選抜の大学入学共通テスト利用として薬学科が 25）

本年度より実施の大学入学共通テスト利用入試では、I 期は数学・理科必須、国語または外国語の高得点 1 科目の計 3 科目とした。II および III 期はこれまでの高得点上位 2 科目とし、国語または外国語の採用はどちらかとする旨記載した。

大学入試センター試験で解答を指定する教科・科目を、21 年度入試から国語（近代以降の文章）、「数学 I・数学 A」、「数学 II・数学 B」、「物理 I」、「化学 I」、「生物 I」、「英語」（リスニングを含む）の 7 科目から高得点の 2 科目利用に変更した。各科目を 200 点満点とし、合計 400 点満点である。

指定科目に国語を加えたのは、(3)、(4) に述べたように読解力、表現力、コミュニケーション能力を重視し、

文系の力を備えた方にも門戸を広げたいからである。（従来は「数学 I・数学 A」、「数学 II・数学 B」および理科が「物理 I」、「化学 I」、「生物 I」から 1 科目、「英語」（リスニングを除く）の 3 教科、4 科目で、各教科を 200 点満点とし、合計 600 点満点であった。）

20 年度 III 期が新設され、センター試験利用で 3 回出願機会があるほか、直近過年度 3 年間のセンター試験の成績も利用できるようになった。

21 年度入試から、指定した地域の受験生で、センター試験において指定した科目の合計点が基準を超える受験生は、地域貢献特待生入学試験にエントリーできることとなった。

#### 7) 社会人入試（募集人員は若干名）

大学を卒業後、社会人として働いているが、薬剤師になりたいと強く希望する人に門戸を開くため、本学部でも 20 年度入試で新設した。出願資格は、平成 23 年 3 月末日に満 22 歳以上になり、高等学校卒業またはそれに準じる者で、試験科目は小論文と面接である。

20 年度の社会人入試で入学の 7 名や 21 年度の 2 名、22 年度の 3 名は、年齢、経歴、出身大学の専攻などがさまざまだったが、いずれも意欲的に勉学に勤しんで好成績を挙げており、高校を卒業したばかりの新入生に好影響を与えている。25 年度の社会人入試の入学者は 4 名、26 年度は 1 名、27 年度は 0 名、28 年度は 1 名だった。

#### 8) 編入学試験

香川薬学部では、平成 20 年度に「第 3 年次編入学」を新設し、学科の専門に関する小論文と面接により選考した。

21 年度からは、編入学の対象年次を 3 年次以外に薬学科 2 年と薬学科 4 年にも拡大し、医療系や理工系の学部や専修学校で学んだ者や、薬学部の 4 年制学科からの編入を受け入れられるようにした。21 年度は 2 年へ 4 名、4 年へ 1 名が、22 年度は 2 年へ 5 名、3 年へ 2 名、4 年へ 5 名が編入学した。24 年度は 2 年へ 2 名、3 年へ 2 名、4 年へ 1 名が編入学した。25 年度には 2 年へ 6 名、3 年へ 3 名、4 年へ 3 名が編入学した。26 年度には、26 年度には 2 年へ 3 名、4 年へ 2 名編入学した。27 年度は 2 年へ 1 名、3 年に 1 名、4 年に 1 名が編入学した。28 年度は 2 年次後期に 1 名が編入学した。薬学部へ進路変更を希望する多様な学生を受け入れている。

#### 9) 帰国生入試と外国人留学生入試（募集人員は若干名）

これまで本学部へは帰国生入試と外国人留学生入試（試験科目はどちらも小論文と面接）の出願はなかったが、23 年度入試で初めて帰国生入試 II 期で薬科学科へ 1 名の出願があった。

以上のように、さまざまな入試日程を設けることにより、本学部へ有為で多彩な人材を迎え入れようとしている。

## 香川薬学部 令和2年度 授業科目一覧

### 薬学科 (1～2年)

講義科目名	単位数	学年	担当教員	科目内容
文理学	2 必修	1年 前期	岸本泰司、桐山賀充 窪田剛志、喜納克仁 得丸博史	「建学の精神」を深く理解し、大学教育を円滑に受けることができるために必要な基礎的な学習技術を修得する。
薬学概論	1 必修	1年 前期	加藤善久他、外部講師	薬学の歴史や薬学と社会の関わりを学び、薬学科と薬科学科における学習の意義を理解する。また、早期体験学習により、薬学専門職のイメージを得る。
薬剤師の心構え	0.5 必修	1年 前期	池田博昭、飯原なおみ 中妻章他	医療人として薬剤師に求められる基本的な資質について学ぶ。
アカデミックスキル	0.5 必修	1年 前期	岸本泰司、竹内一 植木正二、大島隆幸 桐山賀充、窪田剛志	大学教育を受けるために必要な基礎的な学習技術（アカデミック・スキル）を身につけ、円滑に大学教育を受けることができるようにする。
人間関係論	1 必修	1年 後期	原田耕太郎	集団心理学の知見に基づいて、成員の集団活動への適応や集団活動の生産性に関する基本的事項を理解する。
薬学数学入門	0.5 選択	1年 前期	桐山賀充	薬学に必要な最低限の数学（計算方法）を身につける。
物理化学1	1 必修	1年 後期	岸本泰司、窪田剛志	熱力学、化学平衡、相平衡の主要概念を理解し、これらの現象を論理的に説明できる能力を習得する。
基礎有機化学1	1 必修	1年 後期	藤島利江	有機化学の基本的な理論、構造の表記法とともに、オクテット則、分極、共鳴などを基礎に、有機反応について学ぶ。
基礎有機化学2	1 必修	1年 後期	富永昌英	官能基の性質と反応を学び、医薬品の溶解性、品質確保のための試験、代謝、配合変化等の有機化学的基礎を身につける。
薬用資源学	1 選択	1年 後期	代田 修	生薬学、天然物化学の基礎として、植物の形態から分類体系を学び、「種」の認識を明確にする。
細胞生物学	1 必修	1年 後期	定本久世	多細胞生物における高次の生体现象として、細胞間の相互作用と制御、及びその分

講義科目名	単位数	学年	担当教員	科目内容
				子機序を詳細に学ぶ。
生理学	1 必修	1年 後期	富永貴志	薬学教育過程に必要な人体の基本的な機能を理解する。
生化学 1	1 必修	1年 後期	大島隆幸	生体を構成するタンパク質と糖質についてその構造と機能を学び、エネルギーの観点から糖質の代謝を理解する。
早期体験学習	1 必修	1年 後期	池田博昭、大岡嘉治 二宮昌樹、竹内一 松尾 平、中島健太郎 森川雅行	薬剤師が働く現場を見聞し、薬剤師の仕事の概要を理解するとともに、将来、薬剤師として医療を担う心構えと態度を養う。
特別実習 1	0.5 選択	1年 後期	香川薬学部全教員	興味を持った研究室を1つ選び、講義のない時間や長期休暇を利用して研究活動に触れる。
基礎薬学演習 1	1 必修	1年 後期	岸本泰司、大島隆幸 窪田剛志、小原一朗 代田修、富永昌英 富永貴志、定元久世 松尾平	1年次の有機系講義内容を定着させ、かつ理解を深める目的で演習を実施する。
エクスペリメントスキル	0.5 必修	1年 後期	白畑孝明、窪田剛志 桐山賀充、小林 卓	モル濃度の計算や溶液の基本的性質を理解し、実際の生理食塩水の調製を行うことで、種々の実験器具・測定装置の用途や使用法を学ぶ。さらに、一連の実験を通して、数値データの取り扱い、客観的な図表の作成、論理的な文章（レポート）作成ができるようになる。
実践社会福祉	1 選択	1～6年 通年	加藤善久	社会貢献活動、災害や介護などのボランティア、薬物乱用などの啓蒙活動への参加などを通じて見識を高め、国民の健康増進における薬剤師が果たす役割と使命感について学ぶ。
医療倫理学	1 必修	2年 後期	立山善康	生命の尊さを認識し、人の誕生から死までの間に起こりうる出来事を医療の立場から対応するための倫理的基盤を学ぶ。

講義科目名	単位数	学年	担当教員	科目内容
医療コミュニケーション学	1 必修	2年 前期	原田耕太郎	コミュニケーションを他者への影響力行使の手段と捉え、その基本的構造と代表的な理論について学ぶ。
薬剤師への招待	1 選択	2～3年 通年	加藤善久	教員が指定した医療に関する様々な研修会・講演会について、興味がある研修会・講演会を選んで参加する。
地域医療学1	0.5 必修	2年 後期	森 久美子、池田博昭	地域医療における薬局の役割について学習する。
地域医療学2	0.5 必修	2年 後期	芳地 一、池田博昭	地域医療における保健・福祉分野で活動する薬剤師の役割について学習する。
物理化学2	1 必修	2年 後期	植木正二	溶液の束一的性質、および反応速度論について学ぶ。
分析化学1	1 必修	2年 前期	小原一朗	物理系薬学のうち、分析化学の基礎となる酸・塩基平衡をはじめとした各種平衡、定性・定量分析を学習する。
分析化学2	1 必修	2年 前期	山口健太郎	分光学とその物理化学的基礎的事項およびこれに基づく分析法、さらに各種分析機器について理解する。
分析化学3	1 必修	2年 後期	山口健太郎	質量分析、NMR解析およびX線解析に特化して手法を学び、これら3種類の大型機器による構造決定法を理解する。
生物物理学	1 選択	2年 後期	岸本泰司	溶液の化学、電解質、電池、モル伝導率、コロイド、界面などの現象について理解し、論理的に説明できる。
有機化学1	1.5 必修	2年 前期	富永昌英	有機化学の基本的な理論、立体構造とその表記法、脂肪族および芳香族化合物の性質、官能基の反応性について学ぶ。
有機化学2	1.5 必修	2年 後期	富永昌英	カルボニル化合物、カルボン酸誘導体に関わる代表的な反応や芳香族化合物の反応性を決める理論について学ぶ。
生薬学	1.5 必修	2年 前期	代田 修	医薬品として用いられる動物・植物・鉱物由来の生薬を理解するために、その基原、性状、成分、有効性と安全性、品質評価、歴史的背景などについて学ぶ。

講義科目名	単位数	学年	担当教員	科目内容
天然物化学	1 必修	2年 後期	代田 修	医薬品のリード化合物として有用な天然有機化合物について、化学構造、起源、生合成、薬理作用などを学ぶ。
生化学 2	1.5 必修	2年 前期	喜納克仁	物理化学・有機化学と関連させながら、生体内エネルギーの獲得と消費、及び生体内の構成成分の合成と消費（分解）について学ぶ。
分子生物学	1 必修	2年 後期	宮澤 宏、小林隆信	生命の設計図である遺伝子の構造・複製・転写・翻訳を学び、生命現象を分子レベルで説明する手法を理解する。
微生物学	1.5 必修	2年 前期	大島隆幸	主な微生物の生活環、分類、構造と機能、代謝や遺伝様式、ウイルスを中心とした感染症全般について理解する。
衛生薬学 1	1 必修	2年 後期	野地裕美	人間集団としての社会を対象として、疾病を予防し、健康レベルを向上させる方法や概念を理解する。
衛生薬学 2	1 必修	2年 後期	竹内 一	食品に含まれている栄養素の種類と代謝、生理機能など、栄養化学や食品化学についての基本的知識を理解・習得すると共に、食品衛生についての知識を習得する。
基礎薬理学	1 必修	2年 前期	得丸博史	医薬品の特性とその働きを理解するために、必要な知識（医薬品の作用点、作用機序）について学習する。
治療薬学 1	1 必修	2年 前期	得丸博史	医薬品の特性とその働きを理解するために、薬理学・薬物治療学について学ぶ。
治療薬学 2	1.5 必修	2年 後期	山田麻紀、得丸博史	呼吸器、腎泌尿器、消化器の構造と機能、これらの器官の代表疾患の病態生理、病理像およびその治療に用いられる薬物の作用、治療上の問題点について学ぶ。
医薬品情報学	1 必修	2年 後期	飯原なおみ、岡田岳人	薬物治療に必要な情報の種類及びそれら情報の使用、評価、伝達、創出の基本的知識及び技法について学ぶ。
救急医療学	0.5 必修	2年 後期	中妻 章、二宮昌樹	災害時において、薬剤師の果たす役割とはなにか、東日本大震災などの過去の事例から学ぶ。



講義科目名	単位数	学年	担当教員	科目内容
特別実習 2	0.5 選択	2年 前期	香川薬学部全教員	興味を持った研究室を1つ選び、講義のない時間や長期休暇を利用して研究活動に触れる。
特別実習 3	0.5 選択	2年 後期	香川薬学部全教員	興味を持った研究室を1つ選び、講義のない時間や長期休暇を利用して研究活動に触れる。
基礎薬学演習 2	1 選択	2年 前期	山口健太郎、代田 修 得丸博史、大島隆幸 富永昌英、喜納克仁 小原一朗	分析化学 1、分析化学 2、有機化学 1、生薬学、生化学 2、微生物学、基礎薬理学、治療薬学 1 の演習を実施する。
基礎薬学演習 3	1 必修	2年 前期	宮澤 宏、山口健太郎 代田 修、得丸博史 野地裕美、山田麻紀 飯原なおみ、富永昌英 竹内 一、植木正二 小林隆信	分析化学 3、有機化学 2、天然物化学、分子生物学、衛生薬学 1、衛生薬学 2、治療薬学 2、医薬品情報学の演習を実施する。
物理・化学実習	1.5 必修	2年 前期	岸本泰司、藤島利江 植木正二、窪田剛志 森川雅行、中島健太郎	薬学において基盤となる物理・化学について、実習を通じて学ぶ。
生薬学実習	1 必修	2年 前期	代田 修	生薬の形態観察、日本薬局方の各試験、成分の分離精製、漢方薬の調剤により、生薬・漢方薬の理解を深める。
分析化学実習	1.5 必修	2年 後期	山口健太郎、富永昌英 小原一朗	有機分析に必須とされる各分析機器の原理と取扱や各種スペクトルデータの解析について知識を深める。
生化学・ 微生物学実習	1.5 必修	2年 後期	宮澤 宏、喜納克仁 大島隆幸、小林隆信	前半ではグラム染色、生化学的試験、遺伝学的解析によって菌種を同定する方法について学ぶ。後半では遺伝子が複製増幅されるしくみとプラスミドの発現のしくみを実体験する。

薬学科 (3~4年)

講義科目名	単位数	学年	担当教員	科目内容
地域医療学 3	0.5 必修	3年 前期	池田博昭、二宮昌樹 中妻 章、多田羅勝義	医療従事者として、地域医療の制度、仕組みを正しく理解し、チーム医療の一員として積極的に関わる薬剤師としての知識、技能、態度を習得する。
放射線科学	1 必修	3年 前期	喜納克仁	放射線や放射線を放出する放射性同位体について、物理的・化学的基礎、医学・薬学への応用、生物への影響などを理解する。
多角的物理化学 演習	1 必修	3年 後期	山口健太郎、岸本泰司 植木正二、小原一朗	これまでに習った物理系薬学に関する各項目の知識を総合的に活かすようになるため、基礎的な問題から発展的な問題まで多くの関連した演習問題を解く。
有機化学 3	1 必修	3年 前期	藤島利江	化学系薬学の基礎となる有機化学について学習する。
医薬化学	1 必修	3年 後期	藤島利江	医薬品の開発過程および医薬品（作用薬）の基本構造やそれらの作用機序の概略を有機化学的視点から概説し、生体と医薬品との相互作用の基本的知識を理解する。
有機化学演習	1 選択	3年 後期	藤島利江、代田 修 富永昌英、植木正二	化学・有機化学系科目の演習を実施する。
免疫学	1.5 必修	3年 前期	中妻 彩	免疫系の基本的事項を修得し、さらに、免疫系が関わる疾患や、免疫反応の臨床応用に関する基本的事項を修得する。
生体機能演習	1 必修	3年 後期	宮澤 宏、喜納克仁 富永貴志、大島隆幸 定本久世、松尾 平 中妻 彩	これまでに学習した生物系薬学に関する各項目の知識を総合的に活かすことができるようになるために、基礎的な問題から発展的な問題まで多くの演習問題を解く。
衛生薬学 3	1.5 必修	3年 前期	大岡嘉治	衛生薬学のうち、水、空気環境汚染の評価方法、および地球規模の環境問題の現状について学ぶ。
衛生薬学 4	1 必修	3年 後期	野地裕美	有害生物や化学物質による食品汚染が、ヒトの健康に及ぼす影響を理解し、食品衛生に関する知識を習得する。
治療薬学 3	1	3年	山田麻紀、池田博昭	循環器および血液疾患、感覚器に関連する

講義科目名	単位数	学年	担当教員	科目内容
	必修	前期		疾患治療薬について柔軟に応用可能な深い知識を身につける。
治療薬学 4	1 必修	3年 後期	大岡嘉治	3年生前期で学んだ免疫学の基礎に立脚し、その発展としての現代免疫学について学ぶ。
治療薬学 5	1 必修	3年 後期	伊藤康一	精神・神経系疾患に関する代表的疾病の代表的薬物治療法について理解する。
治療薬学 6	1 必修	3年 後期	松尾 平	代謝性疾患、内分泌系疾患、骨関節疾患、バイオ医薬品について理解する。
感染症治療学	1 必修	3年 前期	宮澤 宏	感染症や悪性腫瘍に対する薬物治療を扱い、薬物の作用機序・適用・副作用および薬剤耐性の問題を理解する。
東洋医学概論	1 必修	3年 前期	代田 修	東洋医学、特に現代の医療の現場で広く用いられている漢方医学・漢方処方について基礎的理解を得るために、歴史、診断・治療、方剤学、疾患と漢方処方、使用上の注意について理解する。
治療薬学演習 1	1.5 必修	3年 後期	山田麻紀、得丸博史 池田博昭、大岡嘉治 伊藤康一、松尾 平	治療薬学 1～6 で学んだ知識を復習し、応用力や問題解決のための力をつけるため、演習問題を自力で解くことを中心に実施する。
生物統計学	1 必修	3年 前期	岸本泰司	医薬品開発、薬剤疫学、薬剤経済学などの領域において、プロトコル立案、データ解析、および評価に必要となる統計学の諸技能を習得することを目的とする。
薬剤学 1	1.5 必修	3年 前期	加藤善久	吸収、分布、代謝、排泄の各過程および薬物動態学的相互作用に関する基本的事項を修得する。
薬剤学 2	1.5 必修	3年 後期	加藤善久、跡部一孝	薬物の生体内運命を理解し、個々の患者の投与設計ができるようになるために、薬物の体内動態およびその解析に関する基本的知識を修得し、それらを応用する基本的技能を身につける。

講義科目名	単位数	学年	担当教員	科目内容
製剤学 1	1.5 必修	3年 前期	徳村忠一	活性のある“化合物”を、疾病の予防・治療に役立つ“医薬品”とするために必要な製剤学の基礎を学ぶ。
製剤学 2	1 必修	3年 後期	徳村忠一	製剤製造法、各種剤形の概要、ドラッグデリバリーシステムなどを学び、「製剤学 1」と併せて製剤学全体をカバーする。
調剤学	1 必修	3年 前期	二宮昌樹、池田博昭 中妻 章、岡田岳人	講義、演習、実習により、病院・薬局で行われている調剤業務の基礎知識、技能を習得する。
医薬品安全性学	1.5 必修	3年 後期	二宮昌樹	医薬品の安全性を評価し、適正使用ができることを目的に、有害作用の発現機序を理解する。
特別実習 4	1 選択	3年 前期	香川薬学部全教員	興味を持った研究室を1つ選び、講義のない時間や長期休暇を利用して研究活動に触れる。
特別実習 5	1 選択	3年 後期	香川薬学部全教員	興味を持った研究室を1つ選び、講義のない時間や長期休暇を利用して研究活動に触れる。
基礎薬学演習 4	1 選択	3年 前期	喜納克仁、藤島利江 代田 修、中妻 彩 大岡嘉治、山田麻紀 宮澤 宏、岸本泰司 加藤善久、徳村忠一	2年次及び3年次の講義で学んだ知識を定着させ、より一層理解を深めることを目的として、演習を実施する。
衛生・免疫実習	1.5 必修	3年 前期	野地裕美、大岡嘉治 竹内 一、桐山賀充 中妻 彩	抗原抗体反応などの免疫反応を利用したアッセイ法の技術及び食品の安全性や環境衛生管理等に必要とされる基本的な知識、技能、態度を修得する。
薬理学実習	1.5 必修	3年 前期	山田麻紀、伊藤康一 松尾 平、小森理絵	薬理学の講義で学んだ知識あるいは薬理学に対する興味を深めるために、主に実験動物を用いて様々な薬物の効果を測定することにより、生体と薬物の相互作用を理解し身につける。
病態生理学実習	1.5 必修	3年 後期	得丸博史、富永貴志 定本久世、小林 卓	中枢および末梢シナプスに対する薬物の作用や関連した疾患の病態および治療法を学

講義科目名	単位数	学年	担当教員	科目内容
				び、また、主要な疾患の組織学的変化を病理組織標本の顕微鏡観察で理解する。
薬物動態学・ 製剤学実習	1.5 必修	3年 後期	加藤善久、徳村忠一 跡部一孝	薬物動態の理論的解析に関する基本的知識と技能を修得し、基本的な製剤化工程と製剤材料・試作した製剤の品質試験を体験・理解する。
薬学英语	1 必修	4年 前期	山口健太郎、加藤善久	科学、薬学、医療に関する英語文献を読み、医療現場で必要な英語を学ぶ。薬剤師に必要な基本的な英語によるコミュニケーションを学ぶ。
実践地域医療学 1	0.5 必修	4年 前期	飯原なおみ、岡田岳人	患者の価値観や思いを理解するとともに、コミュニケーション・スキルを実践し、適切に情報を収集し提供する力を身につける。
薬事関係法規 1	1.5 必修	4年 前期	白畑孝明	薬剤師として業務を遂行する際に必要な法的知識のうち、特に基礎的なことを講義する。また、薬事に関連する制度等について解説する。
医薬品開発学	1 必修	4年 前期	徳村忠一	医薬品開発における、候補化合物の探索から原薬製造、原薬物性の評価、治験薬製造と臨床開発等の概略に加え、後発医薬品産業を理解するのに必要な知財関連業務について学ぶ。
毒性学	1 必修	4年 前期	野地裕美	化学物質の解毒反応や代謝活性化反応を理解すると共に、化学物質の毒性などに関する基本的知識を習得する。
症候学	1 必修	4年 前期	二宮昌樹、飯原なおみ 池田博昭、中妻 章 岡田岳人、多田羅勝義	各症候から疾患を推測し適切な指導を行うために必要な情報収集や対応、並びに、服薬指導時の注意点について学習する。
チーム医療学	1.5 必修	4年 前期	二宮昌樹、中妻 章 岡田岳人	様々な職種が連携して専門性を活かしたチーム医療を実践するために、医学、臨床工学、診療放射線の各学科の学生同士で症例検討会を行い、チーム構成員の役割、連携、責任体制について理解する。

講義科目名	単位数	学年	担当教員	科目内容
腫瘍治療学	1.5 必修	4年 前期	宮澤 宏、二宮昌樹	病態としての悪性腫瘍を理解し、悪性腫瘍に対する薬物の適応・作用機序・副作用・薬剤耐性機構を学習する。
治療薬学演習 2	2 必修	4年 前期	二宮昌樹、飯原なおみ 池田博昭、山田麻紀 得丸博史、伊藤康一 大岡嘉治、宮澤 宏 富永貴志、中妻 章、 松尾 平、岡田岳人	病院・薬局実務実習において必要な薬物治療に関わる知識・態度をグループワーク形式で学習する。
治療薬学演習 3	2 必修	4年 後期	二宮昌樹、飯原なおみ 池田博昭、山田麻紀 得丸博史、伊藤康一 大岡嘉治、宮澤 宏 富永貴志、中妻 章 松尾 平、岡田岳人	病院・薬局実務実習において必要な薬物治療に関わる知識・態度をグループワーク形式で学習する。
医薬品評価学	1 必修	4年 前期	飯原なおみ	薬剤疫学、医薬経済学、臨床統計学について学び、医薬品情報を評価する力を身につける。
薬物動態学	1.5 必修	4年 前期	加藤善久、跡部一孝	薬物動態の理論的解析ならびに投与設計に関する基本的事項を修得する。
製剤学 3	1 選択	4年 前期	徳村忠一	品質管理手法である製剤試験法、製剤設計の考え方、製造工程の管理・制御の方法及び分析手法について学ぶ。
臨床薬剤学	1 必修	4年 前期	二宮昌樹	医薬品の管理や調剤などの薬剤師業務、および医薬品の臨床応用の具体例を学び、医薬品適正使用を実践するために必要な知識を修得する。
実務実習 事前学習	5 必修	4年 後期	二宮昌樹、池田博昭 飯原なおみ、中妻 章 岡田岳人 香川薬学部全教員	病院・薬局実務実習を円滑に行うために、調剤や服薬指導など薬剤師業務に関する態度・技能を調剤実習により修得する。

講義科目名	単位数	学年	担当教員	科目内容
特別実習 6	3 選択	4年 通年	香川薬学部全教員	各配属講座における課題研究やセミナーに参加して、講義や薬学実習で修得した知識と技能を、自ら考えて手を動かすことによって活用・応用する。科学の奥深さを各自の研究テーマの中で実体験するとともに、薬学とその関連分野に関する幅広い知識を習得し、研究能力、コミュニケーション能力、問題解決能力、プレゼンテーション能力を身につける。
応用薬学演習	2 必修	4年 後期	香川薬学部全教員	4年次までの講義、薬学実習、実務実習事前学習で修得した知識、技能、態度をベースにした演習を実施し、実務実習において必要とされる薬学専門知識の理解を深める。
創薬生命科学特論	1 選択	4年 後期 ～ 6年 後期	香川薬学部全教員	創薬や生命科学に関する論文を読み、論文内容を発表する。

#### 薬学科 (5～6年)

講義科目名	単位数	学年	担当教員	科目内容
医療社会薬学 コミュニケーション学	1 必修	5年 前期	池田博昭、中妻 章	薬剤師業務におけるコミュニケーション・スキルを学習し、医療人としての知識、技能、態度、コミュニケーション能力を習得する。
品質管理学	1 選択	5年 後期	徳村忠一	医薬品の品質管理の意義と、薬剤師の役割について学び、バリデーション、日本薬局方について概説する。
疾患の分子生物学	1 選択	5年 前期	宮澤 宏	生物製剤の種類、取扱い上の注意、問題点を学ぶと同時に、遺伝子組換え技術の基礎からゲノム情報を利用した創薬、最新の細胞治療や再生医療などについても学ぶ。

講義科目名	単位数	学年	担当教員	科目内容
薬理遺伝学	1 選択	5年 前期	大岡嘉治	薬の反応性に関わる遺伝的因子の重要性を理解し、薬物治療の個別化に関する分子生物学、遺伝学の基本的知識を修得する。
医療科学	1 選択	5年 前期	竹内 一	健康および疾病管理において食事と身体活動が果たす役割を化学的に理解するとともに、最新の知見・技術の実践的活用について学習する。
実践治療薬学 1	1	5年	二宮昌樹、池田博昭 飯原なおみ、中妻 章 岡田岳人	病院・薬局実務実習に於いて学習した薬物治療に係わる narrative based medicine を実践する。
卒業実習 1	10 必修	5年 ～ 6年 前期	香川薬学部全教員	配属講座において、薬学に関する課題・問題点の調査・研究に取り組み、薬剤師をはじめとする薬学従事者に必要とされる基本的姿勢、知識や能力を身につけ、それを生涯にわたって高め続ける態度を修得する。
病院実習	10 必修	5年	二宮昌樹 他 香川薬学部全教員 指導薬剤師	病院薬剤師の業務と責任を理解し、調剤および製剤、服薬指導などの薬剤師業務に関する知識、技能、態度を習得する。
薬局実習	10 必修	5年	二宮昌樹 他 香川薬学部全教員 指導薬剤師	保険薬局の社会的役割と責任を理解し、保険調剤、医薬品の供給・管理、情報提供、健康相談、地域医療の関わりについて知識、技能、態度を習得する。
アドバンスト教育プログラム	2 選択 必修	5年前期 ～ 6年前期	香川薬学部全教員 外部講師	高度化する医療において、高い資質を持つ薬剤師、疾病の予防および治療に貢献できる薬剤師を目指し、医療薬学、臨床薬学および最新薬学を学ぶ。
最新医療学	0.5 必修	5年後期 ～ 6年前期	飯原なおみ	変貌する社会の課題と薬剤師の在り方について考える力を身に付けるとともに、臨床研究の限界を理解して臨床研究結果を適切に解釈する力、臨床研究を立案する力を身に付けることを目標とする。



講義科目名	単位数	学年	担当教員	科目内容
実践地域医療学 2	0.5 必修	5年後期 ～ 6年前期	二宮昌樹	臨床で活躍する認定薬剤師及び専門薬剤師の役割について学習する。地域医療における薬剤師の使命と倫理規範、薬局の役割について学習する。
人体解剖学	0.5 選択	6年前期	得丸博史	臨床病理示説見学による症例検討や、特別講義による疾患の原因、病態に関する最近の進歩の理解を通じて、臨床に強い薬剤師となるための総合的学力を涵養する。
臨床薬学アドバ ンスト実務実習	1 選択 必修	5年後期 ～ 6年前期	二宮昌樹、飯原なおみ	診療科症例検討カンファレンスに参加し、病院実務実習に総合的に取り組む能力を習得する。
地域医療アドバ ンスト実務実習	1 選択 必修	5年後期 ～ 6年前期	芳地 一、二宮昌樹	地域医療における薬剤師の関わり方の現状を、在宅実習を通し理解し、今後どの様に地域医療に関わるべきかを自ら考える。
東洋医療薬学ア ドバンスト実務 実習	1 選択 必修	5年後期 ～ 6年前期	代田 修	漢方薬学・漢方処方についての実践的な理解を得るために、「証」の認識手法、処方箋に基づく医療用漢方製剤の調剤、一般漢方製剤の服薬指導、薬局製剤について学習する。
先進薬学実習	1 選択 必修	5年後期 ～ 6年前期	宮澤 宏	これまでに学んだ講義内容、実習での経験を生かし、配属講座において研究活動に従事する。また学会へ参加し、研究成果を発表し、その報告書を作成する。
薬事関係法規 2	1 必修	6年前期	白畑孝明	薬剤師としての業務を遂行する際に必要な法的知識、薬事に関連する制度を学び、倫理や義務について、スモールグループで討議する。
医薬品・ 医療ビジネス	1 必修	6年前期	池田博昭、中妻 章 芳地 一	医薬品産業は単に創薬に留まらず、医療ビジネスも医療に加えて健康産業とも深い関連性を有しており、医薬品産業および医療ビジネスは裾野の広い産業であることを学ぶ。

講義科目名	単位数	学年	担当教員	科目内容
物性分子化学	1 選択	6年 前期	山口健太郎、岸本泰司 植木正二、小原一朗 窪田剛志	これまでに学習した物理系薬学に関する知識を他分野と関連付けて総合的に活かすことができるよう基礎的な問題から発展的な問題まで多くの関連した演習問題を解く。
創薬化学	1 選択	6年 前期	藤島利江、代田修 富永昌英、植木正二	これまでに学習した化学系薬学に関する知識を他分野と関連付けて総合的に活かすことができるよう基礎的な問題から発展的な問題まで多くの関連した演習問題を解く。
生体機能学	1 選択	6年 前期	定本久世、大島隆幸 喜納克仁、中妻 彩	これまでに学習した生物系薬学に関する知識を他分野と関連付けて総合的に活かすことができるよう基礎的な問題から発展的な問題まで多くの関連した演習問題を解く。
健康科学	1 選択	6年 前期	野地裕美、大岡嘉治 竹内 一	これまでに学習した衛生薬学に関する知識を他分野と関連付けて総合的に活かすことができるよう基礎的な問題から発展的な問題まで多くの関連した演習問題を解く。
分子薬理学	1 選択	6年 前期	宮澤 宏、伊藤康一 山田麻紀、得丸博史 富永貴志、松尾 平 中妻 彩	これまでに学習した基礎薬理学、治療薬学1～6 など薬理学に関する知識を他分野と関連付けて総合的に活かすことができるよう基礎的な問題から発展的な問題まで多くの関連した演習問題を解く
薬物相互作用	1 選択	6年 前期	加藤善久、徳村忠一 桐山賀充、窪田剛志 跡部一孝	これまでに習得した薬剤系関連科目に関する知識を他の薬学系科目と相互に関連付けて総合的に活かすことができるよう基礎的な問題から発展的な問題まで多くの関連した演習問題を解く
実践治療薬学2	1 必修	6年 前期	二宮昌樹、池田博昭 飯原なおみ、中妻 章 岡田岳人	病院・薬局実務実習に於いて学習した薬物治療に係わる narrative based medicine を実践する。
卒業実習2	2 選択	6年 後期	香川薬学部全教員	配属講座において、薬学に関する課題・問題点の調査・研究に取り組み、薬剤師をは

講義科目名	単位数	学年	担当教員	科目内容
				はじめとする薬学従事者に必要とされる基本的姿勢、知識や能力を身につけ、それを生涯にわたって高め続ける態度を修得する。
総合薬学演習 1	4 必修	6年 前期	香川薬学部全教員	薬学に関する総合的な演習を通して、薬剤師に向けて卒業時に要求される知識、態度を身につける。
総合薬学演習 2	6 必修	6年 後期	香川薬学部全教員	薬学に関する総合的な演習を通して、薬剤師に向けて卒業時に要求される知識、態度を身につける。
総合薬学演習 S	6 必修	6年 前期	香川薬学部全教員	薬学に関する総合的な演習を通して、薬剤師に向けて卒業時に要求される知識、態度を身につける。

## 学生実習室

学生実習室は、香川薬学部実習棟の3階から5階にあります。これらの3つの階には同じ大きさの実習室が1つずつ存在します。それぞれの実習室で、1学年全体が同時に実習を受けられ、最大で3学年同時に実習可能です。各階の実験室毎の若干の違いはありますが、基本的には下記のような設備となっています。

- (1) 6人がけの実験台 × 36台 = 216人で、1階あたり 857 m<sup>2</sup>の面積があります。
- (2) 実習室両脇には液晶スクリーンが8台設置されており、そこに黒板の字や、映像を映すことが可能になっています。
- (3) 実験機材は、実習室横にある2つの準備室にしまわれており、14台の移動式架台が設置されており、実習毎の機材の収納・展開が容易に行われるよう設計されています。
- (4) ドラフトなどの排気装置も必要十分数設置されており、安全面も確保されています。
- (5) 実習室の前室は、自習スペースとなっており、16人分の机とイスが用意され、実習の待ち時間などにレポートを書くことも可能です。また、4階の前室には薬用植物の原料標本が陳列されており、見学も可能です。
- (6) 学生用の個人ロッカーも完備されています。2階のロッカー室には、1008人分のロッカーがあり、全学生が使用するだけの数は用意されています。

## 大学院 香川薬学研究科創薬科学専攻および薬科学専攻修士課程

本研究科では、生命科学の基礎研究を核としながら、医薬品開発に必要な知識・技能を身につけた視野の広い人材、人類の健康と福祉に貢献できる人材の育成をめざしている。そのために、主指導教員はもとより複数の教員の指導により大学院生一人一人を大切に育てており、さらに外国の研究者・技術者との対話ができ国際舞台で活躍できるための英語力の習得を重視する教育を実施している。

本学の博士課程（前期2年、後期3年）は学部創設の翌年、平成17年4月に開設され、これと同時に前期課程1名と後期課程2名が入学した。この中で後期課程入学者、1名は顕著な研究成果を挙げたことから平成18年3月に博士後期課程の終了を認め、記念すべき本学第1号の博士（薬学）の学位が授与された。平成18年4月には後期課程にさらに1名の入学者（千葉大学大学院自然科学研究科博士前期課程修了）を加えている。また、平成19年4月、後期課程への志願者（京都大学大学院理学研究科博士後期課程中退）が入学を許可された。平成19年1月には本学大学院香川薬学研究科に学位申請論文が提出され、厳正な審査の結果この申請者に平成19年3月、論文博士としては本学第1号の博士（薬学）の学位が授与された。また、平成20年度終了予定者2名の博士論文が提出され、3月に博士（薬学）の学位が授与された。一方、前期課程においても推薦および選抜試験を経て受入が開始され、平成23年2月現在、秋入学者1名を含む19名が在籍している。

平成22年3月には、19名の本研究科初となる博士前期課程終了者を輩出した。平成22年2月12日、これら19名が修士学位申請を完了し、各申請者につき3名の審査員による学位審査が開始された。3月5、6日には論文審査を締めくくる修士論文発表会が開催され、引き続いて開催された判定会議において全員の学位授与が決定した。尚、本研究科では学位申請者の指導教官を審査員から排除する公平性の高い審査を実施している。

さらに、平成23年3月には11名の博士前期課程修了者を輩出している。

このように徳島文理大学香川薬学部大学院は国公立大学に勝るとも劣らない一流の教授陣、最新、設備および洗練した教育システムを誇り、すぐれた創薬・医療品開発のプロフェッショナルを目指す人材養成に総力を上げて推進している。

本研究科は、薬学部6年制移行に伴い、新たな制度での4年制学科である薬科学科の学生を受入れるべく、平成22年度より香川薬学研究科 薬科学専攻に改組された。これにより、19の授業は薬科学専攻を担当する15講座による15科目に再編成され開講した。これらの新科目は、各講座の独自性を生かした特徴ある科目名を採用しており、従来の画一的な「講座名+特論」に代わり意欲的なものとなっている。

平成22年4月には、この新しい薬科学専攻修士課程に8名の入学者を数えた。

以下に、平成22年度における修士課程（新課程）、博士課程前期（旧課程）および後期過程の授業科目等を示す。尚、平成18年には13科目であった授業は平成19年新たに6科目追加され19科目となった。

平成23年4月には、本学部薬科学科より薬科学専攻修士課程に3名が入学者した。一方、創薬科学専攻博士後期課程には本大学院創薬科学専攻博士前期課程より1名の入学者があり、さらに社会人1名が入学した。

平成24年3月には、8名の修士課程修了者を輩出している。

平成24年4月、大学院薬学研究科薬学専攻博士課程（4年制）が設置され香川薬学部から1名が入学した。この新博士課程は、主に6年制薬学部卒業者を対象とした4年制課程で、（1）医療・薬物療法分野、（2）健康・高齢者医療分野、（3）医薬品開発・高度医療分野、（4）医薬解析・医療安全、の4分野から構成されている。また、

本課程は徳島および香川薬学部の2学部合同大学院であり、研究科委員会等も基本的には合同で運営される。これをもって従来の創薬科学専攻博士課程の募集を終了し、さらに薬科学専攻修士課程は、理工学部大学院ナノ物質専攻に新たに生命科学系研究分野を加えることにより、その役割を終えた。

平成27年3月に6年制薬学部卒業生が1名入学し、香川キャンパスにおいて1学年から4学年までの各学年に1名ずつの在籍となった。平成28年3月には4名の新大学院初の課程終了者を輩出し、博士(薬学)の学位が授けられたが、この内1名は香川キャンパス所属である。平成29年3月には徳島キャンパスより課程博士および論文博士を各1名輩出した。平成30年4月1日現在、薬学専攻博士課程在籍者は3名(香川キャンパス)となっている。平成31年3月には徳島、香川各キャンパスから博士課程(甲)を修了した1名ずつに博士(薬学)の学位が授与された。さらに同年9月には徳島キャンパスより論文博士(乙)1名に博士(薬学)の学位が授与された。令和2年度香川キャンパス秋入学学生1名が9月20日に入学した。また、令和2年度徳島キャンパス博士課程修了者2名に学位が授与された。

## 令和2年度 徳島文理大学 薬学研究科 教職員組織表

\*印は香川キャンパス

薬学研究科長 福山愛保											
専攻	分野	大学院				専攻	分野	大学院			
		研究室名	教授	准教授	講師			研究室名	教授	准教授	講師
薬学専攻	医療・薬物療法	医療薬学	京谷庄二郎 四宮一昭	石田志朗	末永みどり	薬学専攻	医療解析・医療安全	分析化学	田中好幸 宗野真和		中島勝幸
		薬理学	喜多紗斗美					生化学	葛原 隆	畠山 大	庄司正樹
		薬剤学	谷野公俊					遺伝情報学		高橋宏暢	
		医療薬学*	二宮昌樹 飯原なおみ 池田博昭		中妻 章			薬物治療学*	伊藤康一		松尾 平
			薬物動態学*	加藤善久				生体防御学*	大岡嘉治		中妻 彩
		健康・高齢者医療	生薬学	梅山明美	野路征昭				中四がんプロ 臨床腫瘍薬剤 師コース	医療薬学*	二宮昌樹 池田博昭
	衛生化学		角 大悟		藤代 瞳						
	微生物学		永浜政博		竹原正也						
	公衆衛生学		鈴木真也								
	医薬品開発・高度医療	天然物化学	福山愛保	堂上美和	原田研一						
			反応		加来裕人						
		天然薬物学	浅川義範 山本博文	江角朋之 兼目裕充							
			病態分子	深田俊幸		原 貴史					
		機能分子	今川 洋		葛西祐介						
		薬化学	吉田昌裕		松本健司						
			生物	張 功幸							
		高度医療	機能形態学	井上正久		川上隆茂					
			病態生理学*	得丸博史		定本久世					
			解析化学*	山口健太郎	富永昌英	小原一朗					
			神経科学*	富永貴志							
薬理学*			山田麻紀								
生命			岸本泰司		植木正二						
生薬・天然物			代田 修								
医薬化学*	藤島利江										

## 主要諸元

### 主要機器リスト

#### 中央機器室

香川薬学部研究棟2階にもうけられた生物系、化学系それぞれの分野に分けられた共通機器室には下表の様な主要機器が設置されており、常に研究のために使用することが可能になっています。

#### 生物系

一般名	装置名
インフラレッドイメージング	Odyssey L1-COR
表面プラズモン共鳴装置	Biacore3000
質量分析装置 (MS)	AXIMA-QIT/Tof
質量分析装置 (MS)	AXIMA-CFR+
二次元ミクロクロマトグラフィスポットティングシステム	2D-HPLC/AccuSpot
蛍光イメージングスキャナー	Molecular Image FX
共焦点レーザースキャン顕微鏡	LSM 510
セルソーター	FACS Aria
フローサイトメーター	FACS Canto
DNA シーケンサー	3130
DNA シーケンサー	3131XL
リアルタイム PCR	Model 7500
リアルタイム PCR	QuantStudio7K
DNA マクロアレイ	Fluidics Station 450
マイクロインジェクション	Injection NI 2
マイクロダイセクター	TransferMan Nk2
核酸自動分析装置	NA-2000
エルトリエーション遠心分離システム	Avanti HP-26XP/E; BECKMAN
クリオスタット	CM3050、 Leica
分離用超遠心機	CP100MX、日立工機
分離用小型超遠心機	CS150GXL、日立工機
遺伝子組み換え実験室	封じ込めレベル P3

## 化学系

一般名	装置名
核磁気共鳴装置 (NMR)	AVANCE700
核磁気共鳴装置 (NMR)	AVANCE400
核磁気共鳴装置 (NMR)	AVANCE400
核磁気共鳴装置 (NMR)	UNITY INOVA500
核磁気共鳴装置 (NMR)	JNM-ECX400
質量分析装置 (MS)	SOLARIX
質量分析装置 (MS)	JMS-600
単結晶 X線構造解析装置 (SCD)	SMART APEXII
単結晶 X線構造解析装置 (SCD)	SMART 1000
単結晶 X線構造解析装置 (SCD)	AFC-7R
単結晶 X線構造解析装置 (SCD)	D8 VENTURE ULTRA
フーリエ変換赤外分光光度計 (FT-IR)	FT-IR 6300
可視紫外分光光度計 (UV)	V-560
蛍光分光光度計	FP-6500
円二色性分散計 (CD)	J-820
旋光計	P-1030
元素分析	CHNS/O 2400
示差走査熱量測定装置 (DSC)	DSC822
電子常磁性共鳴装置 (EPR)	E500-8/2.7

## 講座別

### 1 生薬・天然物化学講座

超高性能液体クロマトグラフ質量分析計システム  
(UPLC/Q-ToF MS)

### 2 解析化学講座

ESI-CSI-TOF型質量分析計 (ACCU TOFF LT-100改  
JEOL社製)

MALDI-TOF型質量分析計 (MALDI micromass社製)

FT IRReact (IR 4000 Mettler Toledo社製)

CD (円偏光二色性) スペクトル装置 (日本分光 J-820)

円偏光照射装置 (日本分光)

超高压反応装置 (光高压機器 HR15-B3)

高出力レーザー発生装置 (Spectra-Physics LAB-150)

超臨界流体システム (日本分光)

日本分析工業製リサイクル分取HPLC (LC-9204)

### 3 薬化学講座

質量分析装置 ESI-TOF MS (Bruker micrOTOF)

### 4 生体防御学講座

フローサイトメーター (BD FACSCalibur)

## 5 薬物治療学講座

核磁気共鳴画像装置 (MRI 1.5T MRmini SR)  
共焦点レーザー共通型顕微鏡 (FV10-ASW)  
インキュベーションイメージングシステム  
(OLYMPUS; LCV100-C-SP)  
マウス脳波長時間ビデオ測定装置 (Pinnacle Technology Inc.)

## 6 薬学教育講座

分子間相互作用解析装置 (アフィニックス)  
64ch細胞外電位記録システム (正立蛍光顕微鏡付) (アルファメッドサイエンス&オリンパス)  
循環動態測定システム (日本光電)  
核酸自動分析装置 (NA-2000)

## 7 分子生物学講座

DNAシンセサイザー (POLYGEN)  
マルチラベルプレートリーダー (BERTHOLD, Mithras LB940-LF)  
蛍光顕微鏡 (KEYENCE, BZ-8000)  
リアルタイムPCR (ABI, 7500 RealTime PCR system)  
 $\gamma$ リアクター (四国計測工業株式会社, SMW-087)

## 8 衛生薬学講座

全自動細胞解析装置 (Cytomics FC500)

## 9 生命物理化学講座

学習行動実験評価システム (瞬目反射, 協調運動)  
筋電位測定装置 (AB-611J)  
電気刺激発生装置 (MASTER-8cp)  
聴性脳幹反応ABR測定装置  
ローターロッド (47600)

トレッドミル (LE8708)

行動・神経活動同時記録システム (空間学習)  
ビデオ上方行動解析システム (F-TopScan-HSET)  
赤外線ハイスピード撮影録画システム  
生体電位2chテレメトリー  
16ch×2 マルチシングルユニットシステム

## 10 薬理学講座

共焦点レーザー顕微鏡 (Olympus FV-1000)  
脳スライス-パッチクランプ記録装置 (HEKA EPC-8, Axon MultiClamp700Bほか)

## 11 薬物動態学講座

高速液体クロマトグラフ質量分析計 (Applied Biosystems; 3200 Q Trap LC/MS/MS System)  
倒立型蛍光顕微鏡 (Carl Zeiss; Axio Observer.D1)

## 12 病態生理学講座

分光タイプ共焦点レーザー顕微鏡 (オリンパス FV1000)  
Laser capture microdissection (LCM) 顕微鏡 (Carl Zeiss, PALM MBIV Micro dissection System)

## 13 医療薬学講座

PerkinElmer製 FT-IRシステム (Spectrum One)

## 14 神経科学研究所

分光タイプ共焦点レーザー顕微鏡 (オリンパス FV1000)



## 施設面積

	実習棟	研究棟	模擬薬局
建面積	857	1,322	-
延床面積	4,285	10,103	893
	講義棟	図書館	薬品倉庫
建面積	3,022	2,091	52
延床面積	13,074	12,935	52

	薬用植物園
建面積	137
土地面積	2,080

講義棟の延床面積に、模擬薬局の延床面積が含まれている (単位: m<sup>2</sup>)

## 図書館 (リサーチ アンド メディア ライブラリー)

(2020年12月31日現在)

蔵書数 (うち香川薬学部分)	購読雑誌数
359,812 冊 (23,575 冊) (視聴覚資料: 1,156 点)	和雑誌: 150 洋雑誌: 3 洋雑誌(電子ジャーナル): 1,711

## 職員数

(2021年3月1日現在)

教授	准教授	講師	助教・ 助手	実験助手	小計	事務職員	合計
17	5	8	6・1	0	37	1	38

客員教授	特任教授	特任准教授	特任講師	非常勤職等
2	0	0	0	10

## 学生数学生数

(2021年3月1日現在)

学部	香川薬学部							大学院	薬学研究科				
									薬学専攻				博士課程
年次	1年	2年	3年	4年	5年	6年	計	年次	1年	2年	3年	4年	計
定員	90	90	90	90	90	90	540	定員	6	6	6	6	24
現員	47	42	41	36	45	59	270	現員	3 (香2)	3 (香1)	0	4 (香1)	10 (香4)

大学院・薬学研究科の現員は上段が総数（下段が香川薬の内数）

## 外部資金獲得状況

(2020年12月31日現在)

●文部科学省, 日本学術振興会

科学研究費助成事業	研究種目	件数	直接経費	間接経費
	新学術領域研究	2	¥8,500,000	¥2,550,000
	基盤研究(A)	1	¥1,000,000	¥300,000
	基盤研究(B)	1	¥500,000	¥150,000
	基盤研究(C)	12	¥8,280,000	¥2,484,000
	若手研究	1	¥1,000,000	¥300,000
	国際共同研究加速基金	1	¥1,000,000	¥300,000
	挑戦的研究(萌芽)	1	¥300,000	¥90,000
	計	19	¥20,580,000	¥6,174,000

●厚生労働省

科学研究費補助金

件数	直接経費
1	¥950,000

●その他

教育研究助成金

奨学寄付金

学外共同研究費 (環境推進費、広島大)

件数	直接経費	間接経費
1	¥451,000	¥0
4	¥1,827,000	¥203,000
1	¥1,000,000	¥300,000

	件数	直接経費	間接経費
計	26	¥24,808,000	¥6,677,000
総計		¥31,485,000	



## II. 各講座の教育・研究概況





## 解析化学講座

### Laboratory of Analytical Chemistry

#### 教員

**教授** 山口健太郎 着任年月日：2004年4月1日  
薬学博士  
前職：千葉大学 助教授

**准教授** 富永昌英 着任年月日：2005年4月1日  
博士（工学）  
前職：東京大学 助手

**研究補助員** 生熊智都子 着任年月日：2019年4月1日

#### 教育の概要

##### 担当科目：分析化学2（山口）

###### 到達目標

物質の性質は、構造要素である原子や分子の配置に関連づけて考えると理解し易い。これは、原子の配列と状態、およびお互いの結合形式に深く関係しているからである。また、原子配列は結合の特性に大きく影響されやすく、特に明確な方向性を持つ共有結合は分子の構造に関係している。原子の配列の観測、決定に基づく分子構造解析の手段として種々の物理分析的手法が生み出されてきたが、これらの基礎となる分光学についての理解が重要である。本授業では機器分析法および生物化学的分析法の基本原理を習得することを目指し、さらに一般的な分光学的手法と各種クロマトグラフィーによる分離分析法に関する理論を習得する。  
(知識・理解・技能)

###### 方策

2年前期に開講される分析化学1から連続した分析化学の授業であることを念頭に置いて学習する。課題レポートやミニテストを実施するので、復習を欠かさず学習すること。

###### 達成度

定期試験（60～80%）、課題レポート・小テストおよび授業態度（20～40%）により評価した。

##### 担当科目：分析化学3（山口）

###### 到達目標

物理分析手法はNMR、X線解析および質量分析等の先端機器分析を中心に発展し、現在では複雑な生体分子の分析においても欠かすことが出来ない。本講義ではこれら大型機器分析による分子構造の精密解析の理解

を目的として、試料調整や具体的な測定手順、および解析結果の解釈についての詳細を修得する。さらに、薬学領域における大型機器を用いた医薬品関連低分子有機化合物および生体分子についての構造解析法と原理を修得する。(知識・理解・技能)

###### 方策

2年前期に開講される分析化学1および2から連続した分析化学の授業であることを念頭に置いて学習する。課題レポートやミニテストを実施するので、復習を欠かさず学習すること。

###### 達成度

定期試験（60～80%）、課題レポート・単元2回および授業態度（20～40%）により評価した。

##### 担当科目：薬学英语（山口・他）

###### 授業概要

科学、薬学、医療に関連する英語文献を読み、医療現場に必要な英語を学ぶ。さらに、外部講師として、**native speaker**、海外で医療に関する研鑽を積み、実際に医療現場で英語を用いて活躍している薬剤師、医師を招き、薬剤師に必要な基本的な英語によるコミュニケーションを学ぶ。

###### 到達目標

薬学分野で必要とされる英語に関する基本的事項を習得する。知識（理解）、技能（表現）、態度（関心・意欲）

###### 受講心得

科学、薬学、医療に関連する英語の学術文献および薬剤師に必要な基本的な英語によるコミュニケーションに関心を持つ。

###### 評価方法

英語の学術文献の内容発表（45%）、薬学英语コミュニケーションへの取り組み（35%）、レポート（20%）により評価する。

##### 担当科目：多角的物理化学演習（山口・他）

###### 授業概要

これまでにならった物理系薬学に関する各項目の知識を総合的に活かすことができるようになるために、基礎的な問題から発展的な問題まで多くの関連した演習問題を解く。

###### 到達目標

物理量の単位と次元について理解する。(知識・理解)  
仕事および熱の概念を説明できる。(知識・理解)

熱力学第一法則について説明できる。(知識・理解)  
 溶液の束一的性質、蒸気圧降下について理解する。(知識・理解)

酸・塩基平衡を説明できる。(知識・理解)  
 紫外可視光度測定法の原理および応用例を説明できる。(知識・理解)

質量分析法の原理および応用例を説明できる。(知識・理解)  
 放射線の歴史、原子の構造について理解する。(知識・理解)

受講心得

これまでの物理学 A、B、物理化学 1、2、分析化学 1、2、3 の復習をし、演習に臨むとともに演習の復習をしっかり行うこと。

評価方法

筆記試験 (90%)、演習の取り組み・態度など (10%) を総合して評価する。

**担当科目：基礎有機化学 2 (富永)**

到達目標：基礎有機化学 1 に続いて、アルケン・アルキン・ポリエンの化学を学ぶ。反応がいかにして進むのかを考える。立体配置と立体配座について理解し、有機化合物の中でも炭化水素に関する基礎知識を習得する。具体的に、1)炭化水素の性質と反応性を説明できる。2)反応性と選択性を立体化学から記述できる。3)炭素-炭素結合の生成と開裂について説明できる。4)立体配置と立体配座を透視図、ニューマン投影式、フィッシャー法などで説明できる。

目的達成状況：CBT 対策の導入において、多くの学生の理解度が高くなっているように見受けられる。ここ数年の中で比較的成績は良好であり、内容の習熟度も高かった。

方策：講義、演習、質問時間を組み合わせ、学生の理解度を把握するようにした。今年度から、各レベルに対応した有機化学 1 の習得方法と時間配分の説明を行った。宿題と演習は、CBT・国家試験レベルの選択・記述問題を中心に行った。

教えるために使った時間：1 講義準備に 3 時間、演習作成に 3 時間、質問時間は講義後の午後に集中する傾向にあり、平均して一人 10～15 分程度である。

**担当科目：有機化学 1 (富永)**

到達目標：生体は有機化合物によって成り立っており、それらの変化によって生命が維持されていることを理解するための基礎として、有機化学の基本的な理論、有機化合物の構造とその表記法、アルケン・アルキン化合物、ハロアルカン、アルコール・エーテル類の性質と反応について学ぶ。有機化学が薬学における他の多くの

の科目に関連していることを認識し、その理解に必要な有機化学の基礎を習得する。

目的達成状況：CBT 対策の導入において、多くの学生の理解度が高くなっているように見受けられる。ここ数年の中で比較的成績は良好であり、内容の習熟度も高かった。

方策：講義、演習、質問時間を組み合わせ、学生の理解度を把握するようにした。今年度から、各レベルに対応した有機化学 1 の習得方法と時間配分の説明を行った。宿題と演習は、CBT・国家試験レベルの選択・記述問題を中心に行った。

教えるために使った時間：1 講義準備に 3 時間、演習作成に 3 時間、質問時間は講義後の午後に集中する傾向にあり、平均して一人 10～15 分程度である。

**担当科目：有機化学 2 (富永)**

到達目標：生体は有機化合物によって成り立っており、それらの変化によって生命が維持されていることを理解するための基礎として、芳香族化合物、アミン誘導体、カルボニル化合物の構造とその反応性について学ぶ。有機化学が薬学における他の多くの科目に関連していることを認識し、その理解に必要な有機化学の基礎を習得する。

目的達成状況：CBT 対策の導入において、多くの学生の理解度が高くなっているように見受けられる。ここ数年の中で成績は比較的的良好であり、内容の習熟度も高かった。

方策：講義、演習、質問時間を組み合わせ、学生の理解度を把握するようにした。今年度から、各レベルに対応した有機化学 1 の習得方法と時間配分の説明を行った。宿題と演習は、CBT・国家試験レベルの選択・記述問題を中心に行った。

教えるために使った時間：1 講義準備に 3 時間、演習作成に 3 時間、質問時間は講義後の午後に集中する傾向にあり、平均して一人 10～15 分程度である。

**担当科目：分析化学実習 (山口、富永)**

到達目標：本実習では有機分析に必須とされる各分析機器の原理と取扱や各種スペクトルデータの解析について知識を深め、分子計算化学を通じて分子構造を理論的に解釈することを学ぶ。また各種ウェブによる情報検索および各種コンピューターソフトウェアを利用したレポート作成・プレゼンテーションについての技能を修得する。

目的達成状況：レポートやスペクトル演習・発表を通して、実習の各項目の理解度・習熟度は例年に比較して高かった。

方策：体感的学習に重点を置いて少人数にグループ化し、研





究レベルで用いる最新の分析機器の利用を積極的に行った。化合物の合成からスペクトル測定および構造解析まで、またPCを用いた計算化学やプレゼンテーション作成について、一人一人が実際に体験できるよう、設備の準備および実習プログラムの構成を行った。

教えるために使った時間：1実習準備に約5時間、質問時間は実習終了後に集中する傾向にあり、平均して一人15～30分くらいの時間を使っている。

### 管理・運営に係ること

山口：予算委員会委員長

山口：大学院委員会委員長

山口：機器・設備管理委員会委員長

山口：中央機器室管理委員会委員長

山口：将来計画検討委員会 委員

富永：入試委員、大学院委員、CBT委員

### 研究の概要

#### 研究方針

先端機器の開発：装置開発は先端研究を行う上で非常に重要な要素である。我々は、特に見たいものを見る新規機器の開発こそ研究の獨創性を担保するものと考え。科学機器は科学知識の生産者であり、これ無しで科学の進歩はあり得ない。世界をリードするためには世界に通用する機器を創造する必要があることを念頭に置いて、これを実現できる人材の養成と併せて、新しい道具作りを指向した研究を推進したい。

先端機器の利用戦略：「創造的先端研究」と「基盤研究」の両者を重視した総合的分析化学を確立することが香川薬学部における解析化学講座としての大きな使命であると考え。当講座では既にコールドスプレー質量分析装置(CSI-MS)を開発し、現在反応追跡装置(RTS)そして次世代の機器として超小型質量分析装置の開発を計画中である。これらの利用戦略として、異なる構造解析機器を有機的に連結融合した次世代の機器分析システムの構築や、さらに具体的には巨大分子のイオン化や分子コンピューティング、そして迅速診断、およびその他の新分野への展開を推進している。

#### 研究概要

解析化学は分子(種)の構造、物性、反応性および機能を深く探求することにより創薬研究に寄与することを目的としている。特に溶液中の反応中間体や生体分子の動的構造と反応性-機能の関連に注目し、マクロな物性や機能の発現機構をミクロに解明する新

しい分析法の創出や量子力学と統計力学に基づく溶液化学解析手法の開発を行なう。そして、これらの成果の創薬有機合成への応用を目指す。

質量分析装置の開発：質量分析とは、文字通り「分子の質量」を測定する分析法である。具体的には様々な方法で化合物をイオン化し、電場によって加速する。これらを種々の方法によってふるい分け、イオンの質量に関する情報を得る。これによって注目する分子の分子量はもちろん、例えばタンパク質などの巨大な生体分子では、アミノ酸配列までが明らかにできる。このように質量分析は非常に強力な分析法である反面、化合物をイオン化するための条件が過酷なために比較的不安定な化合物の分析には不向きとされていた。我々の研究室ではこれらの問題点を克服するための装置開発を行っており、既にコールドスプレーイオン化法という非常に穏和な条件での測定に成功している。これによって、例えば水素結合などの非常に弱い相互作用によって結びついている分子集合体などを、イオン化によって破壊することなく観測することができる。

生体高分子の分析：我々の体は多様な生体高分子によって構築されている。これらの分子の溶液中での挙動を調べることは、生体内で起こっている様々な化学反応を知る上で極めて重要であり、分子生物学分野だけでなく、薬学分野においても不可欠な研究領域となっている。我々の研究室ではコールドスプレーイオン化質量分析を始めとする種々の分析法を用い、タンパク質、核酸、脂質など重要な生体内分子の振舞いを明らかにしてきた。その結果例えばDNAが4重らせん構造を取りうることなどを明らかにした。また、水はたくさんの分子がお互いに水素結合を介してネットワークを形成していると考えられているが、この事柄を直接観測するのは意外と困難である。我々は上記の分析機器を用いることで、多数の水分子が会合している様子を捉えることに成功した。

有機反応の追跡：有機反応の反応機構を理解することは生体内現象の根本的な理解につながる。当研究室では有機反応において、原料、生成物ならびに反応中間体など反応系中に存在するすべての化学種を同時に観測し、それらの濃度の経時変化を質量分析によって追跡するシステムの開発を行っている。これによって反応中の各成分の振舞いが明らかとなり、例えば反応が効率よく行うためにはどのような工夫が必要か、などに対する予測が可能となる。

生体高分子などの複雑で巨大な分子の質量分析は一般に困難であり、ESIやMALDIを用いても測定できないことが多い。我々は最近、これらの分子を安定した多価イオンに導き、精密で迅速な質量分析を行う多価イオンプローブを開発した。これにより、生体高分子はもとより、フラ

ーレンなどのイオン化しにくい安定な化合物も多価イオンに導くことができる。現在、プローブイオン化法として新しいイオン化ジャンルを開発中である。

分子レベルで物理的運動を行う各種分子機械（マイクロマシン）の創製が注目されている。当講座においても分子コマの創製に成功し、種々の新規機能を備えた新素材として有望視している。この分子コマは回転子の軸が揃った単結晶を与えることがわかり、光との相互作用が興味深い。現在この分子コマ結晶の回転運動と物性との関係を考察中であり、種々の関連分子の創製を展開している。

唯一の高精度分子立方体構造解析法として知られる単結晶 X線構造解析において、近年新手法が発見された。これは、結晶化しない液体や油状試料の構造を解析するもので、多孔性錯体の空隙に試料分子を強制配列することにより X線解析を行う。薬学研究領域に於いて、液体および油状医薬品の三次元精密分子構造解析は特に重要であり、生体との相互作用を分子レベルで解析する手がかりとなる。結晶スポンジ法と命名された同手法の開発研究を当講座において開始した。

ブロック分子のデザインと分子間に働く弱い相互作用を利用したナノ構造の構築：複数の官能基をもつ分子を単位構造とし、これを共有結合で連結することにより特徴的な二・三次元構造をもつブロック分子を合成する。また、このブロック分子に水素結合や金属配位結合、疎水性相互作用など分子間に働く弱い相互作用を作用させ、チャンネル構造やらせん構造、ベシクルやファイバーなどの特徴的な立体構造や分子集合体を自発的に構築させる。

アダマンタンを有する環状化合物の動的自己集合と結晶化：特徴的な特性を有するアダマンタンからなる環状化合物を構築し、中空球状集合体や二次元ネットワーク集合体への自己組織化および結晶化を通じた動的挙動と相転移について調べる。

---

#### 外部誌上発表 (2016年4月~2021年3月)

---

#### [原著論文]

#### 2020

- Saito, Y.; Satake, M.; Mori, R.; Okayasu, M.; Masu, H.; Tominaga, M.; Katagiri, K.; Yamaguchi, K.; Kikkawa, S.; Hikawa, H.; and \*Azumaya, I.(2020) Synthesis and chiroptical properties of cylindrical macrocycles comprising two calix[3]aramide moieties  
*Org. Biomol. Chem.*, 2020, 18, 230-236
- Tanaka, N.; Inagaki, Y.; Yamaguchi, K.; and \*Setaka, W.(2020) Gear Alignments Due to Hydrogen-Bonded Networks in a Crystal Structure of Resorcyliptycene Hydrate and Its Transformation to a Nongearing Anhydrate Crystal by Heating  
*Cryst.Growth Des.*, 2020, 20, 1097-1102
- \*Danjo, H.; Masuda, Y.; Kidena, Y.; Kawahata, M.; Ohara, K.; and Yamaguchi, K.(2020) Preparation of cage-shaped hexakis(spiroborate)s  
*Org. Biomol. Chem.*, 2020, 00 1-7
- \*Tominaga, M.; Hyodo, T.; Maekawa, Y.; Kawahata, M.; and \*Yamaguchi, K.(2020) One-Step Synthesis of Cyclophanes as Crystalline Sponge and Their [2]Catenanes through  $S_nAr$  Reactions  
*Chem. Eur. J.*, 2020, 26, 5157-5161
- Tominaga, M.; \*Mizuno, K. Yamamoto, H.; Hyodo, T.; and Yamaguchi, K.(2020) Co-Inclusion of cyclic ethers and chloroform by a macrocycle with enzophenone-3,3',4,4'-tetracarboxylic diimide units  
*Cryst. Eng. Comm.* 2020, 22, 2964-2969
- Matsumura, M.; Takahashi, T.; Yamauchi, H.; Sakuma, S.; Hayashi, Y.; Hyodo, T.; Obata, T.; Yamaguchi, K.; \*Fujiwara, Y.; and \*Yasuike, S.(2020) Synthesis and anticancer activity of bis(2-arylimidazo[1,2-*a*]pyridin-3-yl) selenides and diselenides: the copper-catalyzed tandem C-H selenation of 2-arylimidazo[1,2-*a*]pyridine with selenium  
*Beilstein J. Org. Chem.* 2020, 16, 1075-1083.
- Mattsson, J.; Zava, O.; Renfrew, A.; Sei, Y.; Yamaguchi, K.; Dyson, P.; and \*Therrien, B.(2010) Drug delivery of lipophilic pyrenyl derivatives by encapsulation in a water soluble metalla-cage  
*Dalton Trans.*, 2010, 39, 8248-8255.
- \*Ohara, K.; Hayashi, Y.; and \*Yamaguchi, K.(2020) Laser Desorption Ionization-Mass Spectrometry of Linear Diphenylenes Encapsulated in Crystalline Sponge  
*Bull.Chem.Soc.Jpn.* 2020, 93, 963-968.
- Kawahata, M.; Tominaga, M.; Komatsu, A.; Hyodo, T.; Yamaguchi K.(2020) Structural elucidation of liquid cyclooctatetraene and cyclooctadienes in inclusion crystals  
*Journal of Molecular Structure*, 2020, 1221, 128775
- Murata, Y.; Kakusawa, N.; Arakawa, Y.; Hayashi, Y.; Morinaga, S.; Ueda, M.; Hyodo, T.; Matsumura, M.; Yamaguchi, K.; Kurita, J.; Yasuike, S.(2020) Pd-catalyzed oxidative Heck-type arylation of viny ketones, alkenes, and acrylates with *Sb*-aryl tetrahydridibenz [*c,f*][1,5] azastibocines  
*Journal of Organometallic Chemistry*, 2020, 928, 121545.
- \*Kawahata, M.; Tominaga, M.; Komatsu, R.; Hyodo, T.; and \*Yamaguchi, K.(2020) Inclusion crystals of V-shaped host molecules having trialkoxybenzene moieties with a carborane or benzoquinone derivative  
*CrystEngComm*, 2020, 22, 7648-7653.



12. Ohara, K.; and \*Yamaguchi, K.(2020) Combined Analysis Based on a Crystalline Sponge Method  
Analytical Sciences, 2021, 37, 167-175
13. Matsumura, M.; Matsuhashi, Y.; Kawakubo, M.; Hyodo, T.; Murata, Y.; Kawahata, M.; Yamaguchi, K.; and Yasuike, S.(2021) Synthesis, Structural Characterization, and Optical Properties of Benzene-Fused Tetracyclic and Pentacyclic Stiboles  
Molecules, 2021, 26, 222.
14. Giang, P.M.; Tu, L.A.; Trang, V.M.; Binh, N.Q.; Hyodo, T.; Yamaguchi, K.; Kawakami, S.; and Otsuka, H.(2019) Absolute Configuration of a New henethylcyclohexanetriol and a New Natural Bibenzyl From *Amomum celsum*  
Natural Product Communications, 2019, 1-6.
15. \*Setaka, W.; Yamaguchi, K.; and Kira, M.(2021)Solid-State 2H NMR Study for Deuterated Phenylene Dynamics in a Crystalline Gyroscope-Like Molecule  
Chemistry, 2021,3,39-44.
16. \*Tominaga, M.; Hyodo, T.; Hikami, Y.; and \*Yamaguchi, K.(2021) Solvent-dependent alignments and alogen-related interactions in inclusion crystals of adamantane-based macrocycle with pyridazine moieties  
CrystEngComm, 2021, 23,436-442.
- 2019**
1. \*Tominaga, M.; Kunitomi, N.; Ohara, K.; Kawahata, M.; Itoh, T.; Katagiri, K.; and \*Yamaguchi, K. (2019) Hollow and Solid Spheres Assembled from Functionalized Macrocycles Containing Adamantane  
J. Org. Chem., 2019, 84, 5109-5117.
2. Ishizuka, T.; Kogawa, T.; Makino, M.; Shiota, Y.; Ohara, K.; Kotani, H.; Nozawa, S.; Adachi, S.; Yamaguchi, K.; Yoshizawa, K.; and \*Kojima, T. (2019) Formation of a Ruthenium(V)—Imido Complex and the Reactivity in Substrate Oxidation in Water through the Nitrogen Non-Rebound Mechanism  
Inorg. Chem., 2019, 58, 12815-12824.
3. \*Kawahata, M.; Tominaga, M.; Fujimaru, K.; Hyodo, T.; Yamaguchi, K. (2019) Inclusion abilities towards hexyne isomers by co-crystallization with extended V-shaped host molecule  
Tetrahedron, 2019, 75, 130576.
4. Wang, S.; Otani, Y.; Zhai, L.; Su, A.; Nara, M.; Kawahata, M.; Yamaguchi, K.; Sada, A.; Ohki, R.; and \*Ohwada, T. (2019) Overall Shape Constraint of Alternating  $\alpha/\beta$ -Hybrid Peptides Containing Bicyclic  $\beta$ -Proline  
Org. Lett., 2019, 21, 7813-7817.
5. Matsumura, M.; Kitamura, Y.; Yamauchi, A.; Kanazawa, Y.; Murata, Y.; Hyodo, T.; Yamaguchi, K.; and \*Yasuike, S. (2019) Synthesis of benzo[d]imidazo[2,1-b]benzoseleazoazoles: Cs<sub>2</sub>CO<sub>3</sub>-mediated cyclization of 1-(2-bromoaryl)benzimidazoles with selenium  
Beilstein J. Org. Chem. 2019, 15, 2029–2035.
6. Matsumura, M.; Kawahata, M.; \*Muranaka, A.; Hiraiwa, M.; Yamaguchi, K.; \*Uchiyama, M.; and \*Yasuike, S. (2019)Efficient Synthesis, Structural Characterization, and Optical Properties of 6*H*-Dibenzo[*b,h*]carbazole and Its Derivatives  
Eur. J. Org. Chem. 2019, 3788-3793.
7. Kikkawa, S.; Masu, H.; Katagiri, K.; Okayasu, M.; Yamaguchi, K.; Danjo, H.; Kawahata, M.; Tominaga, M.; Sei, Y.; Hikawa, H.; \*Azumaya, I. (2019) Characteristic Hydrogen Bonding Observed in the Crystals of Aromatic Sulfonamides: 1D Chain Assembly of Molecules and Chiral Discrimination on Crystallization  
Cryst. Growth&Des., 2019, 19,2936-2946.
8. Hayashi, Y.; \*Ohara, K.; Taki, R.; Saeki, T.; Yamaguchi, K. (2019). Crystalline sponge-laser desorption ionization (CS-LDI) of unsaturated cyclic organic compounds encapsulated in different electronic environments in pores  
Analytica Chimica Acta, 2019, 1064, 80-86.
9. Yamada, M.; Matsumura, M.; Sakaki, E.; Yen, S-Y.; Hyodo, T.; Kawahata, M.; Yamaguchi, K.; Murata, Y.; \*Yasuike, S. (2019). Copper-Catalyzed Three-Component Reaction of Ethynylstibanes, Organic Azides, and Selenium: A Simple and Efficient Synthesis of Novel Selenides and Diselenides Having 1,2,3-Triazole Rings  
Tetrahedron, 2019, 75, 1406-1414.
10. \*Tominaga, M.; Kawahata, M.; Itoh, T.; \*Yamaguchi, K. (2019). Self-Assembly Behavior Shifting to Crystal Formation of Chiral Macrocyclic Tetraamines  
Cryst. Growth Des., 2019, 19, 1118-1124.
11. Otani, Y.; Liu, X.; Ohno, H.; Wang, S.; Zhai, L.; Su, A.; Kawahata, M.; Yamaguchi, K.; Ohwada, T. (2019). Amide nitrogen pyramidalization changes lactam amide spinning  
Nat. Commun., 2019, 10, 461.
12. Hyodo, T.; Kawahata, M.; Hikami, Y.; Komatsu, A.; Tominaga, M.; \*Yamaguchi, K. (2019). Cycloalkanes and cycloalkenes in dispersive force oriented inclusion crystals by a functionalized acyclic host molecule  
CrystEngComm, 2019, *in press*
13. Nakagawa, T.; Danjo, H.; Kawahata, M.; Yamaguchi, K. (2019). Construction and structural analysis of mono- and heterobimetallic bis(titanate) molecular cages  
Tetrahedron, 2019, 75, 315-323.

14. \*Kawahata, M.; Tominaga, M.; Kawanishi, Y.; \*Yamaguchi, K. (2019). Co-crystal screening of disubstituted adamantane molecules with *N*-heterocyclic moieties for hydrogen-bonded arrays  
J. Mol. Struct., 2019, 1177, 511-518.
15. \*Fujishima, T.; Tsutomu, S.; Kawahata, M.; Yamaguchi, K. (2019). Synthesis and characterization of 20-hydroxyvitamin D3 with the A-ring modification  
J. Steroid Biochem. Mol. Biol., 2019, 187, 27-33.
- 2018**
1. Kawakami, S.; Nishida, S.; Nobe, A.; Inagaki, M.; Nishimura, M.; Matsunami, K.; \*Otsuka, H.; Aramoto, M.; Hyodo, T.; Yamaguchi, K. (2018). Eight *ent*-Kaurane Diterpenoid Glycosides Named Diosmariosides A–H from the Leaves of *Diospyros maritima* and Their Cytotoxic Activity  
Chem. Pharm. Bull., 2018, 66, 1057-1064.
2. Tsurunaga, M.; Inagaki, Y.; Momma, H.; Kwon, E.; Yamaguchi, K.; Yoza, K.; \*Setaka, W. (2018). Dielectric Relaxation of Powdered Molecular Gyrotops Having a Thiophene Dioxide-diyl as a Dipolar Rotor  
Org. Lett., 2018, 20(21), 6934-6937.
3. \*Kawahata, M.; Matsui, K.; Hyodo, T.; Tominaga, M.; \*Yamaguchi, K. (2018). Inclusion and selectivity of amides by *p*-terphenyl derivative bearing adamantanecarboxylic acid  
Tetrahedron, 2018, 74, 7089-7094.
4. \*Tominaga, M.; Iekushi, A.; Ohara, K.; Kawahata, M.; Itoh, T.; \*Yamaguchi, K.; \*Azumaya, I. (2018). Crystallization Processes through Self-assembled Materials Dependent on the Substituents of Tetrapodal Adamantanes  
Chem. Lett., 2018, 47, 1279-1281.
5. \*Kawahata, M.; Hyodo, T.; Tominaga, M.; \*Yamaguchi, K. (2018). Separation of *p*-xylene from aromatic compounds through specific inclusion by acyclic host molecule  
CrystEngComm, 2018, 20, 5667-5671.
6. \*Tominaga, M.; Kawahata, M.; Itoh, T.; \*Yamaguchi, K. (2018). Spherical Aggregates and Crystal Structure of Naphthalenediimide-Based Macrocyclic and Complexation with Perylene  
Cryst. Growth Des., 2018, 18, 37-41.
7. \*Wakamatsu, H.; Sasaki, Y.; Kawahata, M.; Yamaguchi, K.; \*Yoshimura, Y. (2018). Synthesis of Various Heterocycles Having a Dienamide Moiety by Ring-Closing Metathesis of Ene-ynamides  
Synthesis, 2018, 50, 3467-3486.
8. Takashima, H.; Inagaki, Y.; Momma, H.; Kwon, E.; Yamaguchi, K.; \*Setaka, W. (2018). Ferrocene-diyl Bridged Macrocages: Steric Effects of the Cage on the Redox Properties of Ferrocene Moiety  
Organometallics, 2018, 37, 1501-1506.
9. Hayashi, Y.; Ohara, K.; Taki, R.; Saeki, T.; \*Yamaguchi, K. (2018). Combined analysis of 1,3-benzodioxoles by crystalline sponge X-ray crystallography and laser desorption/ionization mass spectrometry.  
Analyst, 2018, 143, 1475-1481.
10. Yamada, M.; Matsumura, M.; Takino, F.; Murata, Y., Kurata, Y.; Kawahata, M.; Yamaguchi, K.; Kakusawa, N.; \*Yasuike, S. (2018). Synthesis of Fully Functionalized 5-Selanyl-1,2,3-triazoles: Copper-Catalysed Three-Component Reaction of Ethynylstibanes, Organic Azides, and Diaryl Diselenides.  
Eur. J. Org. Chem., 2018, 2, 170-177.
11. Hirao, T.; Kim, D-S.; Chi, X.; Lynch, V-M., Ohara, K.; \*Park, J-S.; \*Yamaguchi, K.; \*Sessler, J-L. (2018). Control over multiple molecular states with directional changes driven by molecular recognition. Nat. Commun., 2018, 9, 823.
12. Ning, Y.; Kawahata, M.; Yamaguchi, K.; Otani, Y.; \*Ohwada, T. (2018). Synthesis, Structure and N-N Bonding Character of 1,1-Disubstituted Indazolium Hexafluorophosphate.  
Chem. Commun., 2018, 54, 1881-1884.
13. \*Tominaga, M.; Ando, H.; Ohara, K.; Itho, T.; Yamaguchi, K. (2018). Crystal Formation of a Coordination Cage through Spherical Particles Derived from a Tripodal Ligand Containing Adamantane Moiety and Silver(I) Salt.  
Chem. Lett., 2018, 47, 315-317.
- 2017**
1. Suzuki, N.; Kawahata, M.; Yamaguchi, K.; Suzuki, T.; Tomono, K.; Fukami, T. (2017). Comparison of the relative stability of pharmaceutical cocrystals consisting of paracetamol and dicarboxylic acids.  
Drug Dev. Ind. Pharm., 2017, 44, 582-589.
2. \*Kawahata, M.; Tominaga, M.; Maekawa, Y.; \*Yamaguchi, K. (2017). Preparation and crystal structures of charge transfer complexes of acyclic host molecules bearing pyrogallol derivatives with paraquat.  
CrystEngComm, 2017, 19, 7229-7235.
3. \*Katagiri, K.; Matsuo, N.; Kawahata, M.; Masu, H.; Yamaguchi, K. (2017). Aqua coordination to attenuate the luminescence properties of europium(III)-phosphine oxide porous coordination polymers.  
New J. Chem., 2017, 41, 8305-8311.
4. \*Danjo, H.; Hamaguchi, M.; Asai, K.; Nakatani, M.; Kawanishi, H.; Kawahata, M.; Yamaguchi, K. (2017). Proton-Induced



- Assembly–Disassembly Modulation of Spiroborate Twin-Bowl Polymers Bearing Pyridyl Groups. *Macromolecules*, 2017, 50, 8028-8032.
5. Terazawa, S.; Uemura, Y.; Koyama, Y.; Kawakami, S.; Sugimoto, S.; Matsunami, K.; \*Otsuka, H.; Shinzato, T.; Kawahata, M.; Yamaguchi, K. (2017). Microtropins Q–W, *ent*-Labdane Glucosides: Microtropiosides G–I, Ursane-Type Triterpene Diglucoside and Flavonol Glycoside from the Leaves of *Microtropis japonica*. *Chem. Pharm. Bull.*, 2017, 65, 930-939.
  6. \*Tominaga, M.; Takahashi, E.; Ukai, H.; Ohara, K.; Itho, T.; Yamaguchi, K. (2017). Solvent-Dependent Self-Assembly and Crystal Structures of a Salen-Based Macrocyclic. *Org. Lett.*, 2017, 19(7), 1508-1511.
  7. Ning, Y.; Fukuda, T.; Ikeda, H.; Otani, Y.; Kawahata, M.; Yamaguchi, K.; \*Ohwada, T. (2017). Revisiting secondary interactions in neighboring group participation, exemplified by reactivity changes of iminylium intermediates. *Org. Biomol. Chem.*, 2017, 15, 1381-1392.
- 2016**
1. \*Tominaga, M.; Kawaguchi, T.; Ohara, K.; Yamaguchi, K.; Katagiri, K.; Itoh, T.; \*Azumaya, I. (2016). Vesicle Formation of Three-dimensional Trinuclear Silver(I) Complexes Built from Tris-NHC Ligands Bearing Long Alkyl Chains. *Chem. Lett.*, 2016, 45, 1201-1203.
  2. \*Tominaga, M.; Noda, A.; Ohara, K.; Yamaguchi, K.; Itho, T. (2016). Synthesis, Hollow Spherical Aggregation, and Crystallization of an Adamantane-derived Azacyclophane Containing Triazine Rings. *Chem. Lett.*, 2016, 45, 733-775.
  3. \*Sasaki, M.; Ando, M.; Kawahata, M.; Yamaguchi, K.; Takeda, K. (2016). Spontaneous Oxygenation of Siloxy-*N*-silylketenimines to  $\alpha$ -Ketoamides. *Org. Lett.*, 2016, 18, 1598-1601.
  4. \*Ohara, K.; Tominaga, M.; Masu, H.; Azumaya, I.; \*Yamaguchi, K. (2016). Adamantane-based Bidendate Metal Complexes in Crystalline and Solution State. *Anal. Sci.*, 2016, 32(12), 1347-1352.
  5. Matsumura, M.; Sakata, Y.; Iwase, A.; Kawahata, M.; Kitamura, Y.; Murata, Y.; Kakusawa, N.; Yamaguchi, K.; Yasuike, S. (2016). Copper-catalyzed tandem cyclization of 2-(2-iodophenyl)imidazo[1,2-*a*]pyridine derivatives with selenium: Synthesis of benzo[*b*]selenophenefused imidazo[1,2-*a*]pyridines. *Tetrahedron Lett.*, 2016, 57, 5484-5488.
  6. Kawakami, S.; Inagaki, M.; Matsunami, K.; \*Otsuka, H.; Kawahata, M.; Yamaguchi, K. (2016). Crotofolane-Type Diterpenoids, Crotoascarins L–Q, and a Rearranged Crotofolane-Type Diterpenoid, Neocrotoascarin, from the Stems of *Croton cascarilloides*. *Chem. Pharm. Bull.*, 2016, 64, 1492-1498.
  7. Wang, D-Y.; Kawahata, M.; Yang, Z-K.; Miyamoto, K.; Komagawa, S.; Yamaguchi, K.; Wang, C.; Uchiyama, M. (2016). Stille coupling via C–N bond cleavage. *Nat. Commun.*, 2016, 7, 12937.
  8. \*Kawahata, M.; Komagawa, S.; Ohara, K.; Fujita, M.; \*Yamaguchi, K. (2016). High-resolution X-ray structure of methyl salicylate, a time-honored oily medicinal drug, solved by crystalline sponge method. *Tetrahedron Lett.*, 2016, 57, 4633–4636.
  9. \*Iwatsuki, S.; Ichihara, A.; Tanooka, S.; Toyama, M.; Katagiri, K.; Kawahata, M.; Yamaguchi, K.; Danjo, H.; \*Chayama, K. (2016). Coordination structure and extraction behavior of a silver ion with *N*-substituted-9-aza-3,6,12,15-tetrathiaheptadecanes: significant effect of Ph–C–N framework on the extractability. *Dalton Trans.*, 2016, 45, 12548–12558.
  10. Masuda, T.; Arase, J.; Inagaki, Y.; Kawahata, M.; Yamaguchi, K.; Ohhara, T.; Nakao, A.; Momma, H.; Kwon, E.; \*Setaka, W. (2016). Molecular Gyrotops with a Five-Membered Heteroaromatic Ring: Synthesis, Temperature-Dependent Orientation of Dipolar Rotors inside the Crystal, and its Birefringence Change. *Cryst. Growth Des.*, 2016, 16, 4392–4401.
  11. Sawada, T.; Yamagami, M.; Ohara, K.; Yamaguchi, K.; \*Fujita, M. (2016). Peptide [4]Catenane by Folding and Assembly. *Angew. Chem. Int. Ed.*, 2016, 55, 4519-4522.
  12. Wang, S.; Taniguchi, T.; Monde, K.; Kawahata, M.; Yamaguchi, K.; \*Otani, Y.; \*Ohwada, T. (2016). Hydrogen bonding to carbonyl oxygen of nitrogen-pyramidalized amide – detection of pyramidalization direction preference by vibrational circular dichroism spectroscopy. *Chem. Commun.*, 52, 4018-4021.
  13. Tarao, A.; Niki, A.; Komagawa, S.; Arimitsu, K.; Uchimoto, H.; \*Kawasaki, I.; Yamaguchi, K.; \*Nishide, K. (2016). A highly regio- and stereoselective selenoxide elimination of 2-bis[4-(trimethylsilyl)phenylseleno]alkanes to give (*E*)-alkenyl selenoxides and its mechanistic study. *ChemistrySelect*, 2, 189-194.
  14. Ishizuka, T.; Watanabe, A.; Kotani, H.; Hong, D.; Satonaka, K.; Wada, T.; Shiota, Y.; Yoshizawa, K.; Ohara, K.; Yamaguchi, K.; Kato, S.; \*Fukuzumi, S.; \*Kojima, T. (2016). Homogeneous Photocatalytic Water Oxidation with a Dinuclear Co<sup>III</sup>–Pyridylmethylamine Complex.

Inorg. Chem., 55, 1154-1164.

15. Wang, S.; Sawada, T.; Ohara, K.; Yamaguchi, K.; \*Fujita, M. (2016). Capsule-Capsule Conversion by Guest Encapsulation. Angew. Chem. Int. Ed., 55, 2063-2066.
16. \*Tominaga, M.; Kawaguchi, T.; Ohara, K.; Yamaguchi, K.; Masu, H.; \*Azumaya, I. (2016). Synthesis and crystal structures of twisted three-dimensional assemblies of adamantane-bridged tris-NHC ligands and Ag<sup>I</sup>. CrystEngComm, 18, 266-273.

---

口頭発表・学会発表 (2020年4月~2021年3月)

---

【一般講演】

1. 林侑加子, 小原一朗, 山口健太郎 (2020) 結晶スポンジレーザー脱離イオン化質量分析, 有機微量分析研究懇談会第37回合同シンポジウム, 6月11日~6月12日, 島根
2. 兵頭直, 富永昌英, 川幡正俊, 山口健太郎 (2020) 環状化合物の多孔性結晶による緑の香り成分の包接挙動と吸着結晶構造解析, 有機微量分析研究懇談会第37回合同シンポジウム, 6月11日~6月12日, 島根
3. 宋舒禕, 湯玉欄, 尾谷優子, 池田博隆, 兵頭直, 山口健太郎, 稲垣都士, 大和田智彦 (2020) チオアセトアニリドのシス-トランス異性化に与える効果の解析, 日本薬学会関東支部会, 9月19日, (オンライン)
4. 尾谷優子, 蘇奥澤, 王思遠, 翟璐晗, 佐田あかね, 大木理恵子, 長門石暁, 津本浩平, 奈良雅之, 川幡正俊, 山口健太郎, 大和田智彦 (2020) p53-MDM2/MDMX 間相互作用を阻害する非天然ヘリックス分子の創製, 反応と合成の進歩 2020 特別企画シンポジウム, 11月9日~11月10日, (オンライン)
5. Shuyi Song, Yulan Tang, Yuko Otani, Hiroataka Ikeda, Tadashi Hyodo, Kentaro Yamaguchi, Satoshi Inagaki, Tomohiko Ohwada (2021) Analysis of effects on cis-trans isomerization of N-thioacetanilide, 日本薬学会 第141年会, 3月26日~29日, 広島
6. Hao U, Akinari Sumita, Tadashi Hyodo, Kentaro Yamaguchi, Yuko Otani, Tomohiko Ohwada (2021) English Title Friedal-Crafts acylation reaction of amino acids, 日本薬学会 第141年会, 3月26日~29日, 広島
7. 兵頭直, 富永昌英, 山口健太郎, (2021) 環状化合物の多孔質結晶によるハロゲン化エーテル系医薬品の包接挙動解析, 日本薬学会 第141年会, 3月26日~29日, 広島
8. 杉本美久, 富永昌英, 兵頭直, 山口健太郎 (2021) 環状化合物からなる多孔質結晶によるフェノール類の吸着と結晶構造解析, 日本薬学会 第141年会, 3月26日~29日, 広島
9. 富永昌英・藤丸滉輔・兵頭直・山口健太郎 (2021) アダマンタン部位を有する環状化合物によるアルカン類の選択的結晶化, 日本化学会第101春季年会, 3月19日~22日, オンライン

---

特許

---

- 特許 (日本)  
回折データ解析方法, コンピュータプログラムおよび憶媒体  
発明者 藤田 誠, 猪熊泰英, 山口健太郎  
公開第 2016-538444 号 (日本)  
PCT/JP2015/071682  
US15/500629 (米国)  
EP15826644.5 (欧州)  
特許 (日本)  
光応答性を有する遷移金属錯体  
発明者 山口健太郎 小林 稔  
特許権者 独立行政法人科学技術振興機構  
特許第 4878170 号 (2011年12月9日)  
特許出願 (日本)  
 $\pi$  電子系が結晶中で一軸回転する分子コマによる有機結晶材料と複屈折の制御方法  
発明者 瀬高 渉, 山口健太郎  
特許権者 独立行政法人科学技術振興機構  
特開 2010-95354 (2010年4月16日)  
特許出願 (日本)  
結晶中で  $\pi$  電子系が回転する分子コマおよびその製造方法  
発明者 瀬高 渉, 山口健太郎  
特許権者 独立行政法人科学技術振興機構  
特開 2010-58374 (2010年3月15日)  
特許出願 (日本)  
皮膚感作性検定方法  
発明者 岡本昌彦, 山口健太郎, 清 悦久  
特許権者 住友化学 (株)  
特開 2009-186253 (2009年)  
特許出願 (日本)  
質量分析用多価プローブ  
発明者 山口健太郎 檀上博史 伊藤文博  
出願人 山口健太郎 檀上博史 伊藤文博  
特許願 出願 2008-335877 (2008年12月2日)  
特許出願 (日本)  
イオン脱着を利用した光応答分子システム  
発明者 山口健太郎 小林稔  
特許権者 科学技術振興機構  
特許願 出願 2006-41931 (2006年2月20日)  
特許出願 (日本)  
ジホスフィン化合物の製造方法, この製造方法により製造されるジホスフィン化合物及び中間生成物  
発明者 山口健太郎 檀上博史 小泉徹 今本恒雄  
出願人 独立行政法人科学技術振興機構  
特許願 出願 2006-30519 (2006年2月18日)



特許出願（日本）

ビス（ホスフィン）ボロニウム塩，ビス（ホスフィン）ボロニウム塩の製造方法，この製造方法により製造されるビス（ホスフィン）ボロニウム塩

発明者 山口健太郎 檀上博史 小泉徹  
今本恒雄

出願人 独立行政法人科学技術振興機構

特許願 出願 2006-30520（2006年2月18日）

特許

コールドスプレー質量分析装置

発明者 山口健太郎，小林達次

特許権者 科学技術振興事業団 日本電子株式会社

特許第 3786417 号（2006年3月31日）

U.S. Pat. 6,977,369

（同上）Yamaguchi, K., Kobayashi, T.

JST, JEOL（Dec 20, 2005）

特許（日本）

質量分析用試料スプレー装置

発明者 山口健太郎 三木伸一 佐保良二

特許権者 ブルカー・ダルトニクス株式会社

日本サーマルエンジニアリング

特許第 311642 号（2005年10月26日）

特許（日本）

分析用超伝導マグネット用液体ヘリウム再

凝縮装置および液体ヘリウム再凝縮方法

発明者 山口健太郎 佐保良二 森山正人

特許権者 山口健太郎 池田宣征

特許第 238892 号（2005年8月19日）

特許（日本、中国、台湾、EU、オーストラリア他）

コールドスプレー質量分析装置

発明者 山口健太郎 小林達次

特許権者 科学技術振興機構 日本電子株式会社

特許第 3616780 号（2004年11月）

特許

三次元分子構造解析法

発明者 山口健太郎、首藤紘一

特許権者 山口健太郎、首藤紘一

特許第 3335680 号（2002年8月2日）

特許

包摂超分子錯体のホスト化合物および包摂超分子錯体

発明者 西郷和彦、相田卓三、金原数、尊健愚、田代

健太郎、坂本茂、山口健太郎

特許権者 東京大学長

特許第 3256743 号（2001年12月7日）

特許

エレクトロスプレー質量分析手法及びその装置

発明者 山口健太郎

特許権者 科学技術振興事業団

特許第 3137953 号（2000年12月8日）

U.S.Pat. 6,642,515 (May 27, 2004)

特許

質量分析用標準物質および質量分析用標準物質キット

発明者 山口健太郎

特許権者 山口健太郎 日本電子株式会社

公開第 2000-310617 号（2000年11月7日）







# 生命物理化学

## Laboratory of Biophysics

### 教員

**教授 岸本泰司** 着任年月日：2006年4月1日  
 最終学歴：2001年3月 東京大学大学院薬学系研究科博士課程修了。博士（薬学）  
 前職：日本学術振興会特別研究員（PD）（大阪大学大学院医学研究科）  
 （2020年12月に転出）

**助教 窪田剛志** 着任年月日：2005年4月1日  
 最終学歴：2005年3月 九州大学大学院薬学府博士課程修了。博士（薬学）  
 前職：九州大学大学院生（薬学府 博士課程）

**助手 中島健太郎** 着任年月日：2006年11月1日  
 最終学歴：2005年3月 横浜国立大学大学院修士課程修了。  
 2020年3月 徳島文理大学にて論文により学位取得。  
 博士（薬学）  
 前職：ニッピコラーゲン工業株式会社 化粧品製造開発部

### 教育の概要

#### 担当科目：大学院 薬品生物物理化学（岸本泰司）

- 1) 教育達成目標とその妥当性：検査薬などを開発するにあたり、対象となる物質（タンパク質や糖など）を高感度に検出・定量できることが必要である。そこで本授業では、ELISA法や酵素サイクリング法など高感度測定法の原理について学び、さらには疾患の検査方法への応用について理解する。また、その測定法に用いる測定器についても学習する。
- 2) 目的達成状況：目標は達成できた。
- 3) 教育内容面での取り組みと改善方策：目標を達成するために、受講生である社会人大学院生の都合に合わせた授業日程を考えた。
- 4) 教えるために使った時間：正規の15回分の授業を行った。

#### 担当科目：物理化学1（窪田剛志）

- 1) 教育達成目標とその妥当性：医薬品の物理的性質を理解するためには、物理化学的な思考・取り扱いは非常に重要である。本講義では、前期の物理学で学んだ基礎的な数学的・物理学的概念を発展・適用し、熱力学、化学平衡、相平衡の理解に導くことを目的とした。
- 2) 目的達成状況：おおむね達成できた。
- 3) 教育内容面での取り組みと改善方策：基本の原理や概念

を理解してもらうことを大事にした。毎回、動画や映像を使用して、視覚的・直感的な理解を促した。また、パワーポイントを主に使用して講義を行ったが、毎回まとめの資料を印刷し配布した。講義の最重点項目を理解しているかどうか、毎回、宿題あるいはレポートとしてチェックし、答えは採点の上、次回の講義開始前に学生に返却した（特に国家試験の問題に早くからなじませるために、国家試験過去問題を利用した）。これにより、学生が講義のポイントを聞き逃さないようする意識が高まると同時に、教師側としては各学生がどの程度講義のポイントを理解しているかを把握できるメリットがある。学生全体の成績が悪いケースでは、その回の講義内容自体に問題があったと判断し、次回の講義で補足説明をするように心がけた。また、不正解の割合があまりに悪い学生に対しては、補習を実施し、当該学生の状況をチューターへ連絡する判断の一助とした。

4) 教えるために使った時間：教えるために使った時間：週1回、半期15時間に加え、補講を数回行った。さらに相当程度、マンツーマンでの指導を行った。さらに、資料作成には、講義毎に数日の労力をかけた。

#### 担当科目：生物物理学（岸本泰司）

- 1) 教育達成目標とその妥当性：生物物理学は、生命システムを物理学と物理化学を用いて理解しようとする学問領域である。生物物理学の対象は、分子スケールから1個体、生態系に至るまで全階層の生物的組織におよんでいる。本講義の前半ではこの生物物理学の基礎となる緩衝液および電解質溶液の理論と、電気化学の話題を中心に解説し、問題演習を行う。後半では物理製剤学などの医療薬学分野を学ぶ上で重要となる「界面、コロイド分散系」「粘度、輸送系」の概念・関連する諸現象、およびこれら概念・現象の理解に必要な科学的原理について理解してもらうことを目標とした。
- 2) 目的達成状況：本試験でも平均点で7割以上が得られ、概ねよく理解してもらえたと判断できる。
- 3) 教育内容面での取り組みと改善方策：枝葉は割愛し、基本の原理や概念を理解してもらうことを大事にした。また、パワーポイントを主に使用して講義を行ったが、毎回まとめの資料を印刷し配布した。講義の最重点項目を理解しているかどうか、毎回、宿題あるいはレポートとしてチェックし、答えは採点の上、次回の講義開始前に学生に返却した。これにより、学生が講義のポイントを聞き逃さないようする意識が高まると同時に、教師側としては各学生がどの程度講義のポイントを理解しているかを把握できるメリットがある。学生全体の成績が悪いケースでは、その回の講義内容自体に問題があったと判断し、次回の講義で補足説明をするように心がけた。
- 4) 教えるために使った時間：週1回、半期15時間に加え、

補講を数回行った。さらに相当程度、マンツーマンでの指導を行った。資料作成には、講義毎に数日の労力をかけた。

**担当科目：生物統計学（岸本泰司）**

- 1) 教育達成目標とその妥当性：基本的な生物統計学の手法を学び、それがどのように臨床で応用されているかを理解することを目標とした。また、疫学についても範囲に入れた。
- 2) 目的達成状況：目標は達成できた。
- 3) 教育内容面での取り組みと改善方策：現在はコンピュータソフトウェアが発達しているため、データの解釈さえ正確にできれば、あとはコンピュータの使い方だけが問題となる。そこで実際の授業にも、PCルームのパソコンを利用し、ソフトウェアを駆使して統計学の勉強に励んでもらった。
- 4) 教えるために使った時間：正規の15回分の授業を行った。

**担当科目：事前学習（岸本、窪田、中島）**

- 1) 教育達成目標とその妥当性：病院・薬局の実務実習を円滑に行うために、調剤および製剤、服薬指導などの薬剤師職務に必要な基本的知識、技能、態度を習得する必要がある。そこで、講義、演習、SGD、ロールプレイ及び調剤実習を行った。
- 2) 目的達成状況：目標は達成できた。
- 3) 教育内容面での取り組みと改善方策：SGDやロールプレイへの積極的な参加を促すように努めた。
- 4) 教えるために使った時間：オムニバス形式で各教員が3時間担当した。

**担当科目：病院実習ならびに薬局実習（岸本、窪田、中島）**

- 1) 教育達成目標とその妥当性：病院薬剤師の業務と責任を理解し、チーム医療に参画できるようになるために、調剤および製剤、服薬指導などの薬剤師業務に関する基本的知識、技能、態度を修得することを目標とする。また、薬局の社会的役割と責任を理解し、地域医療に参画できるようになるために、保険調剤、医薬品などの供給・管理、情報提供、健康相談、医療機関や地域との関わりについての基本的な知識、技能、態度を修得することを目標とする。
- 2) 目的達成状況：薬学科（6年制）出身者として必要とされる知識や技能を、実務を通して、すべて修得させた。
- 3) 教育内容面での取り組みと改善方策：各教員に振り分けられた5年生、ならびに講座配属されている5年生に対して、実務実習がスムーズに進むように、指導薬剤師との間で教育内容の進捗状況を調整した。
- 4) 教えるために使った時間：病院または薬局に都合3回訪問した。また月に1回、講座の5年生には集まってもらい情報交換した。

**担当科目：物理・化学実習（岸本、窪田、中島）**

- 1) 教育達成目標とその妥当性：生薬学において基盤となる物理・化学について、有機化学実験・物理化学実験を通じて学ぶ。有機化学実験では、基本となる操作法・精製法を身につけた後、医薬品を化学構造から理解するために、官能基の検出法、化学合成法について実習する。物理化学実験では、物質の物理的性質を学ぶために、物理平衡と反応速度について実習する。
- 2) 目的達成状況：おおむね達成できた。
- 3) 教育内容面での取り組みと改善方策：実験機器の取り扱いについて、できるだけきめ細やかに個人指導を行った。また、ただ手を動かすだけではなく、なぜこのような実験を行う必要があるのか、その目的意識の自覚化を促進するようにした。
- 4) 教えるために使った時間：一日2時間分を2週間ほぼ毎日に集中して開講した。実習の都合上、終了時間が延長になることも多くあった。

**担当科目：特別実習（岸本、窪田、中島）**

- 1) 教育達成目標とその妥当性：これまでの講義や実習で修得してきた知識と技能を、自ら考えて手を動かすことによって活用・応用できるようになるために、教員やスタッフ全員が関わって指導する、いわば「卒業研究」である。夏休み、冬休み、春休みの期間を重点的に活用して、指導を行った。
- 2) 目的達成状況：科学の奥深さを各自の研究テーマの中で実体験するとともに、薬学部出身者として必要とされる知識や技能を、研究の過程で修得した。
- 3) 教育内容面での取り組みと改善方策：講座配属された3年生以上の学生を、教員とスタッフに振り分けて、一緒に実験を行った。薬学部3・4年生は講義・実習・試験が多すぎるため、なかなか思うように時間が取れなかった。
- 4) 教えるために使った時間：昼夜問わず、休みの日も関係なく本実習は進められた。

**担当科目：総合薬学演習（岸本、窪田、中島）**

- 1) 教育達成目標とその妥当性：薬剤師国家試験の対策講義として開講され、前期は「基礎薬学」を、後期は「基礎薬学」から「医療薬学」までを通して学ぶことが目標である。とくに前期は、午前中が講義で午後は演習という形式を用いて、学習効果を上げることが狙っている。
- 2) 目的達成状況：国家試験に必要な内容は一通り教えることができた。
- 3) 教育内容面での取り組みと改善方策：授業回数が多すぎて、授業や演習試験の復習の時間が十分に取れず、学生は自分の頭の中を整理できていないように思われる。国家試験の問題の中には、過去に出題された問題とよく似たものが出題されることがあり、復習は重要である。今後の改善が望まれる。
- 4) 教えるために使った時間：オムニバス形式。



### 担当科目：卒業実習（岸本泰司）

- 1) 教育達成目標とその妥当性：薬剤師国家試験の対策講義として開講され、前期は「基礎薬学」を、後期は「基礎薬学」から「医療薬学」までを通して学ぶことが目標である。とくに前期は、午前中が講義で午後は演習という形式を用いて、学習効果を上げることを狙っている。
- 2) 目的達成状況：国家試験に必要な内容は一通り教えることができた。
- 3) 教育内容面での取り組みと改善方策：授業回数が多すぎて、授業や演習試験の復習の時間が十分に取れず、学生は自分の頭の中を整理できていないように思われる。国家試験の問題の中には、過去に出題された問題とよく似たものが出題されることがあり、復習は重要である。今後の改善が望まれる。
- 4) 教えるために使った時間：オムニバス形式。

### 担当科目：エクスペリメントスキル（窪田剛志）

- 1) 教育達成目標とその妥当性：モル濃度の計算や溶液の基本的性質を理解し、実際の生理食塩水の調製を行う。生理食塩水の調製を通じて、種々の実験器具、測定装置の用途や使用法を学ぶ。一連の実験を通じて、数値データの取扱い、客観的な図表の作成、論理的な文章を作成できるようにする。
- 2) 目的達成状況：おおむね達成できた。
- 3) 教育内容面での取り組みと改善方策：精度の異なる実験器具の使い方を通して、誤差の概念を体感できるように工夫している。また、試薬を量る際に、基本的なモル濃度計算などを反復行うことで、様々な濃度単位を扱えるようにしている。
- 4) 教えるために使った時間：3～5限の実習を5回行った。

### 担当科目：早期体験学習（分担：中島健太郎）

- 1) 教育達成目標とその妥当性：病院、保険薬局、製薬企業への訪問・見学により、医療現場や医薬品の製造・開発における薬剤師の仕事の重要性と今後期待される役割について体験学習させる。訪問実習前後のスマールグループディスカッション（SGD）と発表会を通して、医療現場で薬剤師が果たす役割とその意義について考えさせ、自身の薬剤師としての将来像を持たせることにより学生の学習意欲を向上させる。
- 2) 目的達成状況：今年度はコロナ感染症により、病院、保険薬局、製薬企業への訪問・見学ができなかったため、各施設から講師（病院：4名、保険薬局：4名、製薬企業：3名）を招聘し、スライドによる仮想の施設見学に加え、感染予防対策を講じた学生と薬剤師とのスマールグループでの面談による新たな実習形式の早期体験学習を試みた。韓国から入国できていなかった5名の留学生に対しては、Google Classroomでの遠隔授業に加え、Zoomなどのオンライン会議システムを使った薬剤師との面談や製薬企業の仮想工場見学のライブ配信を行った。学生のレポートでは、薬剤師が果たす役割とそ

の意義について十分に考察されており、学習意欲の向上が伺われる内容も散見されることから、所期の目的は概ね達成できたと考えられる。

- 3) 教育内容面での取り組みと改善方策：医療機関における守秘義務の意義と重要性を学ばせるとともに、挨拶や言葉使いなど、医療人の前提である社会人としてのマナーの涵養にも努めた。さらに、訪問実習前のSGDにより、施設訪問の目的を明確にさせ、その後のSGDと発表会において薬剤師が果たす役割とその意義について考えさせることができた。また、学生同士による相互評価を導入し、SGDや発表会への学生の積極的な参加を促すことができた。また、発表会では教員に加え、今年度の実務実習を終えた5年次の一部の学生にも参加してもらい、薬剤師としての心構えや学習意欲の向上を促すようなコメントや情報を捕捉した。今年度は、病院、保険薬局、製薬企業へ実際に訪問し、現場を見学することができなかった反面、各施設への移動時間を節約することができ、各施設の講師と十分な質疑応答の時間をとることができたため、学生の満足度、および講師陣からの評価は概ね高かった。
- 4) 教えるために使った時間：15コマ（90分/コマ）の講義・SGD・体験実習に加え、訪問施設・全国の薬学部へ郵送する報告書の作成に、合計100時間程度費やした。

### 管理・運営に係ること

#### 岸本泰司

初年次教育委員会委員長  
OSCE実施委員会委員  
教職課程委員会委員（学部代表）  
評価・FD委員会委員  
入試問題出題・採点委員会委員  
四国全薬学部連携・物理FD委員会委員  
薬学教育協議会・物理化学系教科担当者  
薬剤師国家試験問題検討委員会「物理・化学・生物」部会委員

#### 窪田剛志

OSCE実施委員会委員  
初年次教育委員会委員  
入学前教育委員会委員  
オープンキャンパス体験実習担当

#### 中島健太郎

早期体験学習委員会  
実験動物委員会  
オープンキャンパス体験実習担当

### 研究の概要

**課題 1. プラセボ反応の分子メカニズムの解明 (岸本)**

行動遺伝学、行動薬理学の手法を用いて様々な、神経疾患の基礎研究を行なっている。そのうちの 1 テーマについて以下に概説する。

プラセボ反応は、薬理的に不活性な“偽薬”の投与による好ましい生理学的応答である。この現象はある種の学習による期待から生じると考えられている。プラセボ反応の脳内分子機構を明らかにすれば、薬効の最大化、医療費の削減、臨床試験の精緻化に貢献できる可能性がある。しかし、現在、研究対象がほぼ人間のみであり、方法も主に fMRI などの脳機能イメージング法に限られていることから、詳細な脳内分子機構が明らかとなっていない。そこで本研究は、1) マウスにおけるプラセボ条件づけ系の有用性を評価し、2) この系を用いて、報酬系に関与するドパミン受容体の拮抗薬および作動薬の効果を明らかにすることを目的とした。方法としては、野生型マウス (C57BL/6J) に対し、4 日間連続で (午前/午後の交互に)、30 分間、「注射なし+ケージ」、もしくは「モルヒネ注射+チャンバー」の組合せ提示の後、ホットプレートテストを行なった。5 日目午前に、「生理食塩水注射+チャンバー」に条件を変えて逃避反応が起きるまでの潜時を評価した (評価試行)。さらに、評価試行において、 $\mu$  オピオイド受容体拮抗薬であるナルトレキソン、ドパミン受容体 D2, D3 拮抗薬であるアミスプリド、ドパミン受容体作動薬であるプラミベキソールの影響を見た。さらに、薬剤が痛覚の閾値自体に影響しないかを確認するため、無処置群と薬剤投与群で痛覚潜時を比較した。評価試行において有意なプラセボ反応が観察された。また、この効果はナルトレキソンではほぼ完全に阻害された。この結果は、臨床研究における  $\mu$  オピオイド受容体拮抗薬によるプラセボ反応の阻害と一致しているため、プラセボ研究におけるマウスの条件づけ系の有用性を示すことができた。さらに、アミスプリドの投与はプラセボ反応を有意に減弱させたことから、プラセボ反応におけるドパミン受容体の重要性が明らかとなり、プラセボ反応における報酬系の関与が示唆された。薬剤が痛覚の閾値自体に影響しないかを確認したところ、全ての薬剤間で潜時に有意差は観察されなかった。これにより、アミスプリドは痛みに対する閾値に影響せず、プラセボ反応に作用したことが示唆された。

**外部資金導入状況**

(岸本)

日本学術振興会 科学研究費補助金・基盤(C) (代表)

**課題 2. 薬学部の研究論文生産性に関する書誌学的調査 (岸本)**

2000 年代に入ってから、主要 20 カ国ほどの中で日本のみが自然科学分野における論文発表数が停滞していることが近年頻繁に議論されている。この間、特に薬学部においては、6 年制への移行や私立薬学部の急増など、他の学部にくらべて

も大きな変化があった。しかし、薬学部に特化した学業生産性に焦点を当てた研究は少ない。そこで本調査では、新設薬学部の増加が一旦落ち着いた最後の年である 2017 年に着目し、この年における全国薬学部の論文(医学・生物学分野に限る)生産性を分析した。教員を教授、准教授、講師とし、教員 1 人当たりの平均論文発表数は、国公立大学が 2.75、私立大学が 0.87 で、両者の間に有意な差があった。私立大学を 2003 年以降に設置された薬学部とそれ以前に設置された薬学部に分けてみると、生産係数は前者が 0.62、後者が 1.18 であった。このように、新設された薬学部は、従来の学校に比べて論文の生産性が有意に低いことがわかった。6 年制を採用している新設私立大学薬学部の増加は、臨床的に強みのある薬剤師の排出に貢献していることは間違いないが、同時に基礎研究能力の低下に関わる問題を浮き彫りにすることができた。

**課題 3. タウオパチーモデルマウスの物体認識記憶における microRNA-132 の作用 (窪田)**

microRNA-132 (miR-132) は神経の生長や記憶・学習に関連した幾つかの遺伝子、すなわち p250GAP, SIRT1 そしてアセチルコリンエステラーゼ(AChE) の 3' 側の非転写領域に結合することが遺伝子配列から予測されている。本研究では、タウオパチーモデルマウスの物体認識記憶における miR-132 の作用を、新奇物体認識試験を用いて検討した。

8~10 か月齢の rTg4510 マウスを 2 つの物体を配置したケージの中に入れ、訓練試行として 10 分間探索させた。その 2 時間後(T1)、及び、24 時間後(T2)に片方の物体を新規物体に変更し、同様に探索させた。探索率は総探索時間における新奇物体探索時間を割合として算出した。miR-132 の相補的配列の 1 本鎖 RNA を合成し、訓練試行の 24 時間前に脳室内に投与した。

rTg4510 マウスの T1 において物体認識記憶の障害が認められたが、miR-132 の投与により改善した。T2 では、miR-132 投与により探索率の低下が認められた。一方、miR-132 投与から 24 時間後には前頭前皮質におけるアセチルコリンエステラーゼ(AChE) の mRNA 発現量が著しく減少したが、48 時間後にはその差は消失した。このことより、miR-132 投与により惹起した短期的な物体認識記憶の改善は、AChE の発現低下に伴う ACh レベルの増加に起因する可能性が示唆された。SIRT1 の mRNA は 24 時間では変化しなかったが、48 時間後には有意な低下が認められた。長期的な物体認識記憶の障害は、miR-132 投与の 48 時間後に認められた SIRT1 のダウンレギュレーションに起因する可能性が示唆された。以上より、AD マウスでは、miR-132 の AChE と SIRT1 に対する抑制のバランスが経時的に変化することにより、記憶の改善/悪化が惹起することが示唆された。

**課題 4-1. LDM 高発現トランスジェニックマウスを用いた実験的脱髄後の髄鞘再生に対する脂質代謝関連酵素の機能的役**



## 割の解明 (中島)

肝臓でのコレステロール生合成は 20 段階以上の反応を経て行われており、これらの反応に関与する分子群は細胞内コレステロール濃度感受性の転写因子である *sterol regulatory element-binding protein 2 (SREBP2)* によって制御されている。肝細胞内コレステロール濃度は、細胞内での新規合成と *low density lipoprotein* 受容体 (*LDLR*) による血液からの取り込みによって厳密に調節されている。一方、末梢血中のリポタンパク質は血液脳関門を通過できないことから、脳に必要なコレステロールはほぼ全て脳内で新規に合成されていると考えられており、末梢とは異なるコレステロール合成制御機構が示唆されているが、その詳細は明らかになっていない。本研究では、多発性硬化症に代表される脱髄性疾患の発症機序の解明と創薬ターゲットを見出すことを最終目的として、*cuprizone* 投与による実験的脱髄・髄鞘再生モデルマウスを用いてコレステロール合成関連分子の発現変動を解析した。これまでに、コレステロール合成酵素の中で唯一の *CYP* 酵素である *Lanosterol 14 $\alpha$ -demethylase (LDM, CYP51)* の発現をオリゴデンドロサイト特異的に増大させたトランスジェニックマウス (*LDM-Tg*) では、脱髄の程度が軽減されることが明らかとなっており、*LDM* が髄鞘再生過程において重要な機能的役割を担っていると考えられる。本研究では、*LDM-Tg* マウスと対照となる野生型マウスを用いて実験的脱髄・髄鞘再生モデルマウスを作製し、コレステロール合成関連分子の発現変化を免疫組織化学と *laser capture microdissection (LCM)* により回収した白質の抽出タンパク質のウェスタンブロットによって解析した。脱髄期では、野生型・*LDM-Tg* マウスともに、炎症に伴う反応性アストロサイトの増大および突起の伸長と、それらアストロサイトにおいて脱髄の程度と関連した *SREBP2* の発現増大が見られた。髄鞘再生期の早い段階では、*SREBP2* の発現は脱髄期に比べて減少する一方で、*SREBP2* の制御を受ける *LDLR*、*squalene synthase* ならびに *LDM* の発現増大が確認されたことから、脱髄により惹起された反応性アストロサイトでは、肝細胞と同様に、*SREBP2* により、コレステロール合成が制御されていると考えられる。対照的に、正常神経細胞表面で見られる *LDLR* の発現は、*SREBP2* とは異なる機構により制御されている可能性が示唆される。脳内コレステロール代謝の制御機構については未だ不明な点が多く、多発性硬化症などの発症機序が未解明の脱髄性疾患の発症・髄鞘再生過程での変化を明らかにすることは、創薬の点からも非常に重要な課題である。特に、脱髄の軽減効果を持つ *LDM* 発現増大がそうした制御機構に与える影響については、さらなる検討が必要である。

## 課題 4-2. 藻類摂取による脳内炎症予防効果の検討 (中島)

超高齢化の進む現代社会において、健康寿命の延伸と労働力人口の確保は喫緊の課題であり、有効な治療法の確立されていない認知症や精神疾患の予防は、増大し続ける社会保障

費の抑制の観点からも非常に重要である。本研究課題では、本学薬学部の研究グループが見出し、人工合成法を確立した緑藻類の初期発生に必須な成長因子 (*サルーシン, thalassinin*) を応用した海藻類の陸上養殖システムにより生産されたヒトエグサを用いて、脳内炎症予防効果について解析を進めている。ヒトエグサをはじめとする緑藻類には、血中コレステロールの低下作用や血糖値の上昇抑制作用がある食物繊維、抗酸化作用を持つビタミン類、DNA 生合成に必要な葉酸、必須脂肪酸の  $\alpha$ -リノレン酸、カルシウムなどが豊富に含まれており、様々な疾患の予防効果が報告されている。これまでに、ヒトエグサと同じ緑藻植物門に属すボタンアオサの抽出成分が、培養神経細胞において抗炎症作用や神経保護作用を示すことが報告されているが、個体レベルでの神経変性疾患に対する藻類摂取の予防効果はほとんど調べられていない。近年、認知症や神経変性疾患に加え、明確な病理学的変化を示さないといわれている慢性疲労症候群や統合失調症のような精神疾患においても、症状と関連した脳内炎症が報告されていることから、緑藻類に含まれる豊富な栄養素の複合的な働きによる脳内炎症抑制と、それによるこれら疾患の予防効果が期待できるのではないかと考えた。本研究では、アルツハイマー型認知症の三大病変の一つで、細胞骨格タンパク質であるタウの過剰リン酸化によって生じる神経原線維変化を発現する遺伝子組換えマウスと、統合失調症様症状が報告されている *cuprizone (CPZ)* 短期投与による脳内炎症モデルマウスを用い、脳内炎症を指標として、これらの疾患に対する藻類摂取の予防効果を検討する。これまでに、*CPZ* 誘発性脳内炎症モデルマウスの作製に成功し、このモデルマウスを用いた予備検討により、本ブランディング事業で陸上栽培したヒトエグサの日常的な摂取が、脳内炎症予防効果を持つことを示唆する結果を得ている。今年度は、アルツハイマー型認知症の三大病変の一つである神経原線維変化を誘発するヒト型変異タウを過剰発現する遺伝子組換えマウス (*rTg4510* マウス) を用いて、ヒトエグサを継続摂取することによる神経原線維変化とそれに伴う脳内炎症の抑制効果について検討した。

ヒトエグサ (*MSN, Monostroma nitidum*) を実験動物用飼料に 1%または 3%(w/w)になるよう添加したヒトエグサ含有固形飼料 (1%MSN, 3%MSN) を調製し、自由摂取できる環境下で、生後 8-12 週齢の *rTg4510* マウスを 9-20 週間飼育した (実験群)。通常固形飼料で同様に飼育した同腹のヒト型変異タウを過剰発現しないマウスを対照群とした。これらマウスの脳の凍結切片を作製し、リン酸化タウに対する抗体 (抗 TAU(pS396)抗体) を用いて神経原線維変化を評価し、脳内免疫担当細胞であるミクログリアのマーカーとして知られる *Iba1* タンパク質に対する抗体を用いた免疫組織学的解析により、脳内炎症の程度を評価した。

*rTg4510* マウスの経時的な免疫組織学的解析の結果、マウス大脳皮質および海馬 CA3 領域における抗 TAU(pS396)抗体の免疫活性は、生後 5 ヶ月齢から加齢に伴った漸増が観察さ

れ、生後 12 ヶ月齢の rTg4510 マウスでは顕著な脳の萎縮が認められた。一方、抗 Iba1 抗体による解析では、抗 TAU(pS396) 抗体による免疫活性がほとんど認められなかった生後 2 ヶ月齢から、対照マウスと比較して Iba1 免疫活性の顕著な増大が認められた。これらの撮影画像の定量解析の結果、Iba1 免疫活性の 2 ヶ月齢以降の加齢に伴う有意な変動は認められず、神経原線維変化の病変形成初期から脳内炎症が起こっていることが示唆された。rTg4510 マウスにおける MSN 投与の影響を検討した結果、抗 TAU(pS396) 抗体および抗 Iba1 抗体の免疫活性の MSN 投与群での有意な低下は認められなかったが、野生型マウスでの比較では、未処置群と比較して MSN 投与群で Iba1 免疫活性の面積比が有意に低かった。これらの結果から、MSN の継続的摂取による、ミクログリアの活性化レベルの抑制効果は認められるものの、ヒト型変異タウ蛋白質の過剰産生による器質の変化を伴う強制的な炎症反応を抑制するほどのものではないと考えられた。他方、ミクログリアの活性化状態に応じた細胞形態変化を解析するため、免疫組織学的解析により得られた画像データからよりミクログリアの細胞体と突起に分けて定量的に解析する手法を確立し、野生型マウスにおける MSN 投与の影響を再解析した結果、Iba1 免疫活性陽性細胞の細胞体の数や大きさに有意な差は見られなかった一方で、細胞突起の数が、MSN 投与群で有意に低かった。この結果は、MSN 投与がミクログリアの細胞体の数や大きさには影響を与えず、正常時に周囲の環境を監視している突起のみを抑制したことを示唆している。

これまで、ミクログリアは神経変性疾患や脳の損傷における役割が主に注目されてきたが、近年の技術の発展などにより正常脳におけるミクログリアの多様な役割も明らかになりつつある。また、近年、脳内炎症を伴う神経疾患の病態において異なる遺伝子発現パターンを示す活性化ミクログリアのサブタイプおよびクラスターが存在することが示唆されており、今回のように抗 Iba1 抗体のみを用いた解析に留まらず、多様なサブタイプやクラスターに分類した上で比較解析していくことが、脳内炎症を伴った疾患研究の今後の重要な課題になると考えられる。近年、うつ病や統合失調症等の組織学的変化の乏しい精神疾患においても、症状と関連した脳内炎症が報告されていることから、MSN 摂取によるミクログリアの活性化レベルの抑制効果や脳内炎症予防効果は、罹患者数の多いこれら精神疾患の予防にも繋がることが期待される。

#### 課題 4-3. 非相同タンパク質 Bcnt と glutamine synthetase の共通エピトープに関する研究 (中島、客員教授 ; 岩下)

反芻類特異的に発現している p97Bcnt は、5500 万年ほど前に直系型 p45Bcnt の遺伝子重複によって生じたことが岩下らによって報告されている。この両者は全身の組織分布も細胞内局在も異なっていることから、生物進化の過程で異なる機能的役割を担うに至ったと考えられた。広範な生物種で保存されている p47Bcnt の C-末端領域のペプチド

EELAIHNRGKEGYIERKA に対する抗体 (抗 BCNT-C 抗体) を作成し、免疫組織化学的検索を行ったところ、成熟ラット脳では astrocyte の細胞体および突起で発現していた。ところが、p47Bcnt の発現を *in situ* hybridization によって検索すると、p47Bcnt mRNA は astrocyte ではなく、神経細胞に検出される。この抗体を用いた Western blotting では、ウシ、ラット、マウス脳の抽出物において 43kDa 蛋白が検出される。そこで、免疫沈降によってこの蛋白を単離し、LC-MS/MS によってその構造を決定したところ、Bcnt とは全く非相同の蛋白であり、脳では astrocyte 特異的に発現している glutamine synthetase (GS) である可能性が示唆された。Western blotting ならびに免疫組織化学的検索によって検証したところ、この抗体は内在性の、また遺伝子導入によって強制発現した GS を認識することが明らかとなった。そこで抗 BCNT-C 抗体の GS との交差反応に関与するアミノ酸配列を、GS の様々な欠失変異体やアミノ酸置換変異体を用いて検索したところ、GS のアミノ酸配列『GYFE』と p45Bcnt の『GYIE』との局所的な立体化学的・物理化学的環境の空間的類似性により、これらの配列を含むエピトープが 2 つの非相同蛋白の共通エピトープとして働き、抗 BCNT-C 抗体による標的外分子である GS との交差反応が引き起こされたことを明らかにした。

#### 外部資金導入状況

(中島)

日本学術振興会 科学研究費補助金・若手 (代表)

徳島文理大学 「特色ある教育・研究」事業 (代表)

---

#### 外部誌上発表 (2016 年 4 月~2021 年 3 月)

---

#### [原著論文]

##### 2020

1. Hossain MD, Jamal M, Tanoue Y, Ojima D, Takahashi H, Kubota T, Ansary TM, Ito A, Tanaka N, Kinoshita H, Kishimoto Y, Yamamoto T. (2020) MDGA1-deficiency attenuates prepulse inhibition with alterations of dopamine and serotonin metabolism: An *ex vivo* HPLC-ECD analysis. *Neurosci. Lett.* 16, 134677.
2. Iwashita S, Suzuki T, Kiriyama Y, Dohmae N, Ohoka Y, Song S-Y, Nakashima K. (2020) Overcoming off-targets: assessing Western blot signals for Bcnt/Cfdp1, a tentative component of the chromatin remodeling complex. *Biosci. Rep.* 40: BSR20194012.
3. Kakizawa S, Kishimoto Y, Yamamoto S, Onga K, Yasuga K, Miyamoto Y, Watanabe M, Sakai R, Mori N. (2020) Functional maintenance of calcium store by ShcB adaptor protein in cerebellar Purkinje cells. *Sci. Rep.* 10:14475.
4. Kishimoto Y, Hirono M, Atarashi R, Sakaguchi S, Yoshioka T, Katamine S, Kirino Y. (2020) Impairment of cerebellar long-term depression and GABAergic transmission in prion protein deficient mice ectopically expressing PrPLP/Dpl. *Sci. Rep.* 28:15900.
5. Kuboyama K, Kawada K, Fujii N, Ojima D, Kishimoto Y, Yamamoto T, Yamada M.K. (2020) Visually cued fear conditioning test for cortical function. *Neuropsychopharmacol.*



Rep. 40:371-375.

**2019**

1. Tanigami H, Yoneda M, Tabata Y, Echigo R, Kikuchi Y, Yamazaki M, Kishimoto Y, Sakimura K, Kano M, Ohno-Shosaku T (2019) Endocannabinoid signaling from 2-arachidonoylglycerol to CB1 cannabinoid receptor facilitates reward-based learning of motor sequence. *Neuroscience*. In press.
2. Nakao H\*, Kishimoto Y\*, Hashimoto K, Kitamura K, Yamasaki M, Nakao K, Watanabe M, Kano M, Kirino Y, Aiba A. (2019) mGluR1 in cerebellar Purkinje cells is essential for the formation but not expression of associative eyeblink memory. (\* equal 1st author). *Scientific reports* 9:7353.
4. Shishido H, Ueno M, Sato K, Matsumura M, Toyota Y, Kirino Y, Tamiya T, Kawai N, Kishimoto Y. (2019). Traumatic brain injury by weight drop method causes transient amyloid- $\beta$  deposition and acute cognitive deficits in mice. *Behav. Neurol.* 2019:3248519.
5. Nakashima K, Iwashita S, Suzuki T, Kato C, Kohno T, Kamei Y, Sasaki M, Urayama O, Ohno-Iwashita Y, Dohmae N and Song SY. (2019). A spatial similarity of stereochemical environments formed by amino acid residues defines a common epitope of two non-homologous proteins. *Sci. Rep.* **9**, 14818

**2018**

3. Kishimoto Y, Tsukamoto I, Nishigawa A, Nishimoto A, Kirino Y, Kato Y, Konishi R, Maruyama T, Sakakibara N. (2018) Data on COA-Cl administration to the APP/PS2 double-transgenic mouse model of Alzheimer's disease: improved hippocampus-dependent learning and unchanged spontaneous physical activity. *Data in Brief* 20, 1877-1883.

**2017**

1. Connor S, Ammendrup-Johnsen I, Kishimoto Y, Karimi Tari P, Cvetkovska V, Harada T, Ojima D, Yamamoto T, Wang Y, Craig AM (2017) Altered cortical dynamics and cognitive function upon haploinsufficiency of the autism-linked excitatory synaptic suppressor MDGA2. *Cell Rep.* **26**, 3637-3645.
2. Kishimoto Y, Fukumoto K, Nagai M, Mizuguchi A, Kobayashi Y. (2017) Early contextual fear memory deficits in a double-transgenic amyloid- $\beta$  precursor protein/presenilin 2 mouse model of Alzheimer's disease. *Int. J. Alzheimers. Dis.* 2017:8584205.

**2016**

1. Connor S\*, Ammendrup-Johnsen I\*, Chan AW\*, Kishimoto Y\*, Murayama C, Kurihara N, Tada A, Ge Y, Lu H, Yan R, Jeffrey M, Matsumoto H, Kiyonari H, Kirino Y, Matsuzaki F, Suzuki T, Murphy T, Wang, Y, Yamamoto T, Craig AM. (2016) Altered Cortical Dynamics and Cognitive Function upon Haploinsufficiency of the Autism-Linked Excitatory Synaptic Suppressor MDGA2. *Neuron*, **91**, 1052-1068, (2016) (\* equal 1st author).
2. Shishido H\*, Kishimoto Y\*, Kawai N, Toyota Y, Ueno M, Kubota T, Kirino Y, Tamiya T. (2016) Traumatic brain injury accelerates amyloid- $\beta$  deposition and impairs spatial learning in the triple-transgenic mouse model of Alzheimer's disease. *Neurosci. Lett.* **629**, 62-67, (\* equal 1st author).
3. Kishimoto Y, Shishido S, Sawanishi M, Toyota Y, Ueno M, Kubota T, Kirino Y, Tamiya T, Kawai N. (2016) Data on amyloid precursor protein accumulation, spontaneous physical activity, and motor learning after traumatic brain injury in the

triple-transgenic mouse model of Alzheimer's disease. *Data in Brief* **9**, 62-67.

4. Kubota T, Matsumoto H, Kirino Y. (2016) Ameliorative effect of membrane-associated estrogen receptor G protein coupled receptor 30 activation on object recognition memory in mouse models of Alzheimer's. *J. Pharmacol. Sci.*, **131**, 219-222.

**[著書・訳書]****[邦文総説・解説等]**

1. Kishimoto Y, Matsumura M, Sato K, Kubota T (2021) Spatial and latent memory data in PS2Tg2576 Alzheimer's disease mouse model after memantine treatment. *Mendeley Data*. DOI: 10.17632/xxrsf4nr7v.2.
2. 岸本泰司、(2019) 「瞬目反射条件づけ (小脳学習説 Marr-Albus-Ito 理論の 50 年)」*Clinical Neuroscience* **37** (8), 953.
3. 岸本泰司、(2016) 「瞬目反射条件づけ」*脳科学辞典* .

**口頭発表・学会発表 (2020年4月～2021年3月)**

1. 岸本泰司、中村裕子、新開崇広、青野仁美、藤原友佳、大畑南美、松崎真也、山本融「Exploring the molecular basis of placebo response using mouse placebo analgesia conditioning」*NEURO2020: 第43回日本神経科学大会*, 2020年7月29日-8月1日, 神戸国際会議場、神戸市.
2. 岸本泰司、廣野守俊、新竜一郎、坂口未廣、吉岡亨、片峰茂、桐野豊「プリオンタンパク質ノックアウトマウスにおける小脳長期抑圧障害」、*日本生物物理学会第58回年会*, 2020年9月16日-9月18日, Gメッセ群馬、前橋市.
3. 松崎真也、萩かれん、中澤鈴菜、尾嶋大喜、山本融、窪田剛志、岸本泰司「MDGA1 ノックアウトマウスの社会性行動に対する D-サイクロセリンの効果」*日本薬学会第141年会*、2021年3月26-29日、広島国際会議場、広島市.
4. Iwashita S, Suzuki T, Uezato Y, Sugiyama Y, Dohmae N, Ohoka Y, Song SY and Nakashima K. N-terminus variants of Bcnt/Cfdp1, a transient chromatin remodeler: DEF/Y motif core that is adjacent to the CK2 phosphorylation sites. *The 93th Annual Meeting of the Japanese Biochemical Society*. Sep. 14-16, 2020, Yokohama, Japan.
5. 窪田剛志、山本融、岸本泰司「Distinct regulation of morphine-induced conditioned place preference and withdrawal in MDGA1 knockout mice.」*第93回日本薬理学会年会*、2020年3月16-18日、パシフィコ横浜、横浜市
6. 窪田剛志、岸本康司、桐野豊「タウタンパク質発現期間依存的な記憶およびタウタンパク質代謝の障害」*日本薬学会第140年会*、2020年3月25-28日、京都国際会議場、京都市.







## 生薬・天然物化学講座

### Laboratory of Pharmacognosy and Natural Products Chemistry

#### 教員

**教授 代田 修** 香川薬学部着任年月日：2004年4月1日  
 現職着任年月日：2013年4月1日  
 最終学歴：1994年3月東京薬科大学大学院薬学研究科薬学専攻博士後期課程修了。博士（薬学）  
 前職：国立医薬品食品衛生研究所生薬部主任研究官

#### 教育の概要

##### 担当科目：薬用資源学（代田）

- 【1】創薬と薬用資源の歴史的役割
- 【2】薬用資源の有用成分、有毒成分
- 【3-4】植物の形態
- 【5】植物に由来する薬用資源；光合成
- 【6-7】植物の分類と科の特徴
- 【8】薬用植物の分布、保存、栽培と育種
- 【9-10】植物バイオテクノロジー
- 【11】植物の遺伝子鑑別
- 【12】動物・鉱物に由来する薬用資源
- 【13】微生物に由来する薬用資源
- 【14】海洋生物に由来する薬用資源
- 【15】農薬、化粧品、食品添加物、サプリメント

##### 1) 教育達成目標とその妥当性

天然資源から医薬品を開発する時、また、天然資源そのものを医薬品として用いる時に不可欠なことは、資源となる素材の本質を正しく把握することである。本講義では植物の形態を基礎知識として分類体系を学び、「種」の認識を明確にする。また、これらの資源の保存・保護の意味を学び、薬用資源の問題点と将来性を考える。本講義は、生薬学、天然物化学の基礎となる。

##### 2) 目的達成状況

ほぼ達成できたと思われる。しかし、まだまだ改善の余地があり、特に内容が古いままの部分は早急に改善が必要と考えている。

##### 3) 教育内容面での取り組みと改善方策

製本した講義資料を作成し、使用している。講義の終わりには、その時間に講義した内容について、意見、感想、思ったことなどを書かせることで出欠を取っている。講義内容が10年ほど変わっておらず、最新の内容に移行すべきであるが、人手不足などによる他の業務に翻弄されて、その余裕が全く

無い。

##### 4) 教えるために使った時間

週1コマ。半期15コマ（1.0単位）。準備に1コマ当たり約0.5日程度掛けた。

##### 5) その他

本講義では、高校において生物を履修してこなかった学生を含め、薬学を学ぶ上で必要な初期の知識を持たせることも兼ねている。

##### 担当科目：生薬学（代田）

- 【1】総論Ⅰ：生薬の歴史；生薬の形態と使用部位
- 【2】総論Ⅱ：生薬の成分；生薬の特徴
- 【3】藻類、菌類、裸子植物を基原とする生薬
- 【4-8】離弁花植物を基原とする生薬
- 【9-11】合弁花植物を基原とする生薬
- 【12】単子葉植物を基原とする生薬
- 【13】動物・鉱物を由来とする生薬
- 【14】生産と流通、品質評価
- 【15】漢方薬の処方構成する生薬、その他の利用

##### 1) 教育達成目標とその妥当性

古くから我々人類は、植物、動物、鉱物等の天然資源から病気に対する「薬」を見つけ、その知識は現代まで伝承されてきた。本講義では、日本薬局方収載生薬及びその他の医療の現場で用いられている生薬の基原、含有成分、薬効及びそれらを基にした品質評価法を解説し、薬剤師、研究者として必要な基礎的知識の習得を目指す。

##### 2) 目的達成状況

まだまだ慣れない科目のため、準備や講義の時間配分などに手間取っている。

##### 3) 教育内容面での取り組みと改善方策

CBTでは写真が掲示され生薬名を答える形式の出題があることから、パワーポイントによる写真表示を活用した。また、学生が低学年からCBTや国家試験を念頭に置けるよう、CBT形式の演習問題や国家試験の過去問の解説も取り入れた。講義の初めに前回の確認問題を答えさせることで出欠を取っている。

##### 4) 教えるために使った時間

週1コマ。半期15コマ（1.5単位）。準備に1コマ当たり約0.5日程度掛けた。

##### 5) その他

研究室の人手不足などによる他の業務に翻弄され、講義のバージョンアップや準備に十分な時間を取ることが出来な

った。

**担当科目：天然物化学（代田）**

- 【1】天然物と医薬品開発
- 【2】天然物研究法
- 【3】天然物と二次代謝産物
- 【4】糖質
- 【5-6】脂肪酸とポリケタイド
- 【7-8】芳香族化合物
- 【9-11】テルペノイドとステロイド
- 【12-14】アルカロイドおよびその他の含窒素化合物
- 【15】その他の特異な天然有機化合物

1) 教育達成目標とその妥当性

生薬成分のように、植物や動物、微生物などが生産して、天然に存在する有機化合物のことを天然有機化合物(略して、天然物)といい、天然有機化合物について研究する学問を天然物化学という。天然物化学は薬用資源学、生薬学を始めとして、有機化学、機器分析学、衛生化学、生化学、薬理学など幅広い学問分野に密接に関連している。本講義では、医薬品のリード化合物などとして有用な天然有機化合物を中心に、その構造、起源、生合成、利用などについて講じている。

2) 目的達成状況

概ね達成できたと思われる。しかし、新 SBO における講義内容の精査がまだ出来ておらず、今後の課題となっている。

3) 教育内容面での取り組みと改善方策

講義においてはパワーポイントを使用している。また、演習問題を与え、理解しておかなければならない重要な点を確認させるように工夫している。

4) 教えるために使った時間

週 1 コマ。半期 15 コマ (1.5 単位)。準備に 1 コマ当たり約 0.5 日程度掛けた。

5) その他

製本した講義補助資料を作成し、使用している。出席の確認には、演習問題を解かせて提出させることにより行っている。また、8 回目の講義以降に中間試験を実践している。

**担当科目：東洋医学概論（代田）**

- 【1】東洋医学
- 【2】中国医学
- 【3】漢方医学
- 【4】漢方の治療体系、「証」について
- 【5】病態と治療 (1)「気・血・水」について
- 【6】病態と治療 (2)「陰陽、虚实」について
- 【7】病態と治療 (3)「寒熱、表裏」について
- 【8】漢方の診察法、薬物学
- 【9-11】疾患別漢方処方
- 【12-13】漢方処方の成り立ちと配合生薬の特性
- 【14】漢方薬の副作用、使用上の注意
- 【15】漢方・生薬製剤の製造管理及び品質管理規則

1) 教育達成目標とその妥当性

東洋医学、特に現代の医療の現場で広く用いられている漢方医学・漢方処方について基礎的理解を得るために、歴史、診断・治療、方剤学、疾患と漢方処方、薬効評価、使用上の注意等を解説している。漢方方剤の適用に関しては「証」を正しく認識することが必須とされており、本講義では薬剤師として必要な漢方医学知識を修得することを目標としている。

2) 目的達成状況

慣れない科目の為、まだまだ不十分であるが、一応一通りをこなすことができたと考えている。

3) 教育内容面での取り組みと改善方策

講義内容の改修・改善が必要であり、時間が許す限り取り組んでいくつもりであるが、人員不足のため他業務に時間を取られて思うように取り組めない。

4) 教えるために使った時間

週 1 コマ。半期 15 コマ (1.5 単位)。準備に 1 コマ当たり 1 日程度掛かった。

5) その他

講義終了時の出欠取りで、その日の講義内容について質問や確認事項を記載してもらった。昨年度より教科書を変更したが、まだ講義内容に若干のズレが生じている。

**担当科目：生薬学実習（代田）**

- 【1】器具配付点検、直前講義、注意
- 【2-4】生薬の外部形態、内部形態
- 【5-6】代表的な薬用植物の観察
- 【7-9】繁用漢方薬の体験
- 【10-15】生薬の確認試験
- 【16-20】生薬から指標成分の分離精製
- 【21-23】生薬の純度試験
- 【24-26】生薬の成分定量
- 【27-29】定量解析、精油定量
- 【30】器具点検回収

1) 教育達成目標とその妥当性

漢方薬(漢方処方)を構成する生薬の外部形態、内部形態、並びに薬用植物の形態を観察することで生薬・薬用植物鑑定の基礎を養う。また、実際の漢方処方湯剤・軟膏剤の調製を体験する。そして、日本薬局方収載生薬の確認試験、純度試験、定量試験について実際に行なって知識を習得する。さらに、生薬からの成分の分離・精製を通じてクロマトグラフ法の原理・手法を学ぶ。まとめとして、漢方方剤未知検体についてその構成生薬の鑑別を行う。

2) 目的達成状況

目標は達成できた。SBO に掲載されている内容および本実習の特徴となっている内容をこなすため、必要コマ数よりも時間をかなり掛けて行っている。

3) 教育内容面での取り組みと改善方策



自作の実習書に実習項目、生薬の詳細な資料を組み込み、局方における生薬の確認試験等の理解を促し、同時に生薬学の復習を行った。動画カメラを用いて操作方法を示すなど丁寧な指導を心掛けた。項目毎のレポートの提出に対しては評価基準を明示し、丁寧な指導を行った。また、最後に筆記試験を課して記憶の定着を図った。

#### 4) 教えるために使った時間

4週間、週3日、1日3コマ。半期30コマ(1単位)。準備に1日当たり3,4時間程掛かった。

#### 5) その他

本年度より教員が一人(代田)のみになった為、準備、指導や安全面に不都合が生じている。

### 担当科目：薬学概論(代田、分担担当1コマ)

#### 【1】薬学と医薬品：天然物医薬品

##### 1) 教育達成目標とその妥当性

薬学に入ったばかりの1年生前期に開講されている科目であり、薬学とはどのような分野であるかを学ぶ。担当している1コマでは、天然資源由来の医薬品に関連した内容を講義しており、今後の薬用資源学、生薬学、生薬学実習、天然物化学、東洋医学概論、そして東洋医療アドバンストコースに向けて、どの様な内容を学んでいくのかを認識してもらうこと目的としている。

##### 2) 目的達成状況

目標は達成できたと考えている。内容が幅広く且つ多いので、逆に1年生には良い刺激となっていると思っている。

##### 3) 教育内容面での取り組みと改善方策

入学してきたばかりの1年生には、それまでの習熟度の違いもあり、話の内容を十分に理解できない学生もいる様なので、もう少し内容を精査し、簡素化していくことを考えたい。

##### 4) 教えるために使った時間

半期1コマ。準備に1日間程度掛けた。

##### 5) その他

担当を初めて数年経つが、人手不足などによる他の業務に翻弄され、講義のバージョンアップや準備が思うように出来ていない。

### 担当科目：基礎薬学演習1(代田、分担担当3コマ)

#### 【1】薬用資源学1

#### 【2】薬用資源学2

#### 【3】薬用資源学3

##### 1) 教育達成目標とその妥当性

1年生後期に開講されている薬学専門科目の演習科目であり、担当しているのは薬用資源学についてである。講義の内容が理解できているかを演習形式で行っている。

##### 2) 目的達成状況

ほぼ達成できたと思われる。演習は単純5択で50問を答え

させ、その後、解説を行った。勉強してきた学生の出来は良かったが、全く勉強をしていなかった学生はやはり出来が悪い状態であった。この演習を通して、学生が勉強をしなければならぬことを自覚して貰えれば良いと考えている。

##### 3) 教育内容面での取り組みと改善方策

昨年度に用いた演習問題を再利用したところ、一部の学生が先輩より譲り受けた問題を持っていて、成績は本来のものとは違った。バージョンアップを検討したい。

##### 4) 教えるために使った時間

半期3コマ。準備に1コマ当たり約0.5日間程度掛けた。

### 担当科目：基礎薬学演習2(代田、分担担当2コマ)

#### 【1】生薬学1

#### 【2】生薬学2

##### 1) 教育達成目標とその妥当性

2年生前期に開講されている薬学専門科目の演習科目であり、担当しているのは生薬学についてである。講義の内容が理解できているかを演習形式で行っている。

##### 2) 目的達成状況

ほぼ達成できたと思われる。演習は単純5択で50問を答えさせ、その後、解説を行った。勉強してきた学生の出来は良かったが、全く勉強をしていなかった学生はやはり出来が悪い状態であった。この演習を通して、学生が勉強をしなければならぬことを自覚して貰えれば良いと考えている。

##### 3) 教育内容面での取り組みと改善方策

今後、演習問題のバージョンアップを検討したい。

##### 4) 教えるために使った時間

半期2コマ。準備に1コマ当たり約0.5日間程度掛けた。

### 担当科目：基礎薬学演習3(代田、分担担当2コマ)

#### 【1】(天然物化学中間試験)

#### 【2】天然物化学1

##### 1) 教育達成目標とその妥当性

2年生後期に開講されている薬学専門科目の演習科目であり、担当しているのは天然物化学についてである。講義の内容が理解できているかを演習形式で行っている。

##### 2) 目的達成状況

ほぼ達成できたと思われる。演習は単純5択で50問を答えさせ、その後、解説を行った。勉強してきた学生の出来は良かったが、全く勉強をしていなかった学生はやはり出来が悪い状態であった。この演習を通して、学生が勉強をしなければならぬことを自覚して貰えれば良いと考えている。

##### 3) 教育内容面での取り組みと改善方策

中間試験の時間に1コマを充てた為、演習は1回のみとなった。今後、演習問題のバージョンアップを検討したい。

##### 4) 教えるために使った時間

半期2コマ。準備に1コマ当たり約0.5日程度掛けた。

**担当科目：基礎薬学演習4（代田、分担担当2コマ）**

**【1】東洋医学概論1**

**【2】東洋医学概論2**

1) 教育達成目標とその妥当性

3年生前期に開講されている薬学専門科目の演習科目であり、担当しているのは東洋医学概論についてである。講義の内容が理解できているかを演習形式で行っている。

2) 目的達成状況

ほぼ達成できたと思われる。新カリキュラムにおいて新たに開講された基礎薬学演習科目の一つであり、基礎薬学演習4は今回が初めてとなった。演習は単純5択で50問を答えさせ、その後、解説を行った。勉強してきた学生の出来は良かったが、全く勉強をしていなかった学生はやはり出来が悪い状態であった。この演習を通して、学生が勉強をしなければならないことを自覚して貰えれば良いと考えている。

3) 教育内容面での取り組みと改善方策

今年度が初めてであったが、今後、演習問題のバージョンアップを検討したい。

4) 教えるために使った時間

半期2コマ。準備に1コマ当たり約0.5日程度掛けた。

**担当科目：有機化学演習（代田、分担担当3コマ）**

**【1】生薬学**

**【2】天然物化学**

**【3】東洋医学概論**

1) 教育達成目標とその妥当性

3年生前期に開講されている薬学専門科目の演習科目であり、1年生から3年生において開講している生薬学、天然物化学、東洋医学概論について担当した。講義の内容が理解できているかを演習形式で行っている。

2) 目的達成状況

ほぼ達成できたと思われる。新カリキュラムにおいて新たに開講された薬学演習科目の一つであり、有機化学演習は今回が初めてとなった。演習は単純5択で50問を答えさせ、その後、解説を行った。勉強してきた学生の出来は良かったが、全く勉強をしていなかった学生はやはり出来が悪い状態であった。この演習を通して、学生が勉強をしなければならないことを自覚して貰えれば良いと考えている。

3) 教育内容面での取り組みと改善方策

今後、演習問題のバージョンアップを検討したい。

4) 教えるために使った時間

半期3コマ。準備に1コマ当たり約0.5日程度掛けた。

**担当科目：応用薬学演習（代田：主担当）**

**【1-63】PC演習**

1) 教育達成目標とその妥当性

4年生後期に開講されている薬学専門科目の演習科目であり、実質的にはCBT対策となっており、1年～4年前期までの教科について理解できているかを演習形式で行っている。

2) 目的達成状況

ほぼ達成できたと思われる。演習はPCにて単純5択で答えさせている。この演習を通して、学生が勉強をしなければならないことを自覚して貰えれば良いと考えている。

3) 教育内容面での取り組みと改善方策

今後、演習問題のバージョンアップを検討したい。

4) 教えるために使った時間

半期63コマ。準備に1コマ当たり約0.5日程度掛けた。

5) その他

主担当を初めて数年経つが、人手不足などによる他の業務に翻弄され、準備が思うように出来ていない。

**担当科目：特別実習1（代田）**

**【1-10】研究室における実験・研究の体験**

1) 教育達成目標とその妥当性

1年生後期に開講される選択科目である。今回は1名の学生が当研究室を選択した。研究室における実験・研究の体験を目的として行われる特別実習である。

2) 目的達成状況

達成できたと思われる。学生は、専門科目および学生実習をまだ受講していないため、内容について行けない部分もあったかもしれないが、マンツーマンで指導したことにより理解を深めることができたと考える。本実習により、受講学生は実験のノートテイキングから化合物単離のためのクロマトグラフィーの理論・基礎的手法まで習得した。実習し、レポートを提出して終了とした。

3) 教育内容面での取り組みと改善方策

研究の内容および実験操作の意味など、全く予備知識がない中ため、なるべく平易な言葉で書かれた補助資料を準備し、マンツーマンでの指導を行った。

4) 教えるために使った時間

18日間、朝9時から17時頃まで。

**担当科目：特別実習6（代田）**

**【1-120】配属講座における卒論研究の前段階としての実習**

1) 教育達成目標とその妥当性

4年生後期に開講される選択科目である。卒論テーマの割り振りりと、その最初となる実験操作を行った。研究室における実験器具・装置の使い方や、実験ノートのつけ方などを修得させた。

2) 目的達成状況

ほぼ達成できたと思われる。研究室の教員不足により手や



目が届かない面があったが、研究室の先輩学生に補助してもらい、一通り自分で実験操作ができるようになってきた。

### 3) 教育内容面での取り組みと改善方策

研究室の研究室の教員が補充されていればもっとしっかりとした研究指導が行えたと思われる。

### 4) 教えるために使った時間

30日間、朝9時から夕方17時頃まで。

## 担当科目：卒業実習1（代田）

### 【1-320】配属講座における卒業研究

#### 1) 教育達成目標とその妥当性

5年生前期から開講される必須科目である。卒業論文のテーマとなる実験操作を行い、データをまとめ、卒業論文をまとめ、研究発表を行う。

#### 2) 目的達成状況

ほぼ達成できたと思われる。研究室の教員不足により手や目が届かない面があったが、何とか卒論をまとめ上げさせた。

### 3) 教育内容面での取り組みと改善方策

研究室の研究室の教員が補充されていればもっとしっかりとした研究指導が行えたと思われる。

### 4) 教えるために使った時間

160日間、朝9時から夕方17時頃まで。

## 担当科目：東洋医療薬学アドバンス実務実習（代田）

### 【1-4】病態と治療

### 【5-16】漢方薬局実習（1）

### 【17-28】漢方薬局実習（2）

### 【29-30】まとめ

#### 1) 教育達成目標とその妥当性

漢方医学・漢方処方についての実践的な理解を得るために、「証」の認識手法、処方箋に基づく医療用漢方製剤の調剤、一般漢方製剤の服薬指導、薬局製剤について学習する。薬局における漢方調剤を通じて医師の処方する漢方方剤及び様々な剤型に触れ、漢方薬の服薬指導を修得する。一般漢方処方について患者さんがどのような病態にどのような処方を選択しているかを調査し、専門知識に基づいた的確なアドバイスが可能になること、また、「証」の診断法を体得することを目指した。

#### 2) 目的達成状況

今年度はコロナ禍の影響で実際の漢方薬局実習は行えなかった。代わりに（株）ツムラのWebや（地独法）神奈川県立産業技術総合研究所のWeb動画を活用した。

### 3) 教育内容面での取り組みと改善方策

今年度は実際の実習が行えなかったため、来年度はWebでの実習についても検討する。

### 4) 教えるために使った時間

半期20コマ（1.0単位）。

### 5) その他

本実習は実際の漢方薬局にて漢方調剤体験を含めた内容が特徴となっているが、コロナ禍の影響により学生各自での取り組みとなり、レポートによりその成果を判定した。

## 管理・運営に係ること

代田：CBT対策委員会委員長

薬用植物園管理運営委員会委員長

教務委員会委員

入試委員会委員

予算委員会委員

OSCE委員会アドバイザー

物質管理委員会委員

安全保障輸出管理委員会委員

大学入学共通テスト実施本部委員

## 社会貢献

### 代田 修

- 1) 独立行政法人 医薬品医療機器総合機構 日本薬局方原案審議委員会 医薬品名称調査会 委員
- 2) 独立行政法人 医薬品医療機器総合機構 専門委員
- 3) 公益社団法人 日本薬学会 代議員
- 4) 公益財団法人 薬剤師研修センター 漢方薬・生薬研修会 薬用植物園実習 講師
- 5) 一般社団法人 日本生薬学会 代議員
- 6) 一般社団法人 日本生薬学会 関西支部 委員
- 7) 一般社団法人 薬学教育協議会 生薬学・天然物化学教科担当教員会議 委員
- 8) 大学薬用植物園園長・担当者会議 委員

## 研究の概要

### 「*Ephedra* 属植物の成分解析」

麻黄は漢方処方において重要な生薬の一つであるが、その供給は100%輸入に依存している。現在、主たる輸入先である中国からの輸出が規制され、麻黄の確保は大変重要な課題である。一方、世界の他地方を見てみると、ペルーを産地とする *Ephedra americana* は現地では民間薬として用いられているが、漢方生薬麻黄の主薬効成分であるエフェドリンは含まれていないとされ、またその成分研究もあまり行われていない。そこで本研究では *E. americana* の成分について検討を進めている。現在までに新規化合物を含む複数のプロアントシアニン類を単離し、その構造を明らかにした。

## 「有用食品からの生理活性成分の探索」

ミルクフルーツ (*Chrysophyllum cainito*) はアカテツ科の常緑樹である。果実を横に輪切りにすると星形の模様が浮き出ることから、英名ではスターアップルと呼ばれている。また、果実はゼリー状で白色の乳液を含んでいることから、東南アジア諸国ではミルクフルーツと呼ばれている。植物種子は、抗酸化作用や抗腫瘍作用の報告がされていることから、ミルクフルーツ種子および葉の生理活性成分について検討を開始し、新規化合物を含む複数の化合物を単離し、その構造を明らかにした。

## 外部誌上発表 (2016年4月～2021年3月)

## [原著論文]

## 2021

1. Warashina, T., and Shirota, O. (2021). Tetracyclic Triterpenoids, Steroids and Lignanes from the Aerial Parts of *Oxypetalum caeruleum*. Chem Pharm Bull (Tokyo) 69, 226-231.
2. Nugroho Alfarius, E., Hirasawa, Y., Kaneda, T., Morita, H., Shirota, O., Matsuno, M., and Mizukami, H. (2021). Triterpenoids from *Walsura trichostemon*. J Nat Med, in press.

## 2020

1. Sivanandhan, S., Pathalam, G., Michael Gabriel, P., Balakrishna, K., Boovaragamurthy, A., Ignacimuthu, S., Antony, S., Shirota, O., Alwahibi Mona, S., El-Shikh Mohamed, S., et al. (2020). Effect of monoterpene ester from *Blumea axillaris* (Lam.) DC and its acetyl derivative against plant pathogenic fungi and their in silico molecular docking. Natural product research, 1-8.
2. Mori-Yasumoto, K.; Hashimoto, Y.; Agatsuma, Y.; Fuchino, H.; Yasumoto, K.; Shirota, O.; Satake, M.; Sekita, S. (2020). Leishmanicidal phenolic compounds derived from *Dalbergia cultrata*. Natural Product Research, 1-9.
3. Rádís-Baptista, G.; Dodou, H. V.; Prieto-da-Silva, Á. R. B.; Zaharenko, A. J.; Kazuma, K.; Nihei, K.; Inagaki, H.; Mori-Yasumoto, K.; Konno, K. (2020). Comprehensive analysis of peptides and low molecular weight components of the giant ant *Dinoponera quadriceps* venom. Biological Chemistry, 401(8), 945-954.

## 2019

1. Esakkimuthu, S.; Nagulkumar, S.; Darvin, S. S.; Buvanavaragurunathan, K.; Sathya, T. N.; Navaneethakrishnan, K. R.; Kumaravel, T. S.; Murugan, S. S.; Shirota, O.; Balakrishna, K.; Pandikumar, P.; Ignacimuthu, S. (2019). Antihyperlipidemic effect of iridoid glycoside deacetylasperulosidic acid isolated from the seeds of *Spermocoe hispida* L. - A traditional antiobesity herb. Journal of Ethnopharmacology 245, 112170.

## 2018

1. Nugroho, A. E., Inoue, D., Chin-Piow, W., Hirasawa, Y., Kaneda, T., Shirota, O., A. Hadi, A.H.A., and Morita, H. (2018). ,Reinereins A and B, new onocerane triterpenoids from *Reinwardtiendron cinereum*. Journal of Natural Medicines 72(4), 588-592.

2. Yasumoto, K., Sakata, T., Yasumoto, J., Yasumoto-Hirose, M., Sato, S., Mori-Yasumoto, K., Jimbo, M., Kusumi, T., Watabe, S.(2018). Atmospheric CO<sub>2</sub> captured by biogenic polyamines is transferred as a possible substrate to Rubisco for the carboxylation reaction. *Scientific Reports*, 8:17724, 1-10.

## 2017

1. Tokumura, T., Yoshida, N., Mori-Yasumoto, K., Shirota, O., Kurita, T. (2017). Degradation rates and products of fluticasone propionate in alkaline solutions. *Journal of Pharmaceutical Analysis*, 7(5), 297-302.
2. Kazuma, K., Ando, K., Nihei, K., Wang, X., Rangel, M., Franzolin, M. R., Mori-Yasumoto, K., Sekita, S., Kadowaki, M., Satake, M., Konno, K. (2017). Peptidomic analysis of the venom of the solitary bee *Xylocopa appendiculata circumvolans*, *Journal of Venomous Animals and Toxins including Tropical Diseases*, 23:40.
3. Paudel, M.K., Shirota, O., Sakamoto, S., Morimoto, S., and Tanaka, H. (2017). An immunochromatographic assay for rapid detection of salvinorin A. *Journal of Immunoassay and Immunochemistry* 38, 438-448.
4. Nugroho, A.E., Okuda, M., Yamamoto, Y., Chin-Piow, W., Hirasawa, Y., Kaneda, T., Shirota, O., Hadi, A.H.A., and Morita, H. (2017). Apowalsogynes A and B, Two Highly Oxidized 3,4-Seco-Apotirucallane Triterpenoids from *Walsura chrysogyne*. *Natural Product Communications* 12, 1189-1192.

## 2016

1. Muhiit, M. A., Umehara, K., Mori-Yasumoto, K., and Noguchi, H. (2016). Furofuran Lignan Glucosides with Estrogen-Inhibitory Properties from the Bangladeshi Medicinal Plant *Terminalia citrina*. *Journal of Natural Products* 79, 1298-1307.
2. Ishihara, Y., Fujitani, N., Sakurai, H., Takemoto, T., Ikeda-Ishihara, N., Mori-Yasumoto, K., Nehira, T., Ishida, A., and Yamazaki, T. (2016). Effects of sex steroid hormones and their metabolites on neuronal injury caused by oxygen-glucose deprivation/reoxygenation in organotypic hippocampal slice cultures. *Steroids* 113, 71-77.
3. Nugroho, A.E., Chin-Piow, W., Hirasawa, Y., Janar, J., Kaneda, T., Shirota, O., and Morita, H. (2016). Daphnane Diterpenoids from *Daphne altaica*. *Natural Product Communications* 11, 1073-1075.

## 口頭発表・学会発表 (2020年4月～2021年3月)

1. 渡邊 絢女, 安元 加奈未, 安元 剛, 瀧野 裕之, 佐竹 元吉, 代田 修. 抗リーシュマニア活性を有する薬用植物の探索(その31)-ミャンマー産植物 PYINER LANKAR *Sophoraaxigua* の成分について-. 日本薬学会第141年会, 2021年3月28日, 広島 (on line) .

## 教科書

1. 代田 修 (2018) 分担執筆「パートナー生薬学 改訂第3版 増補」(編集 竹谷孝一, 木内文之, 小松かつ子) 南江堂.
2. 代田 修 (2016) 分担執筆「パートナー天然物化学 改訂第3版」(編集 海老塚豊, 森田博史, 阿部郁朗) 南江堂.
3. 代田 修 (2013) 分担執筆「最新天然物化学改訂第2版」(編集 奥田拓男) 廣川書店.

## 特許

1. 武藤 徳男, 黒柳 正典, 代田 修 (2014). 「抗アレルギー



性物質」特許開 第2014-009184  
2. 野地裕美, 田元浩一, 代田 修, 関田節子, 斎 政彦, 伊

藤建比古 (2011). 「ローヤルゼリー抽出物及びヒト骨  
芽細胞増殖抑制剤」特許開 第2011-032







## 薬化学講座

### Laboratory of Medicinal Chemistry

#### 教員

教授 藤島 利江  
博士 (薬学)

助教 森川 雅行  
博士 (薬学)

#### 教育の概要

##### 担当科目：医薬化学 (藤島)

1) 教育達成目標とその妥当性：医薬品の開発過程および医薬品(作用薬)の作用機序の概略を有機化学的視点から概説し、生体と医薬品との相互作用の基本的知識を修得する。さらに、国家試験に必要と考えられる基本骨格の名称と代表的な薬理作用を論述する。

2) 目的達成状況：試験結果から判断したい。

3) 教育内容面での取り組みと改善方策：板書に努めた。さらに、重要点を繰り返すように努める。

4) 教えるために使った時間：1 講義約 10 時間(プリント, web test 作成時間も含む)

5) その他：次年度に控えた CBT に備え、形式に慣れてもらうため、web test を毎回 upload して自由に学習できるようにした。アクセスは 1 回の web test あたり 10 名ほどであった。問題・解説も印刷して配布した。当初の意図に反し、web test よりも配付プリントで取り組む学生が圧倒的に多かった。

##### 担当科目：基礎有機化学 1 (藤島)

1) 教育達成目標とその妥当性：生体分子の機能と医薬品の作用を化学構造と関連づけて理解するため、生体成分の基本構造とその化学的性質に関する基本的知識を修得する。また、医薬品の作用を化学構造と関連づけて理解するため、医薬品に含まれる代表的な化学構造単位とその性質に関する基本的知識を修得する。

2) 目的達成状況：講義・web test 成績から判断すると学生は非常に刺激を受けており、科目としての目標は達成したと考えられる。

3) 教育内容面での取り組みと改善方策：板書に努め、重要点を繰り返し、繰り返し説明する。

4) 教えるために使った時間：約 10 時間(プリント作成時間も含む)

5) その他：教科書の内容では、理解が困難と考えられるところがあるので、プリントを用意し、学生の理解を助ける。

##### 担当科目：有機化学 3 (藤島)

1) 教育達成目標とその妥当性：生体を構成する分子、生理

活性を持つ分子など、生体関連物質としての有機化合物のはたらきを、立体構造、及び官能基の特性から理解する。有機化学 1-2 で学んだ事項の復習、及び CBT や薬剤師国家試験に向けた演習。

2) 目的達成状況：試験結果、小テストやアンケートより判定すると、概ね達成したと考えられる。有機化学に関して、学生の学力や取り組む姿勢にばらつきがあるため、講義内容を最適なレベルに設定することは難しいと感じている。

3) 教育内容面での取り組みと改善方策：1 年次使用のブラウン基本有機化学を使用し、CBT や薬剤師国家試験を用いた実践的形式に加え、有機化学反応における電子対の動きを矢印で示すことができるかどうか試験する小テストを適宜行った。昨年度に初めて取り入れた中間試験は、学生の習熟度と負担を考慮し、今年度は行わなかった。一方、CBT 形式の小テストを増やし、基礎の確認ができるようにした。

4) 教えるために使った時間：1 講義約 5 時間(プリント作成時間も含む)

##### 担当科目：有機化学演習 (藤島)

1) 教育達成目標とその妥当性：有機化学 1-3, 反応有機化学で学んだ有機化学の知識を基盤とし、基本的な分子設計から実際の有機合成手法までを学ぶ。有機合成を考える際に有効な「逆合成」という考え方を引き続いて学び、目的化合物の合成に応用できる能力を身につける。

2) 目的達成状況：講義の取り組みやレポートより判定すると、概ね達成したと考えられる。

3) 教育内容面での取り組みと改善方策：ブラウン基本有機化学を用いた有機化学の復習からはじめ、現在の研究テーマへの応用を概説した。

4) 教えるために使った時間：1 講義約 8 時間(プリント作成時間も含む)

##### 担当科目：基礎薬学演習 1 および演習 2 (藤島)

1) 教育達成目標とその妥当性：有機化学を中心として基礎的薬学能力を身につける。

2) 目的達成状況：講義の取り組みやレポートより判定すると、概ね達成したと考えられる。

3) 教育内容面での取り組みと改善方策：担当部分ではブラウン基本有機化学を用いた有機化学の復習からはじめた。

4) 教えるために使った時間：1 講義約 8 時間(プリント作成時間も含む)

##### 担当科目：物理・化学実習 (藤島, 森川)

1) 教育達成目標とその妥当性：薬学において基盤となる「化学」について、実験を通じて学ぶ。有機化学実験の基本とな

る操作法を身につけた後、医薬品を化学構造から理解するために、官能基の検出法、化学合成法について実習を行う。

2) 目的達成状況：実験レポート作成状況、及び実習試験結果より判定すると、2年次の初回実習としての目的は、概ね達成したと考えられる。

3) 教育内容面での取り組みと改善方策：モデルコアカリキュラムを基盤として、これまでの授業で得た有機化学の知識を生かし、まずは、実験の基本操作、実験ノート・レポートの書き方を学んでもらう。その上で、基礎的な有機反応を用いて、目的物の合成、単離精製までの技能を発展させる、幅の広い実験実習である。また、有機化学の基礎でもあり、薬剤師国家試験にても頻出の官能基検出法を実習する。

4) 教えるために使った時間：1実習約10時間(プリント作成時間も含む)

#### 担当科目：特別実習、卒業実習、総合薬学実習(藤島, 森川)

1) 教育達成目標とその妥当性：講座配属し、講義や薬学実習で修得した知識と技能を、自ら考えて手を動かすことによって活用できるようにする。有機化学・医薬品化学を各自の研究テーマの中で実体験すると共に、薬剤師として必要とされる知識や技能を、調査研究の過程で修得する。卒業試験、薬剤師国家試験を突破できる学力を身につける。

2) 目的達成状況：基礎的な有機化学実験を通じて、有機化合物の合成法・精製法を身につけた。薬剤師国家試験対策では、演習試験や卒業試験の結果をみると、当初の目標は概ね達成されたと考えている。

3) 教育内容面での取り組みと改善方策：夏休み、冬休み、春休み、講義や実習のない期間を重点的に活用して、指導を行った。各自の興味に合ったテーマを選び、個人またはグループで有機化学実験を行った。また、卒業試験、薬剤師国家試験に向けた有機化学の勉強会を開催し、個別指導を行った。今後も、学生の学力レベルや特性に合わせた指導を行うとともに、学生自ら調べた結果を発表し議論する「スモールグループディスカッション」を積極的に取り入れたいと考えている。

4) 教えるために使った時間：1実習1日あたり8-10時間

#### 研究の概要

##### 1. 有機化学を基盤とした生体分子へのアプローチ：新規核内受容体リガンドの創製(藤島, 森川)

核内受容体を介する生理作用を、低分子リガンドと受容体タンパク高分子の反応という観点から捉えるとき、反応の interface を提供するの核内受容体である。これまでのリガンドデザインは、受容体親和性上昇を目指したアプローチが大半であった。しかしながら、標的遺伝子上流に存在する DNA 結合領域にも配列に多様性があり、DNA 結合領域と転写開始点までの塩基数も標的遺伝子ごとに異なることが明らかとなってきている。特定の標的 DNA 配列に結合能力の高

い受容体配座を生み出すリガンドは、その下流にある標的遺伝子の転写活性化を特異的に促進すると考えられる。そこで、内在性リガンドと異なる構造修飾・官能基導入を基盤に、受容体の安定構造に変化をもたらす低分子リガンドの創製、及び DNA 配列特異的な活性化能を有するリガンドの評価手法確立を目指し、研究を進めている。

#### 外部誌上発表 (2016年4月~2021年3月)

##### [原著論文]

##### 2019

1. Fujishima, T.; Komatsu, T.; Takao, Y.; Yonamine, W.; Suenaga, T.; Isono, H.; Morikawa, M.; Takaguchi, K. Design and concise synthesis of novel vitamin D analogues bearing a functionalized aromatic ring on the side chain, *Tetrahedron*, **2019**, *75*, 1098-1106.
2. Fujishima, T.; Suenaga, T.; Kawahata, M.; Yamaguchi, K. Synthesis and characterization of 20-hydroxyvitamin D<sub>3</sub> with the A-ring modification, *J Steroid Biochem Mol Biol*, **2019**, *27*, 27-33

##### 2018

3. Suenaga, T.; Fujishima, T. The C4-functionalized 9,10-seco-5,7,10(19)-cholestatriene derivatives: Concise synthesis and characterization of novel vitamin D analogues with a four-membered heterocyclic ether, *Tetrahedron*, **2018**, *74*, 1461-1467

##### [邦文総説・解説等]

4. Katsuhito Kino, Taishu Kawada, Masayo Hirao-Suzuki, Masayuki Morikawa, Hiroshi Miyazawa. Products of Oxidative Guanine Damage Form Base Pairs with Guanine, *Int. J. Mol. Sci.* **2020**, *21*, 7645.
5. 藤島利江「新しい生物学的等価体としてのオキセタン」*化学と生物*, **2018**, *56*, 589-590.
6. Kino K., Hirao-Suzuki M., Morikawa M., Sakaga A., Miyazawa H. Generation, repair and replication of guanine oxidation products, *Genes Environ.*, **2017**, *39*, 21-27.
7. 末長努, 野崎孝徒, 藤島利江「オキセタン構造を有するビタミン D<sub>3</sub> 誘導体の合成」*ビタミン*, **2016**, *90*, 109-114.

#### 口頭発表・学会発表 (2020年4月~2021年3月)

1. 森川雅行、河野夏美、藤島利江「パラジウムを用いたビタミン D<sub>3</sub> とその誘導体に対する幾何異性化反応の解析」, 日本薬学会第 141 年会, 広島 (2021年3月)

#### 特許

1. 藤島利江, 原山尚「2 $\alpha$  位に置換基を有するビタミン D 誘導体」, 特願 2009-178092.
2. Yamana K., Harada Y., Azuma Y., Saito H., Takenouchi K., Takayama, H., Kittaka, A., Saito N., Fujishima, T. (2006) Vitamin D<sub>3</sub> lactone derivatives for treatment of osteoporosis. *Jpn. Kokai Tokkyo Koho*, JP 2006045109.
3. Takenouchi K., Anzai M., Saito, Okada K., Ishizuka S., Miura D., Takayama, H., Kittaka, A., Saito, H. N., Fujishima, T. (2004) Preparation of vitamin D<sub>3</sub> lactone derivatives for the treatment of Paget's bone diseases and hypercalcemiaPCT *Int. Appl. WO 2004067525*.



4. Takayama, H., Kittaka, A., Fujishima, T., Saito, N. (2004) Preparation of 2-substituted vitamin D derivatives. PCT Int. Appl. WO 2004067504.
5. Takayama, H., Fujishima, T., Kittaka, A. (2003) Preparation of 2-substituted vitamin D derivatives. PCT Int. Appl. WO 2003055854.
6. Takayama, H.; Kittaka, A., Suhara, Y., Fujishima, T. Preparation of vitamin D derivatives having substituent in 2-position. (2002) PCT Int. Appl. WO 2002066424.
7. Takayama, H., Fujishima, T. (2002) Preparation of 1-methyl-20-epivitamin D derivative. PCT Int. Appl., WO 2002014268.
8. Takayama, H., Fujishima, T. (2002) Preparation of 3-methyl-20-epi-vitamin D derivatives and their vitamin D receptor binding effects. PCT Int. Appl., WO 2002012182.
9. Takayama, H., Fujishima, T. (2001) Preparation of 5,6-trans-2-alkylvitamin D derivatives. PCT Int. Appl., WO 2001090061.
10. Takayama, H., Kittaka, A., Suhara, Y., Fujishima, T. (2001) Preparation of vitamin D derivatives having substituents at the 2 $\alpha$ -position. PCT Int. Appl., WO 2001062723.
11. Takayama, H., Fujishima, T., Suhara, Y., Nihei K., Konno K. (2001) Preparation of vitamin D derivatives having substituents at the 2 $\alpha$ -position. PCT Int. Appl., WO 2001016099.
12. Takayama, H., Fujishima, T., Liu Z., Konno K. (2000) Preparation of 2-alkylated vitamin D derivatives. PCT Int. Appl., WO 2000066548.
13. Takayama, H., Fujishima, T. (2000) Preparation of 3-methylated vitamin D derivatives. PCT Int. Appl., WO 2000064870.
14. Takayama, H., Konno K., Fujishima, T. (1998) Preparation of vitamin D<sub>3</sub> derivatives and their pharmaceutical uses. PCT Int. Appl., WO 9850353.

#### 管理・運営に係ること

藤島：

入試委員長，全学入試委員会委員，全学人権教育推進委員，  
物質管理委員長：実験廃棄物担当，OSCE 委員，国家試験対策委員，薬学共用試験センター派遣 OSCE モニター員

森川：

薬友会担当委員，早期体験学習委員，初年次教育委員会（化学担当），CBT 委員，入試委員会

#### 社会貢献

藤島：

有機化学系強化検討委員会委員，国家試験問題検討委員会（物理・化学・生物）委員，薬学共用試験センター派遣 OSCE モニター員。ひらめきときめきサイエンス運営。主要学会誌でのレビュー。





# 分子生物学講座

## Laboratory of Molecular Biology

### 教員

**教授 宮澤 宏** 着任年月日：2004年4月1日

最終学歴：1986年3月東京大学大学院薬学研究科博士課程修了。薬学博士

前職：国立医薬品食品衛生研究所・遺伝子細胞医薬部・室長

元職：東京工業大学生命理工学部・助手、理化学研究所細胞生理学研究室前任研究員、国立公衆衛生院・衛生薬学部・室長

**准教授 喜納 克仁** 着任年月日：2004年4月1日

2012年に講師から准教授に昇格。

最終学歴：2002年3月東京医科歯科大学大学院医学研究科博士課程修了。博士（医学）

1998年3月京都大学大学院工学研究科合成・生物化学専攻修了。修士（工学）

前職：理化学研究所基礎科学特別研究員（花岡細胞生理学研究室）

元職：日本学術振興会特別研究員（DC1）

**講師 小林 隆信** 着任年月日：2005年4月1日

最終学歴：2015年3月東京理科大学にて論文により学位取得。博士（薬学）

前職：東京理科大学大学院薬学研究科博士後期課程（中退）

### 教育の概要

#### 担当科目：生化学2（喜納）

生化学2では、生化学の中のエネルギーの基礎、エネルギーの獲得、代謝について理解させる。将来的に医薬品の効果・副作用の発生機構の理解および創薬に向けた医薬品設計のための基礎知識として身につけるとともに、科学的に思考する力を養うことを目的とする。実際の講義では、有機化学の反応機構を復習・習熟させるため、共通する反応については極力矢印つきで反応を解説している点を強調した。その際、指導教員の専門分野の話もおりませた。

この科目については、範囲が膨大であるので、今マスターすべきこと（基本的に論述式）をピックアップしたプリントを配付し、そこから試験範囲とした。また物理系が弱い学生が多いので、酵素反応速度論については、実際の実験での手法も含め、時間をかけて丁寧に行った。

#### 担当科目：分子生物学（宮澤・小林）

分子生物学では、生命の設計図である遺伝子を理解するために、核酸の構造、機能および代謝に関する基本的知識を修得し、染色体の構造や遺伝子の複製と維持される仕組みや、設計図を基に生合成されるタンパク質の構造と働きに関する知識を身につけることを目的に、宮澤が授業した。さらに、薬学領域で応用されているバイオテクノロジーを理解するために、遺伝子操作に関する基本的知識の部分を小林が授業した。

学生の日頃の学習時間を確保させる目的で、講義終了時にその日学んだ内容を整理するのに役立つ課題を出し、レポート提出、あるいは、次の講義時間の開始時にミニテストを実施した。また、採点後のミニテスト返却により、学生に自分のできなかったところを確認させた。

#### 担当科目：感染症治療学（宮澤）

感染症治療学では、病原微生物による感染症の病態や予防法を学習し、感染症の治療に用いられる薬物（抗菌薬、抗真菌薬、抗寄生虫薬、抗ウイルス薬など）の作用機序・副作用・薬剤耐性機構を学習する。感染症は人類にとって悩まされてきている疾患であり、著効を示す治療薬によって、劇的な効果を発揮する一方で、病原微生物側でもそれに対抗して耐性菌が出現している。感染症治療薬を使用するにあたり、病原体の同定から適正な薬物を使用することが肝要であり、また、感染症の予防も重要である。平成29年度からこれまでの「化学療法学」の範囲で悪性腫瘍に対する治療薬の部分を除き、各感染症の病態と薬物治療の部分を含む講義とした。

薬物の作用機序を通して、ヒトと微生物との代謝経路の相違および薬物開発戦略についても言及した。代表的な薬物の構造を理解させる目的で構造を識別する問題を含んだ小テストを例年行ってきたが、新型コロナウイルス禍のため、宿題として課した。また、作用機序による分類と適用による分類の2通りから薬物を紹介することで、理解を深めた。試験は、薬物名を正確に覚えさせること、理解度を正確に判定することのため、選択式ではなく記述式を多く取り入れ、採点は部分点を考慮した。今年度は、1回目から9回目までの講義wo WEBで行った。

#### 担当科目：腫瘍治療学（宮澤、二宮）

腫瘍は、遺伝的および非遺伝的な変化によって正常細胞が、増殖制御されない「がん細胞」に変わり大きくなったものである。悪性腫瘍は、国民の半数が罹患するといわれ、死亡率も高い。この授業では、様々な種類の悪性腫瘍の病態を学び、悪性腫瘍に対する治療薬の作用機序、適用範囲、副作用について講義した。また、抗悪性腫瘍薬の耐性の問題についても言及した。

新しい抗悪性腫瘍薬が次から次へと開発されているので、

最新のものまでできるだけ紹介した。理解を助ける目的で例年毎回小テストを行ってきたが、今年度は担当する講義が全て WEB で行うことになったため、小テストを宿題に切り替えた。試験は、薬物名を正確に覚えさせること、理解度を正確に判定することのため、選択式ではなく記述式を多く取り入れた。

#### 担当科目：薬学概論（宮澤）

薬学概論の中の二コマを担当した。コロナ禍ということで、2 回とも WEB で講義を行った。初回、「薬学の世界へようこそ」において、薬の歴史、我が国の薬学の歴史から、薬学の使命、医療の担い手としての薬剤師の役割と使命を理解できる内容の講義を行った。もう一コマは、「生物学的医薬品へとくに核酸医薬品と細胞組織医薬品」というテーマで講義した。科学技術の進歩とともに、医薬品の形態が変化してきている中、生物学的医薬品の占める割合が増えていることを実例を示しながら概説した。入学早々の学生に、生物学的医薬品の利点と注意事項を示し、新しい時代の創薬研究に必要な心構えを喚起した。

#### 担当科目：疾病の分子生物学（宮澤）

5 年次の科目であり、昨年度までの「医薬品開発学 2」から科目名を変更し、新カリキュラムの科目である。それに伴って、疾病という観点で、近年医薬品として多用されるようになってきている生物学的製剤の開発に向けた技術面での最近の進歩を中心に講義した。生物製剤の種類、取扱い上の注意、問題点を講義すると同時に、遺伝子組換え技術の基礎からゲノム情報を利用した創薬、最新の遺伝子治療、細胞治療や再生医療などについても集中講義として紹介した。今年度は、新型コロナウイルス流行にあたり、全講義を WEB にて行った。

#### 担当科目：放射線科学（喜納）

放射線に関する全般について講義した。また、担当者の専門分野の話も行った。講義では特に、薬剤師国家試験で出題された項目や模擬試験で枝問として出題された項目について、教科書にマークさせ、何回も読み上げるなど工夫した。通常の講義では扱わないであろう、福島原発事故に関連した内容についても講義時間を割いた。

#### 担当科目：放射線衛生学（喜納）

診療放射線学科の科目である。放射線生物学を踏まえ、一般人に対するプロの心構えについて、放射線とのつきあいをどう伝えるのかについて、講義した。原子力発電のこれまでと今後についても、解説した。

#### 担当科目：文理科学（喜納担当分 2 コマ）

文理科学 15 コマのうち、1 コマを使って、図書館の使い方を

実践形式で説明した。開催時期も通常設定の時間とは別に設定し、4 月のなるべく早い時期に開催するようにした。なるべく入学したての時期に行うことで、図書館をスムーズに抵抗なく使って頂くこと、高校とは違うこれぞ大学の図書館と知ってもらうことを狙いとしている。さらに、1 コマを使って、国家試験合格につながる学び方について教授し、卒業研究を通じて考える力、論理的思考力を養うことを伝えた。

#### 担当科目：生化学実習（宮澤・喜納・小林）

生物科学は生命現象を分子の挙動として理解しようとする学問であり、近年めざましく発展し、老化や疾病を含めたあらゆる生命現象を理解する上で基礎となる重要不可欠な学問となっている。この実習では、生命の設計図である遺伝子が複製増幅されるしくみとプラスミド作成のしくみを実体験してもらおう。題材として、アルコール分解酵素の遺伝子を髪の毛から抽出・増幅させ、アルコールの耐性と関連させる。

- ・通常の講義と違いを出すため、極力情報を与えないようにし、自ら情報を集めて、考察させることに重点を置いた。学生からの質問の内容が、よく考察できていない・情報を収集していないことにもとづくものとわかった場合には、こちらから逆に関連する質問を返して考察させるよう努めた。

- ・レポートは 2 回提出とし、計画立てて行わせることをねらいとした。

- ・レポートの採点は考察のみを重視し、答えが正しくはなくても論理的に書けており人と異なったことを記述していればボーナス点を加点した。

#### 担当科目：特別実習・卒業実習（宮澤・喜納・小林）

各人必ず異なる研究テーマを与え、普段の授業や国家試験対策では培えない思考力・応用力および協調性を身につけることを目的としている。これは単なる薬剤師ではなく“使える薬剤師”をめざしている。また、教科書だけではなかなか身につけることができなかった知識を実際に体験させることにより、知識を吸収しやすいよう配慮した。夏休み、冬休み、春休みの期間を重点的に活用して、指導を行った。5 年次生は病院実習、薬局実習の合間に指導した。

#### 担当科目：応用生物学 A（小林）

応用生物学 A では、人体の三次元的構造と、組織や器官の基本的な機能について学ぶ。具体的には、神経系、骨格系・筋系、循環器系、血液・造血器系、呼吸器系、消化器系、泌尿器系、内分泌系、感覚器系について、基本的な構造の名称を挙げることができ、機能を構造と関連づけて説明できることを目標とする。2 年次から始まる治療薬学の導入となる科目でもあり、臓器と病気との関りについてもできるだけ触れながら講義を行った。本講義は薬学治療学講座の松尾先生と本講座の小林が分担しており、小林は呼吸器系、消化器系、



泌尿器系、内分泌系、感覚器系を担当した。

### 管理・運営に係ること

宮澤：

(全学)

徳島文理大学遺伝子組換え実験安全委員会委員長・香川薬学部安全主任者、全学教務委員会委員、全学入試委員会委員、全学研究倫理教育委員会委員、国際交流委員会委員、香川 IR 委員会委員、全学 SD 委員会委員、

(香川薬学部)

香川薬学部長、香川薬学部教務委員会オブザーバー、国家試験対策委員会オブザーバー、将来計画委員会委員長、予算委員会委員、図書委員会委員

(ほぼ毎月開催) 教授会、部局長会、香川部局長等懇談会、合同教授会

(その他)

さぬき市病院事業運営審議会委員

令和2年度自己点検・評価委員会(2020.5.26、徳島キャンパス)

新入生オリエンテーション挨拶(2020.6.15)

令和2年度香川県ブロック別進学説明会(2020.7.1、高松)

編入学試験(令和2年度編入学I期)面接(2020.7.18、香川キャンパス)

徳島薬学部との打ち合わせ(カリキュラム)(2020.7.20、香川キャンパス)

大学院薬学研究科入学試験(2020.8.1、香川キャンパス)

善通寺第一高校訪問(2020.8.19)

国際交流委員会(2020.8.28、香川キャンパス図書館)

令和2年度保護者会香川支部会(2020.8.29、香川キャンパス)

令和2年度秋期入学式(2020.9.16、香川キャンパス)

徳島薬学部との打ち合わせ(カリキュラム)(2020.9.17、Zoom開催)

令和2年度秋期卒業式(2020.9.19、香川キャンパス)

2021年度総合型選抜入試 面接試験(2020.10.3、香川キャンパス)

第1回全学入試委員会(2020.10.5、徳島キャンパス)

大学共通テスト実施委員会 本部員(2020.10.27、香川キャンパス)

徳島薬学部との打ち合わせ(カリキュラム)(2020.10.28、徳島キャンパス)

土庄町・小豆島町との協定調印式(2020.10.29、香川キャンパス)

新入留学生オリエンテーション(2020.11.2、香川キャンパス)

創立125周年記念式典(2020.11.3、徳島キャンパス)

新入生歓迎会(2020.11.4、香川キャンパス DI 室)

指定校推薦1期入試面接(2020.11.15、香川キャンパス)

私立薬科大学協会・令和2年度第2回総会(2020.11.24、オンライン開催)

全国薬科大学長・薬学部長会議令和2年度第2回総会(2020.12.4、オンライン開催)

公募制推薦入試I期、学科・施設説明会挨拶(2020.12.12、香川キャンパス)

指定校推薦2期・公募制推薦2期入試面接(2020.12.13、香川キャンパス)

OSCE直前評価者講習会・OSCE本試験 挨拶(2020.12.20、香川キャンパス)

大学共通テスト実施説明会 本部員(2020.12.24、香川キャンパス)

令和2年度大学院薬学研究科博士内審査会(2020.12.25、香川キャンパス)

外国人留学生編入学試験面接(2021.1.12、香川キャンパス)

大学共通テスト 本部長(2021.1.16-17)

第1回全学教務委員会(2021.1.21、香川キャンパス)

白衣授与式 挨拶(2021.1.26)

SD研修会(2021.1.30、オンデマンド視聴)

一般入試1期A 本部(2021.2.1、香川キャンパス)

一般入試1期B 本部(2021.2.2、香川キャンパス)

学生と企業との交流会 挨拶(2021.2.7、香川キャンパス)

入学前スクーリング 挨拶(2021.2.28)

令和2年度第1回全学研究者倫理教育委員会(2021.3.3、香川キャンパス)

国際交流委員会(2021.3.4、香川キャンパス)

令和2年度大学院薬学研究科博士本審査会(2021.3.5、オンライン)

全学SD推進委員会(2021.3.5、香川キャンパス)

各オープンキャンパスでの挨拶

喜納：

図書委員長、非密封RI管理委員会委員長、大学院委員、教務委員

放射線取扱主任者、環境計量士、公害防止管理者、危険物取扱者の国家試験に対する学生からの問い合わせへの対応  
合同教授会への参加

図書委員長として、各出版社新刊の選定と購入申請、学生にとって有益な図書の発掘

入試問題作成

小林：

広報委員

ホームページの更新、SNS(Facebook、twitter)の更新、大学案内の作成、オープンキャンパスの実施、配布資料の作成、薬学部進学セミナーでの学部紹介、いつでもオープンキャンパス対応、中高生のための薬剤師セミナー2020 薬剤師と『感

染症』開催

OSCE 委員会 ステーション 1 責任者

入試問題作題

### その他、新聞報道等

宮澤・喜納・小林：

生化学実習に伴う、生化学実習書を作成、印刷

### 研究の概要

#### 1. 神経細胞への分化誘導機構の解明 (小林・宮澤)

マウス胚性腫瘍細胞 P19 は、異なる条件での培養により異なる組織特異的細胞への分化が誘導されるという多分化能をもった細胞株である。分化の一条件として、凝集状態での培養と一定濃度のレチノイン酸添加によって、神経細胞集団が生じることが知られる。

我々はこの系を用いて、未分化細胞から組織特異的細胞への分化にかかわる分子機構を明らかにしようとしている。近年の研究により、分化には増殖因子や分化誘導因子による刺激、3 次元的な細胞間相互作用などが特に重要な役割を果たしていることが明らかになってきている。しかし、分化は様々な要因が総合的にかかわり合っている複雑な過程であるため、どんなシグナル分子がいつどのように関与して細胞分化が誘導されるかを全体的に捉えることはできていない。未分化細胞が組織特異的細胞へと分化する機構を明らかにすることは、基礎研究として興味深いばかりではなく、最近の医療現場で注目されている再生医療技術をより進歩させるためにも重要である。

我々はまず、レチノイン酸添加によって P19 細胞が神経細胞へと分化する条件について検討した。レチノイン酸処理時間と分化誘導率を調べ、最も効率よく神経細胞へと分化させる条件を確立した。次に、DNA マイクロアレイを用いた網羅的遺伝子発現解析を行い、レチノイン酸添加によって転写量が変動する遺伝子群を明らかにした。これらの遺伝子のうち、神経分化との関連やレチノイン酸による発現変動機構が明らかにされていない遺伝子に注目し、詳しい解析を行っている。例えば、特徴的なドメインをもつタンパク質をコードする遺伝子の一つが、上記条件を満たすことが明らかになった。このタンパク質と同ファミリーに属するタンパク質のいくつかについては、細胞周期や DNA 修復等を始めとする様々な生物現象に関与していることが既に報告されている。しかし、我々が注目したタンパク質については、まだそのような報告がなされていない。そのため、①レチノイン酸添加と発現量変動の関連性、②他因子との相互作用、③該当遺伝子の発現変動が P19 細胞の神経分化誘導に果たす役割等について、現在解析を進めている。また、解析ターゲットとして選別した他の複数の遺伝子についても同時に解析を行っており、これ

らの結果を統合することによって、未分化細胞からの神経分化誘導にかかわる分子機構の詳細な解明に結び付けたいと考えている。

該当遺伝子の一つとして、カゼイン  $\kappa$ (Csn3) 遺伝子に注目した。P19 細胞にレチノイン酸を投与し神経細胞分化誘導をさせた時、分化の初期段階でカゼイン  $\kappa$ (Csn3) 遺伝子の発現が上昇することを見いだした。レチノイン酸受容体である RAR $\alpha$  が Csn3 遺伝子上流の RARE に結合することで発現上昇することを明らかにした。カゼイン  $\kappa$  は、乳中に存在するタンパク質であるが、タンパク質の凝集を防ぐ機能もあり、神経分化へ運命が決定される時にこの機能の関与が示唆される。もう一つ、P19 細胞の神経分化誘導過程で一過的に上昇する転写因子 Tal2 に注目して研究を進めている。

#### 【外部研究資金】

・平成 29 年度 特色ある教育・研究 共同研究事業 (小林)

#### 2. DNA 損傷の発生・生体内への影響、修復機構の解明 (喜納)

DNA は生命現象を営むための遺伝情報を蓄えており、自身の情報を複製によって子孫に残すことができる。この情報に誤りが生じる (突然変異) と、老化、ガン化、様々な遺伝病の引き金になる。DNA の情報の変化のひとつとして、DNA の酸化損傷による変異があげられる。ガンマ線による被爆、太陽光による光励起された皮膚内色素、さらには体内の代謝過程で生成する活性酸素種など様々な要因で DNA は酸化される。

##### a) グアニン酸化損傷

これまで、DNA を酸化する多くの系で、グアニンからチミンやシトシンへの突然変異が観察されてきた。このうち、グアニンの酸化生成物である 8 オキソグアニン(8-oxoG)の場合、DNA 複製においてアデニンを取り込み、塩基対を形成することが判明している。この性質がグアニンからチミンへの突然変異をひき起こすと提唱されている。しかしこれまでのところ、グアニンからシトシンへの突然変異をひき起こす酸化生成物は知られていなかった。

我々は、紫外線により励起させたりボフラビンを用いて、DNA 中において 8-oxoG とともにイミダゾロン(Iz)が生成することを明らかにした。また、DNA 複製において Iz の分解生成物であるオキサゾロン(Oz)の相手にグアニンが取り込まれることを示した。よって、Oz は 8-oxoG とともに生体内で生成し、グアニンからシトシンへの突然変異をひき起こしている可能性を初めて提唱できた。現在は、グアニジノヒダントイン(Gh)やスピノヒダントイン(Sp)もグアニンからシトシンへの突然変異を引き起こすことが報告されており、これらがグアニンと塩基対形成の可能性のあることを *ab initio* 計算で示した。

また、8-oxoG の酸化剤として新たにヨウ素を見出し、各種酸化損傷の調整に役立つことを見出した。また、この研究過





程で、Ghや酸化型 Gh(Ghox)、オキサリリックアシッド(Oxa)は酸性条件で生成することを確認し、Ghは系中でさらにGhoxに酸化されていること、Ghoxは熱分解によりOxaに誘導されていることを確認した。一方、SpやIzは塩基性条件で生成することを確認した。また、これまで存在が予測されていた中間体ジイミン(Dim)を世界で初めて検出・同定した。

上記の研究とは別に、ヒトNEIL1およびNTH1はOzに対し、修復活性を持つことを明らかにした。

最近では、4本鎖DNA中における1電子酸化反応を解析し、3'側に特異的に酸化がおきることを明らかにし、HOMOに起因することを発見した。また、生成物は1本鎖とは異なること、1本鎖と2本鎖での反応解析との比較から1位の脱プロトンのしやすさで生成物が正誤されていることを明らかにした。

加えて2020年には、グアニン酸化損傷の研究が新型コロナウイルスに対する治療薬開発につながるのではないかと提案もしている。

#### b) フラビン誘導体の化学

ビタミンB<sub>2</sub>はフラビン骨格を持っており、酸化還元酵素の中心的役割をになっている。我々はカチオンラジカル発生剤として、フラビン誘導体の簡便な合成法を開発し、それをDNA末端に共有結合で固定した。末端にフラビンを固定した2本鎖DNAに光を照射した時、8-oxoGからIzが生成することを明らかにした。以前のキノンの実験とあわせると、8-oxoG→Izという反応がDNA内ホール移動で起こりうることを間違いないものとした。

さらに、この研究で作成したいくつかのフラビン誘導体を用いて、それ自身の光分解性を解析し、ルミクロムに分解することを再確認した。

あわせて、カルボキシメチルフラビン、ルミフラビン、ルミクロムの経済的で簡便な合成方法を確立した。

#### c) 放射線ホルミシスの理論構築

低線量の放射線被ばくレベルによるがんの発生確率が線量に比例するかどうかはまだ決定されていないのが現状である。そこで、低線量で発生する放射線ホルミシスについて、2つの変曲点を持つ山のような形状をとる関数を使用した数学モデルを検討した結果、以下の見解が得られた：(i) 癌を発症する確率が自然のバックグラウンド線量を超える放射線レベルで減少する場合、放射線ホルミシス効果は最大12.4mSvまでに発生する。(ii) 750 mSv以上で比例関係がある場合、放射線ホルミシス効果は最大225mSvまでに発生する。したがって、16.8または307 mSv以下の放射線量について分子レベルおよび細胞レベルで研究を行うことにより、低放射線量に起因する発がんを調査することができる展望を提案した。

#### 【外部研究資金】

- ・平成29—令和3年度：科研費基盤C（喜納）
- ・第33回リバネス研究費L-RAD賞（喜納）
- ・平成23—26年度：科研費基盤C（喜納）

・平成23年度—24年度；百十四銀行学術文化振興財団 産業・学術部門助成金（喜納）

・平成23年度；放射線影響協会 研究奨励助成金（喜納）

・平成23年度—24年度；中富健康科学振興財団 研究助成金（喜納）

・平成23年度；北野生涯教育振興会 生涯教育研究助成金（喜納）

・平成23年度：特色ある教育・研究助成金（教育）（喜納）

・平成22年度：特色ある教育・研究助成金（教育）（喜納）

・平成20—22年度：私立大学戦略的研究拠点形成支援事業助成金（分担者）

・平成20—21年度：通産省地域イノベーション創出研究開発事業助成金獲得（分担者）

・平成20年度：国際科学技術財団 研究助成金（喜納）

・平成21年度：科研費若手B繰越申請（喜納）

・平成19—20年度：科研費若手B（喜納）

・平成17—18年度：科研費若手B（喜納）

・平成17年度：特色ある教育・研究助成金（共同研究）（喜納）

・平成16年度：特色ある教育・研究助成金（共同研究）（喜納）

#### 3. DNAとの結合を標的とした新規NF-κB低分子阻害剤の同定（小林・喜納）

NF-κBは、様々なシグナル応答の調節に中心的な役割を果たす転写因子の一つである。NF-κBによる転写調節のみだれは、様々な病気と関わりがあると考えられており、NF-κBの特異的阻害剤は、シグナルの収束段階を制御できることから、それらの病気の有望な治療薬となることが期待される。これまで、我々はDNAとNF-κBの結合を阻害する低分子化合物の同定を目的として、*in silico*でのdocking studyにより低分子化合物候補を選定し、それらの化合物によるDNAとNF-κBとの結合阻害能の解析をおこなってきた。コンピュータを用いたstructure-based virtual screening (SBVS)法を利用して、我々が所有するvirtual chemical libraryから、DNAとNF-κBとの結合を阻害する低分子化合物候補を選定した。次に、選んだ化合物の阻害能を、MF20 molecular interaction analytical system (Olympus)によるFluorescence Correlation Spectroscopy (FCS)を用いて評価した。さらに、類似化合物と比較検討したところ、有意な差が認められた。このうち効果が認められたものに関して、Electrophoresis Mobility Shift Assay (EMSA)法により、阻害能の検討を行った。現在、これらの化合物に関して、細胞における阻害能等の検討を重ねている。今後は、これらの低分子化合物のメカニズム解析、最適化合物への分子設計を行うことにより、創薬リード化合物となる新規NF-κB阻害剤の開発を進める予定である。

最近では、2—bとも関連するが、新たな阻害剤の探索を行っているところである。

## 【外部研究資金】

・平成22年度：東京生化学研究会 研究奨励金 (小林)

【共同研究先】東京理科大学

## 4. DNA複製装置調節の解明 (宮澤)

DNAは生命の設計図といえる遺伝情報を含んでいる。DNAの維持、複製とDNAに含まれる情報の発現は、あらゆる生命現象の基本である。また、生命は $10^9$ にも及ぶ情報単位を細胞の核内にきわめてコンパクトに収納(凝縮)している。細胞の増殖時や発生分化の段階で、凝縮と脱凝縮をダイナミックに繰り返し、しかも厳密に制御されて、遺伝情報の維持・発現を行っている。

我々は、DNA複製に関与している因子群および相互作用するタンパク質の機能を解析し、さらにDNA修復やDNA転写などDNA上に起こる各種の反応との関係、核構造の中での挙動を明らかにし、DNA複製装置がどう調節されているかを解明したいと考えている。

これまでに、染色体DNA複製酵素のひとつであり、DNA修復にも関与するDNAポリメラーゼεの第二サブユニット(DPE2)とヒストンデアセチラーゼ(HDAC)を含むSin3複合体構成サブユニットSAP18との相互作用を見いだした。HDACはヒストンを脱アセチル化することで、クロマチン構造を凝縮へと導き、遺伝子発現を抑制する。複製因子との相互作用から、複製前後のクロマチン構造の保持に機能していることが予測され、細胞分裂を経ても遺伝子発現情報が保持されるエピジェネティック制御機構との関連が示唆された。今後は多くのエピジェネティクス制御系に関与するタンパク質のうち、DNAメチル化酵素、ヒストンアセチル化酵素、ヒストン脱アセチル化酵素のタンパク質とDNAポリメラーゼε(polε)を中心とした複製複合体との相互作用が、複製の進行および分化状態の変化でどのように変化し制御されているかを明らかにしていく予定である。

## 外部誌上発表 (2016年4月~2021年3月)

## 2020

- Hirao-Suzuki M, Koga T, Sakai G, Kobayashi T, Ishii Y, Miyazawa H, Takiguchi, M, Sugihara N, Toda A, Ohara M, Takeda S., "Cadmium down-regulates apolipoprotein E (ApoE) expression during malignant transformation of rat liver cells: direct evidence for DNA hypermethylation in the promoter region of ApoE." *Biochem Biophys Res Commun.*, 2020, 531(2), 215-222
- Kino K. "The prospective mathematical idea satisfying both radiation hormesis under low radiation doses and linear non-threshold theory under high radiation doses" *Genes Environment* 2020, 42, 4
- Kino K.\*, Kawada T, Hirao-Suzuki M, Morikawa M, Miyazawa H. "Products of oxidative guanine damage form base pairs with guanine." *Int J Mol Sci.* 2020, 21(20), 7645.
- Kino K.\*, Ohshima T, Kawada T, Kobayashi T, Miyazawa H "A strategy for finding new medicines against the novel coronavirus disease (COVID-19) derived from base pairing

with DNA damages." *Glob J Infect Dis Clin Res* 2020, 6(1), 060-061.

- Morikawa M., Kino K.\*, Kawada T., Miyazawa H. "Localizations of the highest occupied molecular orbital and guanine oxidation by UV-light and other oxidizers." *Photomed. Photobiol.* 2021, in press

## 2018

- Hirao-Suzuki, M., Takeda, S., Kobayashi, T., Kino, K., Miyazawa, H., Waalkes, MP., Takiguchi, M., "Cadmium down-regulates apolipoprotein E (ApoE) expression during malignant transformation of rat liver cells: direct evidence for DNA hypermethylation in the promoter region of ApoE." *J. Toxicol. Sci.*, 2018, 43(9), 537-543

## 2017

- Suzuki, M., Takeda, S., Teraoka-Nishitani, N., Yamagata, A., Tanaka, T., Sasaki, M., Yasuda, N., Oda, M., Okano, T., Yamahira, K., Nakamura, Y., Kobayashi, T., Kino, K., Miyazawa, H., Waalkes, MP., Takiguchi, M., "Cadmium-induced malignant transformation of rat liver cells: Potential key role and regulatory mechanism of altered apolipoprotein E expression in enhanced invasiveness." *Toxicology*, 2017, 382, 16-23
- Kobayashi, T., "Expression and Regulation of *Tal2* during Neuronal Differentiation in P19 Cells" *Yakugaku Zasshi*, 2017, 137(1), 61-71
- Kino K.\*, Hirao-Suzuki M., Morikawa M., Sakaga A., Miyazawa H. "Generation, repair and replication of guanine oxidation products." *Genes Environ.*, 2017, 39, 21

## 2016

- Kobayashi, T., Tanuma, S., Kino, K., Miyazawa, H., "New scaffolds of inhibitors targeting the DNA binding of NF-κB" *Integr. Mol. Med.*, 2016, 3(5), 769-773
- Suzuki, M., Kino, K.\*, Kawada, T., Oyoshi, T., Morikawa, M., Kobayashi, T., Miyazawa, H. "Contiguous 2,2,4-triamino-5(2H)-oxazolone obstructs DNA synthesis by DNA polymerases α, β, η, ι, κ, REV1 and Klenow Fragment exo-, but not by DNA polymerase ζ." *J Biochem.* 2016, 159(3), 323-329.
- Kino, K.\*, Sugawara, K., Miyazawa, H., Hanaoka, F.\* "2,2,4-Triamino-5(2H)-oxazolone is a Weak Substrate for Nucleotide Excision Repair." *J. Pharm. Negat. Results*, 2016, 7(1), 42-45

## 【著書・訳書】

- 宮澤宏「10章 遺伝子治療と細胞、組織を利用した移植治療」コンパス分子生物学—創薬・テララーメイド医療に向けて—(改訂第3版)、南江堂、2021年3月

## 【邦文総説・解説等】

- 大吉崇文、喜納克仁「DNA損傷修復タンパク質 TLS/FUSによるエピ・シ・エネティクス制御」放射線生物研究, 2017, 52(3), 227-238

## 口頭発表・学会発表 (2020年4月~2021年3月)

- 高石美佑, 小林隆信, 赤木楓, 泉典孝, 喜納克仁, 宮澤宏「κ-カゼインと低分子Gタンパク質 RalA, Rnd2, Ranとの相互作用に関する研究」第61回日本生化学会中国・四国支部例会, 広島, 2020年7月
- 川田大周, 西山陽菜, 弥園葉奈, 小林隆信, 宮澤宏, 喜納克仁「塩基除去修復酵素による新規グアニン酸化損傷の反応性」日本環境変異原学会第49回大会, 沼津, 2020



年11月

3. 西山陽菜, 喜納克仁, 川田大周, 弥園栞奈, 小林隆信, 宮澤宏「新規グアニン酸化損傷に対する Fpg の反応性」第59回日本薬学会・日本薬剤師会・日本病院薬剤師会中国四国支部学術大会, WEB開催, 2021年12月
4. 森凌, 喜納克仁, 川田大周, 弥園栞奈, 小林隆信, 宮澤宏「異なるpH下でのグアニン酸化損傷化合物の生成量の違い」第59回日本薬学会・日本薬剤師会・日本病院薬剤師会中国四国支部学術大会, WEB開催, 2021年12月
5. 川田大周, 荒木麻由, 土浦菜々, 西山陽菜, 森凌, 山田彩加, 小林隆信, 宮澤宏, 喜納克仁「新規グアニン酸化損傷の塩基除去修復酵素に対する反応性」第42回日本光医学・光生物学会, 東京, 2021年1月
6. 小林隆信, 大島隆幸, 磯崎伊織, 平岡理那, 喜納克仁, 宮澤宏「TAL2と相互作用する因子の同定」日本薬学会第141年会, 広島, 2021年3月

---



---

**特許**

---

該当事項なし

**その他、新聞報道等** (2016年4月~2021年3月)

**2021**

2020年度 日本薬学会中国四国支部 学生発表奨励賞 (森, 西山: 学部生)

**2018**

2017年度 日本薬学会中国四国支部 学生発表奨励賞 (坂賀: 学部生)

**2016**

平成28年度日本環境変異原学会 研究奨励賞 (喜納)  
第33回リバネス研究費 L-RAD 賞 (喜納)





## 生体防御学講座

### Laboratory of Immunology

#### 教員

**教授 大岡 嘉治** 着任年月日：2005年9月1日

最終学歴：1993年3月東京工業大学大学院博士課程修了。  
理学博士

前職：大阪大学医学部助手

**助教 中妻（横田） 彩** 着任年月日：2006年8月1日

最終学歴：2004年3月北里大学大学院博士課程修了。博士（医学）

前職：独立行政法人産業技術総合研究所・年齢軸生命工学研究センター 第1号契約職員

#### 教育の概要

##### 担当科目：衛生薬学3（大岡 嘉治）

衛生薬学分野の中から、特に環境衛生学について重点的に講義を行った。近年、地球の温暖化、環境ホルモン、土壌・水質・大気汚染等の地球環境問題が社会的関心を集めている。これらの地球環境問題を理解する上で必要なヒトの生活活動と地球生態系の関わりを解説するとともに、ヒトの生活活動の維持が環境に及ぼす影響とそれを正しく評価する方法について習得することを目的として講義を行った。

##### 担当科目：治療薬学4/治療薬学演習1.2（大岡 嘉治）

3年生前期の必修教科である免疫学の基礎に立脚して、薬学科3年生に、その発展としての現代免疫学について解説するとともに、環境要因や内的要因によって免疫系が攪乱された時に生じるアレルギー、自己免疫、AIDSなどの免疫関連疾患およびその治療法と治療薬について解説した。さらに、免疫反応の臨床応用に関する実際と将来への展望について概説した。治療薬学演習1では、治療薬学4（アレルギー・自己免疫疾患）に関する演習を実施し、知識の理解を深めた。治療薬学演習2では、免疫チェックポイント医薬品について講義と症例研究発表を実施し、知識の理解を深めた。

##### 担当科目：薬理遺伝学（大岡 嘉治）

本講義では、古典的なメンデル遺伝学から最新の分子生物学を基本に、薬に対する反応性に関わる遺伝的因子の重要性を解説し、遺伝的要因が薬の効果や副作用の予知にどのように利用されているか理解するよう努めた。

##### 担当科目：健康科学/総合薬学演習（大岡 嘉治）

これまでに学習した衛生薬学3に関する多くの演習問題に

取り組んだ。演習問題の解説に時間をかけて行い、知識の理解に努めた。

##### 担当科目：免疫学/基礎薬学演習4/生体機能演習/応用薬学演習（中妻 彩）

免疫系は、外部から侵入してきた細菌やウイルスからの攻撃や、異常を生じた自己細胞による組織破壊から体を守る仕組みである。この仕組みが、どのような構成要員によって、どのような役割が担われ、どのように目的を達成しているのか、基本的事項について解説した。その上で、この仕組みが破綻した時に生じるアレルギー、自己免疫疾患および免疫不全症候群や、免疫監視システムを巧妙に回避することによって発症する感染症やがんなどの疾患について概説した。さらに、ワクチンや抗体医薬などの生物学的製剤、がん免疫療法および移植医療など、免疫反応を応用した最先端の医薬品や治療技術について概説した。免疫学では、教科書の内容に加え、最新の知見を説明する図や表をまとめた資料を作製して配付し、理解の向上を図った。毎回の講義の後に、その講義の要点を問う復習課題と次回講義の予習課題を課し、学生の時間外学習の習慣付けと知識の定着を促した。基礎薬学演習4、生体機能演習および応用薬学演習では、免疫学に関する演習を実施し、知識の理解を深めた。

##### 担当科目：臨床免疫学（保健福祉学部臨床工学科3年）（中妻 彩）

免疫系は、外部から侵入してきた微生物、ウイルス、毒素などからの攻撃や、異常を生じた自己細胞による組織破壊から体を守る仕組みである。この仕組みが、どのような構成要員によって、どのような役割が担われ、どのように目的を達成しているのか、基本的事項について解説した。その上で、この仕組みが破綻した時に生じるアレルギー、自己免疫疾患および免疫不全症候群や、免疫監視システムを巧妙に回避することによって発症する感染症やがんなどの疾患について概説した。教科書の内容に加え、最新の知見を説明する図や表をまとめた資料を作製して配付し、理解の向上を図った。毎回の講義の後に、その講義の要点を問う復習課題と次回講義の予習課題を課し、学生の時間外学習の習慣付けと知識の定着を促した。

##### 担当科目：生体機能学/分子薬理学/総合薬学演習（中妻 彩）

これまでに学習した免疫学および治療薬学4に関する知識を他分野と関連付けて総合的に活かすことができるように、基礎的な問題から発展的な問題まで多くの演習問題に取り組んだ。演習問題の解説を簡潔にわかりやすくまとめた資料を作製して配付し、理解の徹底を図った。

**担当科目：衛生・免疫実習（分担：大岡 嘉治、中妻 彩）**

この実習の免疫実習部分を当講座で担当し、抗原の定義と種類、抗体、補体、抗原抗体反応の特徴、試験管内抗原抗体反応の種類について解説し、これらを利用したアッセイ法の技術を習得させた。

**講座配属学生の指導（分担：大岡 嘉治、中妻 彩）**

薬学科 4 年生、5 年生および 6 年生の特別実習または卒業研究を指導し、さらにそれぞれに応じた学習指導を行った。

**管理・運営に係ること**

- 大岡嘉治**：香川薬学部動物実験委員会委員長  
 評価・FD 委員会委員長  
 予算委員会委員  
 OSCE 実施委員会委員 誘導待機担当（香川校）  
 実務実習訪問指導（香川県）  
 入試問題作問委員（生物系）  
 国家試験問題検討委員会（衛生薬学部会）  
 オープンキャンパス サイエンスミニキャンブ  
 （9 月 13 日）
- 中妻 彩**：香川薬学部動物実験委員会委員  
 評価・FD 委員会委員  
 CBT 対策実施小委員会委員（生物）  
 OSCE リカバリー担当（香川校）  
 実務実習訪問指導（香川県）  
 オープンキャンパス サイエンスミニキャンブ  
 （9 月 13 日）

**研究の概要**

**2020 年の研究活動の概要：**

**研究テーマと目標：**

免疫細胞の移動と免疫反応の制御のメカニズム。特に、ビタミン A,D や種々のホルモンなどの核内受容体リガンドによる免疫系機能調節の役割について、腸管などの粘膜系を中心に研究し、アレルギーや自己免疫病などの免疫学的疾患やその他の炎症性疾患および腫瘍に対する治療および創薬への新たな基盤造りを目指している。

**背景と成果の概要：**

免疫系がその役割を果たすためには、必要な機能を持つ免疫細胞が体的確な場所に移動する必要がある。免疫系の司令塔である T 細胞は血液やリンパ液の流れに乗って全身を巡回しているが、抗原と出会い活性化されるまでは二次リンパ系器官以外の組織には移入できない。しかし、一旦、二次リンパ系器官で抗原と出会って活性化/メモリー T 細胞となると通

常の組織にも移入できるようになる。但し、抗原との出会いの場所である二次リンパ系器官が所属する組織に特異的に移入（ホーミング）する傾向がある。例えば、腸関連の二次リンパ系器官（パイエル板や腸間膜リンパ節）で抗原刺激を受けた T 細胞は、小腸に特異的にホーミングする傾向がある。T 細胞の組織特異的なホーミング制御の分子機序は全く不明だったが、2004 年に私達は、ビタミン A 由来のレチノイン酸が、T 細胞に小腸ホーミング特異性をインプリントする生理的因子であることを発見し、さらに、パイエル板や腸間膜リンパ節の樹状細胞の中には、レチノイン酸合成の鍵を握る酵素 RALDH (retinaldehyde dehydrogenase) を発現してビタミン A (レチノール) からレチノイン酸を生成する能力を持つものが存在することを発見した (Immunity 21:527-538, 2004)。これらの樹状細胞は、T 細胞に抗原提示する際にレチノイン酸を与えることで、小腸ホーミング特異性をインプリントする。B 細胞の小腸へのホーミングについても同様なメカニズムが関与しており、レチノイン酸が T 細胞非依存性 IgA 抗体産生を促進することも、2006 年に von Andrian 教授 (Harvard 大) らとの共同研究で明らかにした (Science 314:1157-1160, 2006)。

2009 年には、個々の樹状細胞において、RALDH の相対活性を計測する方法を確立し、レチノイン酸産生能力を持つ樹状細胞サブpopulationを同定した。レチノイン酸産生能力は、樹状細胞の成熟と RALDH のアイソフォーム RALDH2 の発現にほぼ依存していた。それに基づき、腸において樹状細胞に RALDH2 発現を誘導する生理的因子を探索し、GM-CSF (granulocyte-macrophage colony-stimulating factor) が、主要な役割を果たすことを発見した。レチノイン酸自体も必須補助因子として関与していた。また、IL-4 と IL-13 は、GM-CSF と同様な効果を示し、GM-CSF と相乗的に作用したが、受容体欠損マウスの解析から、これらは必須因子ではないことが判明した。Toll 様受容体からの刺激も、樹状細胞の成熟と同時に RALDH2 発現を促進した (Int Immunol 21:361-377, 2009)。

レチノイン酸は、以前より T 細胞のヘルパー T 細胞 1 型 (Th1) および 2 型 (Th2) への機能分化にも影響を与えることが、私達の研究を含めて明らかとなっていた (Int Immunol 15:1017-1025, 2003)。2007 年になって、私達の発見したレチノイン酸産生樹状細胞が、リンパ球の移動ばかりでなく、誘導型 Foxp3<sup>+</sup>制御性 T 細胞 (iTreg) の分化を促進し、炎症促進性 Th17 細胞の分化を抑制することが、複数のグループによりほぼ同時期に報告された。これは、レチノイン酸が、経口免疫寛容の成立と、それによる全身性の抗原特異的免疫反応の抑制に関与する可能性、および炎症反応の制御に関与する可能性を示唆した。私達は最近、ビタミン A 欠乏下では、T 細胞ばかりか、腸間膜リンパ節の樹状細胞の性質が著しく変化し、経口抗原特異的で IL-13 と TNF- $\alpha$  (tumor necrosis factor- $\alpha$ ) を高産生する新規炎症性 Th 細胞を誘導することを見出した。



ビタミンA欠乏下では一般に抗体産生反応が低下することが広く知られていたが、私達は、食物抗原に対しては、著しく強いIgG1抗体産生およびIgE抗体産生がIL-13依存性に誘導されうることも見出した。この反応には上記IL-13高産生性の新規炎症性Th細胞が関与すると考えられる(Mucosal Immunol 7:786-801, 2014 [2013 Nov 13. Epub ahead of print])。現在、この新規Th細胞の性質と分化誘導機序およびアレルギー炎症性疾患における役割について解析を進めている。

このように、ビタミンAレベルによる免疫反応の制御と免疫学的疾患との関係を解析しており、さらに、免疫細胞の腸組織ホーミング受容体発現におけるレチノイン酸作用の分子機序(J Immunol 186:733-744, 2011)、T細胞におけるレチノイン酸分解系の免疫制御における役割(PLoS ONE 6:e16089, 2011)、そして、レチノイン酸受容体(RAR)とヘテロダイマーを形成するRXRのリガンドや環境化学物質によるレチノイン酸シグナルの増幅と攪乱(J Immunol 185:5289-5299, 2010; J Immunol 191:3725-3733, 2013)についても研究を進めている。さらに、樹状細胞におけるRALDH2発現の分子機構を解析し、レチノイン酸の結合したRAR/RXRヘテロダイマーが、RALDH2遺伝子の直近上流に存在する通常の半分のレチノイン酸応答配列(RARE) half-siteに結合することが重要であり、この配列が多く種の共通に存在することを明らかにした(PLoS ONE 9:296512, 2014)。

ビタミンA欠乏下では、デキストラン硫酸ナトリウム(DSS)によって誘導される大腸炎と、さらに azoxymethane との併用で誘導される大腸癌の形成が、著しく促進されることをマウスモデルで証明した。つまり、ビタミンAがこれらの誘導と形成に対する抑制効果を持つことが示唆された(BioMed Res Int Article ID 4874809, 2016)。このビタミンAの効果にも、レチノイン酸が関わっていることが推定される。上述のように、我々は、レチノイン酸産生樹状細胞の分化誘導に、GM-CSFとレチノイン酸自体が重要な役割を果たすことを示したが、さらに成熟誘導刺激としてToll様受容体からの刺激を加えると、レチノイン酸産生能は上昇するものの、同時に炎症性サイトカインを産生することを見出した。しかし、定常状態のマウスの腸間膜リンパ節に存在するレチノイン酸産生樹状細胞は、炎症性サイトカインを産生しない。そこで、我々は、腸に存在する新たな成熟誘導刺激を探索した。その結果、固相化E-cadherinなどによるインテグリンβ1からの刺激によって、炎症性サイトカインを産生せず、高いレチノイン酸産生能を持つ樹状細胞を分化誘導することに成功した。レチノイン酸産生樹状細胞の分化成熟に、腸粘膜上皮に発現するE-cadherinなどが寄与していることが示唆された。In vitroで分化誘導されたこれらの樹状細胞は、効率良く腸帰巣性iTregを誘導すること、さらにDSS誘導大腸炎を有意に緩和することを明らかにした(Sci Rep 6: 37914, 2016)。

#### 外部資金導入実績

- 1) 科学研究費補助金：基盤研究C「低濃度レチノイン酸環境下で機能する新規炎症性ヘルパーT細胞の分化誘導機構の解明」(2020年度-2022年度)代表：大岡 嘉治
- 2) 科学研究費補助金：基盤研究C「レチノイン酸によるIL-13高産生炎症性Th細胞の制御とアレルギー治療法の研究」(2016年度-2020年度)(2年延長)代表：中妻 彩

#### 内部・外部との共同研究

- 1) 中井 雄治教授(弘前大学食料科学研究所) DNAマイクロレイ解析

---

#### 外部誌上発表 (2016年4月~2021年3月)

---

#### [原著論文]

##### 2020

1. Iwashita S, Suzuki T, Kiriya Y, Dohmae N, Ohoka Y, Song SY, Nakashima K. : Overcoming off-targets: assessing Western blot signals for Bcnt/Cfdp1, a tentative component of the chromatin remodeling complex. *Biosci Rep*. 26; 40 (6): BSR20194012 (2020).

##### 2016

1. Yokota-Nakatsuma, A., Ohoka, Y., Takeuchi, H., Song, S.-Y., and Iwata, M.: Beta 1-integrin ligation and TLR ligation enhance GM-CSF-induced ALDH1A2 expression in dendritic cells, but differentially regulate their anti-inflammatory properties. *Sci Rep*. 6:37914 (2016).
2. Okayasu, I., Hana, K., Nemoto, N., Yoshida, T., Saegusa, M., Yokota-Nakatsuma, A., Song, S.-Y., and Iwata, M.: Vitamin A inhibits development of dextran sulfate sodium-induced colitis and colon cancer in a mouse model. *BioMed Res Int*: Article ID 4874809 (2016).

#### [邦文総説・解説等]

##### 2017

1. 中妻 彩. 「レチノイン酸による炎症誘導性樹状細胞と新規IL-13高産生炎症性T細胞の制御」 *Yakugaku Zasshi*. 137(12):1491-1496(2017).

---

#### 口頭発表・学会発表 (2020年4月~2021年3月)

---

#### [学会発表]

1. 中妻彩, 大西秀汰, 大西紅, 寺西愛, 大岡嘉治. 「新規IL-13高3生炎症性ヘルパーT(Th)細胞とTh17/22細胞の比較検討」日本薬学会 第141年会、広島(オンライン開催)、3月27日、2021.

---

#### 特許

---

**その他、新聞報道等**

**[受賞]**

1. 中妻 彩 「日本食品免疫学会第9回学術大会ポスター賞」
2. 中妻 彩 「平成28年度日本薬学会中国四国支部奨励賞」
3. 中妻 彩 「日本食品免疫学会第12回学術大会ポスター賞」

**社会貢献**

中妻 彩 : 香川県薬剤師会研究倫理審査委員会委員





## 衛生薬学講座

### Laboratory of Pharmaceutical Health Sciences

#### 教員

**教授 野地 裕美** (2013年4月より)

着任年月日：2006年4月1日(准教授)

最終学歴：北海道医療大学薬学部卒業。

博士(薬学)、薬剤師、臨床検査技師

前職：北海道医療大学 助手

**准教授 竹内 一**

着任年月日：2013年4月1日(生体防御学講座から異動)

最終学歴：東京大学大学院博士課程修了。博士(医学)

前職：チューリッヒ大学 Postdoctrand

**講師 桐山 賀充** 着任年月日：2005年4月1日

着任年月日：2005年4月1日(助手)

最終学歴：北海道大学大学院薬学研究科博士課程修了。

博士(薬学)、薬剤師

前職：McGill University Health Center 博士研究員

#### 教育の概要 (2020年)

**担当科目(対象学年、講義時期、担当者)：衛生薬学1(2年、後期：野地)・衛生薬学4(3年、後期：野地)・毒性学(4年、前期：野地)**

薬剤師の本来の役割は、医師や他の医療スタッフと共に公衆衛生の向上と増進に寄与することである。衛生薬学は、人間集団全体の生命を病気から守り、その健康レベルの向上を目指している学問領域である。したがって、医薬品や生体成分の反応性、医薬品の作用・動態・疾患との関わりや患者に適した薬物の選択・用法・用量など、疾患の治療に関わる他の領域の薬学教育とは異なって、衛生薬学では病気にならないようにするにはどうしたらよいかについて学ぶ予防薬学とも呼ばれるユニークな薬学領域である。将来、薬学生が薬学出身者として、あるいは薬剤師として社会に巣立った際には、医薬品の専門家として社会に貢献することは当然であるが、それと同時に食、生活習慣、生活環境と健康との関わりを理解した「疾病を予防する健康の専門家」としても貢献しなければならない。

「衛生薬学1」では、社会を対象として病気を予防し、健康を増進する概念や方法、意義について学習すると共に、健康を脅かす感染症や生活習慣病からの予防について理解することを目的としている。したがって、生化学、微生物学、で学習した内容や、日常的に新聞等で報道される保健衛生や公衆衛生に関連した記事とも密接に関連しているので、これらの内容も包含しながら講義をするように努めた。

「衛生薬学4」では、微生物、自然毒、カビ毒などの有害生物による食中毒や食品添加物、農薬、工業製品さらに環境汚

染物質などの化学物質による食品汚染がヒトの健康に及ぼす影響を理解する。さらに、食品の安全を守るための法制度と化学物質の安全性評価とその規制について理解し、食品の安全性と食品衛生に関する知識を習得することを目的としている。

本講義内容は、微生物学、衛生化学の講義内容と密接に関連しており、それらと関連させながら講義を進めて行くと共に、中毒症状やその解毒方法については、薬理学とも関連づけて講義を行った。教科書を中心に講義を行ったが、ノート作成の手助けになるようにイラストを交えたプリントを作成するなどの工夫を行った。

化学物質は体内に吸収された後、組織に分布し、代謝変化を受けて、体外に排泄される。生体内での代謝による化学物質の変化は、医薬品や化学物質の薬理作用や有害作用の発現と密接に関連しており、極めて重要である。

「毒性学」の講義では、これらの点を踏まえて薬毒物の1) 体内動態、2) 代謝に関与する酵素と反応機構、3) 代謝による薬効・毒性の変化、4) 薬物代謝に影響を及ぼす因子、5) 薬物相互作用、さらに6) 化学物質の毒性について、薬剤学、薬理学、生理化学、生化学、有機化学で学習した内容を関連づけながら電子黒板を用い、プリントを利用して解説した。また、講義のはじめにミニテストを実施して学生の理解度を確かめながら講義を進めた。

**担当科目：衛生薬学2(担当者：竹内)**

健康維持に必要な栄養を科学的に理解し、食品中の栄養素の種類と代謝、生理機能を説明できる。食品化学に関する基本的な知識を理解し、食品の品質や機能について説明できる。栄養素の過不足による主な疾病を列挙し説明できる。

教育内容面での取り組み：授業内容を要約したプリントと練習問題を作成し、内容を理解できるようにした。

**担当科目：アカデミックスキル(担当者：桐山、竹内)**

細胞生物学や機能形態学に関する補講を行い、学生の理解度の向上に役立てるようにした。読解力向上のための演習を行い、授業全般に対する理解力の向上に役立てるようにした。

**担当科目(対象学年、講義時期、担当者)：応用生物B(1年前期：桐山)、数学A(1年前期：桐山)、薬学数学(1年前期：桐山)、文理学(1年前期：桐山)、実験スキル(1年前期：後期)**

「文理学」では、初年次教育として、細胞生物学および数学について1年生を対象として勉強会を行い、1年生の学力向上に努めた。「実験スキル」では、薬学における実験の基礎となる実験機器の取り扱い、溶液の作製、デー

タ解析、およびレポート作成法について学習する。実際の生理食塩水の調整を行うことで、モル濃度の計算や溶液の基本的性質を理解できるように、また、種々の実験器具や測定装置の使用法が学べるように工夫した。さらに、データの取り扱い、図表の作成、レポート作成ができるようにした。

**担当科目：衛生・免疫実習(担当者:野地、竹内、桐山)**

「衛生・免疫実習」では、(1) 油脂の変質試験、食品添加物試験の個別試験を実施して、食品の安全性と衛生管理などに関する基本的知識と技能を修得する。(2) 水道水の水質検査、水質汚濁の主な指標の測定、主な大気汚染物質の濃度の測定、室内環境を評価するための代表的な指標の測定を実施して、環境汚染物質に関する基本的知識と技能を修得し、環境の改善に向かって努力する態度を身につけ、人の健康にとってより良い環境の維持と向上に貢献できるようになることを目的としている。

各実習項目では、食の安全や環境汚染に関心を持つように、身近な試料を用いて実験を行った。

学生は、興味を持って実習に取り組み、目的は概ね達成されたものと思われる。

**担当科目 (対象学年、実施時期：担当者)：特別実習 (4年、5年通年：野地、竹内、桐山)**

「特別実習」では、講座に配属した4年生を対象に、本講座の研究課題に関する実習を行った。本実習では、先ず、課題の遂行に必要とされる実験手技を正確に実施できるように繰り返し学習させた。これらの実験手技には、ピペッティング操作、種々の緩衝液の作製、細胞培養用培地の調製、細胞培養、細胞の計数、正立および倒立顕微鏡、蛍光顕微鏡下での細胞の観察、培養細胞からのDNAやmRNAの分離精製、核酸の寒天ゲル電気泳動による分離と精製、細胞の可溶化、細胞内タンパク質のSDS-ポリアクリルアミドゲル電気泳動による分離、Western blotによる細胞内タンパク質の検出、polymerase chain reactionによる発現遺伝子の増幅、real-time polymerase chain reactionによるmRNAの検出、発現ベクターへの特定遺伝子の組込みと大腸菌への導入、増幅された特定遺伝子の培養細胞への導入、化学発光法によるタンパク質の検出、などが含まれる。これらの実験手法の一部分は、すでに3年生までの学生実習で経験しているが、未習得の手法と併せて、個々の学生がより正確に操作することができるように指導した。この実習を通じて、単に実験手法を修得させるだけでなく、講座における日常生活や研究の遂行に必要とされる心構え、実験結果の解釈のしかたと次のステップに進展させるための考え方、目標に到達できた際の達成感など、座学や通常の学生実習では十分に学習したり感じることができない部分についても指導することができ、学生の向上心を醸成する上で役立った。

**担当科目 (対象学年、実施時期：担当者)：卒業研究 (5年、6年、通年：野地、竹内、桐山)**

「卒業研究」では、学生1人1人が本講座における研究課題に個別に取り組んだ。研究を実施するにあたり、担当教員の指導のもと、各人の研究テーマに関する情報を収集して実験を行った。得られた実験結果を整理して取り纏め、研究室で口頭発表させた。6年生は、得られた結果を卒業論文としてまとめ、5月に実施した卒業研究発表会でポスターにて発表した。この卒業研究を通して、学生が課題に関する情報を収集する力、情報をまとめる力、発表する力を向上させるだけでなく、担当教員と実験方法や実験結果に関するディスカッションを通して、薬剤師として必要なコミュニケーション能力や問題解決能力を育成する上で役立ったと考えられた。

**担当科目：健康科学 (野地、竹内)・薬学科・選択**

4年生までの専門科目で修得した衛生薬学の知識を基礎として5年次の実務実習で経験して修得した知識をさらに発展させ、これからの薬剤師に必要とされる疾病の予防と健康の維持に役立つ予防薬学の観点から、講義を行った。さらに、これまでに学習した衛生薬学に関する知識を他の科目と関連づけて総合的に活かすことができるようになるために、基礎的な問題から発展的な問題まで多くの演習問題を解答させた。

**管理・運営に係ること**

- 野地裕美：薬学科長
  - 国試対策委員会委員長
  - 将来計画検討委員会委員
  - 教務委員会委員
  - 第3回オープンキャンパス サイエンスミニキャンプ担当
  - 実務実習訪問指導 (沖縄県)
- 竹内 一：OSCE 委員
  - CBT 対策委員
  - 国試対策委員
  - 動物実験委員
  - 早期体験学習委員
  - 初年次教育委員
  - 入学前教育委員
  - ネットワーク管理委員
  - 中央機器室生物系機器室管理者
  - 実務実習訪問 (香川県)
  - 第3回オープンキャンパス 研究室体験担当
- 桐山賀充：初年次教育委員
  - 入試委員
  - CBT 対策委員
  - CBT 実施委員
  - CBT システム管理責任者 (代理)



- OSCE リカバリー担当 (香川薬学部)  
 第3回オープンキャンパス サイエンスミニキャン  
 プ担当  
 第6回オープンキャンパス 進路相談担当

## 研究の概要

### [研究の達成目標、その意義・背景]

研究テーマ：細胞外 pH の酸性化が関節リウマチの炎症応答を調節するしくみ (野地)

慢性炎症性自己免疫疾患である関節リウマチ (RA) では、関節滑膜で著しい血管新生が認められ、滑膜細胞が異常増殖してパヌスを形成し、関節軟骨が破壊される。滑膜細胞が異常増殖して激しい炎症が生じるRAでは関節滑液のpHが低下することも知られており、この関節腔内の局所的酸性化が炎症を増幅してRAの病態の増悪に寄与している可能性が考えられる。この点を明らかにする目的で、細胞外pHの酸性化がRA滑膜細胞 (RASC)の炎症応答に及ぼす影響を解析している。

### [内部・外部との共同研究]

1. 岡島史和教授 (青森大学薬学部)

研究テーマ：レチノイド X 受容体 (RXR) 刺激による T 細胞分化への影響の解析 (竹内)

レチノイン酸 (RA) 刺激は、リンパ球の分化に影響を与えることが知られている。RA 刺激を受けた T 細胞は、免疫抑制性の制御性 T 細胞への分化が促進される一方、炎症性サイトカインを分泌する Th17 細胞への分化は抑制される。RA 受容体は、RXR とヘテロ二量体を形成するが、RA 刺激の役割が上記のように明らかになりつつあるのに対して、RXR 刺激が与える影響については未だ不明である。そこで我々は RXR 刺激が T 細胞分化に与える影響について解析を行った。

その結果、RXR 刺激は RA 刺激と協調して制御性 T 細胞分化を促進することが明らかになった。また、RXR 刺激は RA 刺激のみならず、他の核内受容体刺激とも協調して Th17 分化を抑制することが判明した。これらの作用は *in vivo* での T 細胞分化誘導系でも機能したことから、RXR 刺激を用いた新たな免疫制御法の開発の基盤的知見となった。

### [内部・外部との共同研究]

1. 大岡嘉治教授、中妻彩講師 (徳島文理大学香川薬学部生体防御学講座) 免疫学的解析  
 2. 影近弘之教授 (東京医科歯科大学生体材料工学研究所) : RAR, RXR アゴニスト、アンタゴニストの提供

研究テーマ：脳内胆汁酸の生理機能に関する研究 (桐山、野地)

中枢神経系において、現在 20 種類の胆汁酸が検出されている。脳内の胆汁酸は、脳内で合成されるだけでなく、トランスポーターや単純拡散を介して血液脳関門 (BBB) を

通過することが報告されている。脳内で検出される主な胆汁酸は CDCA や CA であるが、脳内での胆汁酸の働きの詳細は未だ不明である。また、胆汁酸の受容体である farnesoid X receptor (FXR) と Takeda G-protein receptor 5 (TGR5) も脳内で検出されている。しかし、これらの胆汁酸の受容体の脳内での役割も不明である。また、胆汁酸はアルツハイマー病に対してはアミロイド  $\beta$  ペプチドの蓄積の抑制、パーキンソン病ではミトコンドリアの傷害の抑制、ハンチントン病ではアポトーシスの抑制やミトコンドリアの傷害の抑制、ALS でもアポトーシスを抑制することが報告されており、胆汁酸がこれらの神経変性疾患の抑制に働く可能性が示唆されている。脳内での胆汁酸の生理機能を明らかにすることは、これらの疾患の病態の解明に役立つものと考えており、分子レベルの解析をさらに進めている。

## 外部誌上発表 (2016年4月~2021年3月)

### 2020

1. Kiriya Y. and Nochi H. Induction of PD-L1 by Nitric Oxide via JNK Activation in A172 Glioblastoma Cells. *Biol Pharm Bull.* 43(6):1020-1022, (2020)
2. Iwashita S, Suzuki T, Kiriya Y, Dohmae N, Ohoka Y, Song SY, Nakashima K. Overcoming off-targets: assessing Western blot signals for Bcnt/Cfdp1, a tentative component of the chromatin remodeling complex. *Biosci Rep.* 40 (6): BSR20194012, (2020)

### 2019

1. Kiriya Y. and Nochi H. The Biosynthesis, Signaling, and Neurological Functions of Bile Acids. *Biomolecules.*9:6, (2019)

### 2018

1. Kiriya Y. and Nochi H. Intra- and Intercellular Quality Control Mechanisms of Mitochondria. *Cells.*7:1, (2018)
2. Kiriya Y. and Nochi H. IRole and Cytotoxicity of Amylin and Protection of Pancreatic Islet  $\beta$ -Cells from Amylin Cytotoxicity. *Cells.*7:95, (2018)

### 2016

1. Yokota-Nakatsuma, A, Ohoka, Y., Takeuchi, H., Song, S.-Y. and Iwata, M. Beta1-integrin ligation and TLR ligation enhance GM-CSF-induced ALDH1A2 expression in dendritic cells, but differentially regulate their anti-inflammatory properties. *Sci. Rep.* 6, 37914 (2016).
2. Kiriya Y., Kasai, K., Kino, K. & Nochi, H. Induction of the expression of GABARAPL1 by hydrogen peroxide in C6 glioma cells. *Integr Mol Med* 3, 675-679 (2016).
3. Kiriya Y. & Nochi, H. D-Amino Acids in the Nervous and Endocrine Systems. *Scientifica (Cairo)*, 6494621 (2016).

## 口頭発表・学会発表 (2020年4月~2021年3月)

1. 大休伶奈、桐山賀充、中島遥香、野地裕美  
 「すだち由来スダチチンによる PD-1 および PD-L1 発現への影響」  
 第 59 回日本薬学会・日本薬剤師会・日本病院薬剤師会 中国

四国支部学術大会、島根県、2020年12月7日～2021年1月6日

2. 堀井結以花、桐山賀充、秋山真帆、野地裕美

「脳内胆汁酸ケノデオキシコール酸およびビタミンD受容体によるモノカルボン酸トランスポーターの発現誘導」

第59回日本薬学会・日本薬剤師会・日本病院薬剤師会 中国四国支部学術大会、島根県、2020年12月7日～2021年1月6日

3. 森和輝、野地裕美、竹内一

「加熱変敗食用油による細胞増殖抑制作用の解析」

第59回日本薬学会・日本薬剤師会・日本病院薬剤師会 中国四国支部学術大会、島根県、2020年12月7日～2021年1月6日

4. 太田葵、野地裕美、竹内一

「加熱変敗食用油投与による生体内のリンパ球への影響の解析」

第59回日本薬学会・日本薬剤師会・日本病院薬剤師会 中国四国支部学術大会、島根県、2020年12月7日～2021年1月6日

---

---

**教科書**

---

---

1. 野地裕美「《臨床薬学テキストシリーズ》第7巻『呼吸器／免疫・炎症・アレルギー／骨・関節』、中山書店、2020年9月 分担執筆

---

---

**特許**

---

---

1. 野地裕美、田元浩一ほか（2013）「ロイヤルゼリー抽出物及びヒト骨芽細胞増殖抑制剤」  
特許第5552277号



## 薬理学講座

### Laboratory of Neuropharmacology

#### 教員

**教授 山田麻紀** 着任年月日：2016年4月1日  
 最終学歴：1996年3月東京大学大学院医学研究科博士課程修了。博士（医学）、薬剤師。  
 前職：東京大学アイソトープ総合センター 研究員

#### 教育の概要

担当科目：  
 治療薬学2（山田）  
 治療薬学3（山田）  
 治療薬学演習（山田）  
 総合薬学演習（山田）  
 特別実習（山田）  
 卒業研究（山田）  
 薬理学実習（山田）

本講座では「治療薬学2」（2年次後期）、「治療薬学3」（3年次前期）の2科目の講義を山田が担当した（治療薬学2、3は他講座の先生も分担）。また、オムニバス復習講義+演習「治療薬学演習1」（3年次後期）、において山田は講義演習の他、とりまとめ（試験採点なども含む）を担当した。「治療薬学演習2」～4年次も、部分担当した。

この他、総合薬学演習のうち、生物、薬理、病態生理・薬物治療学の分野を山田が分担した。新カリキュラム対応の分子薬理学も部分担当した。

治療薬学2・3では、薬の効く仕組みを理解することを目的として、生理学、病態生理学、薬物治療を包括して、薬物の作用機序を学修することを目標とした。演習では広い範囲の薬物について、薬理学的性質・適応・副作用・禁忌などを復習することにより、知識の整理を目標とし、講義・演習形式の授業を担当した。

実習は、薬理学実習を分担した。新カリキュラムの導入に伴い、特にアクティブ・ラーニングを重視したプログラムとして一昨年度より新しい実習プランを立ち上げており、今年もそのような内容にできた。

講義では、前期のオンライン授業は授業の映像配信が許可されなかったため、講義で話す内容をほぼ全て文字おこしして配信した。昨年同様に、ビデオなどの視覚的にわかりやすい教材を用いた。さらに、講義教材の内容を講義時の参照用、自宅復習用にわけた。これらの講義スライドや自宅復習用のファイルをGoogle Classroomを用いてウェブ上に載せ、学生がプリントを探さなくてもいつでもアクセスして復習できるようにした。なお、薬理学の教科書で既存のものは一長一短で新しい内容も掲載されていないため、その点もカバーでき、

かつ、分かりやすい講義ノートを自作してきた。

2010年度から5年次半年にわたる長期実務実習が開始され、講座スタッフ（山田）は今年度訪問指導教員としては関与しなかったものの、随時実習中の5年生の指導に当たった。例えば、主要な薬物の一覧表（エクセルで山田が作成したもの）を渡し、実習中に参照したり記録したりするプラットフォームにできることを目指した。ヤクチエ等の有用性の高い薬剤師向けアプリについても指導した。

本年度5・6年次の卒業研究での教育・研究は、昨年度までの助教・久保山の力がなくなったため、系をいちから立て直す必要に迫られ、予想以上に進行が停滞している。

昨年度までの結果を基に二度の学会発表はできた。

論文については、東京大学、早稲田大学、香川大学医学部との共同研究に加えて、薬理学講座の学生さんの協力も結集した形での二報の論文が掲載できた。

SciRepに掲載された論文は2019年6月にCellReportsの査読を受けたあとも有名誌に投稿していたが、久保山の退職決定によりRevise対応実験も不可能になったため、SciRepに12月に投稿、3回のReviseへも実験ができないため難航し、8月にやっと受理となった。

#### 管理・運営に係ること

山田：総務委員長、OSCE実行委員副委員長、就職委員、ハラメント相談員、全学倫理審査委員、全学倫理教育委員

#### 研究の概要

##### 【研究目的】

記憶という現象を理解すること。その理解を通じて、神経精神疾患などでの記憶障害の克服に貢献すること。

##### 【背景】

脳内に存在する多数の経細胞は、情報を伝達することで、感覚処理・認識・記憶・判断などの多様な脳の高次機能を発揮しています。その情報伝達の場となっているのが、神経細胞同士の接合部位であるシナプスです。中枢神経系の興奮性シナプスの場合は、情報の発信側である軸索末端に対して受け手側は1ミクロン（マイクロメートル、千分の1ミリ）程度の膨らみである樹状突起スパインを形成しています。

シナプス伝達には長期可塑性という現象が知られています。シナプスの伝達強度がある一定の強い（弱い）刺激によって、それ以後は前より効率よく（低く）伝達するようになるLTP(LTD)という現象です。これが、記憶などの脳の機能の基盤となると考えられています。

この、シナプス長期可塑性については、脳の組織を取り出した実験で主に研究されており、実際の脳内で、いつ、どこに、どのように起こるのか詳しいことは分かっていません。生体

内でのシナプスの、刺激に伴う変化を理解することは、記憶現象の本質を理解することにつながります。また、記憶能の破綻をとまなう神経精神疾患の理解につながり、記憶障害の克服に役立つ可能性があります。

### 【方法】

薬理学講座では、記憶を保持する神経細胞を長期的に、簡便に観察する手法の開発を行っています。これまでに山田のグループでは、Arc という遺伝子を発現する神経細胞の一部に記憶保持細胞に期待される性質がみられること(参考文献1) また、LTP(記憶の基盤とされるシナプスの長期的伝達増強)を起こした部位のスパイン(シナプス後部=受け手側、の膨らみ)で CapZ というタンパク質が発現増加すること(参考文献2)を見出してきました。これらの知見に基づいて、緑色蛍光タンパク質 EGFP を応用した遺伝子組み換えマウス(Arc::EGFP-CapZ TG)を作製し活動した細胞/LTP を起こしたスパインを可視化することを目指してきました。

作製した TG マウス(Arc-induced CapZ linked EGFP Transgenic mouse、略称 AiCE-TG マウス)の脳内には、学習後に緑色蛍光強度が高い少数の神経細胞/スパインがあるため、それが記憶をになう細胞/スパインである可能性を考えています。なお、AiCE-TG では、作成時に工夫し 100 コピーという通常では得にくいほど多くの外来遺伝子が保持された状態で明瞭な蛍光が得られ、かつ、数年以上安定に保持されています。CapZ は F-actin Capping Protein の一種の構造たんぱく質で脳にも多量に存在し、外来遺伝子由来の CapZ 融合タンパク質の量は 10%以下にとどめられています。

今年度は、記憶に関連する刺激の入力を AiCE-TG の脳内の片側に強く入力させ左右を比べるという手法を開発し、刺激後 15-20 分という短時間のうちに脳内で変化し保持される EGFP-CapZ のスパイン局在の変化をとらえることに成功しました。脳内での EGFP-CapZ の増加はスパインのうちの数%以内というごくわずかな範囲にとどまっている可能性が高く、今まで、世界の誰もが求めて捉えられなかった記憶の第一歩を検出できた可能性が高いと考えています(参照: Scientific Report 2020)。

なお、本研究を中心的に遂行していた久保山助教は 2019 年 3 月の時点で薬理学講座での論文 1 報が出ていなかったため(基準を知らず出せなかったため)、2020 年度以降の任期は更新されませんでした。このため、本研究の遂行は困難な事態となったままです。

### 【参考文献】東大講師時代の山田グループからの論文

1. タスク依存に Arc 陽性細胞のごく一部のスパインで、LTP が発生したと考えられる膨大化が観察されたことを報告した論文 (*Cereb Cortex* 19: 2572-2578, 2009)
2. CapZ という分子が LTP を起こしたスパインで増加することを見出した論文 (*Genes Cells* 15: 737-747, 2010)

### 【外部機関との共同研究】

- (Scientific Report 共同研究) 東京大学医学系研究科・生理学教室 狩野方伸教授 / 橋本谷祐輝助教  
早稲田大学理工学術院・先進理工学研究科・生命医科学専攻 井上貴文教授
- (Neuropsychopharmacology Reports 共同研究) 香川大学・医学系研究科・分子神経生物学 山本融教授

---

### 外部誌上発表 (2016 年 4 月~2021 年 3 月)

---

#### [Preprint]

2019

- Kuboyama K**, Inoue T, Hashimotodani Y, **Itoh T**, **Suzuki T**, **Tetsuzawa A**, **Kinoshita R**, **Ohtsuka Y**, **Takara R**, **Miyazawa T**, **Gusain P**, Kano M, **Yamada MK**. (2019) Fluorescent Marker of a Plasticity-Related Change in Dendritic Spines. Sneak Peek (Preprint) doi: 10.2139/ssrn.3419080

#### [Original papers]

2020

1. **Kuboyama K**, Inoue T, Hashimotodani Y, **Itoh T**, **Suzuki T**, **Tetsuzawa A**, **Ohtsuka Y**, **Kinoshita R**, **Takara R**, **Miyazawa T**, **Gusain P**, Kano M, **Yamada MK** (2020) Traceable stimulus-dependent rapid molecular changes in dendritic spines in the brain *Scientific Reports*, **10** 15266  
DOI :10.1038/s41598-020-72248-4  
<https://www.nature.com/articles/s41598-020-72248-4>
2. **Kuboyama, K.**, **Shirakawa, Y.**, **Kawada, K.**, **Fujii, N.**, **Ojima, D.**, **Kisimoto, Y.**, **Yamamoto, T.**, and **Yamada, M. K.** (2020) Visually cued fear conditioning test for memory impairment related to cortical function *Neuropsychopharmacology Reports* 40(4):371-375  
<https://onlinelibrary.wiley.com/doi/full/10.1002/npr2.12146>

2019

3. Tanga N, **Kuboyama K**, Kishimoto A, Kiyonari H, Shiraishi A, Suzuki R, Watanabe T, Fujikawa A, Noda M. (2019) The PTN-PTPRZ signal activates the AFAP1L2-dependent PI3K-AKT pathway for oligodendrocyte differentiation: Targeted inactivation of PTPRZ activity in mice. *Glia* 67: 967-984

2018

4. Suzuki R, Fujikawa A, Komatsu Y, **Kuboyama K**, Tanga N, Noda M. (2018) Enhanced extinction of aversive memories in mice lacking SPARC-related protein containing immunoglobulin domains 1 (SPIG1/FSTL4). *Neurobiol learning mem* 152: 61-70.

2017

5. **Kuboyama K**, Tanga N, Suzuki R, Fujikawa A, Noda M. (2017) Protamine neutralizes chondroitin sulfate proteoglycan-mediated inhibition of oligodendrocyte differentiation. *PLoS one* 12: e0189164.
6. Fujikawa A, Chow JPH, Matsumoto M, Suzuki R, **Kuboyama K**, Yamamoto N, Noda M. (2017) Identification of novel splicing variants of protein tyrosine phosphatase receptor type Z. *J biochem* 162: 381-390.
7. Fujikawa A, Sugawara H, Tanaka T, Matsumoto M, **Kuboyama K**, Suzuki R, Tanga N, Ogata A, Masumura M, Noda M.



- (2017) Targeting PTPRZ inhibits stem cell-like properties and tumorigenicity in glioblastoma cells. *Sci rep* 7: 5609.
8. **Kohno S**, Ebihara K, Kobayashi M. (2017) Suppressive regulation of lateral inhibition between medium spiny neurons via dopamine D<sub>1</sub> receptors in the rat nucleus accumbens shell. *Neurosci Lett* 636: 58-63.
9. Nakahata Y, Eto K., Murakoshi H, Watanabe M, **Kuriu T**, Hirata H, Moorhouse AJ, Ishibashi H, Nabekura J. (2017) Activation-dependent rapid postsynaptic clustering of glycine receptors in mature spinal cord neurons. *eNeuro* 4: e0194-16.2017.

Phencyclidine-induced impairment of spine molecular plasticity shown in the AiCE-Tg mice  
北米神経科学大会 SfN Connectome  
Jan 13, 2021 On line presentation P285.01

## 2016

10. **Kuboyama K**, Fujikawa A, Suzuki R, Tanga N, Noda M. (2016) Role of Chondroitin Sulfate (CS) Modification in the Regulation of Protein-tyrosine Phosphatase Receptor Type Z (PTPRZ) Activity. PLEIOTROPHIN-PTPRZ-A SIGNALING IS INVOLVED IN OLIGODENDROCYTE DIFFERENTIATION. *J Biol Chem* 291: 18117-18128.
11. Fujikawa A, Nagahira A, Sugawara H, Ishii K, Imajo S, Matsumoto M, **Kuboyama K**, Suzuki R, Tanga N, Noda M, Uchiyama S, Tomoo T, Ogata A, Masumura M, Noda M. (2016) Small-molecule inhibition of PTPRZ reduces tumor growth in a rat model of glioblastoma. *Sci rep* 6: 20473.
12. Ono Y, Saitow F, **Konishi S**. (2016) Differential modulation of GABA<sub>A</sub> receptors underlies postsynaptic depolarization- and purinoceptor-mediated enhancement of cerebellar inhibitory transmission: a nonstationary fluctuation analysis study. *PLoS one* 11: e0150636.

## [英文総説]

1. **Yamada MK**. (2016) Angiogenesis in refractory depression: A possible phenotypic target to avoid the blood brain barrier. *Drug discov ther* 10: 79-81.
2. **Yamada MK**. (2016) A link between vascular damage and cognitive deficits after whole-brain radiation therapy for cancer: A clue to other types of dementia? *Drug discov ther* 10: 74-78.

## [著書・訳書]

1. **山田麻紀** 「血管と血のめぐりでの認知症治療の可能性」  
香川県薬剤師会 会誌「かがやく」学術の頁  
かがやく 162号 p39-41 平成28年7月1日号

## [その他]

Press Release

徳島文理大学香川薬学部の研究グループが脳の可塑的変化の検出方法を開発 -- 記憶を目で観る新手法、記憶障害への創薬応用にも期待 2020.10.13

サンデー毎日 12.6号にも紹介記事掲載

News Link ; ZD Net Japan, Biglobe, News.Toremaga.com

---

## 口頭発表・学会発表 (2020年4月~2021年3月)

---

1. **多和田真聖、久保山和哉、吉岡美紅、藤島利江、山田麻紀**  
“精神神経作用を持つ薬物投与でのマウスの脳の可塑的変化” 第59回日本薬学会・日本薬剤師会・日本病院薬剤師会中国四国支部学術大会, 2020年12月 (Web上開催)
2. **Maki K. Yamada, Masakiyo Tawata, Miku Yoshioka, Toshie Fujishima, Kazuya Kuboyama**







## 病態生理学講座

### Laboratory of Pathological Physiology

#### 教員

**教授 得丸博史** 着任年月日：2004年4月1日  
 最終学歴：九州大学大学院薬学研究科博士課程修了。博士(薬学), 薬剤師。  
 前職：東京大学助手, 米国デューク大学メディカルセンター Research Assistant Professor, 徳島文理大学香川薬学部准教授(薬理学)

**講師 定本久世** 着任年月日：2014年4月1日  
 最終学歴：北海道大学大学院生物科学専攻博士課程修了。博士(理学)。  
 前職：徳島文理大学助教

**助教 小林 卓** 着任年月日：2005年6月1日  
 最終学歴：北海道大学大学院生物科学専攻博士課程単位取得退学。博士(理学・医学)  
 前職：札幌医科大学助手

#### 教育の概要

##### 担当科目：基礎薬理学 (得丸博史)

- 1) 教育達成目標とその妥当性：薬剤師として医薬品の適正な使用を指導できるようになるために、薬物・生理活性物質に関する基本的知識、生体との相互作用に関する基本事項を修得し(知識)、その知識をわかりやすく説明できるようになる。具体的には、自律神経系・体性神経系の構造・機能を理解し、そこに作用する薬物の種類、特性、作用点、作用機序についてわかりやすく説明できるようになる。
- 2) 目標達成状況：ほぼ達成
- 3) 教育内容面での取り組みと改善方策：基礎薬理学は薬理学の基本を学ぶ重要な科目であるため、機能形態学の知識を織り交ぜながら丁寧にわかりやすくを心掛けた。教科書を含めた複数の教材から内容をわかり易くまとめたプリントを作成・配布し内容理解の徹底をはかった。
- 4) 教えるために使った時間：15回×90分

##### 担当科目：治療薬学1 (得丸博史)

- 1) 教育達成目標とその妥当性：薬剤師として医薬品の適正な使用を指導できるようになるために、薬物・生理活性物質に関する基本的知識、生体との相互作用に関する基本事項を修得し(知識)、その知識をわかりやすく説明できるようになる(技能)。具体的には、中枢神経系および消化器系(一部)の形態・機能を理解した上で、中枢神経系作用薬(全身麻酔薬、睡眠薬、鎮痛薬)、精神神経疾患(不安・うつ病・統合

失調症・てんかん・パーキンソン病・アルツハイマー病など)とその治療薬について説明できるようになる。

- 2) 目標達成状況：ほぼ達成
- 3) 教育内容面での取り組みと改善方策：基礎薬理学で学んだ内容を復習しながら、薬理学の基本・基礎を重点的に再教育した。教科書を含めた複数の教材から内容をわかり易くまとめたプリントを作成・配布し内容理解の徹底をはかった。
- 4) 教えるために使った時間：15回×90分

##### 担当科目：治療薬学2 (得丸博史、久保山和哉、山田麻紀)

- 1) 教育達成目標とその妥当性：①知識(理解) 消化器、呼吸器、腎泌尿器、の正常の構造、生理的機能を、またこれらの器官の代表疾患について、どのような変化が様々な症状や病理像につながるかを理解する。②態度(関心・意欲) 薬物治療の対象となる疾病の病態生理に関心を持つ。③技能(表現) 患者の病態を、適宜、図やグラフを用いて分かりやすく説明できる。④思考・判断 与えられた患者のデータに基づいて、その背景にある病態を読み取り、妥当な処方を組み立て、根拠に基づいた薬物治療を実践できる。
- 2) 目標達成状況：ほぼ達成
- 3) 教育内容面での取り組みと改善方策：教科書を含めた複数の教材から内容をわかり易くまとめたプリントを作成・配布し内容理解の徹底をはかった。
- 4) 教えるために使った時間：5回×90分

##### 担当科目：治療薬学演習1 (得丸博史、薬理系教員他)

- 1) 教育達成目標とその妥当性：基礎薬理学および治療薬学1の内容理解をさらに徹底するために、演習及びその解説を行った。さらに、薬剤師国家試験を見据え、演習問題を解かせて、薬理学分野の試験問題に慣れると同時に、問題考え方(取り組み方)を取得することも目的とする。
- 2) 目標達成状況：ほぼ達成
- 3) 教育内容面での取り組みと改善方策：内容が幅広いため、まず、当方で絞り込んだ問題を解答させ、学生の理解度のチェックに努めた。その上で、問題の解説を行いつつ、理解が十分でない範囲、深く掘り下げた授業が必要であると思われる範囲をピックアップし、より丁寧に、詳細に解説した。授業には、板書、プリント等を目的に応じて使い分けた。
- 4) 教えるために使った時間：3回×90分

##### 担当科目：最新病理学 (得丸博史)

- 1) 教育達成目標とその妥当性：医療の高度化に伴って必要性が高まってきているチーム医療において、薬剤師としての専門性を発揮するために必要な病態を理解できる。具体的には、薬剤師が担う的確な薬物治療の基礎としての個々の疾患の病態を深く正確に理解でき、医師との情報交換に際して相手の

言うことを理解でき、患者への服薬指導に際して治療の必要性を説明するための病態を理解できる。(知識・理解・関心)

2) 目標達成状況：ほぼ達成

3) 教育内容面での取り組みと改善方策：薬理及び薬淵治療と関連づけた、人体の構造と機能について解説した。教科書を含めた複数の教材から内容をわかり易くまとめたプリントを作成・配布し内容理解の徹底をはかった。

4) 教えるために使った時間：6回 x 90分

**担当科目：国試対策講義および対策（得丸博史、定本久世、小林卓）**

1) 教育達成目標とその妥当性：国家試験合格に必要な勉強法を身につけ、合格に必要な知識を身につける。薬剤師国家試験に必要な薬理学・病態生理学・薬物治療薬および機能形態学の知識を習得し、国家試験に合格できるようになる。

2) 目標達成状況：ほぼ達成

3) 教育内容面での取り組みと改善方策：講座の学生には学修成果を振り返ることが出来るようポートフォリオを作成し、記録するよう指導した。また、勉強法についても資料を使い指導した。教科書を含めた複数の教材から内容をわかり易くまとめたプリントを作成・配布し内容理解の徹底をはかった。また、多くの演習問題を作成し、知識の定着を図った。

4) 教えるために使った時間：90分 x 6回

**担当科目：病態生理学実習（得丸博史、定本久世、小林卓）**

1) 教育達成目標とその妥当性：モルモット回腸を使用した薬理学実験を通して、薬理学の講義で得られた知識を確実に身につける。本実習は臨床の場における患者への適正な薬物使用の基盤となる。

2) 目標達成状況：ほぼ達成

3) 教育内容面での取り組みと改善方策：薬理学で得た知識と実習内容とのつながりを丁寧に説明して理解を得た。薬液の濃度計算、濃度-反応曲線の描き方、pD2値・pA2値の求め方について実際に手を動かして学習できた。生の回腸標本を扱う時間をたっぷりとることで、生理学的実験の難しさと面白さを伝えられるように試みた。学生にレポートを作成させることで最終的な評価を行い、上記のような理解度や満足度について確認した。もちろんレポートの書き方についても指導を行った。

4) 教えるために使った時間：8回（病態生理学講座担当分）x 270分

**担当科目：特別実習（得丸博史、定本久世、小林卓）**

1) 教育達成目標とその妥当性：学生には卒業実習が課せられる。卒業実習は、未知の分野を開拓し、新規の知識を見出そうとするものであり、講義や薬学実習で習得した知識と技能では、講座配属後に各自の研究テーマを遂行するには十分でない。特別実習では、講座配属後の卒業実習にスムーズに移

行できるように薬理学講座卒業実習に必要とされる知識及び基礎技術を習得することを目的とする。特に、教員が一方的に知識や技術を与えるのではなく、『学生が主体的に考え、主体的に動く』ように、内容を工夫する。本実習終了後には、卒業実習に直ちに取り組むことができる。

2) 目標達成状況：ほぼ達成

3) 教育内容面での取り組みと改善方策：『学生が自分で考え、行動する』ことに重きを置いた特別実習用テキストを作成した。テキストは4つの課題から成り、これらの課題について学生は、1) 知識を取得し、2) 実験方法を考え、3) 実験を行い、4) 結果から考察し、5) レポートを作成し提出する、という5つの作業を行う。4つの課題については、卒業実習において必要な知識・技術をより多く学べるように選定した。また、予め結果が分かっている課題ではなく、教員側も実験を行わない限り結果が分からない課題を作成した。課題の実行に関しては、教育的配慮から、指示する部分、指導する部分、自分で調べる部分に分けて、学生個々に対応する。提出されたレポートについては、教員が一度見た後に学生と議論し、文章の書き方や理論の展開法などを詳細に学生に指導する。4つの課題をこなすにつれ、学生の実験手技やレポートはより洗練されたものとなる。

4) 教えるために使った時間：30回x5時間

**担当科目：卒業実習（得丸博史、定本久世、小林卓）**

1) 教育達成目標とその妥当性：病態生理学講座の各人の研究テーマに従って、専門的な実験研究あるいは調査研究を行い、薬の薬理作用の多面性を確かめ、薬物治療における適正な医薬品使用の判断に寄与する。物事について多方面から考え、結論を出す能力及び仕事に対する責任感を身につけることができ、これらは医療チームの一員として、また、信頼される薬剤師として重要な素養となる。

2) 目標達成状況：ほぼ達成

3) 教育内容面での取り組みと改善方策：各人の知識・技術のレベルアップのために、英文文献の紹介を定期的に行った。実験の準備を含めた、実験計画を各個人に作成させ、そのスケジュールどおりに進捗しているかについて進捗状況報告会を定期的に関き、助言・指導を行った。学会や論文における発表を視野にいれ、研究を継続している。各人の進捗状況が完全に把握できていない部分があり、今後、各人との連絡を密にする必要があると感じている。

4) 教えるために使った時間：90回x5時間

**担当科目：応用生物学B（定本久世、小林卓）**

1) 教育達成目標とその妥当性：薬学の基礎となる基本的な生物学の知識を習得する。

2) 目標達成状況：ほぼ達成

3) 教育内容面での取り組みと改善方策：講義ではパワーポイントや動画を用いた解説により様々な生物学的メカニズムの



流れを説明し、毎回講義後に確認テストを行った。また、宿題を課すことにより、積極的に教科書を読んで理解することを促した。さらに、中間試験を実施し、その結果から学生ごとの対応を検討した上で、本試験および、補講、再試験をくり返し実施し知識の定着を図った。

4) 教えるために使った時間：15回×90分

#### 担当科目：細胞生物学（定本久世）

1) 教育達成目標とその妥当性：薬学生物の基礎となる細胞内分子の名称、機能などの知識を修得する。

2) 目的達成状況：ほぼ達成

3) 教育内容面での取り組みと改善方策：講義では教科書とパワーポイントによる自作資料を用い、毎回講義後に確認テストを行い、課題を課した。また、中間試験を実施して、知識の定着を図った。

4) 教えるために使った時間：15回（定本担当分）×90分

#### 担当科目：アカデミックスキル（定本久世）

1) 教育達成目標とその妥当性：1年生前期生物学の講義（応用生物学B）の内容を中心に演習を行う。

2) 目的達成状況：ほぼ達成

3) 教育内容面での取り組みと改善方策：応用生物学Bの講義資料、教科書、ニュースで扱われた生物学に関わる題材を元にした演習問題（選択問題、記述問題を含む）を課し、毎回講義内に全ての課題に対する解説を行った。

4) 教えるために使った時間：2回（定本担当分）×90分

#### 担当科目：基礎薬学演習1（定本久世）

1) 教育達成目標とその妥当性：1年生後期生物学の講義（細胞生物学）の内容を中心に演習を行う。

2) 目的達成状況：ほぼ達成

3) 教育内容面での取り組みと改善方策：細胞生物学の講義資料、教科書、ニュースで扱われた生物学に関わる題材を元にした演習問題（選択問題、記述問題を含む）を課し、毎回講義内に全ての課題に対する解説を行った。

4) 教えるために使った時間：2回（定本担当分）×90分

#### 担当科目：生体機能演習（定本久世）

1) 教育達成目標とその妥当性：3年生科目として1年生生物学の講義（応用生物学B、細胞生物学）の内容を中心に演習を行う。

2) 目的達成状況：ほぼ達成

3) 教育内容面での取り組みと改善方策：1年生講義時の資料を元にした演習問題（選択問題、記述問題を含む）を課し、講義内に全ての演習問題に対する解説を行った。

4) 教えるために使った時間：2回（定本担当分）×90分

#### 担当科目：エクスペリメントスキル（白畑孝明、小林卓、窪

#### 田剛志、桐山賀充）

1) 教育達成目標とその妥当性：モル濃度の計算や溶液の基本的性質を理解し、実際の生理食塩水の調製を行うことで、種々の実験器具・測定装置の用途や使用法を学ぶ。さらに、一連の実験を通して、数値データの取り扱い、客観的な図表の作成、論理的な文章（レポート）作成ができるようになる。

2) 目的達成状況：ほぼ達成

3) 教育内容面での取り組みと改善方策：種々の実験器具・測定装置の使用法を指導し、生理食塩水の調製ができるようになった。数値データの取り扱い、客観的な図表の作成、論理的な文章（レポート）作成の指導を行い、これらを習得できた。

4) 教えるために使った時間：5回×270分

#### 担当科目：課題実習（小林卓）

1) 教育達成目標とその妥当性：香川大学医学部3年次の学生を受け入れて研究現場を一ヶ月間体験させることを目的とする（2021年1月27日～3月3日）。本講座では実験動物を用いた生理学的・薬理学的実験から、モル濃度の計算や生理的食塩水などの溶液の基本的性質を理解し、生きた標本から生理学的な応答を記録しながら種々の実験器具・測定装置の用途や使用法を学ぶ。さらに、一連の実験を通して、数値データの取り扱い、客観的な図表の作成、論理的な文章（レポート）作成ができるようになる。

2) 目的達成状況：ほぼ達成

3) 教育内容面での取り組みと改善方策：種々の実験器具・測定装置の使用法、細胞培養法などを指導し、生理食塩水中の生きた標本から生体シグナルを記録できるようになった（ニューロンの培養とCa<sup>2+</sup>イメージング）。数値データの取り扱いと解析、客観的な図表の作成、論理的な文章（レポート）作成の指導を行い、これらを習得できた。ここ5年間は毎年医学部学生を受け入れているので、より効率的に目標が達成できるように、さらには本学の学生の指導にもプラスになるように改善を重ねている。

4) 教えるために使った時間：1ヶ月間（28日間×360分）

#### 管理・運営に係ること

得丸：広報委員会委員長，学生委員会委員長，薬剤師国家試験対策委員会委員，香川薬学部 OSCE 評価員，国家試験問題検討委員会(薬理科目担当教員，病態・薬物治療科目担当教員)

定本：OSCE 委員会委員，薬剤師国家試験対策委員会委員，薬剤師国家試験対策卒業延期生担当委員，CBT 委員会委員

小林：薬剤師国家試験対策委員会委員（卒業試験および模擬試験の実施など）

その他、新聞報道等
-----------

小林：日本生理学会「生理学認定エデュケーター」

研究の概要
-------

1) 神経伝達物質放出を制御するコンプレキシンの機能（得丸、定本）

研究背景

神経終末からの神経伝達物質放出はニューロンにとって重要な情報出力の手段であり、その分子機構の解明は神経科学分野における重要課題の一つである。ニューロンの興奮が神経終末に到達すると、開口した電位感受性  $Ca^{2+}$  チャンネルを通じて  $Ca^{2+}$  が神経終末内に流入する。流入した  $Ca^{2+}$  はシナプス小胞とシナプス前膜の迅速な融合を誘導し、小胞内の神経伝達物質を細胞外に開口放出（エキソサイトーシス）させる。このように、シナプス小胞の開口放出は、①  $Ca^{2+}$  による厳密な制御と②驚異的な速さ（～1 ミリ秒）を特徴とする（Tokumaru, Kasai et al., *Physiol. Rev.* 2012）。シナプス小胞膜上の VAMP2（シナプトブレヴィン）、シナプス前膜のシンタキシン（Syx）、及び SNAP25 は互いに結合して 4 本の  $\alpha$  ヘリックスからなるコイルドコイルを形成する。その形成は各蛋白質の N 末端から C 末端（膜貫通領域）側に向けてファスナーが閉まるように起こり、その結果、小胞膜とシナプス前膜は融合可能な距離まで接近する。この SNAP 受容体蛋白質（SNARE 蛋白質）複合体は膜融合の分子装置であると考えられている。コンプレキシン/シナフィン（以下 Cpx）は、形成途中の SNARE 蛋白質複合体に結合して  $Ca^{2+}$  が流入するまで融合を阻止するクランプとして働く。流入した  $Ca^{2+}$  はシナプトタグミン 1（Syt1）の C2 ドメインによって受容され、Cpx によるクランプを競合的に取り除いて開口放出を誘導する。しかし最近、Cpx をクランプとする考えは以下の知見から疑問視されている。①クランプとされる Cpx の遺伝子をノックアウトしても、伝達物質放出の亢進はみられず、逆に強く抑制される（Reim et al., *Cell* 2001）。②海馬ニューロンに Cpx を過剰発現させても伝達物質放出の阻害はみられない（Xue et al., *Nat Str Mol Biol* 2007）。③Cpx は SNARE 依存性の人工脂質膜（リポソーム）の融合を促進するという報告がある（Malsam et al., *PNAS* 2009）。④Cpx が SNARE 蛋白質複合体から解離するには 3 秒もかかり、 $Ca^{2+}$  流入後～1 ミリ秒という短い時間では Syt1 と Cpx の置き換えは起こり得ない（Pabst et al., *J Biol Chem* 2002）。⑤抗 Syt1 抗体あるいは抗 Cpx 抗体を用いたラット脳の免疫沈降では Syt1/Cpx/SNARE 蛋白質複合体が共沈する（Tokumaru et al., *Brain Cell Biol.* 2008）。我々は、 $Ca^{2+}$  非存在下では結合親和性の弱い Syt1 と SNARE 蛋白質複合体の結合を、Cpx が促進すること、さらに Cpx がシナプス伝達を速める役割があることを突き止めた。Cpx は膜融合を抑制するクランプではなく、膜融合装置の一部である可能性が高い。

研究の目的

シナプス前終末に  $Ca^{2+}$  が流入してからシナプス後膜の応答までの時間は極めて短い（0.06～0.2 ミリ秒）ので、高速な伝達物質放出を可能にするには Syt1 と SNARE 蛋白質複合体の結合は  $Ca^{2+}$  流入の前である可能性が高い。我々はこれまで得られた以下の結果①～⑤から、仮説「Cpx は、SNARE 蛋白質複合体と Syt1 をつなぐアダプター分子として働く」を提唱する。本研究の目的はこの仮説を検証することである。

本研究の意義

本研究は開口放出の新しいモデルを提唱している。Cpx は Syt1 と SNARE 蛋白質複合体を結びつける重要な分子であり、融合の最終段階まではたらく可能性が高い。我々は、Syt1/Cpx/SNARE 蛋白質複合体の形成が  $Ca^{2+}$  に依存していないことを発見した。このことは、Syt1/Cpx/SNARE 蛋白質複合体が  $Ca^{2+}$  流入前に形成される可能性を示している。

Cpx クランプ説は、*in vitro* 実験に基づいて提唱されたものである。この際に使われたリコンビナント Syt1 は N 末端膜貫通領域を欠失したものである。申請者は N 末端部を欠失した Syt1 が Cpx と結合しないことも確認している。SNARE 蛋白質を再構成した人工脂質膜（リポソーム）の融合に対する Syt1 の効果は、膜貫通領域の有無で全く異なることが示唆されている（Bhalla et al. *Nat Struct Mol Biol.* 2006, Mahal et al. *J Cell Biol.* 2002）。本研究では、全長 Syt1 を実験に用いるので、これまでとは全く異なる結果が得られる可能性がある。

成果の概要と自己評価

本研究室による、これまでの研究成果を以下に示す。

①Cpx と SNARE 蛋白質複合体の結合は開口放出に必須である。ヤリイカ巨大神経終末に注入した結合部位ペプチド（SBD ペプチド；アミノ酸 46-74）はシナプス伝達を完全に阻害した（Tokumaru, et al., *Cell* 2001）。

②Cpx と SNARE 蛋白質複合体の結合は開口放出直前（0.18 ミリ秒以内）である。ケージド SBD ペプチド（光感受性ケージドアミノ酸を組み込んだ SBD ペプチド）を開発し、光照射によって瞬時に活性化されたペプチドによってシナプス伝達が阻害される時間から Cpx と SNARE 蛋白質複合体の結合時期を見積もった。

③Cpx は開口放出を速める。ケージド SBD ペプチドの活性化によって Cpx 結合を瞬時に阻害すると、シナプス電流の立ち上がりが遅くなった。

④Syt1 が Cpx の C 末端部と直接結合する（Tokumaru et al., 2008）。

⑤Syt1/Cpx/SNARE 蛋白質複合体が存在する（Tokumaru et al., 2008）。Syt1 と Cpx の結合は SNARE 蛋白質複合体によって促進される。

⑥Syt1 の Cpx 結合部位は、N 末端膜貫通領域である。



#### 今後の課題

今後、SNAREs/Syt1 を再構成した人工脂質リボソームの融合実験により、Cpx の機能の詳細を明らかにしていく必要がある。

#### 2) 海馬抑制性シナプス形成にともなう VAMP2 および VAMP4 の細胞内分布と機能解析 (定本久世)

##### 研究背景・目的

神経活動に対応したシナプス前部からの神経伝達物質の放出には、SNARE と呼ばれるタンパク質群が関与する。SNARE タンパク質の一つである vesicle associated membrane protein 2 (VAMP2, synaptobrevin-2) はシナプス小胞の膜上に存在し、シナプス後膜への小胞融合に関与している。最近になって、VAMP ファミリータンパク質である VAMP4 が抑制性ニューロンに存在し、VAMP2 と異なる機構で GABA 放出に関与していることが報告された (Raingo et al., 2012)。

##### 成果の概要と自己評価

本研究では、海馬抑制性ニューロンのシナプス形成時における VAMP2 および VAMP4 の細胞内動態を解析した。抑制性シナプス前部の形態は vesicular GABA transporter (VGAT)-Venus トランスジェニック・マウスの海馬神経細胞培養系を用いることで可視化した。これに異なる蛍光タンパク質で標識した各分子を発現させ、それぞれの細胞内局在をコンフォーカル顕微鏡により観察した。その結果、抑制性シナプス形成過程の初期には VAMP2 がシナプス前部 (varicosity) に集積し、VAMP2 の前シナプス内での分布はシナプス後部の足場タンパク質 (gephyrin) の近傍にあった。これに対し、VAMP4 はシナプス形成過程の後期にシナプス前部に局在し、前シナプス内分布も VAMP2 と異なっていた。

さらに、抑制性シナプス伝達における VAMP2 と VAMP4 の機能を、電気生理学的手法を用いて解析した。各分子を培養海馬神経細胞に過剰発現させ、単一錐体細胞における抑制性シナプス後電流を記録した。その結果、抑制性入力繊維を繰り返し電気刺激すると抑制性シナプス後電流の振幅が小さくなり、培養日数が進むにつれて繰り返し刺激後の振幅が保たれる傾向が見られた。また、シナプス形成後期にあたる時期に VAMP4 を過剰発現させて同様の実験を行った場合、VAMP2 過剰発現系に比べて有意にこの振幅は大きかった。

#### 今後の課題

今後は発生段階に伴う VAMP4 の遺伝子発現解析と進める。VAMP4 が関わる GABA 放出機構と、シナプス形成にともなう生理機能の変化との関連について解析を進める。

外部資金導入実績：日本学術振興会・科学研究費補助金。

#### 3) 海馬シナプス形成にともなう GKAP/SAPAP1 の細胞内分布と機能解析 (定本久世)

##### 研究背景・目的

学習・記憶形成に関わる神経メカニズムにおいては、多くのシナプス機能分子が働く。シナプス後部の足場タンパク質 GKAP/SAPAP1 は NMDA 受容体サブユニット構成に関与する。同分子は複数アイソフォームを有し、これらの機能が異なることが予想されているが、シナプス調節における正確な機能は明らかでない。申請者らは発現量解析、細胞内分子局在観察、電気生理学実験など多方向からのアプローチにより、GKAP/SAPAP1 アイソフォームの機能解析を行う。

##### 成果の概要と自己評価

GKAP/SAPAP1 CDS 中心部のエクソンは特徴的な複数プロリンをコードしており、プロリン配列の結合タンパクを介して、GKAP/SAPAP1 が間接的に細胞骨格アクチンに関与する可能性が示されている (酵母ツーハイブリッド法、Kawabe et al., 1999)。緑色蛍光タンパク質 (EGFP) で標識したエクソン構造が異なる GKAP/SAPAP1 各アイソフォームをウイルスベクターにより培養神経細胞に発現させ、標識タンパクの細胞内動態を観察した。その結果、GKAP/SAPAP1 アイソフォームのうち 4 種 (GKAPa, SAPAP1a, SAPAP1b, SAPAP1c) については発現ウイルスベクターを作製し、それぞれの細胞内分子局在を定量的に解析することに成功し、プロリンをコードするエクソンが細胞内分子局在に影響することが示された。

#### 4) ナメクジ嗅覚中枢における同期的振動ネットワークのシナプス調節機構 (小林卓)

##### 研究背景・目的

優れた嗅覚学習能力と高い再生能力をもつナメクジ脳を用いて、認知機能における同期的振動ネットワークの仕組みと役割について調べている。『においの情報処理過程にどのような巧みな仕組みがあるのか?』、『多様な動物種の中枢神経系でみられる脳波とは何か?』などの疑問に対する回答を探しながら、最終的には、ニューロンが同期振動する仕組みと意義について明らかにしたい。

##### 成果の概要と自己評価

ナメクジの嗅覚中枢である前脳葉はにおいに関する学習と記憶に必須だが、その同期振動ネットワークはブラックボックスのままである。前脳葉の 10 万個のニューロンたちが具体的にどのように同期振動して嗅覚情報処理を行うのかを調べている。まず、前脳葉の同期振動ネットワークに対する GABA および神経ペプチドの薬理作用について調べ、GABA や神経ペプチド FMRF アミドが振動活動の周波数を調節し得ることを示した。特に、FMRF アミドが前脳葉ニューロン間のシナ

プス接続を抑制することで振動数を低下させること (Eur J Neurosci 誌)、GABA が前脳葉ニューロンの興奮性を高める神経調節因子として働くことを報告した (J Neurophysiol 誌)。次にアセチルコリンが前脳葉の振動ネットワークに対して興奮性に働き、振動活動とニューロン間の同期的活動にも寄与していることを J Comp Neurol 誌などに報告した。この研究を進める過程で、前脳葉の分散培養系において振動ネットワークが自発的に再形成されることを見つけたので、目下のところ、*in vitro* 同期的振動ネットワークが一から作られる様子を調べている。上記の系を用いて網羅的な薬理学的解析を行い、神経伝達物質であるインドールアミン、カテコールアミン類が間接的に前脳葉の振動ネットワークを変調すること、コリナージックニューロンが前脳葉ネットワーク内で同期振動を駆動・保持する候補の大本命であることを報告した (J Comp Neurol 誌ほか)。さらに、嗅覚受容機構における一酸化窒素 (NO) の修飾的役割について明らかにした論文では単一ニューロンレベルでの解析結果を発表した (PLoS One 誌)。2019 年には、シナプス伝達の病態生理学に関する研究として、齧歯類の海馬抑制性シナプス修飾機構についての共著論文を Neurosci Res 誌へ発表した。本年度は、神経ペプチドがコリナージックシナプスを修飾することを示した論文を J Comp Neurol 誌にて発表した。

#### 今後の課題

においの嗅ぎ分けや学習・記憶を司るナメクジ前脳葉の同期振動ネットワークにおいて、さまざまなシナプス伝達様式が再形成される様子を生理・薬理・組織学的手法を（できれば行動学的な手法も）用いてひとつひとつ明らかにして行く。最終的には、種に共通した脳波のしくみとはたらきについて言及したい。

#### 外部資金導入実績：

令和 2-4 年度 JSPS 科学研究費助成事業・基盤研究 (C) 20K06750 (研究代表者)

#### 共同研究：

国内他大学との共同研究 (札幌医科大、福岡女子大、国立精神神経センターなど)。

---

#### 外部誌上発表 (2015 年 4 月~2020 年 3 月)

---

#### [原著論文]

##### 2020

1. Matsuo R, Kobayashi S, Furuta A, Osugi T, Takahashi T, Satake H, Matsuo Y. (2020) Distribution and physiological effect of enterin neuropeptides in the olfactory centers of the terrestrial slug *Limax*. J Comp Physiol A, in press.

##### 2019

2. Ishiguro M, Kobayashi S, Matsuyama K, Nagamine T. (2019)

Effects of propofol on IPSCs in CA1 and dentate gyrus cells of rat hippocampus: Propofol effects on hippocampal cells' IPSCs. Neurosci Res, 143, 13-19.

3. Kobayashi S. (2019) Cholinergic induction of network oscillations in the slug olfactory neuron in vitro. J Physiol Sci 69, S155.

##### 2017

4. Kobayashi S. (2017) Synchronous oscillatory network and cholinergic system in the slug olfactory center. European Biophysics Journal with Biophysics Letters 46, S202.

##### 2016

5. Matsuo R., Tanaka M., Fukata R., Kobayashi S., Aonuma H., Matsuo Y. (2016) Octopaminergic system in the central nervous system of the terrestrial slug *Limax*. J Comp Neurol 524, 3849-3864.

6. Matsuo R., Fukata R., Kumagai M., Kobayashi A., Kobayashi S., Matsuo Y. (2016) Distribution of histaminergic neurons and their modulatory effects on oscillatory activity in the olfactory center of the terrestrial slug *Limax*. J Comp Neurol 524, 119-35.

#### [著書・訳書]

- 得丸博史 (単著) 「シナプス伝達を加速させる分子は何か。神経伝達物質放出におけるコンプレキシンの役割」2017 年 4 月, 香川県薬剤師会会誌 かがやく No165, p.62-64.
- 定本久世 (2015) 分担執筆、編集「研究者が教える動物実験 第 1 巻感覚」(尾崎まみこ、村田芳博、藍浩之、定本久世、吉村和也、神崎亮平、日本比較生理生化学会) 共立出版.
- 定本久世 (2015) 分担執筆、編集「研究者が教える動物実験 第 2 巻神経・筋」(尾崎まみこ、村田芳博、藍浩之、定本久世、吉村和也、神崎亮平、日本比較生理生化学会) 共立出版.
- 定本久世 (2015) 編集「研究者が教える動物実験 第 3 巻行動」(尾崎まみこ、村田芳博、藍浩之、定本久世、吉村和也、神崎亮平、日本比較生理生化学会) 共立出版.
- 得丸博史 (共著) Sumiko Mochida Editor (2014) "Regulation of SNAREs: Complexin" Presynaptic Terminals, p.141-147. Springer

---

#### 口頭発表・学会発表 (2020 年 4 月~2021 年 3 月)

---

- Kobayashi S, 12th FENS Forum of Neuroscience - Virtual Forum (Online), 11-15 July 2020.
- 小林 卓, 第 91 回日本動物学会大会 Online, 2020 年 9 月 4-5 日
- 定本久世, 小林卓, 得丸博史, 第 91 回日本動物学会大会 Online, 2020 年 9 月 4-5 日

#### 社会貢献



定本 久世：

- ・日本比較生理生化学会・評議員、将来計画委員

小林 卓：

- ・日本生理学会・評議員
- ・日生理学会・生理学認定エデュケーター
- ・「日本生物学オリンピック1次予選」(2012～2020年までの毎年7月開催、徳島文理大学・香川キャンパス)

その他、新聞報道等
-----------

定本久世：

- ・独立行政法人日本学術振興会平成29年度特別研究員等審査会専門委員表彰,平成30年7月31日







## 薬物治療学講座

### Laboratory of Pharmacotherapy and Experimental Neurology

#### 教員

**教授 伊藤 康一** 着任年月日：2004年04月01日  
 最終学歴：1983年03月 昭和薬科大学大学院薬学研究科修了。医学博士、薬剤師（(財)日本薬剤師研修センター認定薬剤師）  
 前職：(財)東京都医学研究機構・東京都臨床医学総合研究所・薬理研究部門、研究員  
<http://kp.bunri-u.ac.jp/kph02/>

**講師 松尾 平** 着任年月日：2008年04月01日（当講座着任：2016年04月01日）  
 最終学歴：2008年3月 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科博士課程修了。博士（薬学）、薬剤師

**助教 小森 理絵** 着任年月日：2005年04月01日（当講座着任：2014年07月01日）  
 最終学歴：2003年3月 奈良女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程修了。博士（理学）  
 前職：(財)ヒューマンサイエンス振興財団流動研究員（国立循環器病センター研究所・病因部）

#### 教育の概要

**担当科目：薬物治療学1（伊藤）** 薬学科（旧カリ）・必修・15コマ 後期3年生

薬物治療学1では、それまでに修得した機能形態学・薬理学・病態生理学・臨床生化学のすべての知識を統合し、薬物治療のガイドラインに沿った各疾病の治療指針の立て方を学習する。講義では、具体的な症例を数多く取り上げ、病態・診断基準・適応すべき薬物あるいはその副作用のポイントを分かりやすく解説した。また、薬物治療では、「患者様一人ひとりに対してどのような薬物が適切か」という意識が重要である。そこで、1つの病態に対しても患者背景が異なる複数の症例を取り上げ、個々の患者背景を意識しながら薬物治療が考案できるような内容を講義に盛り込んだ。

**担当科目：治療薬学5（伊藤）** 薬学科（新カリ）・必修・15コマ 後期3年生

治療薬学5では、機能形態学・薬理学・病態生理学・臨床生化学/薬物治療学を一体化して、薬物治療のガイドラインに沿った精神/神経疾患の治療指針の立て方を学習する。講義では、具体的な症例を数多く取り上げ、病態・診断基準・適応すべき薬物あるいはその副作用のポイントを分かりやすく解説した。また、「患者様一人ひとりに対してどのような薬物が

適切か」という意識が重要である。そこで、1つの病態に対しても患者背景が異なる複数の症例を取り上げ、個々の患者背景を意識しながら薬理学をベースに薬物治療を理解できるような内容を講義に盛り込んだ。

**担当科目：応用生物学A（松尾）** 薬学科・選択1年前期

応用生物学Aでは、人体の三次元的構造と、組織や器官の基本的な機能について学ぶ。具体的には、神経系、骨格系と筋系、循環器系、呼吸器系、消化器系、感覚器系について、基本的な構造の名称を挙げることができ、機能を構造と関連づけて説明できることを目標とする。2年次から始まる治療薬学の導入となる科目でもあり、臓器と病気との関りについてもできるだけ触れながら講義を行った。適宜練習問題を解かせ理解度を確認し、フィードバックを行った。

**担当科目：治療薬学6（松尾）** 薬学科・必修3年後期

治療薬学の一部であり、代謝性疾患、内分泌系疾患、骨関節疾患、バイオ医薬品についてその病態や治療法、治療薬について学ぶ。病気となる原因についてしっかりと説明し、どのような治療薬が有効かわかるように工夫した。また薬の作用機序についても分類分けをして詳しく説明した。各分野別に練習問題も作成し知識の定着を図った。

**担当科目：治療薬学演習1（伊藤、松尾、薬理系教員）**

治療薬学5（伊藤）、治療薬学6（松尾）の復習のために、演習を中心に各3回行った。

**担当科目：治療薬学演習2,3（伊藤、松尾、医療薬学教員）**

精神疾患（伊藤）、脳卒中（伊藤）、糖尿病（松尾）のPBLを各3コマ行った。

**担当科目：薬理学実習（伊藤・松尾・小森・山田・久保山）** 薬学科・必修・40コマ 前期3年生

薬理学実習は、2、3学年での基礎薬理学、治療薬学の講義において得られた知識を、薬理学実験を通してさらに理解を深めることを目的とする。動物実験を行うことで、優れた医薬品を開発する上での実験動物を用いた前臨床試験の重要性についても理解する。また、動物実験を行う場合には、動物実験の指針を遵守することを徹底し、動物愛護の精神に基づき有効かつ適切に行われるよう教育指導した。

**担当科目：健康医療薬学アドバンスト実務実習（岸本・大島・植木・松尾・小森・窪田）** 薬学科 選択必修5-6年生

学校での見学実習および測定実習を通して、学校薬剤師の役割を理解させることを目的に、香川県学校薬剤師会のご協

力で講義・実習を実施した。3日間の学校薬剤師業務の見学を主とした実習の後、SGDを行った。

**担当科目：アドバンスト教育プログラム「予防医学」(松尾)**  
薬学科・選択必修 5-6年生

病気と診断される以前に、その進行、罹患を予防するための基礎となる知識を学ぶことを目的に、「自殺予防のためのゲートキーパーの役割」「臨床検査値と病気」「院内感染症と薬剤耐性菌」「結核撲滅に向けての新規結核治療薬の開発とその問題点」について講義を行った。

**担当科目：早期体験学習** (大岡・竹内・松尾・中島・森川)  
薬学科・必修 1年生後期

薬剤師が働く現場を実際に見聞し、将来薬剤師として医療を担う心構えと態度を養うことを目的とする。薬剤師が働く病院および薬局へ訪問させ、その後、薬剤師の仕事の重要性和今後の薬剤師に期待される役割についてグループごとに討議し、発表をさせた。

**担当科目：特別実習1 (伊藤)**・薬学科・選択 1年生

特別実習1では、地域医療現場の最先端である介護施設で、学生が高齢者や他職種の方々と直接的なやりとりを介して、地域医療と薬剤師の役割について考える一つの材料にもらうことを目的とする。

**担当科目：特別実習6 (伊藤)**・薬学科・選択 4年生

特別実習6では、薬物乱用防止教室の新しい考え方実施法について検討した。

**担当科目：創薬生命科学特論 (伊藤)** 選択 5、6年生

「抗てんかん薬と非ビタミン K 拮抗経口抗凝固薬 (NOAC) との意外な関係性について」の論文を読み、討議し臨床現場での薬物相互作用の重要性についての意義を勉強した。

**担当科目：卒業実習 (伊藤・松尾)**・薬学科・必修 5、6年生  
5、6年生の卒業実習を行った。

調査研究「SGLT2 阻害薬の使い分けについて」、実験研究「重積発作後のてんかん発症関連因子の探索-CAGE-seq 法を用いた網羅的遺伝子発現解析-」「重積発作後てんかん原性期におけるミクログリアの解析」「重積発作後てんかん原性期における脳内浸潤白血球の解析」を行った。

**保健福祉学科・臨床工学科、3年生**

**担当科目：臨床薬理学 (伊藤)**・必修・15コマ

薬がなぜ効くのかと言う基礎的知識の習得と、臨床工学技士として、是非知ってほしい腎臓、循環器系に作用する薬と全身麻酔薬など神経系に作用する薬を臨床的側面から講義した。

### 管理・運営に係ること

**伊藤康一**：徳島文理大学紀要委員会 (委員)  
香川薬学部年報委員会 (委員長)  
入学前教育委員会 (委員長)  
一般社団法人 薬学教育協議会 病態・薬物治療関連教科担当教員会議  
社団法人 日本私立薬科大学協会 国家試験問題検討委員会 病態・薬物治療部会

**松尾 平**：OSCE 委員会 委員 (総務、モニター担当)  
教務委員会 委員  
CBT 対策小委員会 委員  
早期体験学習委員会 委員  
入学前教育委員会 委員  
入試委員会 委員 (AO 入試担当)

### その他、新聞報道等

**伊藤康一**：「薬物治療学 改訂10版」、南山堂、てんかん、慢性頭痛、その他の神経疾患。分担執筆

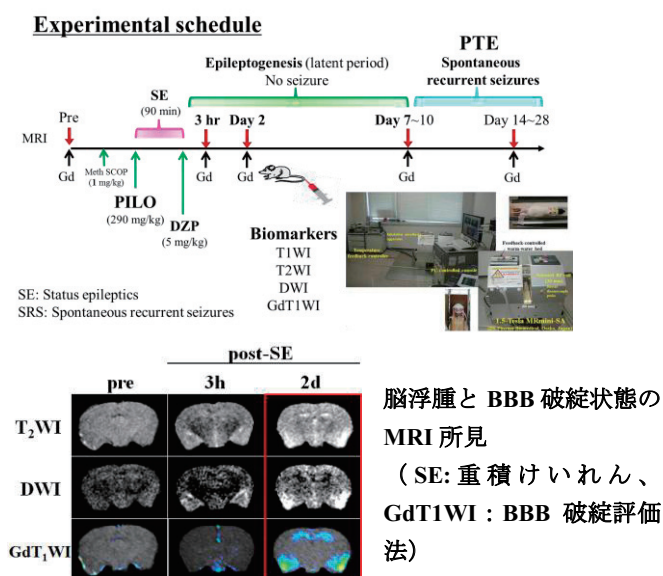
### 研究の概要

#### 1. 重積発作後てんかん発症と脳浮腫、血液脳関門機能不全との関係

てんかんの治療は、バルプロ酸をはじめとする優れた治療薬により一定の効果をもたらしてきた。しかし、最近既存の抗てんかん薬 (AED) による薬物治療の限界が広く認識されている。特に、てんかん患者の 30%以上が何らかの AED 治療抵抗性となり、最高度の QOL 達成に困難が生じている。この問題を解決するために、既存 AED の作用機序とは異なる新たな AED の開発が課題となっている。新規 AED の標的部位を探索することを目的とし、特に全般発作発症を防ぐ標的として血液脳関門 (BBB) との関連に着目した。本研究では続発性てんかん発症過程を検討するため、症候性局所関連てんかんモデルであるピロカルピン重積けいれんモデルマウスを用いた。一方、生きている動物での BBB 機能の検討には、従来の手法である低分子色素 (エバンスブルーなど) や高分子量 (IgG など) の脳実質内拡散を観察するのでは不可能である。けいれん獲得過程での検討を行うため、同一個体でごとにけいれん発作を観察し BBB の時空間的観察は困難であるため小動物用 MRI (MRmini, 1.5T 写真) を用い非侵襲条件下で同一個体の形態学および BBB 不透過ガドリニウム (Gd) 造影剤投与下で造影 MRI 撮像を行い BBB 変化の時空間的観察を行い、けいれん発作発症時およびけいれん発作獲得過程での BBB 変化を定性・定量的に解析した。さらに脳



内炎症因子に関する検討を行っている。



**2. 重積発作後てんかん発症予防薬の探索**

1での研究成果を基礎に、脳浮腫、BBB 損傷、脳内炎症を指標（網羅的プロテオーム解析）に重積発作後てんかん発症予防薬の探索を行っている。

**3. PM2.5 の脳循環および脳梗塞予後に及ぼす影響の解析**

大気汚染における PM2.5 の健康被害は広く知られている。最近ヒトにおいて脳卒中など脳疾患発症や予後（転帰）などに影響があることが報告されている。しかし、そのメカニズムは不明である。脳卒中と脳内炎症の関係を指標に、北京、福岡、横浜で採取された PM2.5 を老齢マウスに鼻腔内投与し、末梢血及び脳内の免疫細胞の動態について FACS 解析法を用いて検討している。（環境研究総合推進費）

**4. 熱性けいれんに対する DHA の効果**

母親から母乳経由で摂取される DHA が乳幼児で発症する熱性けいれんに対しての予防効果を熱性けいれんマウスモデルを用いて検討した。DHA は熱性けいれん発症の予防効果が認められた。

**外部誌上发表 (2016年4月~2021年3月)**

[原著論文]

**2021**

1. Kenta Sakai, Fuyuko Takata, Gaku Yamanaka b, Miho Yasunaga a, Kana Hashiguchi, Kazuki Tominaga, **Kouichi Itoh**, Yasufumi Kataoka, Atsushi Yamauchi, Shinya Dohgu. (2021) Reactive pericytes in early phase are involved in glial activation and late-onset hypersusceptibility to pilocarpine-induced seizures in traumatic brain injury model mice. *J. Pharmacol. Sci.* 145:155-165

**2020**

2. Masahiro Ishii, Ayako Senju, Ami Oguro, Masayuki Shimono, Shunsuke Araki, Koichi Kusahara, **Kouichi Itoh**, Mayumi Tsuji, Yasuhiro Ishihara. (2020) Measurement of the Estradiol Concentration in Cerebrospinal Fluid from Infants and Its Correlation with Serum Estradiol and Exosomal MicroRNA-126-5p. *Biol. Pharm. Bull.* 43:1966-1968

**2019**

3. **Kouichi Itoh**, Ruri Taniguchi, **Taira Matsuo**, Ami Oguro, Christoph F.A. Vogel, Takeshi Yamazaki, Yasuhiro Ishihara. (2019) Suppressive effects of levetiracetam on neuroinflammation and phagocytic microglia: A comparative study of levetiracetam, valproate and carbamazepine. *Neuroscience Letters.*, 708:134363 <https://doi.org/10.1016/j.neulet.2019.134363>

4. Yasuhiro Ishihara, **Kouichi Itoh**, Ami Oguro, Yoichi Chiba, Masaki Ueno, Mayumi Tsuji, Christoph F.A. Vogel, Takeshi Yamazaki. (2019) Neuroprotective activation of astrocytes by methylmercury exposure in the inferior colliculus. *Scientific Reports* 9:13899 <https://doi.org/10.1038/s41598-019-50377-9>

**2018**

5. M. Tanaka, Y. Ishihara, S. Mizuno, A. Ishida, C. F. Vogel, M. Tsuji, T. Yamazaki, **K. Itoh**. (2018) Progression of vasogenic edema induced by activated microglia under permanent middle cerebral artery occlusion. *Biochemical and Biophysical Research Communications*, 496:582-587.

6. Kotani, M., Sato, Y., Ueno, A., Ito, T., **Itoh, K.**, Imadae, M. (2018) Two non-cytotoxic type 2 ribosome-inactivating proteins (Sambucus Sieboldiana lectin and Sambucus Nigra lectin) lead neurosphere cells to caspase-independent apoptosis. *Biomedical Research* 29:1570-1577

**2017**

7. Yasuhiro Ishihara, **Kouichi Itoh**, Miki Tanaka, Mayumi Tsuji, Toshihiro Kawamoto, Suguru Kawato, Christoph F. A. Vogel, Takeshi Yamazaki. (2017) Potentiation of 17β-estradiol synthesis in the brain and elongation of seizure latency through dietary supplementation with docosahexaenoic acid. *Scientific Reports* 7: 6268 | DOI:10.1038/s41598-017-06630-0.

**2016**

8. Kotani, M., Sato, Y., Ueno, A., Ito, T., **Itoh, K.**, Imadae, M. A. (2016) Novel Monoclonal Antibody against Neuroepithelial and Ependymal Cells and Characteristics of Its Positive Cells in Neurospheres. *Cell Mol Neurobiol* 36:11-26.

9. **Itoh, K.**, Ishihara, Y., **Komori, R.**, Nochi, H., Taniguchi, R., Chiba, Y., Ueno, M., Takata-Tsuji, F., Dohgu, S., Kataoka, Y. (2016) Levetiracetam treatment influences blood-brain barrier failure associated with angiogenesis and inflammatory responses in the acute phase of epileptogenesis in post-status epilepticus mice. *Brain Res.*, 1652:1-13
10. Kamada M., Mitsui Y., **Matsuo, T.**, Takahashi T. (2016) Reversible transformation and de-differentiation of human cells derived from induced pluripotent stem cell teratomas. *Hum Cell.* 29(1):1-9
3. 伊藤康一 (2015, 2020) 「疾病薬理学」 ネオメディカル 第 11 章 分担執筆

---



---

**特許**

---



---

- 伊藤康一,
1. 特願 (2003) 「細胞刺激装置及び細胞刺激方法」 第 116895 号
  2. PCT 国際出願 (2004) 「細胞刺激装置及び細胞刺激方法」 PCT/JP2004?005818

---

**口頭発表・学会発表** (2020 年 4 月～2021 年 3 月)

---

1. 中居永一、**伊藤 康一**、樋口眞也、川西裕、福田仁、上羽哲也、新規 AED による脳腫瘍関連てんかん発症抑制について (中間報告)。第 15 回 **日本てんかん学会中国四国地方会**、令和 3 年 2 月 14 日 高知 (web 開催)
2. 田中美樹、**伊藤 康一**、鍋谷悠、石原 康宏. 微小粒子状物質 (PM2.5) 曝露による炎症誘発と脳梗塞予後の増悪. **第 137 回日本薬理学会近畿部会**、2020 年 6 月 20 日 (オンライン)
3. 田中 美樹、**伊藤 康一**、鍋谷 悠、石原 康宏. Effects of airborne particle exposure on prognosis of ischemic stroke. **第 47 回日本毒性学会学術年会**、2019 年 6 月 29 日～7 月 1 日 (オンライン)
4. 石原 康宏、本田 達也、富永 貴志、**伊藤 康一**. 胎児期バルプロ酸曝露によるミクログリア活性化と神経回路機能の異常. **第 61 回生化学会中国四国支部例会**、2020 年 5 月 24 日～25 日 (誌上開催)
5. 田中 美樹、**伊藤 康一**、鍋谷 悠、石原 康宏. 浮遊粒子状物質曝露マウスを用いた脳梗塞予後への影響の解析. **第 61 回生化学会中国四国支部例会**、2020 年 5 月 24 日～25 日 (誌上開催)
6. Ishihara Y, **Itoh K.**, Tominaga T. Activation of microglia and excitation-inhibition imbalances in the developing hippocampus of mice prenatally treated with valproate. **GLIA IN HEALTH & DISEASE Cold Spring Harbor Laboratory Meetings & Courses**, Jul 15-19, 2020 (Virtual Meeting)
6. Tanaka M, Fujikawa M, **Itoh K.**, Ishihara Y. Activated microglia in ischemic stroke aggravate brain edema in Mice. **GLIA IN HEALTH & DISEASE Cold Spring Harbor Laboratory Meetings & Courses**, Jul 15-19, 2020 (Virtual Meeting)

---

**教科書**

---

1. 伊藤康一 (2009, 2012) 「薬の効くプロセス」 小野寺憲治 編修 ネオメディカル 第 10 章 分担執筆
2. 伊藤康一 (2013～20) 「薬物治療学」改訂 3～9 版 南山堂(てんかん、片頭痛、その他の神経疾患) 分担執筆



## 薬物動態学講座

### Laboratory of Pharmacokinetics and Pharmacodynamics

#### 教員

**教授 加藤善久** 着任年月日：2006年9月1日  
 最終学歴：1983年3月静岡薬科大学大学院薬学研究科修士課程修了。博士（薬学）、薬剤師  
 （財）日本薬剤師研修センター認定薬剤師  
 静岡県立大学薬学部客員教授  
 元職：静岡県立大学薬学部医療薬学大講座薬物動態学分野、同大学院薬学研究科機構薬剤学講座・講師

**助教 跡部一孝** 着任年月日：2007年4月1日  
 最終学歴：2007年3月徳島大学大学院薬科学教育部博士後期課程修了。博士（薬学）、薬剤師

#### 教育の概要

##### 担当科目：薬剤学1（加藤善久）

###### 1) 教育達成目標とその妥当性

学習者が、作用部位に達した薬物の量と作用により薬効が決まることを理解し、薬物の生体内における動きと作用に関する基本的知識を修得できるような授業を行なう。また、学習者が薬物の生体内運命を理解し、吸収、分布、代謝、排泄の過程に関する基本的知識を修得できるようにする。

薬物は生体に投与された後、吸収されて、血管系を血流に乗って運搬され、毛細血管の細孔または内皮細胞を透過して様々な臓器や組織の細胞間隙に移行する。そして、細胞内に取り込まれて、その一部が作用発現部位に到達し、薬効を発揮する。その後、ほとんどの薬物は肝臓の肝実質細胞や腎臓の糸球体、尿細管に移行して、代謝、排泄され、体内から消失する。このような薬物の生体内動態の過程（吸収、分布、代謝、排泄）は、薬物の薬効や副作用の発現および持続性を理解する上で重要である。

###### 2) 教育内容面での取り組み

学習者の学習に対するモチベーションを刺激するために、授業時間ごとに到達目標を設定し、学習者主体の授業を心掛けている。授業には、図やグラフを多用することにより、講義の説明が理解しやすいように工夫している。また、薬物動態学、製剤学、衛生化学、薬理学などと関連づけて理解できるように関連事項についての内容を取り入れている。さらに、関連したSBOsごとにキーワードを設けて解説し、演習問題を行い、学習したことが確実に身につけているかの確認を行なっている。また、演習に対しては、学習者へのフィードバックを行い、やる気を刺激している。学習者の授業時間外学習を増やすために、講義のたびごとにホームワークを出し、復習を促すとともに、講義内容のキーワードを5つ書き出さ

せて提出させている。適宜 Google Classroom を活用している。

##### 担当科目：薬剤学2（加藤善久、跡部一孝）

###### 1) 教育達成目標とその妥当性

学習者が、薬物の生体内運命を理解し、吸収、分布、代謝、排泄の過程に関する基本的知識を修得できるような授業を行なう。

薬物の生体内動態の過程（吸収、分布、代謝、排泄）は、薬物の薬効や副作用の発現を理解する上で重要となる。また、体内動態は他剤併用により大きく変動することがあり、薬物の薬理効果の発現に影響を与える。従って、その相互作用の要因を把握することが重要である。

###### 2) 教育内容面での取り組み

薬剤学1と同様の取り組みを実施している。

##### 担当科目：薬物動態学（加藤善久、跡部一孝）

###### 1) 教育達成目標とその妥当性

薬物の薬効や副作用を体内の薬物動態から定量的に理解するために、薬物動態の理論的解析に関する基本的知識と技能を修得できるような授業を行なう。個々の患者に応じた投与計画を立案するために、薬物治療の個別化に関する基本的知識と技能を修得できるようにする。

薬物の体内動態（吸収、分布、代謝、排泄）は、薬物の物理化学的性質と、薬物と生体との相互作用によって決まる。また、薬物の薬効は、薬物の薬理活性の強さと薬物の体内動態に依存している。従って、薬物の薬効を最も効果的に発揮させるためには、その体内動態を把握する必要がある。そこで、生体に投与された薬物の生体内動態について、薬物速度論の立場から、投与後の薬物の血漿中濃度、消失半減期、代謝速度、排泄速度および体内蓄積量などを理解することが重要である。また、ファーマコキネティクス (Pharmacokinetics)、生理学的速度論、コンパートメントモデル、臨床薬物動態について修得する必要がある。

###### 2) 教育内容面での取り組み

薬剤学1および2と同様の取り組みを実施している。また、薬物動態の理論的解析法を紹介するとともに、データを提示し、学習者がそれらを解析することにより、薬物動態学の実用性を体験している。さらに、薬物動態学・製剤学実習と連動して、解析プログラムでの解析を実施している。適宜 Google Classroom を活用している。

##### 担当科目：薬物動態学・製剤学実習（加藤善久、跡部一孝）

###### 1) 教育達成目標とその妥当性

学習者が、薬効や副作用を薬物の体内動態から定量的に理解し、薬物動態の理論的解析に関する基本的知識と技能を修得できるような実習を行なう。

医薬品の生体内動態に関する実験手技（血中薬物濃度の測定）を習熟し、医薬品の薬物治療の場で必要とされる薬物動態学的な知識と技能（薬物速度論解析、体内動態の解析と投与設計）を修得し、薬剤師の任務および職能について、理解を深めることが重要である。

## 2) 教育内容面での取り組み

医薬品の生体内動態の理論的解析（薬物速度論解析、体内動態の解析と投与設計、血中薬物濃度の測定）に関する基本的知識、技能、態度を修得するために、小人数グループ（5～6人1組）できめ細やかな実習を行っている。また、個々にプレゼンテーションや説明の機会を設け、プレゼンテーション技能を高め、理解力を深める実習を実施している。

3) 薬物動態学実習書（2020年度）第15版（加藤善久、跡部一孝 編集）

## 担当科目：薬学英语（加藤善久）

### 1) 教育達成目標とその妥当性

学習者が、科学、薬学、医療に関連する英語文献を読み、医療現場で必要な英語を学ぶことを目的とする。さらに、外部講師として、Philip Hawke（静岡県立大学薬学部）や海外で医療に関する研鑽を積み、実際に医療現場で英語を用いて活躍している薬剤師、医師を招き、薬剤師に必要な基本的な英語によるコミュニケーションを学ぶことを目的とする。薬学分野で必要とされる英語に関する基本的事項を修得する。

### 2) 教育内容面での取り組み

薬剤師に必要な基本的な英語によるコミュニケーションをアクティブラーニングにより実践的に学習する。学習者は、医師、薬剤師および患者役となり、友達同士で英語による簡単なコミュニケーションを実践する。

## 担当科目：基礎薬学演習4（加藤善久）

### 1) 教育達成目標とその妥当性

2年次及び3年次の講義で学んだ知識を定着させ、より一層理解を深めることを目的として、演習を実施する。吸収、分布、代謝、排泄の各過程および薬物動態学的相互作用に関する事項を修得する。

### 2) 教育内容面での取り組み

講義で使用した教科書やノートを参照しながら、演習を行い、理解を深め、科目間の知識を組み合わせた知識の統合を図る。

## 担当科目：薬物相互作用（加藤善久、跡部一孝）

### 1) 教育達成目標とその妥当性

医療および医薬品に関与する高度の薬剤学的知識を修得し、さらに、適正な薬物治療を推進するために、体内動態の各過程で生じる相互作用およびその対処法を習熟することを目的として、基礎から応用までの生物薬剤学および物理薬剤学を、最近の知見を修得する。

### 2) 教育内容面での取り組み

これまでに修得した薬剤系関連科目に関する知識を他の薬学系科目と相互に関連付けて総合的に活かすことができるよう基礎的な問題から発展的な問題まで多くの問題を演習する。

**担当科目：応用薬学演習（薬剤学、薬物動態学）（加藤善久、跡部一孝）、実務実習事前学習（加藤善久、跡部一孝）、薬局実習および病院実習（加藤善久、跡部一孝）、総合薬学演習2および総合薬学演習S（薬剤学、薬物動態学）（加藤善久、跡部一孝）、創薬生命科学特論（加藤善久）、特別実習1～6および卒業実習1および2（加藤善久、跡部一孝）**

### 1) 教育達成目標とその妥当性

応用薬学演習（薬剤学、薬物動態学）および総合薬学演習2（薬剤学、薬物動態学）では、薬学教育モデル・コアカリキュラムの薬剤学、薬物動態学分野を項目ごとに整理し、講義と演習を通して、薬剤学、薬物動態学分野の問題を修得できるようにする。

実務実習事前学習では、薬局・病院の実務実習において、調剤および服薬指導などの薬剤師職務を遂行する上で、必要な基本的な知識、技能、態度を修得できるようにする。

薬局実習では、薬局薬剤師の社会的役割と責任を理解し、地域医療に貢献できるようになるために、保険調剤、医薬品などの情報提供、健康相談、医療機関や地域との関わりについて、基本的知識、技能、態度を修得できるようにする。

病院実習では、病院薬剤師の役割と責任を理解し、病院薬剤師業務を遂行できるようになるために、調剤、製剤、病棟業務およびチーム医療に関する基本的知識、技能、態度を修得できるようにする。

総合薬学演習2およびSでは、5年次までの薬剤学1、薬剤学2、薬物動態学、薬物動態学実習および実務実習で修得した薬剤師として必要とされる事項の総合的な薬学演習を実施し、総合的な知識、技能、態度を身につける。

創薬生命科学特論、特別実習1～6、卒業実習1および2では、論文紹介、課題に対するグループ討論および実験研究を通して、科学的思考能力や論理的思考能力を醸成できるようにする。また、第3者にCBTおよび薬剤師国家試験程度の問題の解答を論理的に説明できるよう自ら調べ、討論することにより、問題の深い理解力と応用力を身につけ、CBTおよび国家試験に対する問題解法能力を養うことができるようにする。

以上の講義、演習および実習を通して、研究マインドを持ち、最適な医療の実現に貢献できる薬のスペシャリスト、医薬品研究開発のプロフェッショナルを育成したいと考えている。また、医薬品、化粧品などの化学物質の性質、創製からその適正使用にいたる薬学とその周辺の幅広い分野において、生命に関わる物質および生体の生理と病態、さらに物質と生体の相互作用に関する知識と技術を習得し、医薬品研究開発分野のみならず、生命科学分野にも貢献できる薬剤師、薬学



研究者、薬学系技術者を養成したいと考えている。

## 2) 教育内容面での取り組み

応用薬学演習（薬剤学、薬物動態学）および総合薬学演習2およびSでは、薬剤学、薬物動態学分野において、それぞれの項目に対する重要ポイントを丁寧に解説している。さらに、CBT対策問題と過去の国家試験問題を分野別に整理して小テストを行なうとともに、その解説を毎時間行い、理解度の確認を行なっている。また、講座配属の学生に対して、CBTおよび薬剤師国家試験対策として、演習形式により問題解法の取り組みを配属直後から実施している。

創薬生命科学特論、特別実習1～6および卒業実習1および2では、独創的研究心や科学的思考能力を醸成させるために、各学生に研究テーマを与え、実験研究あるいは調査研究に取り組みさせている。また、実験データを論理的に解釈できるように、教員とのディスカッションを毎日のように実施している。また、効果的なプレゼンテーションの仕方が身につくように、講義内でのプレゼンテーションや学会発表の機会を定期的に設けている。さらに、学術論文を作成する能力を体得できるように、論文を読む訓練、実験データに基づいた結果と考察を書く訓練を実施している。

薬学は薬に関する総合的学問であるがゆえに、有機化学、分析化学、衛生化学、環境化学、薬理学、薬剤学、薬物動態学、製剤学、病態・薬物治療学、医療薬学などの薬学諸学の知識が統合一体化されてこそ現場で役立つことから、これまでに欠けていた基礎から実践薬学へのリンクや各専門を統合した教育が今後、重要になると考えられ、それらを含めた統合型教育、学習者主体の教育、知識教育に加え技能・態度教育、基礎教育プラス実践教育、コミュニケーションと生命倫理の教育に取り組んでいる。

## 担当科目：薬学概論、医療倫理学、薬剤師への招待、実践社会福祉（加藤善久）

### 1) 教育達成目標とその妥当性

薬学概論では、薬の専門家として必要な基本姿勢を身につけるために、医療、社会における薬学の役割、薬剤師の使命を知り、どのように薬学が発展してきたか、また先端医療を支える医薬品開発の現状を理解する。医療倫理学では、薬剤師の立場から提起される医療に関わる倫理的問題点を理解し、薬剤師として地域社会との関わりや生涯にわたる学習の重要性を学ぶ。薬害の実例を知り、薬剤師として医薬品の利点とリスクを認識する。薬剤師への招待では、高度化する医療に対応し、医療人としての倫理観や使命感を備えた「質の高い薬剤師」を目指すことを自己研鑽に励みながら学ぶ。実践社会福祉では、社会貢献活動、災害や介護などのボランティア、薬物乱用などの啓蒙活動への参加などを通じて見識を広め、国民の健康増進における薬剤師が果たす役割と使命感について学ぶ。

### 2) 教育内容面での取り組み

薬学概論では、薬に関して専門的な知識をもった医療の担い手としての薬剤師が果たすべき役割と責任を自覚するために、香川薬学部の教員および医療関係・製薬企業等に従事している薬剤師（外部講師）によるオムニバス形式の講義を実施する。医療倫理学では、医療従事者の立場から提供される倫理の具体的諸問題を通して、考察を深める。また、薬害被害者の体験を直接聞くことにより、医療従事者としての使命について認識を深める。薬剤師への招待では、医療に関する様々な研修会・講演会について、興味がある研修会・講演会を選んで参加する。実践社会福祉では、体験実習、ボランティア活動に参加し、豊かな人間性と高い倫理観や使命感を身につける。

担当科目：臨床薬物動態学（薬学研究科薬学専攻（4年制博士課程））（加藤善久）

### 1) 教育達成目標とその妥当性

適正な薬物治療を実施するためには、薬物の血中濃度を適切にコントロールする必要がある。そのためには、薬物の体内動態特性を正確に把握し、それに基づいた投与設計を行なわなければならない。本講義では、適正な薬物治療を実施するために、**pharmakokinetics** と **pharmacodynamics** をインテグレートした薬物動態の解析法を理解し、その解析結果を用いた投与設計法を修得する。また、本講義では、薬物の治療効果や副作用の発現を薬物動態と関連づけて理解するために、医薬品の体内動態の速度論的解析法、及び医薬品の体内動態と薬効・毒性発現メカニズムを修得する。

### 2) 教育内容面での取り組み

医療の現場で、有効で安全な薬物療法を実現するために、高度な知識を駆使できる人材、及び副作用情報を解析し、薬物療法の安全性を高める人材の養成を目指している。

---

## 外部誌上発表（2016年4月～2021年3月）

---

### 【解説・報告書等】

1. 加藤善久 (2020). 味の処方せん 我が家の「しぞーかおでん」香川県薬剤師会誌 かがやく, 178:46-47.
2. 加藤善久、宮澤宏 (2020). 榊原紀和講師追悼誌, 徳島文理大学香川薬学部榊原紀和講師追悼事業事務局, pp1-160.
3. 桐野豊、京谷庄二郎、加藤善久、川添和義、高取真吾、清水圭子 (2017). カナダ編 第1回 「薬剤師1人で1日200枚超の処方箋を応需」日経ドラッグインフォメーション Online, 7月3日.  
<http://medical.nikkeibp.co.jp/leaf/mem/pub/di/column/world/201707/551844.html>
4. 桐野豊、京谷庄二郎、加藤善久、川添和義、高取真吾、清水圭子 (2017). カナダ編 第2回 「医療機関受診の前に「まず薬局へ」少ない家庭医、予約は1～2週間後」日経ドラッグインフォメーション Online, 7月18日.  
<http://medical.nikkeibp.co.jp/leaf/mem/pub/di/column/world/201707/552018.html>
5. 桐野豊、京谷庄二郎、加藤善久、川添和義、高取真吾、清

- 水圭子 (2017). カナダ編 第3回 「お薬手帳要らずの患者情報システム」 日経ドラッグインフォメーション Online, 8月7日.  
<http://medical.nikkeibp.co.jp/leaf/mem/pub/di/column/world/201708/552248.html>
6. 桐野豊、京谷庄二郎、加藤善久、川添和義、高取真吾、清水圭子 (2017). カナダ編 第4回 「大学教育にプリセプターとして関わる薬局薬剤師」 日経ドラッグインフォメーション Online, 8月21日.  
<http://medical.nikkeibp.co.jp/leaf/mem/pub/di/column/world/201708/552402.html>
7. 桐野豊、京谷庄二郎、加藤善久、川添和義、高取真吾、清水圭子 (2017). カナダ編 第5回 「大学の中にある「薬剤師クリニック」」 日経ドラッグインフォメーション Online, 9月4日.  
<http://medical.nikkeibp.co.jp/leaf/mem/pub/di/column/world/201709/552569.html&pr=1>
8. 桐野豊、福山愛保、宮澤宏、加藤善久、櫻井栄一、吉田昌裕、飯原なおみ、得丸博史、末松みどり、藤代瞳 (2017). MIL 特別号四国版 「薬学の出発点に立つ君たちへ 高校生のための薬学・薬剤師ガイド」、エニクリエイティブ、10月1日発行、P1-15.
9. 加藤善久 (2016). 「概略と感想」 認定実務実習指導薬剤師養成 WS タスクフォースのためのワークショップ, 第1回中国・四国地区タスクフォース・スキルアップ研修報告書, p.1
10. 桐野豊、京谷庄二郎、加藤善久、川添和義、高取真吾、清水圭子 (2016). 「カナダの薬学教育、病院、薬局の視察報告」、四国の全薬学部との連携・共同による薬学教育改革 ニュースレター, 第5号, p.42-54.

- 年11月21日、香川)  
 2020年度薬学共用試験 CBT 本試験、主任監督者 (2020年11月28日)  
 令和2年度大学院薬学研究科博士論文内審査会、審査員 (2020年12月25日)  
 2021年4月編入学外国人留学生のための編入試験(2期)、オンライン面接担当 (2021年1月12日、香川)  
 令和2年度大学院薬学研究科博士論文本審査会、審査員 (2021年3月5日)  
 2021年度 徳島文理大学大学院薬学研究科(4年制) 薬学専攻博士課程(4月入学) II期入学試験、審査 (2021年3月13日)

跡部一孝:

- 教務委員会委員  
 国家試験対策委員会委員分野責任者  
 CBT 対策実施小委員会委員  
 広報委員会委員  
 オープンキャンパス 受付その他担当(2020年6月28日、7月19日、8月8日、23日、9月13日、10月4日)  
 香川薬学部 薬学共用試験 CBT 体験受験 ゾーン2 管理者(2020年8月6日)、CBT 本試験 ゾーン2 管理者(2020年11月28日)  
 香川薬学部 薬学共用試験 OSCE 本試験 (2020年12月20日) ステーション3 (薬剤の調製) リカバリー

管理・運営に係ること

加藤善久:

- 全学教務委員会委員  
 全学 IR 推進委員会委員  
 全学自己点検-評価実施委員会委員  
 全学地域連携センター運営協議会委員  
 教務委員会委員長  
 将来計画検討委員会委員  
 評価・FD 委員会委員  
 薬学教育評価自己点検評価実施委員会委員  
 大学院委員会委員  
 チューター (薬学科1年生2名担当、2年生1名担当、3年生3名担当、4年生2名担当、5年生2名担当、6年生3名担当)  
 編入学試験 (2020年秋季・2021年度I期) 面接担当 (2020年7月18日、香川)  
 2020(令和2)年秋季 徳島文理大学大学院薬学研究科(4年制) 薬学専攻 博士課程期入学試験 (2020年8月1日、香川)  
 オープンキャンパス香川薬学部、研究室体験担当 (2020年8月8日、香川)  
 2021(令和3)年度 公募制推薦入試I期、面接担当 (2020

その他、新聞報道等

該当なし

研究の概要

主な研究テーマ

1. 薬物の体内動態と薬効・毒性発現メカニズムの解明に関する研究
2. 薬物の甲状腺ホルモン攪乱作用機構の解明に向けた統合的研究: ヒトへの応用
3. LC/MS/MSによるヒト組織中の残留性微量化学物質の高感度定量法に関する研究
4. 抗癌剤封入リポソームによる癌の治療に関する研究

A. はじめに

薬物動態学講座は、創薬と医薬品の適正使用を目指して、薬の吸収、分布、代謝、排泄(体内動態)と薬効および副作用の発現に至る現象を科学的根拠に基づいて明らかにする研究に取り組んでいる。医薬品の合成、医薬品や化学物質の体内動態の解析、動態-薬効・副作用の解析手法を構築し、体内動態への影響要因を解明し、個別化医療の推進、副作用の





発現防止に貢献したいと考えている。さらに、それらの研究を通して医療と健康における薬物の体内動態の重要性を理解し、薬物療法や副作用の予防に貢献できる薬剤師を養成することを責務と考えている。

## B. Polychlorinated biphenyl (PCB)の血中甲状腺ホルモン濃度低下作用発現に関する新規メカニズムの実体解明 (加藤善久)

### B-1. 研究の背景と達成目標

新たに提唱した PCB による血中サイロキシン( $T_4$ )濃度低下作用メカニズムの本質となる  $T_4$ の肝臓への蓄積メカニズムの実体を解析するために本研究を行った。

### B-2. 研究成果の概要

ラット、マウス、ハムスター、モルモットに phenobarbital (PB) (80 mg/kg)を4日間連続投与後、血清中総  $T_4$ 濃度は、ラット、マウス、ハムスターで低下したが、モルモットでは変化が見られなかった。ラットでは、PB 投与により、Oatp2、LAT1、Mrp2 および Mrp3 の mRNA の発現量がそれぞれ 3.2、2.5、2.6、16.9 倍に増加したが、MCT8 の mRNA の発現量は変化しなかった。マウスでは、PB 投与により、Mrp3 の mRNA の発現量が 1.3 倍に増加したが、Oatp2、MCT8、LAT1 および Mrp2 の mRNA の発現量は変化しなかった。以上、PB によるラットの肝臓への  $T_4$ の移行量の増加は、Oatp2 の発現量の増加に起因していることが示唆された。

### B-3. 外部資金導入実績

1. 加藤善久 (代表個人) : PCB などの化学物質の甲状腺ホルモン濃度低下作用発現メカニズムの全容解明. 平成 30~32 年度 科学研究費助成事業 (学術研究助成基金助成金 (基盤研究(C)))

## C. ESI-LC/MS/MS によるエビの組織中有機フッ素化合物濃度の定量に関する研究 (加藤善久)

### C-1. 研究の背景と達成目標

すでに、我々はクジラやイルカ類の血液から perfluoro-1-octanesulfonic acid(PFOS)を検出し、その濃度を報告している。本研究では、ESI-LC/MS/MS を用いて、沿岸部で採取されたエビの可食部中の PFOS、perfluoro-1-hexanesulfonic acid (PFHxS)、perfluoro-1-heptane-sulfonic acid (PFHpS)、perfluoro-1-decanesulfonic acid (PFDS)、perfluoro-1-octanesulfonamide (PFOSA)濃度を測定した。

### C-2. 研究成果の概要

測定したエビ可食部中の平均濃度は、PFOS 濃度が最も高く、次に PFHpS、PFHxS、PFDS、PFOSA の順であった。エビの種類別に比較すると、ムキえびの可食部中の PFOS、PFHpS、PFDS 濃度が高く、また干しアミエビの PFHxS と PFHpS 濃度が高かった。また、桜エビの PFHpS 濃度は干しアミエビ、ムキエビに次いで高値を示した。採取した地域別に比較すると、山口県産のエビの PFOS、PFHpS、PFDS、PFOSA 濃度、兵庫県産のエビの PFHxS、PFHpS 濃度が高い値を示した。台湾、

ベトナム、中国産のエビ可食部中の 5 種類の有機フッ素化合物濃度は山口県、兵庫県を除いた他の産地のエビと同程度であった。以上より、今回測定したエビの 5 種の有機フッ素化合物のうち PFOS 濃度が最も高く、それらの濃度はエビの種類ごとに違いがあること、エビの採取した地域により地域差があることが示された。

## D. ドキソルビシン-フラボノイド封入リポソームによるガン治療に関する研究 (跡部一孝)

### D-1. 研究の達成目標、その意義・背景

ガンを治療するためには、ガン細胞の増殖を抑制するだけでなく、新生血管形成や治療によって起こりえるガン細胞の耐性獲得を阻害することが必要である。現在市販されている抗ガン剤封入リポソーム製剤は、ガン細胞の増殖を抑制する効果は高いが新生血管形成を抑制することは難しく、ガンを完治させるまでには至っていない。

クルクミンをはじめとするフラボノイドの中には抗炎症作用や抗酸化作用以外にも、P-糖タンパク質阻害による抗がん剤の効果増強やガン新生血管形成を抑制する効果を持つことが近年、報告されてきている。しかし、これらフラボノイドの多くは難水溶性の薬物であるため水にほとんど溶けず、また生体内に経口投与した際もほとんどが吸収されないため、そのままでは抗腫瘍効果など期待することができない。

そこで従来のリポソーム製剤にフラボノイドを追加で封入することでガン細胞だけでなく、薬剤耐性ガン細胞や新生血管形成をも抑制できるリポソームが調製できると考え、ドキソルビシンと各種フラボノイドを封入したリポソームを用いて検討を行っている。

### D-2. 目標達成状況

本研究の達成目標は、以下の2点である。

1) ドキソルビシンとフラボノイドを封入したリポソームを用いて、ガン細胞と新生血管内皮細胞への効果を *in vitro* 実験系を用いて評価する。

2) ドキソルビシンとフラボノイドを封入したリポソームを用いて、*in vivo* での抗腫瘍効果と新生血管阻害効果について評価する。

上記目標のうち、1)に関しては、フラボノイドとしてレスベラトロールを封入したリポソームを調製し、リポソームへの最大積載量とリポソーム中レスベラトロールの安定性について検討を行った。またレスベラトロールを封入したリポソームを用いて、ガン細胞への殺細胞効果を持つことを示した。

### D-3. 研究成果の概要と自己評価

我々はレスベラトロールを封入したリポソームを調製し、HT-1080 細胞、マウススライス肺癌細胞を用いて *in vitro* 実験で評価した。その結果、レスベラトロールを封入したリポソームは、マウス肺ガン細胞の増殖を抑制 (*in vitro* 実験) した。今後 *in vivo* 実験での効果の差について検討を行っていく予定である。

## D-4. 今後の課題

レスベラトロールは他に耐性ガン細胞のP-糖タンパク質阻害作用やガン細胞の遊走浸潤の阻害することが報告されている。そこで薬剤耐性細胞においても本リポソームが浸潤阻害効果を発揮するのかについて検討していきたい。

---

**外部誌上発表** (2016年~2021年3月)
 

---

## 【原著論文】

**2020**

1. Fujii, Y., Harada, K.H., Nakamura, T., Kato, Y., Ohta, C., Koga, N., Kimura, O., Endo, T., Koizumi, A., Haraguchi, K. (2020) Perfluorinated carboxylic acids in edible clams: A possible exposure source of perfluorooctanoic acid for Japanese population. *Environ. Pollut.*, 263, 114369.
2. Kimura, O., Fujii, Y., Haraguchi, K., Kato, Y., Ohta, C., Koga, N., Endo, T. (2020) Effects of perfluoroalkyl carboxylic acids on the uptake of sulfobromophthalein via organic anion transporting polypeptides in human intestinal Caco-2 cells. *Biochem. Biophys. Rep.*, 24, 100807.

**2019**

1. Kato, Y., Tamaki, S., Haraguchi, K., Ikushiro, S., Fujii, Y., Ohta, C., Atobe, K., Kimura, O., Endo, T., Koga, N., Yamada, S., Degawa, M. (2019) Kanechlor 500-mediated changes in serum and hepatic thyroxine levels primarily occur in a transthyretin-unrelated manner. *J. Appl. Toxicol.*, 39, 1701-1709.
2. Fujii, Y., Tuda, H., Kato, Y., Kimura, O., Endo, T., Harada, K.H., Koizumi, A., Haraguchi, K. (2019). Levels and profiles of long-chain perfluoroalkyl carboxylic acids in Pacific cod from 14 sites in the North Pacific Ocean. *Environ. Pollut.*, 247, 312-318.
3. Yamada, S., Kuraoka, S., Ito, Y., Kato, Y., Onoue, S. (2019) Muscarinic receptor binding of fesoterodine, 5-hydroxymethyl tolterodine, and tolterodine in rat tissues after the oral, intravenous, or intravesical administration. *J. Pharmacol. Sci.*, 140 73-78.
4. 太田千穂、山本健太、加藤善久、藤井由希子、原口浩一、木村 治、遠藤哲也、古賀信幸。 (2019) 2,2',3,4',5,6,6'-七塩素化ビフェニル(CB188)のラットおよびモルモット肝ミクロゾームによる代謝。福岡医学雑誌、110、83-90.

**2018**

1. Fujii, Y., Kato, Y., Kozai, M., Matsuishi, T., Harada, K.H., Koizumi, A., Kimura, O., Endo, T., Haraguchi, K. (2018) Different profiles of naturally produced and anthropogenic organohalogenes in the livers of cetaceans from the Sea of Japan and the North Pacific Ocean. *Mar. Pollut. Bull.*, 137, 230-242.
2. Kishimoto, Y., Tsukamoto, I., Nishigawa, A., Nishimoto, A., Kirino, Y., Kato, Y., Konishi, R., Maruyama, T., Sakakibara, N. (2018). Data on COA-Cl administration to the APP/PS2 double-transgenic mouse model of Alzheimer's disease: Improved hippocampus-dependent learning and unchanged spontaneous physical activity. *Data in Brief*, 20, 1877-1833.
3. Fujii, Y., Kato, Y., Masuda, N., Harada, K.H., Koizumi, A., Haraguchi, K. (2018) Contamination trends and factors affecting the transfer of hexabromocyclododecane

diastereomers, tetrabromobisphenol A, and 2,4,6-tribromophenol to breast milk in Japan. *Environ. Pollut.*, 237, 936-943.

4. Fujii, Y., Kato, Y., Sakamoto, K., Matsuishi, T., Harada, K.H., Koizumi, A., Kimura, O., Endo, T., and Haraguchi, K. (2018). Tissue-specific bioaccumulation of long-chain perfluorinated carboxylic acids and halogenated methylbipyrroles in Dall's porpoises (*Phocoenoides dalli*) and harbor porpoises (*Phocoena phocoena*) stranded in northern Japan. *Sci. Total Environ.*, 616-617, 554-563.

**2017**

1. Kato, Y., Fujii, A., Haraguchi, K., Fujii, Y., Atobe, K., Endo, T., Kimura, O., Koga, N., Ohta, C., Yamada, S., and Degawa, M. (2017). Possible mechanism for the polychlorinated biphenyl induced liver-selective accumulation of thyroxine in rats. *J. Toxicol. Sci.*, 42, 663-669.
2. Endo, T., Kimura, O., Terasaki M., Fujii, Y., Haraguchi, K., Ohta, C., Koga, N., and Kato, Y. (2017). Growth-related changes in non-essential and essential metals in the liver of star-spotted smooth-hounds (dogfish) *Mustelus manazo* from the northern region of Japan. *Mar. Environ. Res.* 131, 156-161.
3. Kimura, O., Fujii, Y., Haraguchi, K., Kato, Y., Ohta, C., Koga, N., and Endo, T. (2017). Uptake of perfluorooctanoic acid by Caco-2 cells: Involvement of organic anion transporting polypeptides. *Toxicol. Lett.*, 277, 18-23.
4. Sakakibara, N., Igarashi, J., Takata, M., Konishi, R., Kato, Y., and Tsukamoto, I. (2017). Synthesis and evaluation of novel cyclopropane nucleoside as potential tube formation agents. *Chem. Pharm. Bull.*, 65, 504-510.
5. Kawami, M., Deguchi, J., Yumoto, R., Sakakibara, N., Tsukamoto, I., Konishi, R., Takamo, M. (2017). Effect of COA-Cl on transforming growth factor- $\beta$ 1-induced epithelial-mesenchymal transition in RLE/Abca3 cells. *Drug Metab. Pharmacokinet.*, 32, 224-227.
6. Baba, M., Toyama, M., Sakakibara, N., Okamoto, M., Arima, N., Saijo, M. (2017). Establishment of an antiviral assay system and identification of severe fever with thrombocytopenia syndrome virus (SFTSV) inhibitors. *Antivir. Chem. Chemother.*, 25, 83-89.
7. 太田千穂、藤井由希子、原口浩一、加藤善久、木村治、遠藤哲也、古賀信幸。 (2017). 2,2',3,4',5,6' -七塩素化ビフェニル (CB182) のラット、モルモットおよびヒト肝ミクロゾームによる代謝。福岡医学雑誌、108、51-57.

**2016**

1. Endo, T., Kimura, O., Ohta, C., Koga, N., Kato, Y., Fujii, Y., and Haraguchi, K. (2016). Metal concentrations in the liver and stable isotope ratios of carbon and nitrogen in the muscle of silvertip shark (*Carcharhinus albimarginatus*) culled off Ishigaki Island, Japan: changes with growth. *PLOS ONE*, 11(2):e0147797. doi: 10.1371/journal.pone.0147797.
2. Kimura, O., Fujii, Y., Haraguchi, K., Ohta, C., Koga, N., Kato, Y., Endo, T. (2016). Effect of quercetin on the uptake and efflux of aristolochic acid I from Caco-2 cell monolayers. *J. Pharm. Pharmacol.*, 68, 883-889.
3. Igarashi, J., Okamoto, R., Yamashita, T., Hashimoto, T., Karita, S., Nakai, K., Kubota, Y., Takata, M., Yamaguchi, F., Tokuda, M., Sakakibara, N., Tsukamoto, I., Konishi, R., Hirano, K. (2016). A key role of PGC-1 $\alpha$  transcriptional coactivator in production of VEGF by a novel angiogenic agent COA-Cl in cultured human fibroblasts. *Physiological reports*, 4, e12742.

[邦文総説・解説等]



1. 桐野豊、京谷庄二郎、加藤善久、川添和義、高取真吾、清水圭子(2019)、第2章 カナダ「患者中心のケア」「問題解決型教育」へ、「世界薬学探訪記」四国の全薬学部による海外薬学視察団 最新報告: 日本の薬学、薬剤師はどう変わるべきか? 電子書籍、Kindle版、桐野 豊(編), pp1-470.
  2. 太田千穂、山本健太、徳富美沙紀、加藤善久、古賀信幸(2019). 「3,7,3',4'-Tetramethoxyflavone のラット、モルモットおよびヒト肝ミクロゾームによる代謝」中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要, 51: 89-96.
  3. 加藤善久(2018). 「研究最前線 Polychlorinated biphenyls による血中甲状腺ホルモン濃度低下作用機構の解明: 動物種差」Endocrine Disrupter News Letter, 21: 4.
  4. 太田千穂、緒方 瞳、山本健太、原口浩一、加藤善久、遠藤 哲也、古賀信幸. (2016). 「黒シヨウガ成分 5,7,3',4'-Tetramethoxyflavone のラット肝ミクロゾームによる代謝」中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要, 48: 155-161.
- 「薬剤」部会委員 (2011.4~)
- 2) 薬学教育協議会 薬剤学教科担当教員会議委員 (2010.4~)
  - 3) 日本私立薬科大学協会 教務部長会委員 (2020.4~)
  - 4) 日本トキシコロジー学会評議員 (2008.7~)
  - 5) かがわ健康関連製品開発地域イノベーション推進協議会委員 (2016.4~2021.2)
  - 6) J. Toxicol. Sci.誌 Editorial Board (2014.1~)
  - 7) 科学技術の状況に係る総合的意識調査(NISTEP 定点調査)員 (2016.11~2020.11)
  - 8) 日本薬剤学会第36年会(徳島) 組織委員 (2020.2~)

その他、新聞報道等
-----------

該当なし

[プロシーディング]

**2016**

1. Kato, Y., Haraguchi, K., Fujii, A., Fujii, Y., Kimura, O., Ohta, C., Endo, T., Koga, N., Yamada, S., Degawa, M. (2016). Induction of hepatic T<sub>4</sub> transporters by polychlorinated biphenyl in rats. *Organohalogen Compds* 78, 873-876.
2. Ohta, C., Fujii, Y., Haraguchi, K., Kato, Y., Kimura, O., Endo, T., and Koga, N. (2016). Metabolism of 2,2',3,4,4',5,6'-heptachlorobiphenyl (CB182) by rat, guinea pig and human liver microsomes. *Organohalogen Compds* 78, 870-872.

[研究報告書]

1. 加藤善久(代表個人), 「PCBの血中甲状腺ホルモン濃度低下作用発現に関する新規メカニズムの実体解明」平成28年度 科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金(基盤研究(C))) 研究成果報告書, pp.1-4.

口頭発表・学会発表 (2020年4月~2021年3月)
-----------------------------

1. 太田千穂, 加藤善久, 藤井由希子, 原口浩一, 木村治, 遠藤 哲也, 古賀信幸 (2021). 「2,2',4,4',6,6'-六塩素化ビフェニル(PCB155)のヒト肝ミクロゾームおよびチトクロム P450 分子種による代謝」日本薬学会第141年会講演要旨集, 28P01-227, 3月28日, オンライン開催(広島).

特許
----

1. Baba, M., Toyama, M., Sakakibara, N. Anti-hepatitis B virus drug containing pyrimido[1,2-a][1,3,5]triazin-6-one derivative. PCT Int. Appl. (2017), WO 2017010330 A1 20170119.

その他、新聞報道等
-----------

該当なし

社会貢献(教員)
----------

加藤善久

- 1) 日本私立薬科大学協会 薬剤師国家試験問題検討委員会





## 製剤学講座

### Laboratory of Pharmaceutics

#### 教員

**教授 徳村忠一** 着任年月日：2013年4月1日

最終学歴：1981年3月香川大学大学院農学研究科修士課程修了。薬学博士

1979年3月大阪薬科大学卒業 薬剤師

前職：国際医療福祉大学 薬学部准教授

1981年4月より29年間製薬企業勤務

**准教授 白畑孝明** 着任年月日：2020年4月1日

最終学歴：東京大学大学院薬学系研究科博士課程修了博士(薬学), 薬剤師。

#### 教育の概要

##### 担当科目：製剤学1 (徳村)

3年前期 薬学科必修、1.5単位

医薬品は、製剤としてヒトに適用される。製剤の設計や製造、製剤の機能について、薬剤師は正しく理解している必要がある。そのため、CBTおよび薬剤師国家試験の出題範囲となっている。製剤学1と2で、モデルコアカリキュラム「製剤化のサイエンス」を行う。このため製剤学1では、製剤化のサイエンス前半部分をおこなった。将来、国家試験の本領域での正解率80%以上を目標として、確実に覚えなければならない用語や基礎的な理論を学習させた。毎回各自で教科書を読んでくることとし、その範囲で重要な部分を講義で解説した。翌週の授業の最初に確認テストを行い各自の理解度を高めるように行った。また、レポート作成を4回行い新しい用語や理論を使用させて考えさせるようにさせた。

##### 担当科目：製剤学2 (徳村)

3年後期 薬学科必修、1単位

製剤化のサイエンスの後半部分について製剤学1と同様に、基礎事項の解説を中心に行った。さらに製剤学2では、後半4回の講義時間を使い製剤化のサイエンス全般にわたり取得した基礎知識を使ってより高度な理論の理解と問題演習に注力して講義を行った。

##### 担当科目：製剤学3 (徳村)

4年前期 薬学科選択、1単位

製剤学1と製剤学2で製剤学全般についての講義を終わった。製剤学3では、日本における医薬品の規格書である日本薬局方に焦点を当て、特に通則および製剤総則については、音読することで内容の確認を行った。

##### 担当科目：品質管理学 (徳村)

5年後期集中 薬学科選択、1単位

品質管理は日本の製造業の発展に大きく寄与してきた歴史がある。現在は広義の品質管理で使用される「顧客満足」という言葉に代表されるように、全産業で重要な考え方となっている。この広義の品質管理の考え方を講義するとともにグループ討議で理解を深めた。医薬品に関しては、法律で行わなければならないことや公的規格である日本薬局方がある。品質管理という観点からこれらの法律や規格について、講義や医薬品工場の品質管理・品質保証の実際について伏見製薬所の担当者の講演を聞き理解を深めた。

##### 担当科目：医薬品開発学 (徳村)

4年前期 薬学科必修、1単位

医薬品開発の流れ、すなわち候補化合物の探索から原薬製造、原薬物性の評価、治験薬製造と臨床開発等の概略に加え、医薬品開発・販売における製薬企業の規模や研究開発費、給与等についての解説を行った。新製品の開発例について伏見製薬所の担当者の講演を聞き理解を深めた。

##### 担当科目：薬物動態学・製剤学実習 (徳村 他教員3名で担当)

3年後期 薬学科必修、1.5単位

主として薬学教育モデルコアカリキュラムのうち製剤化のサイエンスに対応して、代表的製剤の調製、物性の測定、及び製剤試験法を行った。特に、細粒剤の押し出し造粒法を取り上げ、マニュアル操作により造粒法の原理を習得することに努めた。物性測定では、タップセンサーを用いてかさ密度や安息角の測定を通じて造粒操作の意義を習得できるように努めた。製剤試験法では、溶出試験器を用いて、細粒剤からの有効成分の溶出とその定量法を習得できるように努めた。

##### 担当科目：薬事関係法規1 (白畑孝明)

1)教育達成目標とその妥当性：薬学を取り巻く法律、制度に関する基本的知識を修得する。

2) 目的達成状況：ほぼ達成

3)教育内容面での取り組みと改善方策：講義ではさまざまな薬事関係法規の内容を解説したが、それらの違いが分かるように努めた。

##### 担当科目：薬事関係法規2 (白畑孝明)

1)教育達成目標とその妥当性：薬事関係法規1を踏まえて、薬学を取り巻く法律、制度に関する知識を応用する能力を身につける。

2) 目的達成状況：ほぼ達成

3)教育内容面での取り組みと改善方策：薬剤師が遭遇する法的な問題に対して、適切な判断ができることを意識して、講

義を行った。

**担当科目：エクスペリメントスキル（白畑孝明,小林卓,窪田剛志,桐山賀充）**

1) 教育達成目標とその妥当性：モル濃度の計算や溶液の基本的性質を理解し、実際の生理食塩水の調製を行うことで、種々の実験器具・測定装置の用途や使用法を学ぶ。さらに、一連の実験を通して、数値データの取り扱い、客観的な図表の作成、結果の報告ができるようになる。

2) 目的達成状況：ほぼ達成

3) 教育内容面での取り組みと改善方策：種々の実験器具・測定装置の使用法を指導し、生理食塩水の調製ができるようになった。数値データの取り扱い、客観的な図表の作成、結果の報告の指導を行い、これらを習得できた。

### 管理・運営に係ること

徳村：

- ・全学就職支援委員会委員
- ・就職委員会委員長
- ・総務委員会

その他学部生チュータ、オープンキャンパスなど。

白畑：

- ・国家試験対策委員会委員
- ・CBT委員会委員

その他学部生チュータ、オープンキャンパスなど。

### その他、新聞報道等

該当事項なし。

### 研究の概要

研究活動は、研究の理念を作成しこれをもとに研究テーマを選択している。以下に研究テーマの概要と成果について記載する。

(1) フルチカゾンプロピオン酸エステル含有リポソームの調製と評価

腎炎に対する治療法の一つとして、ステロイド剤が経口投与されることが多いが、副作用の問題は回避できていない。気管支喘息においても同様の副作用の問題があったが、第二世代ステロイド剤の吸入により大幅に改善されている。本テーマは、第二世代ステロイド剤であるフルチカゾンプロピオン酸エステルに着目し、腎炎に対する治療剤としてステロイドリポソーム製剤を開発することが目的である。

これまでに一般的なリポソームの調製法において脂質膜あるいは水相にフルチカゾンプロピオン酸エステルを封入でき

るかどうかにについて検討し、封入がかなり困難であることが判明した。昨年度は、その原因について検討し一般的な調製方法で脂質膜の成分として添加されているコレステロールが関与していることを明らかとした。

本年度は、LibMec法を採用してフルチカゾンプロピオン酸エステルをリポソームに封入できるかどうかの検討を実施している

テーマ担当者：徳村、卒論生

共同研究先等：薬物動態学講座

(2) 調剤で使用される機械に対する洗浄バリデーション方法の確立と実施データの提供

調剤に使用される機械、例えば分包機では、1回使用すれば一部の粉体は機械に残ると考えられる。このため各薬局では、分包機の清掃方法を決めて実行しているはずである。製薬企業の製造ラインでは、使用する機器、器具についての洗浄バリデーションを行いその洗浄方法が妥当であることを検証し文書化している。そこで、本テーマの目的は、調剤で使用される機器について、洗浄バリデーションの考え方を導入し、実際にバリデーションの実施例を示すことによって、調剤に使用される機械の洗浄が適切に行われていることを示すことにある。

これまでにテオフィリン製剤、ニコチンアミド製剤、アセトアミノフェン製剤、ザジテン製剤、およびブランルカスト製剤の残留性と、残留性に与える製剤物性について検討した。また、装置附属のクリーナーの効果と乳糖洗浄の効果及びそれらの複合効果についてについても検討した。また、乳糖洗浄後に装置に残留する乳糖量を明らかとしてきた。本年度は残留カルシウムイオンの検出法について検討するとともに新規清掃剤についてのデータを取得し特許を出願した。

テーマ担当者：徳村、非常勤研究補助員、卒論生

共同研究先等：医療薬学講座

(3) シルデナフィルクエン酸塩のNICU用製剤の開発

シルデナフィルクエン酸塩は、ホスホジエステラーゼタイプ5の阻害剤である。本化合物を含有する製剤としてレバチオ錠があるものの小児用製剤は販売されていない。シルデナフィルクエン酸塩は新生児肺高血圧症に使用されることがあり、その場合には錠剤の粉碎調剤が行われる。錠剤の粉碎調剤については、古くから重量ロスの報告がなされるとともに、最近では主薬含量の低下についての報告がある。しかし、錠剤から粉碎調剤を行ったシルデナフィルクエン酸塩分包品の主薬含量については、これまでに報告されていない。そこで、分包品中のシルデナフィルクエン酸塩含量を測定する方法の確立し測定結果を学会で報告した。論文は昨年度徳島文理大学研究紀要に掲載された。

上記研究との関連で、現在の粉碎調剤の問題点が明らかとなったので、粉碎調剤の問題点を解決するためモデル製剤を



使って粉碎工程の解決法を提案した。学会発表後論文が出版された。次にシルデナフィルクエン酸塩の錠剤を開発した方法で粉碎し所定の含量であることを示した。本結果は論文投稿し本年度掲載された。さらに、シルデナフィルクエン酸塩の錠剤から懸濁液を調製する方法を検討し、すでに学会発表まで終了しているため、本年度は、投稿論文の投稿を行った。コートリル錠についてもシルデナフィルクエン酸塩の錠剤と同様のことが報告されているので、検討を追加し、論文投稿を行った。

テーマ担当者：徳村、卒論生

共同研究先等：なし

#### (4) 主薬 A を含む錠剤の処方設計と試作

主薬 A を含む錠剤を検査に使用したとのことで錠剤の処方検討と試作の依頼が三豊総合病院からあった。主薬含量を試作品から検討し、主薬含量30%を決定した。この主薬含量で、病院で簡単に入手できる添加剤を用いて処方検討と試作を行い、処方と製造方法の提案を行った。昨年度から、異なる製造業者の製品についても同様に錠剤が調製可能か検討するとともに、崩壊時間を自由に制御できる錠剤の検討を行っている。

テーマ担当者：徳村、卒論生

共同研究先等：なし

#### (5) 野菜粉末からの錠剤の試作

8種類の野菜粉末から錠剤を調製する依頼を受けた。昨年度は、8種類の野菜粉末それぞれの成型性と8種類の野菜の当量混合物の成型性を評価した。1回目の評価では、成形性のある粉末とない粉末があり、混合物には成形性が認められた。しかし、本実験の再現性は認められず、その原因が吸湿であることが判明した。そこで、乾燥減量を常に測定しながら実験を行い、再現性のあるデータを取得した。これまでに一定の加湿条件下で保存して、各野菜粉末の吸湿量と成形性の相関関係を明らかにした。本年度は特許出願等に関連した実験を行い、特許が出願された。

テーマ担当者：徳村、卒論生

共同研究先等：結願株式会社

#### (6) 数理モデルによる神経細胞の非線形現象の解析

神経細胞は、その細胞膜に発現するさまざまな種類のイオンチャンネルの相互作用により、外部刺激にตอบสนองして活動電位を発生させることができる(電気的興奮性)。電気生理学実験で得られたデータにより、電気的興奮性を再現する数理モデル(非線形常微分方程式など)が記述される。この方程式を詳細に解析することで神経細胞のダイナミクスを理解することができる。

テーマ担当者：白畑

共同研究先等：なし

### 外部誌上発表 (2016年4月~2021年3月)

#### [原著論文]

#### 2021

1. Shirahata, T. (2021). Modulating the dynamics of a mathematical model of an electrosensory neuron by the membrane capacitance. *Advanced Studies in Theoretical Physics* 15, 1-7.

#### 2020

1. 池田博昭, 高本彩音, 池田純子, 河野清尊, 中妻 章, 徳村忠一, 森久美子, 飯原なおみ, 芳地 一, 二宮昌樹, (2020). 点眼剤の滴下成功率と滴下部位のビデオ解析. *YAKUGAKU ZASSHI*, 140, 1455-1462.
2. 北田里華, 川上充希, 山本秀紀, 山本 宏, 栗田卓朗, 徳村忠一, (2020). 新生児特定集中治療室での使用を目的としたシルデナフィル錠に対する粉碎調剤の最適化. *薬剤学*. 80, 307-314.
3. Shirahata, T. (2020) A numerical study of the relationship between the ghostbursting model and the leak current. *Advanced Studies in Theoretical Physics* 14(2), 65-72.
4. Shirahata, T. (2020) Membrane capacitance can modulate the regularity of bursting in a mathematical model of snail neurons. *Advanced Studies in Theoretical Physics* 14(3), 127-132.
5. Shirahata, T. (2020) The transition from a periodic spiking state to a periodic bursting state via a chaotic bursting state: a numerical study of a dynamical system in neurobiophysics. *Advanced Studies in Theoretical Physics* 14(4), 151-160.

#### 2019

1. Tokumura T., Yasumoto A., Kurita T., (2019). A Validated HPLC Pranololol Assay Method for Cleaning Validation on an Automatic Packaging Machine. *Sch. Acad. J. Pharm.* 8(1), 11-14.
2. 山本秀紀, 川上充希, 北田里華, 横井里沙, 豊福泰代, 栗田卓朗, 仙波靖士, 山本 宏, 徳村忠一, (2019). シルデナフィル錠から調製した新生児特定集中治療室用分包品のシルデナフィル含有量に及ぼす粉碎調剤方法の影響. *徳島文理大学研究紀要*. 98, 1-8.
3. Shirahata, T. (2019) A numerical study of the bistability of a mathematical model of leech oscillator interneurons: the transient current pulse condition for inducing the switch from a periodic spiking state to a chaotic spiking state. *Advanced Studies in Theoretical Physics* 13(7), 319-326.
4. Shirahata, T. (2019) Characterization of the kinetic properties of tetraethylammonium (TEA)-sensitive potassium conductance in a mathematical model of snail neurons. *Advanced Studies in Theoretical Physics* 13(4), 189-194.
5. Shirahata, T. (2019) Evaluation of the difference between a transient voltage-dependent calcium conductance and a stationary calcium-inhibited calcium conductance in a

mathematical model of snail RPa1 neurons. *Advanced Studies in Theoretical Physics* 13(1), 11-22

## 2018

1. Tokumura T., Nishio K., Kurita T., (2018). Validated HPLC Theophylline Assay Method for Cleaning Validation on an Automatic Packaging Machine. *Sch. Acad. J. Pharm.* 7(9), 414-416.
2. Tokumura T., Yasumoto A., Kurita T., (2018). Validated HPLC Acetaminophen Assay Method for Cleaning Validation on an Automatic Packaging Machine. *Sch. Acad. J. Pharm.* 7(10), 438-441.
3. Tokumura T., Yasumoto A., Kurita T., (2018). A Validated HPLC Ketotifen Fumarate Assay Method for Cleaning Validation on an Automatic Packaging Machine. *Sch. Acad. J. Pharm.* 7(11), 460-463.
4. Tokumura T., Yasumoto A., Kurita T., (2018). A Validated HPLC Nicotinamide Assay Method for Cleaning Validation on an Automatic Packaging Machine. *Sch. Acad. J. Pharm.* 7(12), 470-473.
5. Shirahata, T. (2018). The relationship between burst regularity and spike-generating sodium conductance in a mathematical model of snail RPa1 neurons. *Advanced Studies in Theoretical Physics* 12, 151-156.
6. Shirahata, T. (2018). Numerical study of the bistability of a mathematical model of neocortical pyramidal neurons. *Applied Mathematical Sciences* 12, 105-114.

## 2017

1. Tokumura T., Yoshida N., Mori-Yasumoto K., Shiota O., Kurita T., (2017). Degradation Rates and products of fluticasone propionate in alkaline solutions. *J Pharmaceutical Analysis* 7, 297-302.
2. 川上充希, 北田里華, 栗田拓朗, 徳村忠一, (2017). 小児用錠剤粉砕調剤時の乳鉢・乳棒への吸着を防止する方法. *YAKUGAKU ZASSHI* 137(8), 1017-1025.
3. Shirahata, T. (2017). Dependence of the ghostbursting model's dynamical states on the current injected into the dendritic compartment and the ratio of somatic to total surface areas. *Advanced Studies in Theoretical Physics* 11, 561-565.
4. Shirahata, T. (2017). A Mathematical Modeling Study of Dopaminergic Retinal Neurons under Hyperpolarized Conditions. *International Journal of Theoretical and Mathematical Physics* 7, 4-8

## 2016

1. Matsuyama S., Kurita T., and Tokumura T., (2016). Degradation Rate of Ebastine in an Aqueous Solution at pH 1.2 and the Effects of Cyclo dextrins. *Sch. Acad. J. Pharm.* 5(4), 87-91.
2. Tokumura T., Kawakami M., Kitada R. and Kurita T., (2016). Validated Assay Method for Fexofenadine Hydrochloride in Powder Preparations of Allegra® 60 mg Tablets to Develop a New Method for Grinding Tablets on Dispensing in Japan. *Sch. Acad. J. Pharm.* 5(8), 359-362.
3. Shirahata, T. (2016). The Relationship of Sodium and Potassium Conductances with Dynamic States of a Mathematical Model of Electrosensory Pyramidal Neurons. *Applied Mathematics* 7(9), 819-823.
4. Shirahata, T. (2016). Dynamics of a Pituitary Cell Model: Dependence on Long-Lasting External Stimulation and Potassium Conductance Kinetics. *Applied Mathematics* 7(9), 861-866.
5. Shirahata, T. (2016). Quantitative evaluations of the contribution of the excitatory ionic conductance to repetitive spiking in a mathematical model of medial vestibular

nucleus neurons. *Acta Biologica Hungarica* 67(2), 215-219.

6. Shirahata, T. (2016). Dynamic Behavior Induced by the Cooperation between Two Different Ionic Conductances in a Mathematical Model of Vibrissa Motoneurons. *Applied Mathematics* 7(10), 1043-1048.
7. Shirahata, T. (2016). The Effect of Variations in Ionic Conductance Values on the Suppression of Repetitive Spiking in a Mathematical Model of Type-A Medial Vestibular Nucleus Neurons. *Applied Mathematics* 7(10), 1134-1139.
8. Shirahata, T. (2016). Evaluating Bistability in a Mathematical Model of Circadian Pacemaker Neurons. *International Journal of Theoretical and Mathematical Physics* 6(3), 99-103.
9. Shirahata, T. (2016). The Effect of Variations in Ionic Conductance Values on the Dynamics of a Mathematical Model of Non-Spiking A-Type Horizontal Cells in the Rabbit Retina. *Applied Mathematics* 7(12), 1297-1302.
- 10.

## [著書・訳書]

1. 徳村忠一(2017) 共著 改訂 8 版、「製剤化のサイエンス」(寺田勝英・高山幸三 編集) ネオメディアカル, pp.132-152
2. 同上(2019) 改訂 9 版, pp.134-154
3. 同上(2020) 改訂 10 版 pp. 134-154.

## [邦文総説・解説等]

4. 徳村忠一 (2016) シクロデキストリン, 香川県薬剤師会会誌, 39-43.

## 口頭発表・学会発表 (2020年4月~2021年3月)

1. 石原凜子, 跡部一孝, 徳村 忠一 (2021). フルチカゾンプロピオン酸エステル含有リポソームの LibMec 法による調整の試み. 日本薬学会第 141 年会 3 月 広島.
2. 柿木志織, 徳村 忠一 (2021). リン酸水素カルシウム使用後の乳鉢・乳棒表面のカルシウム残留量. 日本薬学会第 141 年会 3 月 広島.

## 特許

特許出願 (日本)

8 種の植物を含む食品組成物.  
発明者 徳村忠一, 梶川万維, 眞部康寛  
出願人 結願株式会社  
特許願 特願 2020-116545 (2020年7月6日)

分包機清掃剤.  
発明者 徳村忠一, 宮本裕子  
出願人 三菱ケミカルフーズ株式会社  
株式会社スモールビレッジ  
特許願 特願 2020-178002 (2020年10月23日)

## その他、新聞報道等

1. 徳村忠一 (2016). 研究室紹介 医薬品を支える人材の育成を目指して, 薬剤学 76(3) 144-149.





## 医療薬学講座

### Laboratory of Pharmaceutical Health Care and Sciences

#### 教員

**教授 二宮昌樹** 着任年月日：2008年10月1日  
最終学歴：1981年3月徳島大学大学院薬学研究科修士課程修了  
博士（医学） 薬剤師  
前職：香川大学医学部附属病院薬剤部副部長

**教授 飯原なおみ** 着任年月日：2005年4月1日  
最終学歴：1983年3月東京理科大学薬学部薬学科卒業  
博士（薬学） 薬剤師  
前職：香川大学医学部附属病院薬剤部薬剤主任

**教授 池田博昭** 着任年月日：2016年4月1日  
最終学歴：2004年3月 広島大学大学院医歯薬保健学研究科 博士（薬学） 実務実習指導薬剤師  
前職：北陸大学薬学部教授

**教授 芳地 一** 着任年月日：2020年4月1日  
最終学歴：徳島大学医学研究科 博士（医学） 薬剤師  
前職：香川大学医学部教授・附属病院 薬剤部長

**講師 中妻 章** 着任年月日：2005年4月1日  
最終学歴：2001年3月岡山大学大学院自然科学研究科博士課程後期修了 博士（薬学） 薬剤師  
前職：株式会社山田養蜂場研究開発部

**助教 岡田岳人** 着任年月日：2013年4月1日  
最終学歴：千葉大学大学院 医学薬学府  
博士前期・後期三年博士課程 修了  
博士（薬学） 薬剤師

#### 教育の概要

##### 担当科目：救急医療学（2年後期、0.5単位、中妻、二宮）

医療に係わる者として、緊急時における心肺蘇生方法の修得、大規模災害時におけるトリアージ、薬剤師の役割について、講義・SGDを行い、救急医療の基礎の習得をめざした。心肺蘇生法は、日本赤十字社の救急法をベースにした、胸骨圧迫、体外除細動器（AED）の使用法の実習、薬剤師の視点で避難所を運営するゲームを行った。例年、臨床工学科と合同で実施しているトリアージ実習は、新型コロナウイルスの感染拡大防止対策のため中止とし、患者の訴え、症状を元にトリアージ判定を行うレポートで対応した。

##### 担当科目：医薬品安全性学（3年後期、1.5単位、二宮）

疾病の薬物治療では治療薬の有効性と副作用のバランスを保ち適切な医薬品が使用されている。医薬品安全性学（1.5単位）では、医薬品による有害事象（副作用）が生じる機序を理解し、医薬品の適正使用における薬剤師の役割を考察する能力を得ることを目的としている。代表的な医薬品の副作用と初期症状及び対処方法、相互作用等の安全性確保などについて要点を整理した資料を用いて学習効果の向上を図り、患者の訴えや症状から副作用が重篤化しないように初期段階で対応できる知識など臨床で求められる基礎的な知識を習得できた。また、フィジカルアセスメント演習により副作用の初期症状に関する基礎知識を習得できた。講義は、後期週1回15コマ行った。

##### 担当科目：臨床薬剤学（4年前期、1.5単位、二宮）

臨床薬剤学（1.5単位）では、高度化する医療体制におけるチーム医療、地域保健によるセルフメディケーションの重要性を理解し、社会に貢献できる薬剤師の役割、使命を考察することができる能力の習得を目的としている。医薬品の管理や調剤などの薬剤師業務、医薬品の臨床応用の具体例を学び、模擬症例を通して診療ガイドラインや添付文書から病態と処方内容を理解し、処方解析を行い、医薬品適正使用を実践するために必要な知識を習得できた。講義は、前期週1回15コマ行った。

##### 担当科目：薬剤師の心構え（1年前期、0.5単位、池田、飯原、中妻）

薬学の歴史、現状、これからの薬剤師についての講義、及び高齢者体験（白内障や加齢黄斑変性など）を通じて、医療人として求められるホスピタリティの精神、薬剤師の役割などを学べるようにした。

##### 担当科目：調剤学（3年前期、1単位、二宮、池田、中妻、岡田）

調剤学では、処方せんの読み方、調剤業務に必要な基礎知識、技能の習得を目指した。計数、計量調剤で必要となる計算問題の作成と実施し、新型コロナウイルス感染症対策にともない、遠隔授業で実施した。また、技能については、調剤実技の動画の活用と、調剤時の注意点について解説を行った。

##### 担当科目：地域医療学2（3年前期、0.5単位、芳地）

地域医療学における保健・福祉分野で活躍する薬剤師の役割について学習することを目指した。地域保健・福祉における薬剤師の使命と責任感を学び、福祉・介護に関わる社会福祉保障制度や多職種連携および災害時の薬剤師連携体制等に

ついて解説し理解を深めた。

**担当科目：地域医療学3（3年前期、0.5単位、池田、中妻）**

地域医療学では、地域医療という考え方のもと薬剤師による、在宅医療、地域保健、福祉、プライマリケア、セルフメディケーションの働きかけを行い、地域住民の健康回復、維持、向上の役割を学ぶ。また、在宅医療で遭遇する人工呼吸器について医師から患者の状態、ケアについて解説し理解を深めた。

**担当科目：早期臨床体験学習（1年後期、1.0単位、池田、二宮）**

90分×2コマを担当し、病院内で医療業務を行っている職種の紹介と病院薬剤師の業務と他職種との連携について概説した。また、体験学習後のグループ討議・発表にタスクとして携わった。

**担当科目：医薬品情報学（2年前期、1.0単位、飯原、岡田）**

医薬品情報学では、医薬品情報を使う・伝える力を身につけさせるために、医薬品情報や患者情報の基本的事項について説明し、また、医薬品情報や論文などの検索に取り組みさせた。医薬品に関する様々な情報に関心をもたせるために、新聞記事の利用にも取り組んでいる。

**担当科目：医薬品・医療ビジネス（5年前期、1単位、池田、中妻、芳地）**

医薬品・医療ビジネスでは医薬品産業が単に創薬に留まらず、医療に加えて健康産業とも深い関連性を有していることを理解し、医薬品および医療をビジネスとしてとらえられる視点をもてることを目的としている。本年度は、新型コロナウイルスの感染拡大防止対策のため Google Classroom による遠隔授業で行った。日本における医療の根幹となる社会保障制度を説明し、薬価制度、創薬の現状と問題、医薬品産業・医薬品関連産業の現状と問題点等についても概説して、ビジネスとしての医療・医薬品について学ばせた。連携薬局医療については調剤薬局・病院薬剤部の薬剤師にも現状等を講義いただいた。

**担当科目：医療社会薬学コミュニケーション学（5年前期、1単位、池田、中妻）**

医療社会薬学コミュニケーション学では、単に患者とのコミュニケーションに留まらない薬剤師業務におけるコミュニケーション能力の必要性を学び、コミュニケーション能力の向上を目的とした。例年5月に集中講義で行っているが、2020年度は COVID-19 による緊急事態宣言により、学生の移動制限があり5月に実施せず、2021年2月に4年生と一緒に実施した。一部実習が継続中であるため、Google Classroom および Google Meet による遠隔配信、授業の撮影・映像配信を行い、実習後の空き時間で受講できるようにした。他の医療者

とのコミュニケーションを潤滑に行いチーム医療に貢献できる能力や患者の副作用徴候や、検査値からすみやかに理解する能力等を養うことができた。

**担当科目：チーム医療学（4年通年、1.5単位、二宮、中妻、岡田）**

近年の高度化する医療では、さまざまな医療従事者と協力し、患者へより良い医療を提供する「チーム医療」が必要とされている。チーム医療学では、多職種連携教育 IPE（Interprofessional education）として、徳島文理大学の診療放射線学科3年生、臨床工学科4年生の学生それぞれと、職種の技能・知識についてグループ学習を行った。例年、医学部4年生とSGDを行っているが、2020年度は COVID-19 拡大防止のため、中止とした。

**担当科目：症候学（4年前期 1単位、二宮、飯原、池田、中妻、岡田）**

症候学では、患者の示す様々な訴えや身体所見から、病態を把握・疾患を想定し、的確な受診勧奨あるいはセルフメディケーションを支援について学ぶことを目的とした。発熱、頭痛、動悸、腹痛など、臨床現場で遭遇する患者の訴えから、予測される疾患をリストアップし、それぞれの違いについて TBL 形式で行った。また、臨床医による症候の原因、疾患について解説を行った。さらに、医薬品使用において患者に指導しておくべき事項や副作用についても学ばせた。

**担当科目：治療薬学演習2,3（4年前期・後期、それぞれ2単位 二宮、飯原、池田、芳地、中妻、岡田）**

治療薬学演習 2,3 では、薬学臨床における代表的な疾患、がん、高血圧症、糖尿病、心疾患、脳血管障害、精神神経疾患、免疫・アレルギー疾患、感染症（8疾患）の薬物治療に加え、消化器疾患、泌尿器、眼・皮膚・骨疾患、漢方薬を用いた治療について、症例を元に PBL 形式で行った。事前に症例に関する治療薬、病態について復習を促し、開始前に治療薬学担当の教員による復習授業を行うなど、SGD ヘススムーズに参加できるように行った。治療薬学演習2については、COVID-19 による緊急事態宣言により、Google Classroom によって実施。SGD はグループごとにクラスを作成し、討論はチャット、コメント機能を活用して行った。3年次までに学んだ、治療薬学を臨床に近い形で再度学ぶ機会となり、治療薬の選択の理由、患者フォローアップの意義について理解を深めた。

**担当科目：実践地域医療学1（4年前期、0.5単位 飯原、岡田）**

地域医療において信頼される薬剤師となるためには、患者や住民ならびに他の医療関係者の目線に立った態度や行動をとることが重要である。模擬患者の協力のもと、患者の価値



観や思いを理解させるとともに、コミュニケーションスキルや適切に情報を収集し提供する力を身につけさせた。

**担当科目：医薬品評価学（4年前期、1単位 飯原）**

医薬品情報を適切に評価し、創造する力を養うために、臨床研究デザインや臨床研究企画時の注意事項、医薬品評価指標や医薬経済指標などについて理解させた。また、医薬品のリスクベネフィットバランスについて考える力を身につけさせた。

**担当科目：実務実習事前学習（4年後期、5単位 二宮、飯原、池田、中妻、岡田）**

5年からの病院・薬局実務実習に向けて、調剤業務および患者接遇関係において香川大学 SP 研究会の応援を得て行った。課題内容は、基本的な計数・計量調剤、初回インタビュー、投薬説明など実際の医療現場で必要とされる技能習得を目指す内容を行った。CBT終了後からOSCEまでの約2週間は、香川薬学部全教員による習熟度の評価を行い、技能修得が不十分な部分を指摘することで、技能の向上を図った。また、学生が自主的に練習できるように1,2校時も実習室を開放し、医療薬学講座スタッフおよび現役薬剤師による指導を行った。

**担当科目：病院・薬局実務実習（5年通年、計20単位 二宮、飯原、池田、芳地、中妻、岡田）**

病院実務実習（10単位）、薬局実務実習（10単位）では、実際に医療現場で活躍する薬剤師とともに、薬剤師が関わる業務を体験し、医療の担い手として求められる薬剤師について学ぶことを目標とし、調剤をはじめとする技能や、チーム医療、投薬で重要となるコミュニケーション等一連の知識（問題解決）・態度の習得をめざした。2020年度は44名が、香川県下をはじめ中国・四国地区および大阪、鹿児島、沖縄の病院24施設、薬局41施設で実習を行った。医療薬学講座では、指導薬剤師と大学の連携体制、香川薬学部教員と実務家教員の連携体制、健康問題を抱える学生への支援、実習に係わるトラブル対応への支援等に中心的な役割を果たした。2020年度は、1月に実習オリエンテーションを行い2月下旬より実習が開始した。4月16日にCOVID-19による緊急事態宣言が発出され、実習の中断・中止、施設・時期の変更が発生した。1期については、4月中旬より遠隔実習を行った。感染拡大防止対策として、県外でのふるさと実習については、実習開始2週間前に帰郷し、健康観察などの対応を行った。また、教員による訪問指導は、県外は中止し、実習の進捗確認等は、メールまたは電話によるヒアリングで行った。たま、全施設でFujiXeroxのWebによるポートフォリオを採用したことで、日々の実習内容について教員、指導薬剤師との間で、実習状況の把握が行えた。

**担当科目：実践治療薬学1（5年後期、1単位 二宮、池田、飯原、芳地、中妻、岡田）**

実践治療薬学1では、病院・薬局実務実習で学習した代表的な疾患（がん、高血圧症、糖尿病、心疾患、脳血管障害、精神神経疾患、免疫・アレルギー疾患、感染症）およびその他の薬物治療に関する知識、患者への服薬指導に必要な知識・態度について確認し、グループワーク形式で学習した。実務実習期間中に体験した症例についてまとめ、グループ内で発表、解説を行った。症例をお互いに発表することで、個々の実習では体験できなかった症例を学べることが出来た。

**担当科目：最新医療学（5年後期、0.5単位 飯原）**

最新医療学では、変貌する社会の課題と薬剤師のあり方について考える力を身につけるとともに、臨床研究の限界を理解して臨床研究結果を適切に解釈する力、臨床研究を立案する力を身につける事を目標とした。

**担当科目：アドバンスト教育臨床薬学コース実務実習（5年後期、1.5単位 二宮、飯原）**

アドバンスト教育臨床薬学コース実務実習では、薬学科5年生が香川大学医学部総合内科（梶形 尚教授）の症例カンファレンスに参加した。カンファレンス参加に先立ち、事前に、循環器系用薬や抗菌薬をテーマにしたSGDを行い、さらにカンファレンス参加後のSGDで症例に関する知識を深めた。薬学生は医学生と同席してカンファレンスに参加することで、チーム医療を理解することができ、医学専門用語や最新の薬物療法に関する知識を深めることができた。

**担当科目：特別実習1, 3（1,2年後期、0.5単位 二宮、池田、中妻）**

特別実習1および3では、早期から大学での研究について考える機会として行われるが、医療薬学講座の特別実習では、臨床の現場に近い研究を体験する機会とした。地域医療（香川県薬剤師会主催のお薬相談会）への参加、連携薬局（かたもと駅前薬局）での健康サポート体験を行い、など地域での薬剤師の役割についてレポートにまとめて発表を行った。

**担当科目：実践臨床薬学（大学院、2単位、二宮）**

大学院科目実践臨床薬学（2単位）では、安全で適正な薬物療法を実践するために、医療チームの中で薬剤師によるファーマシューティカル・ケアを実践するために必要な知識を習得することを目標とした。近年、開発の目覚ましい分子標的薬を中心に消化器腫瘍、乳腺腫瘍、血液腫瘍などに対する抗悪性腫瘍化学療法について概説した。また、がん性疼痛の病態生理、症状、薬物療法を概説した。

**担当科目：薬剤疫学（大学院、2単位、飯原、池田）**

薬剤疫学では、医薬品の有効性、安全性、経済性について薬剤疫学手法を用いて実際に評価できるようになるために、解析手法の特徴ならびに注意点を実践例から具体的に学べるようにした。

**担当科目：医療統計学（大学院、2単位、飯原）**

医療統計学では、臨床研究を自らデザインし解析できるようになるために、各種統計手法の特徴や利用上の注意点について、模擬データを用いるなどして実践的に学べるようにした。

**担当科目：先進医療薬学特論 A/B（大学院、2単位、二宮）**

ナノ物質工学専攻博士前期課程の先進医療薬学特論 A 及び B（各 2 単位）では、がん薬物治療を実践するために必要な知識を習得することを目標とした。近年、開発の目覚ましい分子標的薬を中心に消化器腫瘍、乳腺腫瘍、血液腫瘍などに対する抗悪性腫瘍化学療法及びがん性疼痛に対する鎮痛薬の適正使用について概説した。また、抗がん剤調整時の薬剤曝露による環境汚染について概説した。

**管理・運営に係ること**

二宮昌樹：実務実習委員会（委員長）、事前学習委員会（委員長）、教務委員会委員、将来計画委員会委員、OSCE 実施委員会、香川県実習調整委員会委員、病院・薬局実務実習中国・四国地区調整機構委員長、病院・薬局実務実習近畿地区調整機構オブザーバー

第 2～7 回オープンキャンパス 体験実習担当

飯原なおみ：生涯学習委員会（委員長）、学生委員会（委員長）、OSCE 実施委員会、セクシャルハラスメント防止委員会、総務委員会、動物実験委員会、薬友会、医薬品情報学教科担当教員会議担当者、レギュラトリーサイエンス分野教科担当教員会議担当者

第 3, 5 回オープンキャンパス 体験実習担当

池田博昭：早期体験学習委員会（委員長）、ワークショップ委員会（委員長）、病院薬局実務実習委員会、事前実習委員会  
第 2～6 回オープンキャンパス 体験実習担当

芳地一：OSCE 実施委員会（委員長）、広報委員会

中妻章：病院薬局実務実習委員会、事前実習委員会、OSCE 実施委員会（ステーション担当責任者）、広報委員会、国試対策委員会、香川県実務実習調整委員会委員、病院・薬局実務実習中国・四国地区調整機構事務局

第 1, 2, 4, 6 回オープンキャンパス 体験実習担当

岡田岳人：国家試験対策委員会 CBT 対策小委員会委員、OSCE 実施委員会委員、生涯学習委員会委員、就職委員会委員

第 2, 4, 6 回オープンキャンパス 調剤体験実習担当

**その他、新聞報道等****[著書・訳書]**

1. 二宮昌樹（2017）「第 7 章医療施設のスタッフと学習のポ

イント」（田口忠緒編、「早期臨床体験テキスト」）ネオメディカル,p57-67

2. 池田博昭, 二宮昌樹, (2016) 【こんなときに使える製剤学】点眼剤 1 本は何回滴下できるのか?, 薬事, 58, pp3317-3320

3. 池田博昭, 高本彩音, 岩崎順也, (2019) 「点眼法 98%間違いない」, 読売新聞朝刊 28 面, 2019.11.7

4. 池田博昭, 高本彩音, 岩崎順也, (2019) 「目薬さし方習った?」, 産経新聞夕刊 4 面・プレミアムプラス 1, 2019.12.5.

5. 池田博昭, 高本彩音, (2020) 「あふれた目薬はパチパチでなく縦、横に拭き取るべき」 産経新聞 WEB プレミアム 2020.12.19,

6. 池田博昭, 高本彩音, (2020) 「目薬正しく使っていますか」 産経新聞夕刊 2021.1.14 および産経新聞（中四国版）2021.1.23

**研究の概要****1. 患者と医療者との関係構築に関する研究（飯原）**

素晴らしい医薬品が開発されても患者が服用しなければ効果はない。医薬品や薬物療法に対する患者の心理について解明し、患者と医療者との関係構築について探求する。

これまでに、患者の服薬や副作用に対する捉え方を評価する Medication Acceptance, Preference and Adherence Scale (MAPAS) を開発した。自己判断で服薬調節をする患者は、薬物療法や医療者に対する不満スコアが高いが、このような関連性は飲み忘れの患者では認められないことを明らかにした。また、がん患者では忍耐スコアが慢性疾患患者に比べて高く、特に化学療法初期の患者では副作用の強い治療を好んで選ぶことを明らかにした。

**2. リアルワールドデータを用いた、医薬品評価・医薬品適正使用のための解析（飯原）**

リアルワールドの医療情報（レセプト情報など）を解析して、医薬品の有効性安全性評価、医薬品適正使用、既存薬の新たな薬効探索（ドラッグ・リポジショニング）に取り組んでいる。

レセプト情報・特定健診等データベース（NDB Japan）を用いた解析では、① 25 歳以上の国民で医薬品を使用した外来患者の 7 割は運転禁止・注意医薬品を使用、② 運転禁止・注意医薬品は、高齢者で 1 日用量の上限を超えてしばしば使用、③ 運転禁止薬を 20 成分/月も使用している高齢者がいる、④ 比較的健康的な高齢者のうち、84 万人/年が骨折を発症、35 万人/年が脆弱性骨折を発症し、脆弱性骨折発症者の 2 割が入院（大体骨頸部骨折に限ると 8 割が入院）、⑤ 中枢神経系用薬の成分数増加（ポリファーマシー）は、高齢者の脆弱性骨折発症リスクを直線的に増加し、この傾向は年齢増加に伴い顕著であることなどを明らかにした。③～⑤は JSPS 科研費 JP15K08121 の助成を受けて実施した。

**3. 漢方処方システムに関する研究（岡田）**



漢方薬に関する化学的・生物学的実験から得られた結果、および漢方治療エビデンスの双方を基にデータベースを構築し、情報・計算科学の手法を駆使した漢方処方システム基礎理論の解析を行っている。

#### 4. 薬物の体内動態、薬効・毒性相関に関する研究 (中妻)

医療現場における実際の薬物療法では、治療効果が明確に認められる一方で、期待される治療効果は得られず副作用のみを被る場合が見受けられる。これらの背景には、薬物の組織や受容体などの感受性のほか、薬物自体の生体内での動きが大きく影響していることが知られている。この場合、組織や作用部位への薬物の移行が不十分であることから、効果を発揮するための至適濃度や暴露時間を確保できないことが一要因となっている。医療薬学講座では、実際の臨床使用における治療効果への影響や副作用の発現に大きく関与する薬物や食品成分の体内動態とその機構を解明することを目標として研究を進めている。

薬物の体内動態は、その薬物を医薬品として適正に使用する際に必要な情報であるが、薬物による効果や副作用を予測するには、薬物の体内での動きを知ることが必須となる。しかしながら、薬物動態研究における留意点は、薬物がそれぞれに特性を持っているため、それらの薬物について一律に説明することができないところにある。そこで、これらの薬物を細胞内へ取り込んだり排出したりする働きを持つ、薬物輸送蛋白の性質を明らかにすることで、どの薬物がどのような動態を示すのか予測できると考えている。そのための方法論として、分子生物学的手法および実験動物を用い、これらの知見を統合して臨床使用が問題となる医薬品や食品成分の体内動態とその発現メカニズムを解明し、有効性や安全性に対して個人差の大きい薬物の使用方法を確立して医薬品の適正使用に貢献したいと考えている。

#### 5. チーム医療に貢献するファーマシューティカル・ケアの実践 (二宮)

抗がん剤治療による好中球減少症や免疫不全患者では、深部真菌感染症に罹患しやすい。トリアゾール系抗真菌薬であるイトラコナゾールは、カンジダ属、アスペルギルス属に対して強力な抗菌活性を示すが、肝臓や消化管におけるCYP3A4代謝を阻害することから相互作用に注意しなければならない。粉末化されたカプセル剤では、難溶性であるため薬物動態に個体差が大きい。一方、溶解補助剤を添加し可溶化された内服液が新規承認されたが、その薬物動態についてはまだ不明な点が多い。血液が病棟での服薬指導業務のなかで、骨髄移植を受けた患者で免疫抑制剤としてシクロスポリンとイトラコナゾール内服液を併用している患者について薬物動態から相互作用を検討した。その結果、カプセル剤を併用した場合と比較して、シクロスポリンの血中濃度が5から10倍上昇し、副作用防止のため減が必要になったことがわかった。この症例では、薬物血中濃度測定を通じて薬物療法の適正化

に薬剤師の職能を発揮できた。

#### 6. 点眼薬物療法の薬剤経済性の検討 (池田)

錠剤やカプセル剤は1錠もしくは1カプセル単位で、点眼剤は5 mLもしくは2.5 mLの1本単位で患者さんに交付する。そのため、錠剤やカプセル剤は処方日数を正確に定めているが、点眼剤は処方日数を正確に定めることはできない。つまり、点眼剤の経済性は分かりにくい状況にあることから、後発医薬品を含めた点眼薬物療法の薬剤経済性の確認を行っている。

#### 7. 医薬品のトレーサビリティに関する研究 (芳地)

医療事故や過誤の原因の多くは医薬品に関することとされている。医療事故や過誤の原因究明のために医薬品のトレーサビリティを研究対象としている。医薬品には種々剤形があり、その医薬品への記載事項として、最低限の項目が決められている。しかし、医療事故や過誤を防止する観点から記載されているとは考え難い。そこで、安全・安心な薬物療法の支援を目的として医薬品のトレーサビリティを研究している。

---

### 外部誌上発表 (2016年4月~2021年3月)

---

#### [原著論文]

##### 2021

1. Tatsumichi T, Tanaka H, Okazaki T, Takahashi K, Suzuki K, Kawakita K, Houchi H, Kuroda Y, Kosaka S.(2021) Uterine sarcoma with posterior reversible encephalopathy syndrome associated with pazopanib. J Clin Pharm Ther 46(1) : 223-226.

##### 2020

1. Ohara E, Bando Y, Yoshida T, Ohara M, Kirino Y, Iihara N (2020) Central Nervous System Agent Classes and Fragility Fracture Risk among Elderly Japanese Individuals in a Nationwide Case-Crossover Design Study. Biol Pharm Bull. 43(2) : 340-347
2. 浦上勇也, 山地康文, 篠永浩, 河田由紀子, 久家哲也, 山本和幸, 飯原なおみ(2020) 医療機関と連携した保険薬局における吸入実技指導が喘息患者の臨床効果に与える影響 日本呼吸ケア・リハビリテーション学会誌 29(1) : 117-124
3. 浦上勇也, 山地康文, 久家哲也, 河田由紀子, 原田亜記, 山本和幸, 飯原なおみ(2020) 3成分配合吸入剤への変更が喘息病態合併慢性閉塞性肺疾患患者の臨床症状に与える影響 日本薬剤師会雑誌 72(7) : 747-751
4. 馬場香菜子, 小原依里, 飯原なおみ(2020) ベンゾジアゼピン受容体作動薬初回使用の実態—継続使用との対比 医薬品情報学 22(1): 35-43
5. Ohara E, Bando Y, Yoshida T, Ohara M, Kirino Y, Iihara N (2020) Fracture risk increased by concurrent use of central nervous system agents in older people: Nationwide case-crossover study. Res Social Adm Pharm . S1551-7411(20) :

30581-7

- 池田博昭, 高本彩音, 池田純子, 河野清尊, 中妻章, 徳村忠一, 森久美子, 飯原なおみ, 芳地一, 二宮昌樹(2020) 点眼の滴下成功率と滴下部位のビデオ解析. YAKUGAKU ZASSHI 140(12): 1455-1462
- Tanaka H, Atagi K, Tatsumichi T, Yamaguchi K, Takahashi K, Kaji M, Kosaka S, Houchi H(2020) Relationship between epidermal growth factor receptor mutations and skin rash in non-small cell lung cancer patients. J Chemother. 32(2) : 83-87.
- 浦上勇也, 高島秀人, 篠永浩, 矢野禎浩, 飯原なおみ(2020) ケア・カフェ®が医療介護福祉職間の地域連携に与える影響 社会薬学 39(2) : 58 – 62
- 田井達也, 山口佳津騎, 渡邊正博, 井上達也, 元木貴大, 田中裕章, 岡嶋由美子, 根ヶ山清, 横田恭子, 加地雅人, 小坂信二, 芳地一 (2020) 抗菌薬適正使用支援活動によるデ・エスカレーションの向上が血液培養陽性患者アウトカムに及ぼす影響 医療薬学 46 (6) : 314-322
- Tanaka H, Atagi K, Tatsumichi T, Yamaguchi K, Takahashi K, Kaji M, Kosaka S, Houchi H (2020) Relationship between epidermal growth factor receptor mutations and skin rash in non—small cell lung cancer patients. J Chemotherapy 32(2):83-87

**2019**

- Iihara N, Ohara E, Bando Y, Yoshida T, Ohara M, and Kirino Y (2019) Fragility fractures in older people in Japan based on the national health insurance claims database. Biol Pharm Bull 42(5):778-785
- Iihara N, Ohara E, Baba K, Nagao S, Bando Y, Yoshida T, Ohara M, and Kirino Y (2019) Decreased risk of fragility fractures associated with statin use in the older Japanese population: a nationwide case-crossover study. BPB Reports; 2(3):35-38
- Yamakado S, Cho H, Inada M, Morikawa M, Jiang YH, Saito K, Nakaishi K, Watabe S, Takagi H, Kaneda M, Nakatsuma A, Ninomiya M, Imachi H, Arai T, Yoshimoto T, Murao K, Chang JH, Chen SM, Shih YC, Zeng MJ, Ke LY, Chen CH, Yoshimura T, Miura T, Ito E.(2019) Urinary adiponectin as a new diagnostic index for chronic kidney disease due to diabetic nephropathy. BMJ open diabetes research & care 7(1) e000661
- 小坂信二, 芳地一, 西山成 (2019) SGLT2 阻害薬投与に伴う代謝変化 腎臓内科・泌尿器科 9(1):13-16

**2018**

- Yoshida K, Uchida H, Suzuki T, Watanabe M, Yoshino N, Houchi H, Mimura M, Fukuoka N (2018) Prediction model of serum lithium concentration. Pharmacopsychiatry 51(3):82-88
- Yamamoto T, Ugai H, Nakayama-Imaohji H, Tada A, Elahi M, Houchi H, Kuwahara T (2018) Characterization of a recombinant bacteroides fragilis sialase expressed in Escherichia coli. Anaerobe 50:69-75
- Yanagawa H, Nokihara H, Yokoi H, Houchi H, Nagai M, Yamashita R, Suganuma N, Hyodo M (2018) Present status and perspectives on future roles of Japanese clinical research coordinators. J Clin Med Res 10(12):877-882
- Tanaka H, Takahashi K, Yamaguchi K, Kontani K, Motoki T, Asakura M, Kosaka S, Yokomise H, Houchi H (2018) Hypertension and proteinuria as predictive factors of effects of bevacizumab on advanced breast cancer in Japan. Biol Pharm Bull. 41(4):644-648

**2017**

- Iihara N, Ohara E, Nishio, T., Muguruma, H., Matsuoka, E., Houchi, H., and Kirino, Y. (2017) Patient Preference for Aggressive Medication Therapies with Potentially Stronger Adverse Drug Reactions Revealed Using a Scenario-based Survey YAKUGAKU ZASSHI 137(9), 1161-1167
- 浦上勇也, 木村功二, 河田由紀子, 枯木始, 須崎晶子, 河崎光彦, 山本和幸, 飯原なおみ. (2017). 節薬バッグを活用した残薬管理の服薬アドヒアランスに与える影響. 医療薬学 43(6), 344-350.

**2016**

- Iihara N, Bando Y, Ohara M, Yoshida T, Nishio T, Okada T, and Kirino Y (2016) Polypharmacy of medications and fall-related fractures in older people in Japan: a comparison between driving-prohibited and driving-cautioned medications. J Clin Pharm Ther 41(3), 273—278
- Okada T, Afendi FM, Yamazaki M, Chida KN, Suzuki M, Kawai R, Kim M, Namiki T, Kanaya S, and Saito K (2016) Informatics framework of traditional Sino-Japanese medicine (Kampo) unveiled by factor analysis. J Nat Med 70(1), 107—114
- Watabe, S., Morikawa, M., Kaneda, M., Nakaishi, K., Nakatsuma, A., Ninomiya, M., Yoshimura, T., Miura, T., Ito, E.(2016) Ultrasensitive detection of proteins and sugars at single-cell level. Commun Integr Biol. 9(1) e1124201
- Okada T, Takahashi H, Suzuki Y, Sugano S, Noji M, Kenmoku H, Toyota M, Kanaya S, Kawahara N, Asakawa Y, and Sekita S (2016) Comparative analysis of transcriptomes in aerial stems and roots of *Ephedra sinica* based on high-throughput mRNA sequencing. Genom Data 10, 4—11
- Motoki T, Fukuoka N, Yamaguchi K, Watanabe M, Tanaka H, Abe T, Yoshino N, Kosaka S, Houchi H (2016) Int J Clin Pharmacol Pharmacother 1:107-112

**[著書・訳書]**

- 二宮昌樹「第II部 第3章 オーストラリア編」、飯原なおみ「第I部 世界の薬学と日本」「第II部 第6章 ドイツ編」「第II部 第7章 フィンランド編」「第II部 第8章 デンマーク編」、桐野豊編 (2019) 世界薬学探訪記~日本の薬学、薬剤師はどう変わるべきか?~, 徳島文理大学電子出版研究会 (徳島).
- 二宮昌樹、飯原なおみ、中妻章 (2018) 「第1章処方箋監査」「第2章薬袋作成」「第3章疑義照会」「第8章調剤監査」「第18章医療従事者への情報提供—処方提案」(高田充隆編、「薬剤師の技能理論まるごと実践へ第2版」) 京都廣川書店 p1-11, 13-20, 21-30, 79-90, 199-212
- 池田博昭ほか. (2017). ケーススタディで学ぶがん患者ロジカル・トータルサポート 患者との会話から症状を読み取り処方提案しよう!, じほう社 (東京), pp. 185-214.
- 二宮昌樹 (2019) 「10章地域における薬剤師」八野芳己編「コンパス調剤学改定第3版」南江堂 p267-279

**[邦文総説・解説等]**

- 池田博昭 (2018) 「1滴」のチカラを化学する! 点眼剤 レシピプラス Vo1.17 No.4
- 桐野豊, 福山愛保, 宗野真和, 飯原なおみ, 際田弘志, 阿部真治, 松岡一郎 (2018) 世界薬局・薬学部探訪記「デンマーク編」日経ドラッグインフォメーション Online 2018年2月5日, 2月19日, 3月5日
- 桐野豊, 福山愛保, 飯原なおみ, 際田弘志, 松岡一郎 (2018)



10-11日

---

**特許**


---

- 世界薬局・薬学部探訪記「フィンランド編」日経ドラッグインフォメーション Online 2017年12月25日、2018年1月9日、1月22日
- 桐野豊、宗野真和、飯原なおみ、阿部真治、松岡一郎 (2017) 世界薬局・薬学部探訪記「ドイツ編」日経ドラッグインフォメーション Online 2017年11月6日、11月20日、12月4日
  - 土屋浩一郎、丸山徳見、末永みどり、中妻章、山口 巧(2017) 世界薬局・薬学部探訪記「米国編」日経ドラッグインフォメーション Online 2017年9月19日、10月2日、10月16日
  - 飯原なおみ (2017) 「温故知新第22回 財団助成研究・・・その後」ヘルスリサーチニュース. Vol.69, 3.
  - 飯原なおみ (2017) 「高齢者におけるポリファーマシーと転倒に関連した骨折」香川県薬剤師会会誌. 168, 57-59.
  - 池田博昭, 二宮昌樹 (2016) 【こんなときに使える製剤学】点眼剤 1本は何回滴下できるのか?(Q&A/特集), 薬事. 58(15), 3317-3320
  - 飯原なおみ (2016) 「ナショナル・レセプト・データベースを用いた医薬品使用実態」医薬ジャーナル. 52(8), 1881-1886.
  - 飯原なおみ (2016) 「運転等禁止・注意医薬品—高齢者で用量制限のある医薬品は要注意」香川県薬剤師会会誌. 161, 57-59.

- 齊藤和季, 岡田岳人, 平井優美  
特許第4254949号  
「アルカロイドアシル転移酵素をコードする遺伝子  
(国研)科学技術振興機構, (大)千葉大学. 2009年

---

**口頭発表・学会発表 (2020年4月～2021年3月)**


---

- 池田博昭, 中妻章, 森久美子, 飯原なおみ, 芳地一, 二宮昌樹, 夢田羅勝義 新型コロナウイルス感染症(COVID-19)感染対策で行った遠隔配信授業から対面授業へ切替した際の学生の影響 日本薬学会 第141年会 (広島・オンライン開催) 2021年3月26-29日
- 眞鍋聡太, 小原依里, 上野良夫, 玉木真紀子, 伊原木沙智代, 三枝貢, 眞鍋伸次, 飯原なおみ 患者が実感する気虚改善薬の効果 日本薬学会 第141年会 (広島・オンライン開催) 2021年3月26-29日
- 浦上勇也, 溝渕裕規, 山地康文, 飯原なおみ 保険薬局と呼吸リハビリテーションの連携による呼吸機能などの臨床症状の推移 第30回 日本呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会 (京都, オンライン併用) 2021年3月19-20日
- 長尾聡一郎, 池上一志, 小松亜衣, 馬場香菜子, 小原依里, 飯原なおみ 抗不安・睡眠薬重複処方の実態—複数医療機関での処方 第59回日本薬学会・日本薬剤師会・日本病院薬剤師会 中国四国支部学術大会 (松江 オンライン開催) 2020年12月7日-2021年1月6日
- 上野良夫, 眞鍋聡太, 小原依里, 玉木 真紀子, 伊原木沙智代, 三枝貢, 眞鍋伸次, 飯原なおみ 気虚を改善する漢方薬の効果に関する検討 第30回日本医療薬学会年会 (名古屋 オンライン開催) 2020年10月24日-11月1日
- 浦上勇也, 山地康文, 山本和幸, 飯原なおみ 3成分配合吸入剤への変更が喘息病態合併慢性閉塞性肺疾患患者の臨床症状に与える影響 第30回日本医療薬学会年会 (名古屋 オンライン開催) 2020年10月24日-11月1日
- 浦上勇也, 山本和幸, 飯原なおみ 高齢者のポリファーマシーに対する保険薬局の介入効果 日本薬剤師会学術大会第53大会 (札幌 オンライン開催) 2020年10月







## 薬学教育講座

### Laboratory of Pharmacological Education

#### 教員

**准教授 大島隆幸** 着任年月日：2005年4月1日  
 最終学歴：筑波大学大学院農学研究科博士後期課程修了  
 博士（農学）  
 前職：京都大学ウイルス研究所 博士研究員

**講師 植木正二** 着任年月日：2006年10月1日  
 最終学歴：2002年3月京都大学大学院人間・環境学  
 研究科博士課程修了。博士（人間・環境学）  
 前職：大阪大学大学院理学研究科博士研究員

#### 教育の概要

##### 担当科目：化学A（一般総合科目）（植木正二）

1) 教育達成目標とその妥当性：新入生が化学系薬学の専門講義にスムーズに移行できるようにするために、高校から大学初年度レベルの化学の知識を履修することを目標とした。1年生の前期に開講した。

2) 目的達成状況：目標は達成できた。目標を達成するために、下に記すように莫大な時間を費やし、大変な努力をした。しかし、高校までの教育レベルの低さ（ゆとり教育等）には大きな問題があり、逆に言えばわれわれ大学の教員は、そのような国の失策を甘んじて受け入れ、学部1年生の段階でその負の遺産を徹底的に改善するためのシステムを確立しなければならないと考えている。すなわち、以前から入学前（高校3年生）の時点においても、われわれ大学教員は入学予定者に対して指導（入学前教育）を行う必要があると感じており、実際に香川薬学部では入学前教育が積極的に実施されている。

3) 教育内容面での取り組みと改善方策：1年生第1クォーターで化学Aを、1年生第2クォーターでBを開講して、それらを有機的につなげた。数学の基礎知識が不足している学生が多く見られたので、その改善にも莫大な努力をした。つまり多くの時間を費やして補講した。高校で化学を履修してきた学生に対しても、その満足度を上げてもらうために補講した。また、中間試験の実施などで気を引き締めてもらった。

4) 教えるために使った時間：正規の15回分の授業×2科目を行った。

##### 担当科目：化学B（一般総合科目）（植木正二）

1) 教育達成目標とその妥当性：新入生が化学系薬学の専門講義にスムーズに移行できるようにするために、高校から大学初年度レベルの化学の知識を履修することを目標とした。

1年生の前期に開講した。

2) 目的達成状況：目標は達成できた。目標を達成するために、下に記すように莫大な時間を費やし、大変な努力をした。しかし、高校までの教育レベルの低さ（ゆとり教育等）には大きな問題があり、逆に言えばわれわれ大学の教員は、そのような国の失策を甘んじて受け入れ、学部1年生の段階でその負の遺産を徹底的に改善するためのシステムを確立しなければならないと考えている。すなわち、以前から入学前（高校3年生）の時点においても、われわれ大学教員は入学予定者に対して指導（入学前教育）を行う必要があると感じており、実際に香川薬学部では入学前教育が積極的に実施されている。

3) 教育内容面での取り組みと改善方策：1年生第1クォーターで化学Aを、1年生第2クォーターでBを開講して、それらを有機的につなげた。数学の基礎知識が不足している学生が多く見られたので、その改善にも莫大な努力をした。つまり多くの時間を費やして補講した。高校で化学を履修してきた学生に対しても、その満足度を上げてもらうために補講した。また、中間試験の実施などで気を引き締めてもらった。

4) 教えるために使った時間：正規の15回分の授業×2科目を行った。

##### 担当科目：生化学1（大島隆幸）

1) 教育達成目標とその妥当性：各栄養源の代謝や生合成の過程を概説するとともに、その異常に起因する各疾患の発症機序について講義した。

2) 目的達成状況：ほぼ達成

3) 教育内容面での取り組みと改善方策：細胞や分子生物学的な知識に加え、体内循環や組織の恒常性維持まで、生体レベルでの理解を目的に講義をした。また板書を中心とした講義に加え、写真や動画など、視覚として示すことで理解が深まるものに関してはパワーポイントを利用した。

4) 教えるために使った時間：15回×90分

##### 担当科目：微生物学（大島隆幸）

1) 教育達成目標とその妥当性：感染症全般に関する概要、また各微生物のライフサイクルや宿主との関係、さらに新興感染症を初めとする昨今の病原性感染症の現状と今後について講義した。

2) 目的達成状況：ほぼ達成

3) 教育内容面での取り組みと改善方策：デング熱ウイルスやSFTSなど、教科書には詳細が載っていない最新の感染症を交えながら講義をした。また板書を中心とした講義に加え、写真や動画など、視覚として示すことで理解が深まるものに関してはパワーポイントを利用した。

4) 教えるために使った時間：15回×90分

**担当科目：基礎薬学演習 1 (大島隆幸)**

- 1) 教育達成目標とその妥当性：生化学 1 の講義内容の理解を深めるために、パワーポイントを使った講義を行った。
- 2) 目的達成状況：ほぼ達成
- 3) 教育内容面での取り組みと改善方策：今後は小テストを含めた学力の確認を適時行う予定。
- 4) 教えるために使った時間：3回×90分

**担当科目：物理化学 2 (植木正二)**

- 1) 教育達成目標とその妥当性：物理化学 1 で学習した「平衡」の復習、溶液の束一的性質および反応速度論の習得。現象の経時変化を考える上で特に重要な概念である。
- 2) 目的達成状況：概ね達成できた。
- 3) 教育内容面での取り組みと改善方策：毎講義でホームワークを課し、翌講義で詳細な解説を行った。講義では、出来るだけ平易で具体的な説明を心がけた。
- 4) 教えるために使った時間：講義の準備、課題作成と採点等に数日/講義を使った。

**担当科目：基礎薬学演習 2 (大島隆幸)**

- 1) 教育達成目標とその妥当性：微生物の講義内容の理解を深めるために、パワーポイントを使った講義を行った。
- 2) 目的達成状況：ほぼ達成
- 3) 教育内容面での取り組みと改善方策：今後は小テストを含めた学力の確認を適時行う予定。
- 4) 教えるために使った時間：3回×90分

**担当科目：生体機能演習 (大島隆幸)**

- 1) 教育達成目標とその妥当性：生化学 1 および微生物学の講義内容の理解を深めるために、演習とその解説講義を行った。
- 2) 目的達成状況：ほぼ達成
- 3) 教育内容面での取り組みと改善方策：今後は小テストを含めた学力の確認を適時行う予定。
- 4) 教えるために使った時間：2回×90分

**担当科目：物理・化学実習 (植木正二)**

- 1) 教育達成目標とその妥当性：生薬学において基盤となる物理・化学について、有機化学実験・物理化学実験を通じて学ぶ。有機化学実験では、基本となる操作法・精製法を身につけた後、医薬品を化学構造から理解するために、官能基の検出法、化学合成法について実習する。物理化学実験では、物質の物理的性質を学ぶために、物理平衡と反応速度について実習する。
- 2) 目的達成状況：おおむね達成できた。
- 3) 教育内容面での取り組みと改善方策：実験機器の取り扱いについて、できるだけきめ細やかに個人指導を行った。また、ただ手を動かすだけではなく、なぜこのような実験を行

う必要があるのか、その目的意識の自覚化を促進するようにした。

4) 教えるために使った時間：一日 2 時間分を 2 週間ほぼ毎日に集中して開講した。実習の都合上、終了時間が延長になることも多くあった。

**担当科目：微生物学実習 (大島隆幸)**

- 1) 教育達成目標とその妥当性：無菌操作、グラム染色や身近な菌株の単離と同定など、コアカリキュラムに準拠した実習により、それらの手技と知識の習得を目標とした。
- 2) 目標達成状況：ほぼ達成
- 3) 教育内容面での取り組みと改善方策：古典的な薬学実習の内容ではあるが、無菌操作や顕微鏡での菌体の観察など、体験型学習の効果は大きいと実感した。
- 4) 教えるために使った時間：6回×270分

**担当科目：卒業実習 (大島隆幸、植木正二)**

- 1) 教育達成目標とその妥当性：各個別の研究テーマに沿って、その問題点の発見から研究計画の立案、遂行、解決法を学ぶとともに、共同研究を通して高いコミュニケーション能力を習得することを目標とした。
- 2) 目標達成状況：ほぼ達成
- 3) 教育内容面での取り組みと改善方策：細胞分子生物学的な手法を習得するとともに、学会に積極的に参加させることによって、最新の情報を得ることに努めた。さらに学生同士が教え合い、データを共有することで共同研究の重要性と責任を持たせることに注力した。
- 4) 教えるために使った時間：120回×8時間

**管理・運営に係ること**

大島：広報委員会委員、大学院委員会委員、組換え実験安全委員会委員、OSCE 委員会 (ST4 責任者)、初年次教育委員会委員、薬剤師国家試験問題検討委員会 (微生物部会)、薬剤師国家試験問題検討委員会 (生化学部会)

植木正二

入学前教育委員会委員、就職委員会委員、入試委員会委員、初年次教育委員

**その他、新聞報道等**

**研究の概要**

1) タンパク質の翻訳後修飾を介した機能変換機構の解析 (大島隆幸)

21 世紀の生命科学はまさに「ポストゲノム」であり、限られた数のタンパク質はリン酸化や糖鎖付加、メチル化、アセ



チル化など様々な修飾により、その機能が厳密に制御されている。また近年、ユビキチン分子に代表されるポリペプチドの付加による翻訳後修飾というものが注目されつつある。SUMO (small ubiquitin-related modifier) はその代表的な修飾分子であり、その名前の由来からも明らかのように、非常にユビキチンに類似した構造をしている。しかし、その機能はユビキチンとは異なり、修飾されたタンパク質は分解には至らず、タンパク質間の相互作用、活性、局在などにおいて変化を受ける。こういった機能が転写制御、染色体組換え・分配、クロマチン動態などに関与し、個体発生や細胞分化・増殖の制御を行っているということが明らかになってきた。私たちの研究室では、がんウイルスを含め、細胞のがん化や増殖・分化に関わる因子に着目し、この SUMO による分子修飾とそれに関連した化学修飾を介したエピジェネティックな遺伝子発現制御や細胞の環境応答の分子基盤を理解するための研究を行っている。

2) がんウイルスによる発がんメカニズムの解明 (大島隆幸)  
 がんウイルスとは、文字通り「がんの原因」となるウイルスの総称であり、例えばヒトパピローマウイルスは子宮がん、C型肝炎ウイルスは肝がんの原因ウイルスである。私たちの研究室では、このがんウイルスの中でも、特に成人T細胞白血病(ATL)の原因となるHTLV-1による白血病発症メカニズムを明らかにするために、患者由来の細胞を使って細胞分子生物学的なアプローチにより研究を展開している。特にATLを発症した患者由来のがん細胞すべてに発現が認められるウイルス由来の遺伝子産物であるHBZの機能解析を行っている。また肝がんの原因ウイルスであるB型およびC型肝炎ウイルスに関して、ウイルスのライフサイクルを明らかにするとともに発がんメカニズムについて研究を展開している。

外部資金導入実績:

JSPS 基盤研究 (C) JP26430128

3) 部位特異的スピララベル (SDSL) 電子スピン共鳴 (ESR) によるタンパク質分子の動的構造研究 (植木)  
 目的: SDSL-ESR 法を用いて、機能発現の際のタンパク質の構造変化や相互作用をとらえる。また、新規 ESR 装置の開発および測定法の開発。  
 成果: モータータンパク質キネシンにおける基質結合の際の構造変化を測定した。  
 今後の予定: 新規スピララベル法の開発、心筋収縮制御タンパク質トロポニンへの応用。  
 外部資金導入実績: 物質・デバイス領域共同研究拠点。  
 共同研究: 国内他大学との共同研究。

## [原著論文]

### 2021

1. Hagihara, R., Umeno, T., Ueki, S., Yoshihara, D., Fuchi, Y., Usui, K., Sakuma, M., Yamada, K. and Karasawa, S. (2021) Push-Pull Bisnaphthyridylamine Supramolecular Nanoparticles: Polarity-Induced Aggregation and Crystallization-Induced Emission Enhancement and Fluorescence Resonance Energy Transfer. *Chem. Eur. J.* 27, 3039-3046.

### 2020

2. Tanaka, Y., Mukai, R., Ohshima, T. (2020) HTLV-1 viral oncoprotein HBZ contributes to the enhancement of HAX-1 stability by impairing the ubiquitination pathway. *J. Cell. Physiol.* in press.  
 3. Iwamoto, M., Sano, W., Nishioka, K., Ohashi, H., Sugiyama, R., Ryo, A., Ohki, M., Yun, JH., Park, SY., Ohshima, T., Suzuki, R., Aizaki, H., Muramatsu, M., Matano, T., Iwami, S., Sureau, C., Wakita, T and Watashi, K. (2020) The machinery for endocytosis of epidermal growth factor receptor coordinates the transport of incoming hepatitis B virus to the endosomal network. *J. Biol. Chem.* 295, 800-807.  
 4. Kino, K., Ohshima, T., Kawada, T., Kobayashi, T., Miyazawa, H. (2020) A strategy for finding new medicines against the novel coronavirus disease (COVID-19) derived from base pairing with DNA damage. *Global. J. Infectious Disease and Clinical Research.* in press.

### 2019

5. Zhao, C., Somiya, T., Takai, S., Ueki, S. and Arata, T. (2019) Structural dynamics of the N-extension of cardiac troponin I complexed with troponin C by site-directed spin labeling electron paramagnetic resonance. *Sci. Rep.* 9, 1-13.

### 2018

6. Morishita, K., Ueki, S., Fuchi, Y., Murayama, S., Kaneko, T., Narita, N., Kobayashi, S., Hirai, G., Aoki, I. and Karasawa, S. (2018) Self-assembled biradical ureabenzene nanoparticles for magnetic resonance imaging. *ACS Appl. Nano Mater.* 1, 6967-6975.  
 7. Abe, J., Ueki, S., Yamauchi, S., Arata, T. and Ohba, Y. (2018) Double quantum coherence EPR reveals the structure-function relationships of the cardiac troponin C - troponin I complex regulated by Ca<sup>2+</sup> ions and a phosphomimetic. *Appl. Magn. Reson.* 49, 893-910.

### 2016

8. Mukai R., and Ohshima T. (2016) Enhanced stabilization of MCL1 by the human T-cell leukemia virus 1 bZIP factor is modulated by blocking the recruitment of cullin 1 to the SCF complex. *Mol. Cell. Biol.* 36, 3075-3085.  
 9. Klionsky, D. J., et al (including Ohshima T.) (2016) Guidelines for the use and interpretation of assays for monitoring autophagy (3<sup>rd</sup> edition). *Autophagy* 12, 1-222.

## [著書・訳書]

1. 大島隆幸「ヒト T 細胞白血病ウイルス 1 型の利己的な生き残り戦略機構」2016 年 1 月, 香川県薬剤師会 会誌, かがやく, p43-45.

## 口頭発表・学会発表 (2016 年 4 月~2021 年 3 月)

1. 吉本叶多、向井理紗、美濃遥香、丸岡優、山田里緒、大島隆幸 第 61 回日本生化学会 中国・四国支部例会 広

外部誌上発表 (2016 年 4 月~2021 年 3 月)

島

2. 丸岡優、向井理紗、山田里緒、吉本叶多、大島隆幸 第 61 回日本生化学会 中国・四国支部例会 広島
3. 山田里緒、向井理紗、丸岡優、吉本叶多、大島隆幸 第 61 回日本生化学会 中国・四国支部例会 広島
4. 田中由佳、向井理紗、大島隆幸 第 61 回日本生化学会 中国・四国支部例会 広島

社会貢献
------

その他、新聞報道等
-----------

受賞

1. Takayuki Ohshima. The year in JBC: 2020



## 中央機器室

### Center for Instrumental Analysis

#### 教員

教授 山口健太郎 兼任 (解析化学講座)

准教授 竹内一 兼任 (衛生薬学講座)

講師 小原一朗 着任年月日: 2010年 4月 1日  
博士 (工学)

#### 教育の概要

##### 担当科目: 物理 A (小原)

到達目標: 剛体の運動を理解することは、分子のさまざまな特徴を理解するうえで極めて重要であり、上級学年で習っていく物理系薬学のみならず薬学全体を理解するうえで必要なものである。この物理学 A では、主に古典力学に関連した以下の各項目を習得目標とする。

- ①知識 (理解) ②態度 (関心・意欲) ③技能 (表現)  
④思考・判断

①, ④の観点で以下を目標とする。

[1] 物理系薬学の基礎となる数学的知識、技法を身につける。

[2] 剛体に加わる力の種類による運動の違いを式や図で理解して説明できる。

[3] 運動方程式やエネルギー保存則を用いて単一の剛体および剛体間の振る舞いを決定することができる。

[4] さまざまな運動についても運動方程式を立て、その振る舞いを説明することができる。

②, ④の観点は、講義中の TBL において問われた物理現象に関する質問に対する関心や回答から評価する。

方策: 薬学を学ぶ上で必要な物理学の基礎力を身につけるために、物質および物体間の相互作用などに関する基本的知識 (とくに古典力学) を学習に重点を置いた。具体的には、剛体に加わる力による運動、また、その運動量や力学的エネルギーの保存則について理解。次いで、バネや円のような複雑な運動を数学的に取り扱い、その振る舞いを理解する。また、関心、意欲、思考力を高めるためにチーム基盤型学習 (TBL) を行った。

達成度: おおむね達成された。ただし、学生間の意見交換を取り入れた講義においては『意見を言う』ために必要な知識や経験といった、学力により培われる能力と好奇心といった本人の資質に基づく要素も重要であるため、アクティブラーニング達成のための準備的な講義の必要性を感じた。

##### 担当科目: 物理 B (小原)

到達目標: 新入生が物理系薬学の専門講義にスムーズに移行できるようにするために、熱力学を中心とした高校から大学初年度レベルの物理学の知識を履修することを目標とした。1年生第三クォーターにて開講した。

方策: 昨今は数学の知識のみならず、語彙の意味を文脈から抜き出すことができない学生が散見されたので、その改善にも莫大な努力をした。つまり予習に対する結果が伴わないため、講義後の課題を重点的に課し、そのフィードバックに時間を費やした。高校で物理学を履修してきた学生に対しても、その理解度を深めてもらうために他の講義との連携(基礎薬学演習)にて物理学全般の必要な事項について演習をおこなった。また、中間試験やレポート課題の実施することで、大学で必要とされる知力および体力の向上や気づきの芽生えを促した。

達成度: おおむね達成された。ただし、学生間の意見交換を取り入れた講義においては『意見を言う』ために必要な知識や経験といった、学力により培われる能力と好奇心といった本人の資質に基づく要素も重要であるため、アクティブラーニング達成のための準備的な講義の必要性を感じた。学力テストにおいては数学力においては法則を表す式の振る舞いを理解することができていた。一方で、式に数値を当てはめて計算を行う必要がある場合は、文の読解力、適切な法則や式の選択、正確な計算力、といった三つを同時に達成する必要があるために全てを完璧にこなすことが難しい学生も見られた。これらについては基礎力をつける演習が必要と思われるので、他の数学系科目との連携が必要と考える。

##### 担当科目: 分析化学 I (小原)

到達目標: 今日の医薬品分析は様々であり、その技術体系も多岐にわたっている。これらの分析技術のうち、分析化学の基礎、基本的な定量分析の他、分光機器分析について学び、基本的な薬品分析法についてその概要を理解する。

方策: 分析は実際に実験をしないとイメージしにくい分野であるが、講義では装置写真やスペクトル例を例示する工夫をした。毎回の小テストおよび講義時間内の問題演習により、知識の定着を促した。中間テストを実施し、理解度を確認させた。大教室であったので、パワーポイントとプリント配布での解説が中心になった。

達成度: 小テスト得点率はおおむね良く、復習と知識定着ができていていると考えられる。中間テスト結果は、学生学力分布が広すぎるため、対策が必要。

小原: 質量分析、NMR解析等の装置利用説明、実験指導  
薬学実習教育指導 (機器分析)

管理・運営に係ること
------------

小原：C B T実施委員

研究の概要
-------

溶液中での分子間相互作用について、主に質量分析装置を用いた構造解明を研究課題としている。近年試料の高分子量化に伴い、中央機器室にイオンサイクロトロン型質量分析装置 (FT-ICR) が導入された。この装置は従来の装置に比べ 10 倍～100 倍の分解能を持ち、微細な変化を捉えることが出来る。これによれば、分子量の小さい薬剤が相互作用により結合したタンパク質などの生体高分子の質量数を高精度で測定することが出来る。対象となる試料は、特に 2008 年度においては有機錯体、超分子化合物、および生体高分子などであり、これらを中心に質量分析装置による解析を行い、さらに高分解能核磁気共鳴装置によるタンパク質構造解析を行った。2009 年度には、タンパク-タンパク相互作用およびタンパク質の立体構造の解析において、安定して高精度の成果を得ることが可能となった。さらに、タンパク質精製において独自の手順を確立した。

2010 年に着任した小原は、「生体分子および人工モデルによる機能の発現と追跡」と題して、機能分析を用いた研究に着手している。2014 年からは結晶スポンジを用いたレーザー脱離イオン化法に関する研究に従事し、Crystalline Sponge-Laser Desorption Ionization による新しい質量分析法 (CS-LDI MS) の開発に着手している。

---



---

外部誌上発表 (2016 年 4 月～2021 年 3 月)

---



---

**2020**

1. \*Danjo, H.; Masuda, Y.; Kidena, Y.; Kawahata, M., Ohara, K.; and Yamaguchi, K. (2020) Preparation of cage-shaped hexakis(spiroborate)s  
Org. Biomol. Chem., 2020, 00 1-7
2. \*Ohara, K.; Hayashi, Y.; and \*Yamaguchi, K. (2020) Laser Desorption Ionization-Mass Spectrometry of Linear Diphenylenes Encapsulated in Crystalline Sponge  
Bull. Chem. Soc. Jpn. 2020, 93, 963-968.
3. Ohara, K.; and \*Yamaguchi, K. (2020) Combined Analysis Based on a Crystalline Sponge Method  
Analytical Sciences, 2021, 37, 167-175

**2019**

1. Hayashi, Y.; \*Ohara, K.; Taki, R.; Saeki, T.; Yamaguchi, K. (2019) Crystalline sponge-laser desorption ionization (CS-LDI) of unsaturated cyclic organic compounds encapsulated in different electronic environments in pores  
Analytica Chimica Acta, 2019, 1064, 80-86.

2. Ishizuka, T.; Kogawa, T.; Makino, M.; Shiota, Y.; Ohara, K.; Kotani, H.; Nozawa, S.; Adachi, S.; Yamaguchi, K.; Yoshizawa, K.; and \*Kojima, T. (2019) Formation of a Ruthenium(V)—Imido Complex and the Reactivity in Substrate Oxidation in Water through the Nitrogen Non-Rebound Mechanism  
Inorg. Chem., 2019, 58, 12815-12824.
3. \*Tominaga, M.; Kunitomi, N.; Ohara, K.; Kawahata, M.; Itoh, T.; Katagiri, K.; and \*Yamaguchi, K. (2019) Hollow and Solid Spheres Assembled from Functionalized Macrocycles Containing Adamantane  
J. Org. Chem., 2019, 84, 5109-5117.

**2018**

1. Hayashi, Y.; Ohara, K.; Taki, R.; Saeki, T.; \*Yamaguchi, K. (2018). Combined analysis of 1,3-benzodioxoles by crystalline sponge X-ray crystallography and laser desorption ionization mass spectrometry.  
Analyst, 2018, 143, 1475-1481.
2. Hirao, T.; Kim, D-S.; Chi, X.; Lynch, V-M., Ohara, K.; \*Park, J-S.; \*Yamaguchi, K.; \*Sessler, J-L. (2018). Control over multiple molecular states with directional changes driven by molecular recognition. Nat. Commun., 2018, 9, 823.
3. \*Tominaga, M.; Ando, H.; Ohara, K.; Itho, T.; Yamaguchi, K. (2018). Crystal Formation of a Coordination Cage through Spherical Particles Derived from a Tripodal Ligand Containing Adamantane Moiety and Silver(I) Salt.  
Chem. Lett., 2018, 47, 315-317.

**2017**

1. \*Tominaga, M.; Takahashi, E.; Ukai, H.; Ohara, K.; Itho, T.; Yamaguchi, K. (2017). Solvent-Dependent Self-Assembly and Crystal Structures of a Salen-Based Macrocyclic.  
Org. Lett., 2017, 19(7), 1508-1511.

**2016**

1. \*Tominaga, M.; Kawaguchi, T.; Ohara, K.; Yamaguchi, K.; Katagiri, K.; Itho, T.; \*Azumaya, I. (2016). Vesicle Formation of Three-dimensional Trinuclear Silver(I) Complexes Built from Tris-NHC Ligands Bearing Long Alkyl Chains. Chem. Lett., 2016, 45, 1201-1203.
2. \*Tominaga, M.; Noda, A.; Ohara, K.; Yamaguchi, K.; Itho, T. (2016). Synthesis, Hollow Spherical Aggregation, and Crystallization of an Adamantane-derived Azacyclophane Containing Triazine Rings.  
Chem. Lett., 2016, 45, 733-775.
3. \*Ohara, K.; Tominaga, M.; Masu, H.; Azumaya, I.; \*Yamaguchi, K. (2016). Adamantane-based Bidendate Metal Complexes in Crystalline and Solution State.



- Anal. Sci., 2016, 32(12), 1347-1352.
4. \*Kawahata, M.; Komagawa, S.; Ohara, K.; Fujita, M.;  
\*Yamaguchi, K. (2016). High-resolution X-ray structure of  
methyl salicylate, a time-honored oily medicinal drug,  
solved by crystalline sponge method.  
Tetrahedron Lett., 2016, 57, 4633-4636.
5. Sawada, T.; Yamagami, M.; Ohara, K.; Yamaguchi, K.;  
\*Fujita, M. (2016). Peptide [4]Catenane by Folding and  
Assembly. Angew. Chem. Int. Ed., 2016, 55, 4519-4522.
6. Ishizuka, T.; Watanabe, A.; Kotani, H.; Hong, D.; Satonaka, K.;  
Wada, T.; Shiota, Y.; Yoshizawa, K.; Ohara, K.;  
Yamaguchi, K.; Kato, S.; \*Fukuzumi, S.; \*Kojima, T.  
(2016). Homogeneous Photocatalytic Water Oxidation  
with a Dinuclear Co<sup>III</sup>-Pyridylmethylamine Complex.  
Inorg. Chem., 55, 1154-1164.
7. Wang, S.; Sawada, T.; Ohara, K.; Yamaguchi, K.; \*Fujita, M.  
(2016). Capsule-Capsule Conversion by Guest  
Encapsulation. Angew. Chem. Int. Ed., 55, 2063-2066.
8. \*Tominaga, M.; Kawaguchi, T.; Ohara, K.; Yamaguchi, K.;  
Masu, H.; \*Azumaya, I. (2016). Synthesis and crystal  
structures of twisted three-dimensional assemblies of  
adamantane-bridged tris-NHC ligands and Ag<sup>I</sup>.  
CrystEngComm, 18, 266-273.

---

---

口頭発表・学会発表 (2020年4月~2021年3月)

---

---

【一般講演】

1. 林侑加子, 小原一朗, 山口健太郎 (2020) 結晶スポンジ  
レーザー脱離イオン化質量分析, 有機微量分析研究懇  
談会第37回合同シンポジウム, 6月11日~6月12日,  
島根







# 神経科学研究所

## *Institute of Neuroscience*

### *Laboratory for Neural Circuit Systems*

#### 教員

**教授 富永貴志** 着任年月日：2005年 10月 1日  
 最終学歴：1994年 3月筑波大学大学院博士課程修了。  
 博士（理学）  
 前職：理化学研究所脳科学総合研究センター研究員  
 (Staff Scientist)  
 委嘱講師(国立大学法人徳島大学歯学部) 2014年4月7日～  
 招聘型客員研究員(国立研究開発法人産業技術総合研究所)

**博士研究員 富永洋子** (博士(薬学))  
**実験補助員 竹歳麻紀子**  
**実験補助員 谷口愛**

#### 教育の概要

担当科目：

- 生理学
- 国試対策講義
- 病態生理学実習(分担)
- 長期実務実習
- 基礎薬学演習 1 (分担)
- 生体機能演習 (分担)
- 治療薬学演習 2 (分担)
- 治療薬学演習 3 (分担)
- 分子薬理学 (分担)

本講座では「生理学」「基礎薬学演習 1」「生体機能演習」講義を担当する。その他、国試対策講義（基礎薬学 II および医療薬学 I と II）の一部を分担している。  
 生理学では、薬学で必要になる生理学を学習することを目標とした。大半の学生は、意図した目標を達成した。  
 どの講義でも基本的に以下のヒアリングカードと家庭学習用の仕組みを開発して利用して学習効率の向上につとめている。  
 講義用 Web ページを開設し、各回の講義で回収した授業内容のまとめプリントを PDF で全員分まとめて返却している。  
 また、Google form を利用した小テストを実施している。小テストの結果はリアルタイムに Web に反映されるので学生の少なくとも 1 部は繰り返しテストを行い復習している。

#### 研究の概要

##### 研究の概要

研究室の目下の研究分野は以下の 2 つにまたがっている。特筆すべきなのは、2016 年度 7 月から新規に、新学術領域（「個性」創発脳）の計画研究班として研究に参加したことである。

##### [研究分野]

I. 記憶・学習に関わる脳神経回路機構の光計測による研究  
 脳を構成する神経細胞の神経回路がどのように、「記憶」「学習」といった高次機能を実現しているかを研究している。その手法として、一個一個の神経細胞の膜電位を測る電気生理学という手法と、膜電位感受性色素という特別な分子プローブを使って、神経回路の活動を目に見える光の情報として捉

える光計測法を使っている。また、この手法の開発にも携わり、この計測を行うための特殊な顕微鏡の開発を行った。  
 II. 細胞の膜興奮と行動制御の関連の生理学的解析  
 細胞の膜電位の情報統合の役割に着目して、もっとも単純なモデル生物として単細胞動物のゾウリムシを使い、その興奮性膜の性質と行動制御の関係を研究している。最近、繊毛構成タンパク質を RNA 干渉技術を使ってノックダウンすることで起こる行動異常を電気生理学的手法で調べている。

##### 研究分野 I

2020 年は Covid19 感染症のため、多くの学会、集会がオンラインになり実施できなかった。論文はいくつかの領域で順調に出版できた。

2019 年 7 月 沖縄先端科学技術大学院大学 (OIST) の kuhn 教授とともに第 42 回日本神経科学大会第 69 回日本神経化学大会においてシンポジウムをオーガナイズし、講演を行った。

(シンポジウム 2S06 膜電位イメージング：新展開 Voltage Imaging: What's New?, Bernd Kuhn, 富永貴志オーガナイズ) 第 42 回日本神経科学大会 第 62 回日本神経化学大会 2019 年 7 月 26 日 (金) 朱鷺メッセ (新潟市)

2019 年 8 月 新学術領域研究「個性」創発脳 第 4 回領域会議 を香川県琴平町・琴参閣にて主催し、講演を行った。出席者は 100 名を超えた。

2019 年 9 月 沖縄先端科学技術大学院大学 (OIST) の kuhn 教授とともに第 57 回日本生物物理学会の年会においてシンポジウムのオーガナイザーを務め、講演を行った。(シンポジウム 1SCP 生物物理で見る脳神経回路 (オーガナイザー：富永貴志, Bernd Kuhn) 第 57 回日本生物物理学会年会、宮崎県シーガイアコンベンションセンター 2019 年 9 月 24 日～26 日 9 月 24 日)

2019 年 7 月 招待講演者としてシンポジウム 26 第 46 回日本毒性学会学術年会 2019 2019 年 7 月 28 日 (金曜) アスティとくしま 「幹細胞分化から見る子どもの毒性学：シグナル毒性としての中枢神経影響の評価の現状」にて講演を行った。

2019 年 11 月 招待講演者として、新学術領域「個性」創発脳 第 4 回若手の会・技術支援講習会 2019 年 11 月 14 日～15 日会場：自然科学研究機構 岡崎コンファレンスセンター 中会議室にて講演をおこなった。

その他、この分野の第一人者として多くの会合に招待され共同研究を行なっている。

新学術領域の研究者、特に東北大学大学院の種村健太郎教授、国立産業技術総合研究所の高島一郎上席研究員、明治大学梶原利一准教授とは継続的に共同研究を進め、2019 年には 2 報の論文が出版された。2020 年も継続して出版予定である。カナダトロント大、マウントサイナイ病院の岡本教授との共同研究は、2020 年 3 月現在投稿中である。

ウッズホール海洋生物学研究所 (MBL) の谷研究員との共同研究も進行し、2020 年には論文が *Biophysical Journal* に出版予定である。

2019 年 8 月にはロンドンの UCL の Thomas knöpfel 教授の研究室を訪問し、共同研究を行なった。

その他、徳島大学吉村教授との共同研究は、近々投稿予定の状態である。

**研究分野 II**

主に山口大学掘学准教授、奈良教育大学石田正樹教授との共同研究を推進している。また、北大電子研究所の中垣教授とも共同研究を進め、北大でも講演を行なった。2020年には出版された(表紙に採用)。

**外部資金導入実績:**

競争的研究資金については、以下の科研費が継続課題として、またその他の競争的外部資金が採択されたあるいは新規に応募中である(富永)

2021年度 令和3(2021)年度 基盤研究(B) マンマシンインターフェースによるアルツハイマー型認知症患者の脳機能改善(代表 吉村弘) 応募中

2021年度 令和3(2021)年度 基盤研究(C) ゾウリムシの瞬時に敵と仲間を識別する分子機構の研究(代表 掘学) 応募中

2021年度 令和3(2021)年度 基盤研究(C) ゾウリムシアクアボリン8種の細胞内分布と機能(代表 石田正樹) 応募中

2021年度 令和3(2021)年度 基盤研究(B) 心拍が刻む感受性の窓:感性情報処理の神経基盤(代表 高島一郎) 応募中

\*2021年度 令和3(2021)年度 基盤研究(B) 化学物質暴露がもたらす脳回路E/I不均衡の膜電位光計測による検出と解析 代表 応募中

2021年度 令和3(2021)年度 基盤研究(C) 周産期の抗てんかん薬による児脳発達リスク軽減に対するDHA摂取補完療法の基礎研究(代表 伊藤康一) 応募中

\*2021年度 令和3(2021)年度 挑戦的研究(萌芽) 環境中化学物質の中枢神経回路毒性の非侵襲光計測技術の作出:新規内因性信号 代表 応募中

2021年度 令和3(2021)年度 挑戦的研究(開拓) ナノ秒イメージセンサーによる脳計測の新展開(代表 竹原幸生)

\*2021年度 和3(2021)年度 新学術領域研究(研究領域提案型) 全脳マルチスケール膜電位計測による回路興奮・抑制病態アトラスの作成 代表 応募中

2021年度 毒性発現メカニズムを考慮した、生殖発生への影響を評価する手法の高度化に向けた研究(21KD0101) 生殖-発生-発達期の化学物質暴露に誘発される神経-生殖内分泌機能不全のメカニズム解明に基づく生涯リスク(代表 種村健太郎)

2021年度 2020年度 / ムーンショット型研究開発事業 新たな目標検討のためのビジョン公募 こころを読む電子の眼-ハイパーインテリジェントイメージセンサ(代表 下ノ村 和弘) 不採択

2020年度 / 令和2(2020)年度 基盤研究(B) 発達期化学物質暴露による脳内ケモカインネットワークの攪乱と神経回路網の形成不全(代表:石原康宏) 分担 採択

2019年度 平成31年度 基盤研究(A) 「発生発達期の化学物質暴露による神経行動毒性リスク早期予測システム構築に資する研究」 分担 採択

2019年度 平成31年度 基盤研究(C) 「経験依存的な聴覚嗜好性行動を司る神経回路の同定と動態解析」 分担 採択

2019年度 平成31年度 挑戦的研究(萌芽) 「拍動循環と脳機能・脳疾患の関連性:全脳摘出標本によるアプローチ」 分担 採択

2018年度 継続 厚生労働科学研究費補助金(化学物質リスク研究事業) 「家庭用品化学物質が周産期の中枢神経系に及ぼす遅発性毒性の評価系作出に資する研究」(代表:種

村健太郎) 分担 採択

平成28年度 継続 新学術領域(研究領域提案型) 「個性」創発の神経基盤解明にむけた網羅的な神経回路イメージング解析技術の開発」計画研究代表 研究領域「多様な個性」を創発する脳システムの統合的理解(代表:大隅典子) 採択 107,640千円(直接経費:82,800千円、間接経費:24,840千円) 2016-06-30-2021-03-31

平成28年度 継続 新学術領域(研究領域提案型) 「個性」創発脳システムの統合的理解を拓く国際的データシェアプラットフォームの構築」分担(大隅典子代表) 研究領域「多様な個性」を創発する脳システムの統合的理解(代表:大隅典子) 採択 65,650千円(直接経費:50,500千円、間接経費:15,150千円) 2016-06-30-2021-03-31

平成28年度 継続 新学術領域(研究領域提案型) 「研究領域」多様な個性を創発する脳システムの統合的理解」分担(代表:大隅典子) 採択 123,760千円(直接経費:95,200千円、間接経費:28,560千円) 2016-06-30-2021-03-31

過去の応募・採択・終了状況

\*2020年度 / 令和2(2020)年度 基盤研究(B) 興奮抑制2色膜電位可視化解析から見る異常脳の共通神経回路病態 代表 不採択

\*2020年度 / 令和2(2020)年度 挑戦的研究(萌芽) 環境中化学物質の中枢神経回路毒性の非侵襲光計測技術の作出:新規内因性信号から 代表 不採択

2020年度 / 令和2(2020)年度 基盤研究(C) 周産期の抗てんかん薬による児脳発達リスク軽減に対するDHA摂取補完療法の基礎研究(代表:伊藤康一) 分担 不採択

2020年度 / 令和2(2020)年度 基盤研究(C) ゾウリムシの生死をかけた敵と仲間を識別するしくみ(代表:掘学) 分担 不採択

2020年度 / 令和2(2020)年度 基盤研究(C) 発達期口腔環境と社会脳を担う脳内ネットワーク形成に関する基礎的研究(代表:吉村弘) 分担 不採択

2019年度 / 2019年度 AMED-CREST 「全ライフコースを対象とした個体の機能低下機構の解明」発生発達期の化学物質暴露に誘発される神経-生殖内分泌機能不全の経時的の推移メカニズム解明に基づく生涯リスク評価法作出に資する研究(代表:種村健太郎) 分担 不採択

\*2019年度 平成31年度 挑戦的研究(萌芽) iPS細胞を用いた「膜電位生物学」創出のための基盤技術開発 代表 不採択

\*2019年度 平成31年度 基盤研究(B) 「膜電位イメージングによるE/Iバランス脳機能維持機構の全階層的解析」 代表 不採択

2019年度 平成31年度 基盤研究(B) 「前帯状皮質における神経回路特性とその生後発達:高次脳情報処理の機序解明に向けて」 分担 不採択

2019年度 平成31年度 基盤研究(C) 「遺伝子改変繊維毛虫を用いた水質改善方法の検討」 分担 不採択

2019年度 環境研究総合推進費・委託費【問題対応型】【革新型】【課題調査型】 「胎児期ネオニコチノイド複合曝露による神経影響の解析とバイオマーカーの探索」 分担 不採択

2018年度 国際共同研究事業 英国との国際共同研究プログラム(JRPs-LEAD with UKRI) 「神経回路病」モデルマウスの膜電位大規模光学計測解析」 代表 不採択

\*2018年度 挑戦的研究(萌芽) 「細胞膜,オルガネ



ラ膜の静止膜電位の光学計測法の開発」代表 不採択

2018年度 挑戦的研究(萌芽)「赤色波長特性を有する新規膜電位感受性蛍光タンパク質の開発と病態脳解析への利用」(代表:戸井基通)分担 不採択

\*2018年度 科学研究費補助金 基盤研究B「シナプスE/Iバランスと神経回路の同期的発振が支配する脳情報処理原理の可視化解析」代表 不採択

2018年度 科学研究費補助金 基盤研究C「フィードバックによる脳賦活機能を備えた仮想空間摂食嚥下訓練装置の開発」(代表:吉村弘)分担 不採択

平成29年度 科学研究費補助金 基盤研究C「脳内オシレーター分布の探索と発振現象による新規ニューロンネットワーク形成」(代表:吉村弘) (5,000千円)分担 不採択

2016年 ブリストルマイヤーズ スクイブ株式会社 研究助成「リプログラミングと光計測技術の融合による癌免疫治療に応用可能な新規膜関連分子の探索」代表 佐々木克典 (7,000千円)

\*平成28年度 新学術領域(研究領域提案型)「個性」創発の神経基盤解明にむけた網羅的な神経回路イメージング解析技術の開発」計画研究代表 研究領域「多様な個性」を創発する脳システムの統合的理解」(代表:大隅典子)採択 107,640千円(直接経費:82,800千円、間接経費:24,840千円) 2016-06-30-2021-03-31

平成28年度 新学術領域(研究領域提案型)「個性」創発脳システムの統合的理解を拓く国際的データシェアプラットフォームの構築」分担(大隅典子代表) 研究領域「多様な個性」を創発する脳システムの統合的理解」(代表:大隅典子)採択 65,650千円(直接経費:50,500千円、間接経費:15,150千円) 2016-06-30-2021-03-31

平成28年度 新学術領域(研究領域提案型)「研究領域「多様な個性」を創発する脳システムの統合的理解」分担(代表:大隅典子)採択 123,760千円(直接経費:95,200千円、間接経費:28,560千円) 2016-06-30-2021-03-31

平成28年度 科学研究費補助金 基盤研究C「嗜好性を支える神経回路とその動作特性の解明」分担(代表:梶原利一)採択 4,550千円(直接経費:3,500千円、間接経費:1,050千円) 2016-04-01-2019-03-31

平成28年度 科学研究費補助金・基盤研究(C)「味とニオイと情動の合流点:心因性嗅覚・味覚障害の病態機序解明に向けて」(代表:吉村弘) H28-H30 分担 総額 220,000円(期間全体) 不採択

平成28年度 独立行政法人日本医療研究開発機構・次世代がん医療創生研究事業一次公募・応用研究タイプ・研究領域E・ユニット型 次世代がん医療創生研究事業 不採択

「再生医療とがん研究の融合ー加工がん幹細胞の特性解析を基盤にした新規がん治療法の構築ー」(代表:佐々木克典) 分担 総額 6,000,000円 不採択

\*平成27年度 科学研究費補助金 基盤研究C「興奮/抑制(E/I)バランス変調モデルから解析する神経回路振動演算」代表 採択 平成27-29年度(総額:4,680,000)

平成27年度 厚生労働科学研究費補助金(化学物質リスク研究事業)H27-化学一般-007「発生-発達気における低用量の化学物質暴露による成熟後の神経行動毒性の誘発メカニズム解明と、その毒性的評価系の構築に資する研究」分担(代表 種村健太郎)採択 平成27-29年度(分担額総額:4,800,000)

\*平成27年度 挑戦的萌芽「嗅周囲皮質35野のDタイプカリウム電流と海馬関連皮質のてんかん発生機構の解明」代

表 不採択

\*平成27年度 科学研究費補助金 基盤研究A「光学計測による自閉症神経回路機構の解明」代表 不採択

\*平成27年度 新学術領域研究(研究領域提案型)「妊娠期バルプロ酸投与自閉症モデルマウスの興奮-抑制バランス破綻機構の解析」代表 不採択

\*平成27年度 新学術領域研究(研究領域提案型)「メソコピック神経回路の機能計測に特化した共焦点光学系の開発」代表 不採択

\*平成24年 独立行政法人科学技術振興機構 第2回「研究成果最適展開支援プログラム(A-STEP)探索タイプ」「脳回路機能解析のためのセンサー統合スライス標本維持実験システム」代表 採択 平成24-25年度(総額:1,700,000)

平成24年度 科学研究費補助金 基盤研究A「再生医療に多面的治療手段を提供する多能性幹細胞プロファイリングの開発研究」分担(代表 佐々木克典:H24-H27)採択 平成24-26年度(分担額総額:2,400,000)

平成24年度 科学研究費補助金 基盤研究C「快・不快情動が操る嗅覚表象の単離脳イメージング:行動解析との統合的アプローチ」分担(代表 梶原利一:H24-H27)採択 平成24-26年度(分担額総額:800,000)

平成23年度 厚生労働科学研究費補助金(化学物質リスク研究事業)(H23-H25)神経系発生-発達期の化学物質暴露による遅発中枢影響解析に基づく統合的な情動認知行動毒性評価系確立に資する研究 分担(代表:種村健太郎:H23-H25)採択 平成23-25年度(分担額総額:7,500,000)

\*平成22年度 JSTの研究成果最適展開支援事業(A-STEP)探索タイプ「マクロレンズ一体型超高速共焦点カメラユニット」代表 平成22-23年度(総額:1,300,000)

平成21年度 科学研究費補助金 基盤研究C「繊維病に関する繊維毛制御の分子機構の解析」(代表:堀学)分担金 総額:50千円

平成20年度 厚生労働科学研究費補助金(化学物質リスク研究事業)「化学物質の情動・認知行動に対する影響の毒性的評価法に関する研究ー特に遅発性影響の評価系のメカニズム解明による確立ー」分担(代表:北島聡)(H20-H22)(分担額総額:13,500,000)

\*平成19年度 JSTシーズ発掘プログラム:「新規超高速共焦点光学系の開発」代表 平成23-25年度(総額:1,998,000)

\*平成18年度「特色ある教育研究部門(教育学習方法等の改善)」プログラム:「新規創薬アッセイ・実習用電気生理計測ロボットの開発」研究代表者:富永貴志(総額:2,100,000)

平成17年以前は理化学研究所脳科学総合研究センターに属しており運営交付金にて研究をおこなっていた。

外部誌上発表 (2016年4月~2021年3月)

[原著論文] \*Corresponding author  
2021

1. \*Ishida M, Hori M, Ooba Y, Kinoshita M, Matsutani T, Naito M, Hagimoto T, Miyazaki K, Ueda S, Miura K, Tominaga T. A Functional Aqp1 Gene Product Localizes on The Contractile Vacuole Complex in Paramecium multimicronucleatum. J Eukaryot Microbiol. 2021:e12843. PMID: 33501744

**2020**

- Hayase, Y., Amano, S., Hashizume, K., Tominaga, T., Miyamoto, H., Kanno, Y., et al. (2020). Down syndrome cell adhesion molecule like-1 (DSCAML1) links the GABA system and seizure susceptibility. *Acta Neuropathologica Commun* 8, 206. doi:10.1186/s40478-020-01082-6.
- Kajiwara, R\*, Tominaga, T. (2020). Perirhinal cortex area 35 controls the functional link between the perirhinal and entorhinal - hippocampal circuitry *BioEssays* https://dx.doi.org/10.1002/bies.202000084 (Featured cover)
- Kawano, M., Tominaga, T., Ishida, M., Hori, M\*. (2020). Roles of Adenylate Cyclases in Ciliary Responses of Paramecium to Mechanical Stimulation *Journal of Eukaryotic Microbiology* 67(5), 532-540. https://dx.doi.org/10.1111/jeu.12800 (Featured cover)
- Luyben, T., Rai, J., Li, H., Georgiou, J., Avila, A., Zhen, M., Collingridge, G., Tominaga, T., Okamoto, K.\* (2020). Optogenetic Manipulation of Postsynaptic cAMP Using a Novel Transgenic Mouse Line Enables Synaptic Plasticity and Enhances Depolarization Following Tetanic Stimulation in the Hippocampal Dentate Gyrus *Frontiers in Neural Circuits* 14(), 24. https://dx.doi.org/10.3389/fncir.2020.00024
- Koike-Tani, M., Tominaga, T., Oldenbourg, R., Tani, T.(2020). Birefringence changes of dendrites in mouse hippocampal slices revealed with polarizing microscopy. *Biophysical Journal* 118, 2366–2384, May 19, 2020 DOI:https://doi.org/10.1016/j.bpj.2020.03.016
- Tominaga, T., Kuhn, B. (2020). Cutting-edge brain research from a biophysical perspective: symposium synopsis of Session 1SCP at BSJ2019 in Miyazaki, Kyushu, *Japan Biophysical Reviews* 12(2), 261-262. https://dx.doi.org/10.1007/s12551-020-00637-0

**2019**

- Saito, H., Hara, K., Tominaga, T., Nakashima, K., \*Tanemura, K.(2019). Early -life exposure to low levels of permethrin exerts impairments in learning and memory with the effects on neuronal and glial population in adult male mice *Journal of Applied Toxicology* https://dx.doi.org/10.1002/jat.3882 (Featured cover)
- Tominaga, Y., Taketoshi, M., Maeda, N., \*Tominaga, T. Wide-field Single-photon Optical Recording in Brain Slices Using Voltage-sensitive Dye. *J. Vis. Exp.* (148), e59692, doi:10.3791/59692 (2019).
- \*Kajiwara R, Tominaga Y, Tominaga T (2019) Network plasticity involved in the spread of neural activity within the rhinal cortices as revealed by voltage-sensitive dye imaging in mouse brain slices *Front. Cell. Neurosci.* doi: 10.3389/fncel.2019.00020 2019年1月

**2018**

- Tominaga, Y., Taketosh M., Tominaga, T.\*, (2018) Overall assay of neuronal signal propagation pattern with long-term potentiation (LTP) in hippocampal slices from the CA1 area with fast voltage-sensitive dye

imaging *Front. Cell Neurosci.*, 12:389 doi: 10.3389/fncel.2018.00389

**2016**

- Yoshimura, H., Sugai, T., Kato, N., Tominaga, T., Tominaga, Y., Hasegawa, T., Yao, C., and Akamatsu, T. Interplay between non-NMDA and NMDA receptor activation during oscillatory wave propagation: Analyses of caffeine-induced oscillations in the visual cortex of rats. *Neural Networks*. 79:141-149 (2016) DOI: 10.1016/j.neunet.2016.03.012
- \*Tominaga T and Tominaga Y (2016). Paired burst stimulation causes GABAA receptor-dependent spike firing facilitation in CA1 of rat hippocampal slices. *Front. Cell. Neurosci.* 10:9. doi: 10.3389/fncel.2016.00009

**[英文総説]**

- Allen, R.D., Tominaga, T. and Naitoh, Y. (2008) The Contractile Vacuole Complex and Cell Volume Control in Protozoa In: *Osmotic and Ionic Regulation: Cells and Animals*. pp. 69-105 CRC Press, David H. Evans ed.

**[著書・訳書]**

- 富永貴志 「"収縮胞--リズムカルに動く細胞のポンプ"」, 動物の「動き」の秘密にせまる:運動系の比較生物学 (吉村健二郎編) 動物の多様な生き方 pp 38-60 共立出版社 (2009)

**[邦文総説・解説等]**

- 富永貴志 富永洋子(2011)「実践!膜電位感受性色素による神経回路解」*生物物理 Tominaga T and Tominaga Y. Practice for the optical recording method of neuronal circuit analysis. Seibutsu Butsuri* 51(2), 092-095.
- 石田正樹、富永貴志(2006). 「ゾウリムシの収縮胞複合体」*日本原生動物学会誌*, 39: 157-172

---

口頭発表・学会発表 (2020年4月~2021年3月)

---

**[学会発表]**

- Optical membrane potential recordings with voltage-sensitive dye (VSD) enabling recordings of rare and unique neuronal activity patterns Y Tominaga, R Kajiwara, T Tominaga Society for Neuroscience, *Global Connectome (Online)* 20201218-19
- 新学術領域会議「個性」創発脳第5回領域会議 (20201218-19、オンライン)
- Imaging analysis of the long-term potentiation of the mouse hippocampal activityマウス海馬の長期増強を膜電位感受色素によるイメージングで観察する 富永 洋子<sup>1</sup>, 竹歳 麻紀子<sup>1</sup>, 富永 貴志<sup>1</sup> (1.徳島文理大 神経研) 第58回日本生物物理学会20200916-18
- 単回頻回の膜電位感受性色素(VSD)による広視野可視化法 は神経回路の特異な活動や振動現象の発見に役立つ\*富永 貴志<sup>1</sup>, 梶原 利一<sup>2</sup>, 富永 洋子<sup>1</sup> (1. 徳島文理大 神経研, 2. 明治大理工電気工学・電気電子生命) 20200729-0801第43回日本神経科学大会 (オンライン)
- 発達期および成体期におけるマウス嗅皮質神経回路の膜電位イメージング解析 \*待田 耀子, 山田 悠太, 富永 貴志, 梶原 利一 (1.明治大院理工, 2.徳



島文理大香川薬神経科学研, 3. 明治大理工電気工学・電気電子生命) 20200729-0801第43回日本神経科学大会 (オンライン)

6. 「VSDイメージングによる神経回路毒性の網羅的評価」富永貴志、富永洋子 シンポジウム17 低用量低濃度暴露による発達神経毒性評価型の国際標準化に伴う課題と対応 菅野純、種村健太郎 20200630 第47回日本毒性学会学術年会 (オンライン)

#### 特許

1. Tominaga T, Ichikawa M (2002) Experimental apparatus for sliced specimen of biological tissue and specimen holder US 6,448,063 B2 US patent
2. 富永貴志, 山田整 (1999) 生体試料観察装置. 特許 3405252号、特許公開 2000-235147 特許平 11-037739号. 日本.
3. 富永貴志, 市川道教 (1999) 生体組織スライス標本用実験装置および標本保持具. 特許 3405301号、特許平 11-359966号. 日本.

#### 社会貢献

- 1) 論文査読: Journal of Neuroscience Methods, Frontiers of Cellular Neuroscience 等
- 2) Reviewing Editor Frontiers in Cellular Neural Circuit (2014-: IF4.3)
- 3) 国立大学法人徳島大学歯学部 委嘱 講師 生理学
- 4) 日本生物物理学会 分野別専門委員

#### 管理・運営に係ること

教務委員会委員、評価FD委員会委員、CBT実施委員会委員、ネットワーク委員会会長、全学研究推進委員会、薬学共用試験員 CBT委員

#### その他、新聞報道等

富永: Nature Publishing グループの Frontiers in Cellular Neuroscience (Impact Factor 4.2)の Reviewing Editor として Editorial Board に参加している。2014年9月10日より





## 社会貢献

### 社会貢献

#### 「四国の薬学教育改革事業」

(平成 24-28 文部科学省・大学間連携共同教育事業「四国の全薬学部の連携・共同による薬学教育改革」の継続)

##### (1) へき地での実践教育

1. 多和薬局実習、4年生6名、多和薬局、2021年1月26日、22日、29日

#### 「三大学連携事業」

(平成 20-22 文部科学省・戦略的大学連携支援事業「高度な医療人養成のための地域連携型香川県総合医療教育研究コンソーシアム」の継続)

コロナ禍にあり、令和2年度は交流事業の多くが中止となった。

##### (1) 委員会

1. 三大学連携推進委員会、岸本泰司、香川大学医学部、2020年4月24日

##### (2) 連携大学相互の教育指導

香川薬学部において、香川大学医学科3年生5名を香川大学授業科目「課題実習」に関連して研究指導

受入れ講座：解析化学講座(2名)、病態生理学講座(2名)、衛生薬学講座(1名) 徳島文理大学香川キャンパス、2021年1月27日～30日

薬学科6年生2名が、香川大学授業科目「課題実習」として香川大学医学科で卒業実習

#### 「Eラーニング『副作用診断教育プログラム』」

(平成 20-22 文部科学省・社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム委託事業の継続)

<https://kp.manabinaoshi.jp/index.html>

副作用推論力を培うための生涯学習用プログラムを開講(副作用診断講義 A～J 講座、ベーシックレクチャ I～III)  
飯原なおみ、岡田岳人

#### 広報活動

香川県小豆島中央高等学校 出張講義 2020年7月14日

得丸博史

徳島文理こども大学「お菓子な処方せん」2020年8月1日

中妻章、跡部一孝、小林隆信

さぬき市立さぬき南小学校 外部研修 2020年10月27日

中妻章、小林隆信

香川県立三本松高等学校 外部研修 2020年11月12日

芳地 一

香川県小豆島中央高等学校 外部研修 2021年1月27日

施設見学 中妻章、講義 得丸博史

村上学園高等学校 外部研修 2021年1月28日

施設見学 中妻章、講義 芳地 一

島根県薬剤師会高校生セミナー 2020年12月13日 オンライン開催、得丸博史、小林隆信

令和2年度香川県若者県内定着促進支援補助金採択事業 薬剤師セミナー「高校生のための薬剤師セミナー2020“薬剤師と「感染症」”」 2020年11月24日 オンライン開催、野地裕美、小林隆信、中妻章

### 社会貢献 (教員)

#### 官澤 宏 (学部長)

- 1) 徳島文理大学・香川大学・県立保健医療大学三大学連携推進委員
- 2) 編集委員：Editorial board member for Scientific Reports
- 3) さぬき市病院事業運営審議会委員(2015年12月～現在)
- 4) 日本私立薬科大学協会、議決権を有する者(2018年4月～現在)
- 5) 全国薬科大学長・薬学部長会議会員(2014年4月～現在)
- 6) 薬学教育協議会社員(2014年4月～現在)
- 7) 薬学教育評価機構社員(2014年4月～現在)
- 8) 薬学共用試験センターメンバー(2014年4月～現在)
- 9) NPO法人「へき地あゆむ薬剤師」理事(2016年4月～現在)

#### 野地 裕美 (学科長)

- 1) 日本薬学会環境・衛生部会委員(2006年現在～)
- 2) 衛生薬学協議会衛生薬学担当教員会議委員(2006年～現在)
- 3) 日本私立薬科大学協会薬剤師国家試験問題検討委員会衛生薬学部会委員(2006年～現在)
- 4) 香川県環境保健研究センター・研究テーマ外部評価委員会委員(2014年4月～現在)
- 5) 日本薬学会代議委員(2017年2月～現在)
- 6) 香川県ふぐ調理師免許作問委員(2018年4月～現在)
- 7) 香川県食の安全推進懇談会委員(2019年10月～現在)
- 8) 高松市喫煙防止出前講座 講師

以下「五十音順」

#### 飯原 なおみ

- 1) 香川県薬事審議会 委員(2013年2月～現在)
- 2) 香川県ジェネリック医薬品安心使用協議会 委員(2020年9月～現在)
- 3) かがわ医療福祉総合特別区域協議会委員(2018年4月～現在)
- 4) 日本医療薬学会 専門薬剤師認定試験小委員会 委員(2020年7月～現在)
- 5) 日本薬剤疫学会 評議員(2015年11月～現在)

- 6) レセプト情報等の利活用に向けた特別委員会 委員 (2016年2月～現在)
- 7) 薬剤疫学とデータベースタスクフォース 委員 (2018年3月～現在)
- 8) かがわ長寿大学講師 (2011年度～現在)

#### 伊藤 康一

- 1) 高松市、さぬき市、東かがわ市立中学校、高等学校での薬物乱用防止教室実施 (出張講義)
- 2) 高松市喫煙防止出前講座 講師
- 3) 厚生労働省薬物乱用防止啓発訪問事業 講師: 香川県、愛媛県、高知県の小、中、高等学校
- 4) 薬学教育協議会 病態・薬物治療学教科担当教員会 委員
- 5) 日本私立薬科大学協会 薬剤師国家試験問題検討委員会「病態・薬物治療」部会委員
- 6) 令和2年度 教員免許状更新講習講座 講師
- 7) 大学入試共通テスト監督

#### 池田 博昭

- 1) 日本臨床試験学会理事, 日本医療薬学会代議員, 学会誌「医療薬学」「日本老年薬学会雑誌」査読
- 2) 実務実習指導薬剤師, 日本医療薬学会指導薬剤師、JPALSーレベル6, 日本薬剤師研修センター研修認定薬剤師
- 3) 藤井学園寒川高校 (出張講義)
- 4) 大学入試共通テスト監督

#### 加藤 善久

- 1) 日本私立薬科大学協会 薬剤師国家試験問題検討委員会「薬剤」部会委員 (2011年4月～現在)
- 2) 薬学教育協議会 薬剤学教科担当教員会議委員 (2010年4月～現在)
- 3) 日本私立薬科大学協会 教務部長会委員 (2020年4月～現在)
- 4) 日本トキシコロジー学会評議員 (2008年7月～現在)
- 5) かがわ健康関連製品開発地域イノベーション推進協議会委員 (2016年4月～2021年2月)
- 6) J. Toxicol. Sci.誌 Editorial Board (2014.1月～現在)
- 7) 科学技術の状況に係る総合的意識調査(NISTEP 定点調査)員 (2016年11月～2020年11月)
- 8) 日本薬剤学会第36年会 (徳島) 組織委員 (2020年2月～現在)

#### 岸本 泰司

- 1) 国際ジャーナル (PLOS ONE 等) における査読
- 2) Scientific Reports (Springer Nature) 誌 Editor
- 3) International Journal of Alzheimers Disease (Hindawi) 誌 Editor

#### 喜納 克仁

- 1) 論文審査 6件
- 2) Editorial Board Member of "Science Postprint"
- 3) 新世代の生物有機化学研究会 web 作成委員
- 4) 光医学・光生物学会 評議員
- 5) JEMS 第一編集委員、G&E Editorial board members

#### 桐山 賀充

- 1) 論文査読 1件

#### 窪田 剛志

- 1) 大学入試共通テスト監督
- 2) 国際ジャーナル (Developmental Neuroscience 等) 査読

#### 小林 卓

- 1) 日本生理学会・評議員
- 2) 日生理学会・生理学認定エデュケーター
- 3) 「日本生物学オリンピック・香川県予選」(2020年7月19日、徳島文理大学・香川キャンパス)

#### 定本 久世

- 1) 日本比較生理生化学会・評議員、将来計画委員

#### 白畑 孝明

- 1) 日本私立薬科大学協会の薬剤師国家試験問題検討委員会の法規・制度・倫理部会委員
- 2) 一般社団法人薬学教育協議会の薬学と社会教科担当教員会議委員

#### 代田 修

- 1) 独立行政法人 医薬品医療機器総合機構 日本薬局方原案審議委員会 医薬品名称調査会 委員
- 2) 独立行政法人 医薬品医療機器総合機構 医薬品名称専門協議委員
- 3) 公益社団法人 日本薬学会 代議員
- 4) 公益財団法人 薬剤師研修センター 漢方薬・生薬研修会 薬用植物園実習 講師
- 5) 一般社団法人 日本生薬学会 代議員
- 6) 一般社団法人 日本生薬学会 関西支部 委員
- 7) 一般社団法人 薬学教育協議会 生薬学・天然物化学教科担当教員会議 委員
- 8) 大学薬用植物園園長・担当者会議 委員

#### 竹内 一

- 1) Content-Based Instruction 講師、高松第一高校 (2015年～現在)

#### 得丸博史

- 1) 高校生のためのセミナー「ストレスが病気のひきがねに」(オープンキャンパス 2020年8月23日 (香川)、2020





年9月20日(徳島)

- 2) 日本私立薬科大学協会 薬剤師国家試験問題検討委員会  
「薬理学」部会委員
- 3) 薬学教育協議会 病態・薬物治療学教科担当教員会 委員
- 4) 大学入試共通テスト監督

#### 徳村 忠一

- 1) 薬学教育協議会 日本薬局方教科担当教員会
- 2) 薬学教育協議会 薬剤学教科担当教員会
- 3) 日本私立薬科大学協会 薬剤師国家試験問題検討委員会  
「薬剤」部会委員
- 5) 論文査読 3件

#### 中島健太郎

- 1) 大学入試共通テスト監督

#### 中妻 章

- 1) 大橋前老人会(高松市屋島西町)にて出張講義「インフルエンザと新型コロナ」2020年10月10日

#### 中妻 彩

- 1) 香川県薬剤師会研究倫理審査委員会 委員(2020年4月～現在)

#### 二宮 昌樹

- 1) 香川県病院薬剤師会オブザーバー(2010年4月～現在)
- 2) 香川県薬剤師会理事(2012年4月～現在)
- 3) 香川県保健医療大学非常勤講師「薬理学」講義(2012年9月～現在)
- 4) KKR 高松病院治験審査委員会委員(2013年4月～現在)
- 5) 高松市健康都市推進事業-禁煙推進教室  
2016年1月15日 高松市立山田中学校  
2016年2月14日 牟礼コミュニティーセンター

#### 藤島 利江

- 1) 有機化学系強化検討委員会委員
- 2) 国家試験問題検討委員会(物理・化学・生物)委員
- 3) 薬学共用試験センター派遣 OSCE モニター員

#### 芳地 一

- 1) 香川県病院薬剤師会理事・会長・オブザーバー(2005年6月～現在)
- 2) 香川県薬剤師会理事・常務理事・副会長(2005年6月～現在)
- 3) 香川県保健医療大学非常勤講師(2013年4月～現在)
- 4) 香川大学医学部非常勤講師(2020年4月～現在)
- 5) 香川県災害時における医薬品供給体制検討会議議長(2020年11月～現在)

#### 森川 雅行

- 1) Content-Based Instruction 講師、高松第一高校

#### 山口 健太郎

- 1) 薬学教育協議会 分析化学系教科検討委員会
- 2) 日本化学会有機微量分析研究会懇談会 委員
- 3) 日本医用マススペクトル学会 評議員

#### 山田 麻紀

- 1) 日本薬学会 創薬科学賞 審査員
- 2) 日本神経化学会大会 学会賞 選考委員
- 3) 薬学教育協議会 薬理学教科担当教員会 委員
- 4) 日本私立薬科大学協会 薬剤師国家試験問題検討委員会  
「薬理学」部会委員
- 6) 大学入試共通テスト監督
- 7) 日本神経化学会 評議員
- 8) 独立行政法人 日本学術振興会(JSPS) 科学研究費審査員  
基盤S・基盤A、挑戦的研究、国際共同研究強化B(2017-2019 書類審査および合議。公開後につき本年開示)

#### その他、新聞報道等

#### 伊藤 康一

さぬきケーブルTV ニュース(薬物乱用防止教室実施、さぬき市立志度中学校、2021年1月12日)





## 令和2年度 退職、転入、転出

### 退職

学部長 教授 宮澤 宏



令和3年3月17日 卒業式 (学位授与式)

### 転出

教授 岸本泰司 (帝京大学、薬学部)



**ANNUAL REPORT**

**2020**

**VOLUME 15**

**KAGAWA SCHOOL OF  
PHARMACEUTICAL  
SCIENCES**

**TOKUSHIMA BUNRI UNIVERSITY**

Kagawa School of Pharmaceutical Sciences  
Tokushima Bunri University

March 31, 2021

Shido 1314-1, Sanuki  
Kagawa 769-2193, JAPAN

Telephone: +81-87-899-7100

Facsimile: +81-87-894-0181

URL: <http://kp.bunri-u.ac.jp/index.html>

## Preface to the tenth issue of *The Annual Report*

The Faculty of Pharmaceutical Sciences at the Kagawa Campus was founded in April, 2004. Our purpose is to educate students to become professional pharmacists and basic scientists with sufficient knowledge of chemistry, biology, and pharmaceutical thought to practice with humanity and a high sense of ethics and social responsibility. In April, 2005, the Kagawa School of Pharmaceutical Sciences was established with masters and doctoral programs. The undergraduate course of the Kagawa School of Pharmaceutical Sciences was reorganized in April, 2006, into two departments, the Department of Pharmacy (with a six-year training program) and Pharmaceutical Sciences (with a four-year training program). The mission of the Department of Pharmacy (the six-year program) is to train highly qualified pharmacists who are knowledgeable about advanced medical treatment, and who also can contribute to the prevention and treatment of diseases. Society's view of pharmacy education has changed, not only in medical fields but also in other fields, to the fostering of a healthy and safe society. In order to fulfill this mandate, the Department of Pharmaceutical Sciences (the four-year program) educates students to become key members of society who can play an active part in all social fields with their broad background in pharmacy, and who can become outstanding life scientists by making signal contributions to basic science. But Kagawa School of Pharmaceutical Sciences has turned into only the program of the Department of Pharmacy in April, 2012, in order to match the needs of the region. Our faculty, which has cutting-edge equipment, succeeds the principles at the foundation and has trained professionals with a research mind who can respond the social demands, and a variety of human resources who can contribute to the promotion of health of the people.

Guided by these principles, we laid the foundation for the Kagawa School of Pharmaceutical Sciences and dedicated ourselves to this effort. We established Institute of Neuroscience in the Kagawa School of Pharmaceutical Sciences, and the Institute of Neuroscience was reorganized and has now been expanded into four divisions in April, 2007. We published the first issue of *The Annual Report of the Kagawa School of Pharmaceutical Sciences*, highlighting our educational, research, management, and philanthropic achievements, by looking back upon the past three years of our activities, in 2006. We are now publishing the eleventh issue of the *Annual Report* by looking back upon the past five years of our activities. I would like all of the staff to utilize these issues to perform a self-assessment and to look forward to the future development of their activities. In addition, I expect that this issue will assist our staff in expanding both intramural and extramural interdisciplinary exchanges.

The Kagawa School of Pharmaceutical Sciences is always making progress on the road toward realizing our goals. I would be very grateful if all the people who read this annual report would kindly give me their opinions and/or comments with a view toward continuing to improve the Kagawa School of Pharmaceutical Sciences.

Hiroshi Miyazawa, Ph.D., Dean  
 Kagawa School of Pharmaceutical Sciences  
 Tokushima Bunri University





# Contents

## Preface to the eleventh issue of *The Annual Report*

<b>Short History of <i>The Kagawa School of Pharmaceutical Sciences</i></b>	• • • • • 133
---	---------------

## Reports

Laboratory of Medicinal Chemistry	• • • • • 137
Laboratory of Biophysics	• • • • • 139
Laboratory of Pharmacognosy and Natural Products Chemistry	• • • • • 143
Laboratory of Medicinal Chemistry	• • • • • 147
Laboratory for Molecular Biology	• • • • • 149
Regulation of Immune functions through nuclear receptors	• • • • • 153
Laboratory of Pharmaceutical Health Sciences	• • • • • 155
Laboratory of Neuropharmacology	• • • • • 157
Laboratory of Pathological Physiology	• • • • • 159
Laboratory for Pharmacotherapy and Experimental Neurology	• • • • • 161
Laboratory of Pharmacokinetics and Pharmacodynamics	• • • • • 165
Laboratory of Pharmaceutics	• • • • • 167
Laboratory of Pharmaceutical Health Care and Sciences	• • • • • 171
Laboratory of Pharmaceutical Education	• • • • • 172
Center for Instrumental Analysis	• • • • • 175
Laboratory for Neural Circuit Systems Institute of Neuroscience	• • • • • 177



## ***A Short History of the Kagawa School of Pharmaceutical Sciences***

- 1895 Sai Murasaki founds a private vocational school in the city of Tokushima.**
- 1966 Tokushima Women's University is founded.  
Faculty of Home Economics admits its first students.
- 1968 Faculty of Music admits its first students.
- 1972 Tokushima Women's University is renamed Tokushima Bunri University.  
Faculty of Pharmaceutical Sciences admits its first students.
- 1983 The Kagawa Campus of Tokushima Bunri University opens.  
Faculty of Literature admits its first students on the Kagawa campus.
- 1989 Faculty of Engineering admits its first students on the Kagawa campus.
- 1995 The 100<sup>th</sup> anniversary of the founding of the Murasaki Gakuen.
- 2000 Faculty of Policy Studies admits its first students.
- 2004 Faculty of Pharmaceutical Sciences at Kagawa Campus admits its first students on the Kagawa campus;** the Department of Pharmaceutical Technology opens 10 laboratories.  
The rooms for teaching staff open on the fourth floor of the Research and Media Library.  
The office of the Faculty of Pharmaceutical Sciences at Kagawa Campus opens on the first floor of the Lecture Building.
- 2005 The Kagawa School of Pharmaceutical Sciences is established on the Kagawa campus.  
Masters and doctoral programs begin at the Kagawa School of Pharmaceutical Sciences.  
Pharmaceutical Sciences Research and Laboratory Buildings are completed.  
The Center for Instrumental Analysis opens in the Pharmaceutical Sciences Research Building.  
The Center for Radioisotope and Laboratory Animals opens in the Pharmaceutical Sciences Laboratory Building.  
The Medicinal Plant Garden is established.  
The 110<sup>th</sup> anniversary of the founding of the Murasaki Gakuen.
- 2006 The six-year undergraduate program in the Department of Pharmacy, Kagawa School of Pharmaceutical Sciences accepts its first students.  
The four-year undergraduate program in the Department of Pharmaceutical Sciences, Kagawa School of Pharmaceutical Sciences accepts its first students.  
A mock pharmacy opens in the Lecture Building for student training.  
The construction of eighteen laboratories and one research institute for the Kagawa School of Pharmaceutical Sciences is completed.  
SENKA Endowed Chair for "Practical Drug Discovery and Development" was established.
- 2007 The research institute (Institute of Neuroscience) was reorganized and expanded into four divisions.
- 2012 The four-year Graduate School of Pharmaceutical Sciences (Department of Pharmaceutical Sciences



Doctoral program) was installed.

2014 **The 10<sup>th</sup> anniversary of the founding of Kagawa School of Pharmaceutical Sciences**

2015 The **120<sup>th</sup>** anniversary of the founding of the Murasaki Gakuen.

2020 The **125<sup>th</sup>** anniversary of the founding of the Murasaki Gakuen.

Japan Accreditation Board for Pharmaceutical Education (JABPE), Evaluation of pharmaceutical education programs [Conformity]





## Laboratory of Medicinal Chemistry

### Staff

#### Toshie Fujishima, Ph.D.

Professor since 2016

Associate Professor since 2004

#### Masayuki Morikawa, Ph.D.

Assistant Professor since 2016

### Research

#### Design and synthesis of the novel vitamin D receptor ligands

We have been interested in functions of the nuclear receptors modulated by small molecules, which can be critical to certain disease states. In particular, novel analogues targeted to vitamin D receptor (VDR) were designed and synthesized to understand how the subtype-free, singular VDR can deliver the diverse biological activities vitamin D, as well as to allow the development of potential therapeutic agents with selective activity profiles for the treatment of cancer or osteoporosis. Syntheses of the analogues were carried out by a convergent method using a palladium catalyst. Separate preparation of the requisite A-ring enyne precursors has developed from the 3-buten-1-ol derivatives. Modification in the A-ring, as well as in the side chain of vitamin D, resulted in exceptionally potent compounds with unique activity profiles.

### Publications (2016.4~2021.3)

#### 2019

1. Fujishima, T.; Komatsu, T.; Takao, Y.; Yonamine, W.; Suenaga, T.; Isono, H.; Morikawa, M.; Takaguchi, K. Design and concise synthesis of novel vitamin D analogues bearing a functionalized aromatic ring on the side chain, *Tetrahedron*, **2019**, *75*, 1098-1106.
2. Fujishima, T.; Suenaga, T.; Kawahata, M.; Yamaguchi, K. Synthesis and characterization of 20-hydroxyvitamin D<sub>3</sub> with the A-ring modification, *J Steroid Biochem Mol Biol*, **2019**, *27*, 27-33.

#### 2018

3. Suenaga, T.; Fujishima, T. The C4-functionalized 9,10-seco-5,7,10(19)-cholestatriene derivatives: Concise synthesis and characterization of novel vitamin D analogues with a four-membered heterocyclic ether, *Tetrahedron*, **2018**, *74*, 1461-1467.

#### [Review]

4. Katsuhito Kino, Taishu Kawada, Masayo Hirao-Suzuki, Masayuki Morikawa, Hiroshi Miyazawa. Products of Oxidative Guanine Damage Form Base Pairs with Guanine,

*Int. J. Mol. Sci.* **2020**, *21*, 7645.

5. Fujishima, T. Synthesis of novel vitamin D<sub>3</sub> analogues having a spiro-oxetane structure, *Kagaku to Seibutsu*, **2018**, *56*, 589-590.
6. Kino K., Hirao-Suzuki M., Morikawa M., Sakaga A., Miyazawa H. Generation, repair and replication of guanine oxidation products, *Genes Environ.*, **2017**, *39*, 21-27.
7. Suenaga, T.; Nozaki, T.; Fujishima, T. Synthesis of novel vitamin D<sub>3</sub> analogues having a spiro-oxetane structure, *Vitamin*, **2016**, *90*, 109-114.





## *Laboratory of Biophysics*

### Staff

#### **Yasushi Kishimoto, Ph.D., Professor**

2001 Ph.D. in Biophysics from The University of Tokyo  
2001-2003 Postdoctoral Fellow from Mitsubishi Kagaku Institute of Life Sciences to Kanazawa University  
2003 Visiting Fellow, NIH/NIHM  
2003-2005 JSPS Fellow, Kanazawa University and Osaka University  
2006 Assistant Professor, Tokushima Bunri University  
2013 Associate Professor, Tokushima Bunri University  
2020 Transfer to Teikyo University

#### **Takashi Kubota, Ph.D., Assistant Professor**

#### **Kentaro Nakashima., Research Assistant**

Master of Engineering of Yokohama National University, 2005  
Research assistant since Nov. 1, 2006  
Ph.D. in Pharmacy by dissertation from Tokushima Bunri University, 2020

### Research

#### **Molecular and neural mechanisms of placebo response**

The placebo response is a favorable physiological response to the administration of a pharmacologically inactive "sham" drug. This phenomenon is thought to result from some kind of learned expectation. Clarifying the molecular mechanisms of the placebo response in the brain could contribute to maximizing drug efficacy, reducing medical costs, and refining clinical trials. However, at present, the detailed molecular mechanisms in the brain have not been clarified because the research targets are almost exclusively human and the methods are mainly limited to functional brain imaging methods such as fMRI. In this study, we aimed to 1) evaluate the usefulness of the placebo conditioning system in mice, and 2) use this system to clarify the effects of antagonists and agonists of dopamine receptors involved in the reward system. On the morning of the 5th day, the condition was changed to "saline injection + chamber". In the morning of the fifth day, we changed the condition to "saline injection + chamber" and evaluated the latency until the onset of the escape response (evaluation trial). In addition, we looked at the effects of naltrexone, a  $\mu$ -opioid receptor antagonist, Amisulpride, a dopamine receptor D2 and D3 antagonist, and Pramipexole, a dopamine receptor agonist, in the evaluation trial. In addition, we compared the pain latency between the untreated group and the drug-treated group to see if the drugs

affected the pain threshold itself. A significant placebo response was observed in the evaluation trials. In addition, this effect was almost completely blocked by naltrexone. This result is consistent with the inhibition of placebo response by  $\mu$ -opioid receptor antagonists in clinical studies, thus demonstrating the usefulness of the mouse conditioning system in placebo studies. Furthermore, administration of Amisulpride significantly attenuated the placebo response, demonstrating the importance of dopamine receptors in the placebo response and suggesting the involvement of the reward system in the placebo response. When we checked whether the drugs affected the pain threshold itself, no significant difference in latency was observed among all the drugs. This suggested that Amisulpride did not affect the threshold for pain, but acted on the placebo response. .

#### **A bibliometric study of research paper productivity in pharmacy schools.**

Since the early 2000s, it has been frequently discussed in recent years that Japan is the only country among about 20 major countries where the number of published papers has been stagnant. During this period, there have been major changes especially in the pharmacy school, such as the shift to a six-year system and the rapid increase in the number of private pharmacy schools. However, few studies have focused on the academic productivity specifically for the pharmacy schools. Therefore, in this study, we analyzed the productivity of papers in the field of medical or biological sciences in pharmacy schools nationwide in 2017, the last year when the increase in the number of pharmacy schools had once settled down. Professors, associate professors, and lecturers were considered as faculty members; the average number of papers published per faculty member was 2.75 for public universities and 0.87 for private universities, with a significant difference between them. When private universities were divided into schools of pharmacy established after 2003 and established schools before that, the production coefficient of the former was 0.62 and that of the latter was 1.18. Thus, newly established schools of pharmacy were found to be significantly less productive in terms of papers than traditional schools. The increase in the number of private schools that have adopted a six-year system since their establishment has contributed to some extent to the discharge of clinically competent pharmacists, but it has also brought to light problems related to the decline in basic research capabilities.

### **Effect of microRNA-132 on object recognition memory in an tauopathy mouse model**

MicroRNA-132 (miR-132) plays an important role in neuronal plasticity and memory performance. Previous studies have shown a marked downregulation of miR-132 in Alzheimer's disease (AD) patients and low memory performance in triple transgenic-AD mice lacking the miR-132 gene. In this study, we investigated the effect of intracerebroventricular (i.c.v) administration of locked nucleic acid (LNA)-modified miR-132 on object recognition memory (ORM) and subsequent gene expression in rTg4510 mice. Ten-month-old rTg4510 mice failed to discriminate novel and familiar objects in the retention trial carried out 2 h (short-term) and 24 h (long-term) after sample presentation. Treatment with miR-132 improved the short-term retention of ORM. However, miR-132 did not improve the long-term retention of ORM. The amount of acetylcholinesterase (AChE) mRNA in the prefrontal cortex (PFC) decreased 24 h after exposure to miR-132 in rTg4510 mice (the same time as the sample trial of object recognition test), which was subsequently restored to normal by 48 h (timed 24 h after the trial of object recognition test). The amount of silent information regulator 1 (SIRT1) mRNA in both the PFC and hippocampus decreased 48 h after treatment with miR-132, whereas no difference was observed at 24 h. The expression of CREB mRNA decreased in rTg4510 mouse brain. Treatment with miR-132 restored CREB expression to normal levels at 24 h, while it decreased at 48 h. These results showed that the expression level of CREB mRNA is determined by the balance between the silencing level of AChE and SIRT1. Furthermore, time dependent effect of miR-132 on ORM is because of temporal regulation of these distinct target gene expressions.

### **Analysis of functional role of lanosterol 14 $\alpha$ -demethylase (LDM) in remyelination following cuprizone-induced demyelination using transgenic mice that highly express LDM.**

Lanosterol 14 alpha-demethylase (LDM, CYP51) is the only cytochrome P450 enzyme that is involved in cholesterol biosynthesis in eukaryotes. It is expressed abundantly in the liver and moderately in the brain. Cholesterol is not only a major component of plasma or endoplasmic reticulum membrane but also an essential component of myelin sheath in the nervous system. Cholesterol required for myelination is newly synthesized in oligodendrocyte, because cholesterol synthesized in the peripheral organs cannot cross the blood brain barrier. Our previous study revealed that LDM was predominantly expressed in oligodendrocytes and Schwann cells in the central and peripheral nervous system, respectively, and that its expression increased in the process of

remyelination following cuprizone-induced demyelination. In order to examine the role of LDM in detail, we generated a transgenic mouse in which LDM-transgene is driven by oligodendrocyte-specific myelin proteolipid protein (PLP) promoter, (LDM-Tg mouse). Demyelination in the corpus callosum was moderate in LDM-Tg mice treated with cuprizone for 6 weeks, while it was severe in wild-type mice. Moreover, remyelination following cuprizone-induced demyelination was promoted in LDM-Tg mice as compared with wild-type mice. On the other hand, high expression of LDM did not induce hypermyelination during normal development. These results suggest that LDM is one of critical enzymes for remyelination and that augmentation of LDM expression in oligodendrocytes may have therapeutic significance in demyelinating disease such as multiple sclerosis.

### **Studies on preventive effects by dietary intake of green algae on cuprizone-induced neuroinflammation**

Long-term exposure to cuprizone (CPZ), a copper chelator, has been employed to build a mouse model of demyelinating disease such as multiple sclerosis. It has been reported recently that short-term exposure to CPZ induces neuroinflammation without demyelination in the brain, which was associated with cognitive dysfunction and schizophrenia-like symptoms. We examined mice fed with normal chow or chow containing 0.3% (w/w) CPZ for 7 days by immunohistochemical analysis using an anti-Iba1 antibody, a marker of microglia, an anti-GFAP antibody, a marker of astrocytes and an anti-proteolipid protein (PLP) antibody, a marker of myelin. Iba1- and GFAP-immunoreactivities were increased in whole brain of CPZ-treated mice, while PLP-immunoreactivity and FluoroMyelin Green staining showed no changes as compared with mice fed with normal diet. These data confirmed neuroinflammation without demyelination induced by short-term exposure to CPZ. Previously, it was reported that some species of green algae rich in nutrients have preventive effects against several diseases. Extracts from *Ulva conglobata*, for example, show anti-inflammatory or neuroprotective effects in cultured neuronal cells. Increase in Iba1- and GFAP-immunoreactivities by the CPZ treatment was less in mice with preceding dietary intake of chow containing 1% *Monostroma nitidum* (MSN), a species of green algae, for 7 weeks as compared with mice fed with normal chow, suggesting anti-inflammatory effects of MSN. Since schizophrenia and Alzheimer's disease show neuroinflammation correlated with their progression of symptoms, preventive effects of MSN on neuroinflammation





is expected as a prophylaxis against these disorders.

### Studies on a common epitope between two non-homologous proteins, Bcnt/Cfdp1 and glutamine synthetase.

We had reported that an antibody against a peptide, EELAIHNRGKEGYIERKA, of the evolutionarily conserved C-terminal domain of Bcnt/Cfdp1 (anti-BCNT-C Ab) specifically cross-reacts with glutamine synthetase (GS, glutamate-ammonia ligase) by Western blotting of brain extracts, while other anti-Bcnt/Cfdp1 antibodies do not. No significant homology of amino acid sequences was found between Bcnt/Cfdp1 and GS. However, we identified a key amino acid sequence, KKG YFE, localized in a limited region of the C-terminal of GS, by a combination of Ab binding analyses using deletion mutants, amino acid-substituted mutants of GS and binding competition using peptide fragments of GS. We considered KEGYIEA of the antigen peptide as its counterpart. Furthermore, substitution of Phe-337 of GS with several amino acids suggests that Phe-337 is not directly engaged in the epitope-paratope interface responsible for the cross-reactivity with the anti-BCNT-C Ab, but its steric bulk is important to maintain the stereochemical environment of the interface. These findings show that the anti-BCNT-C Ab recognizes two distinct molecules, Bcnt/Cfdp1 protein and GS through a common spatial linear epitope and that such a cross-reactivity is mainly due to the physicochemical environment formed by amino acid residues of the epitope rather than the primary sequence of the epitope, giving a novel insight into the specificity of antigen-antibody reaction and protein-protein interaction.

---

### Publications (2016.4~ 2021.3)

---

#### 2020

- Hossain MD, Jamal M, Tanoue Y, Ojima D, Takahashi H, Kubota T, Ansary TM, Ito A, Tanaka N, Kinoshita H, Kishimoto Y, Yamamoto T. (2020) MDGA1-deficiency attenuates prepulse inhibition with alterations of dopamine and serotonin metabolism: An ex vivo HPLC-ECD analysis. *Neurosci. Lett.* 16, 134677.
- Iwashita S, Suzuki T, Kiriyama Y, Dohmae N, Ohoka Y, Song S-Y, Nakashima K. (2020) Overcoming off-targets: assessing Western blot signals for Bcnt/Cfdp1, a tentative component of the chromatin remodeling complex. *Biosci. Rep.* 40: BSR20194012.
- Kakizawa S, Kishimoto Y, Yamamoto S, Onga K, Yasuga K, Miyamoto Y, Watanabe M, Sakai R, Mori N. (2020) Functional maintenance of calcium store by ShcB adaptor protein in cerebellar Purkinje cells. *Sci. Rep.* 10:14475.
- Kishimoto Y, Hirono M, Atarashi R, Sakaguchi S, Yoshioka T, Katamine S, Kirino Y. (2020) Impairment of cerebellar long-term depression and GABAergic transmission in prion protein deficient mice ectopically expressing PrPLP/Dpl. *Sci. Rep.* 28:15900.
- Kuboyama K, Kawada K, Fujii N, Ojima D, Kishimoto Y, Yamamoto T, Yamada M.K. (2020) Visually cued fear

conditioning test for cortical function. *Neuropsychopharmacol. Rep.* 40:371-375.

#### 2019

- Tanigami H, Yoneda M, Tabata Y, Echigo R, Kikuchi Y, Yamazaki M, Kishimoto Y, Sakimura K, Kano M, Ohno-Shosaku T (2019) Endocannabinoid signaling from 2-arachidonoylglycerol to CB1 cannabinoid receptor facilitates reward-based learning of motor sequence. *Neuroscience.* 421, 1-16.
- Nakao H\*, Kishimoto Y\*, Hashimoto K, Kitamura K, Yamasaki M, Nakao K, Watanabe M, Kano M, Kirino Y, Aiba A. (2019) mGluR1 in cerebellar Purkinje cells is essential for the formation but not expression of associative eyeblink memory. (\* equal 1st author). *Scientific reports* 9:7353.
- Shishido H, Ueno M, Sato K, Matsumura M, Toyota Y, Kirino Y, Tamiya T, Kawai N, Kishimoto Y. (2019). Traumatic brain injury by weight drop method causes transient amyloid- $\beta$  deposition and acute cognitive deficits in mice. *Behav. Neurol.* 2019:3248519.
- Nakashima K, Iwashita S, Suzuki T, Kato C, Kohno T, Kamei Y, Sasaki M, Urayama O, Ohno-Iwashita Y, Dohmae N and Song SY. (2019). A spatial similarity of stereochemical environments formed by amino acid residues defines a common epitope of two non-homologous proteins. *Sci. Rep.* 9, 14818

#### 2018

- Kishimoto Y, Tsukamoto I, Nishigawa A, Nishimoto A, Kirino Y, Kato Y, Konishi R, Maruyama T, Sakakibara N. (2018) Data on COA-Cl administration to the APP/PS2 double-transgenic mouse model of Alzheimer's disease: improved hippocampus-dependent learning and unchanged spontaneous physical activity. *Data in Brief* 20, 1877-1883.

#### 2017

- Steven A. Connor, Ina Ammendrup-Johnsen, Yasushi Kishimoto, Parisa Karimi Tari, Vedrana Cvetkovska, Takashi Harada, Daiki Ojima, Tohru Yamamoto, Yu Tian Wang, Ann Marie Craig (2017) Altered cortical dynamics and cognitive function upon haploinsufficiency of the autism-linked excitatory synaptic suppressor MDGA2. *Cell Rep.* 26, 3637-3645.
- Yasushi Kishimoto, Kai Fukumoto, Mika Nagai, Ayaka Mizuguchi, Yuiko Kobayashi. (2017) Early contextual fear memory deficits in a double-transgenic amyloid- $\beta$  precursor protein/presenilin 2 mouse model of Alzheimer's disease. *Int. J. Alzheimers. Dis.* 2017:8584205.

#### 2016

- Steven A. Connor\*, Ina Ammendrup-Johnsen\*, Allen W. Chan\*, Yasushi Kishimoto\*, Chiaki Murayama, Naokazu Kurihara, Atsushi Tada, Yuan Ge, Hong Lu, Ryan Yan, Jeffrey M. LeDue, Hiroataka Matsumoto, Hiroshi Kiyonari, Yutaka Kirino, Fumio Matsuzaki, Toshiharu Suzuki, Timothy H. Murphy, Yu Tian Wang, Tohru Yamamoto, Ann Marie Craig. (2016) Altered Cortical Dynamics and Cognitive Function upon Haploinsufficiency of the Autism-Linked Excitatory Synaptic Suppressor MDGA2. *Neuron*, 91, 1052-1068, (2016) (\* equal 1st author).
- Hajime Shishido\*, Yasushi Kishimoto\*, Nobuyuki Kawai, Yasunori Toyota, Masaki Ueno, Takashi Kubota, Yutaka Kirino, Takashi Tamiya. (2016) Traumatic brain injury accelerates amyloid- $\beta$  deposition and impairs spatial learning in the triple-transgenic mouse model of Alzheimer's disease.

- Neurosci. Lett. 629, 62-67, (\* equal 1st author).
3. Yasushi Kishimoto, Hajime Shishido, Mayumi Sawanishi, Yasunori Toyota, Masaki Ueno, Takashi Kubota, Yutaka Kirino, Takashi Tamiya, Nobuyuki Kawai. (2016) Data on amyloid precursor protein accumulation, spontaneous physical activity, and motor learning after traumatic brain injury in the triple-transgenic mouse model of Alzheimer's disease. Data in Brief 9, 62-67.
  4. Takashi Kubota, Hiroshi Matsumoto, Yutaka Kirino. (2016) Ameliorative effect of membrane-associated estrogen receptor G protein coupled receptor 30 activation on object recognition memory in mouse models of Alzheimer's J. Pharmacol. Sci., 131, 219-222.



## Laboratory of Pharmacognosy and Natural Products Chemistry

### Staff

#### Osamu Shirota, Ph D

Professor since 2013

Associate Professor since 2004

Former career: Senior Research Scientist, National Institute of Health Sciences

Ph.D., Graduate School of Pharmaceutical Sciences, Tokyo College of Pharmacy, 1994

### Research

We conduct chemical and biological research on the components of medicinal plants and crude drugs in order to advance the development of therapeutic pharmaceuticals. The lab focuses on determining the structure of potential compounds, the relationship between that structure and their biological activity, and the role of genes in the biosynthesis of compounds and their function in human physiology. In addition, new avenues in systems biology and metabolomics are being explored and there is ongoing research on the prevention of illegal drug circulation and use, and on the evaluation of drug quality.

#### I. Research on the biological active chemical constituents of health foods

We found that royal jelly acted at the early stages of the G<sub>1</sub> phase and the S phase of a cell cycle and controlled multiplication of human osteosarcoma cell line, MG-63 cell. Separation of the active water extract by a dialysis membrane and a solid phase extraction suggested that active substances were high polar low molecular compounds. Furthermore, the existence of nitrogen-containing compounds having acidic groups was suggested by LC/MS (ESI) analyses. Further isolation procedure identified that the main active component was AMP N<sub>1</sub>-oxide. Continuous examination revealed also the existence of adenosine N<sub>1</sub>-oxide, ADP N<sub>1</sub>-oxide, ATP N<sub>1</sub>-oxide, and NAD N<sub>1</sub>-oxide as active ingredients. AMP N<sub>1</sub>-oxide and adenosine N<sub>1</sub>-oxide inhibited multiplication of MG-63 cell strongly, and their control of the G<sub>1</sub> to S phase comparing with AMP as 1/100 low concentration was found. From these facts, AMP N<sub>1</sub>-oxide, adenosine N<sub>1</sub>-oxide, and other N<sub>1</sub>-oxide are considered to be the main ingredients that contribute at MG-63 cell-growth control of royal jelly.

#### II. The search of the Alzheimer therapeutic drug from natural resources

Donepezil hydrochloride of the choline esterase inhibitor is used as Dementia and Alzheimer therapeutic drug. Galantamine, the

metabolite of the Amaryllidaceae plant acts in similar mechanism, and approval in the country is examined. In addition, Kampo medicine nominates an effect for condition improvement. We perform construction pro-screening to search for the therapeutic drug from a crude drug and a medical plant.

#### III. The study of anti-Leishmaniasis therapeutics

Leishmaniasis is a parasitic disease caused by species of the genus *Leishmania*. Over 20 of which are known to be pathogenic to humans, and the disease is endemic in some tropical and subtropical regions of the world. *Leishmaniasis* is transmitted by small biting sandflies (*Phlebotomus* spp.), causing a disease which currently afflicts twelve million people in 88 countries. *Leishmania major*, the causative agent of cutaneous leishmaniasis, is a digenetic parasite that exists as an extracellular promastigote within the insect vector (sandfly), and as a nonmotile intracellular amastigote within the phagolysosome of macrophages and other cells of the reticuloendothelial system of the mammalian host. Treatment options for leishmaniasis include pentavalent antimonials as first-line drugs, and amphotericin B and pentamidine as second-line drugs. However, these drugs are extremely toxic and usually too expensive for general use, and more economical and less toxic drugs are thus being sought. We have been searching for plant compounds that are active against *Leishmania major*, *L. panamensis*, *L. guyanensis*, and *L. peruviana*, exhibited significant activity against the pathogenic protozoan, and newly assay method.

#### IV Research on the chemical components of illegal drugs of plant origin

Khat is a fresh leaf of evergreen shrub *Catha edulis* (Celastraceae) that grows naturally or is grown in Ethiopia, East and Southern Africa, and Yemen, etc., and a lot of people in Africa and Arabia nations use this leaf traditionally as a stimulant biting, and, as a result, it is assumed to obtain the feeling of well-being at the same time as hungry and tiredness's softening. The stimulating component of Khat was believed to be *d*-norpseudoephedrine until cathinone was identified as a main active constituent at the end of 1970's. This cathinone is regulated as narcotics and psychotropic drug, and there is an action similar to (+)-amphetamine that is the synthetic central nervous system stimulation medicine and the strength is assumed to be this level. I synthesized cathinone and ephedrine as an authentic sample to use for the analysis of the drug. 2. *Salvia divinorum* which belongs to Labiatae family is used in traditional spiritual and curative practices by the indigenous Mazatec people of southern Mexico. Salvinorin A (Sal A), which is the neoclerodane diterpene and is an extremely potent and highly

selective kappa opioid receptor agonist, is the main active constituent isolated from the leaves of *S. divinorum*. The sale of *S. divinorum* has become prohibited due to its psychoactive effect in Japan in recent years. The main objectives of this research are to develop immunoassays using anti-Sal A monoclonal antibody (MAb). The icELISA, which has a measuring range from 0.156 µg/ml to 1.25 µg/ml for Sal A, was developed to distinguish *S. divinorum* among various Labiatae plants. In addition, we are preparing the immunochromatographic strip to realize much more rapid analysis. These immunoassays using anti-Sal A must be a convenient authentication method for *S. divinorum* samples.

**V. Research on Development of Preparative Separation Method of Biologically Active Natural Products by Centrifugal Partition Chromatography : Preparative separation of lancemaside A from *Codonopsis lanceolata* by CPC**

The roots of *Codonopsis* sp. (Campanulaceae) have been used in folk medicine in China, Korea, and Japan for the treatment of bronchitis, cough, spasm, and inflammation. Recently, it was demonstrated that a hot water extract of *C. lanceolata* roots promoted spermatogenesis and improved sexual motion. Moreover, three phenylpropanoids were identified as the active compounds that promoted spermatogenesis, while several saponins, including lancemaside A, were isolated, and lancemaside A was identified as the active compound that improves sexual motion. Although it is assumed that *C. lanceolata* roots are highly safe since they have been used for a long time, general and specific toxicity tests for safety assurance of the active integrants are required. In general, a large amount of purified compounds is required to assess the effectiveness and to perform safety tests. Therefore we attempted to develop a simple and efficient method for the preparative isolation of lancemaside A from the hot water extract of *C. lanceolata* roots, and resulted in the successful preparative separation of lancemaside A along with two other saponins from the saponin fraction of *C. lanceolata* by CPC.

---

**Publications (2016.4-2021.3)**

---

**[Original papers]**

**2021**

1. Warashina, T., and Shirota, O. (2021). Tetracyclic Triterpenoids, Steroids and Lignanes from the Aerial Parts of *Oxypetalum caeruleum*. Chem Pharm Bull (Tokyo) 69, 226-231.
2. Nugroho Alfarius, E., Hirasawa, Y., Kaneda, T., Morita, H., Shirota, O., Matsuno, M., and Mizukami, H. (2021). Triterpenoids from *Walsura trichostemon*. J Nat Med, in press.

**2020**

1. Mori-Yasumoto, K.; Hashimoto, Y.; Agatsuma, Y.; Fuchino, H.; Yasumoto, K.; Shirota, O.; Satake, M.; Sekita, S. (2020). Leishmanicidal phenolic compounds derived from *Dalbergia*

*cultrata*. Natural Product Research, Accepted.

2. Rádis-Baptista, G.; Dodou, H. V.; Prieto-da-Silva, Á. R. B.; Zaharenko, A. J.; Kazuma, K.; Nihei, K.; Inagaki, H.; Mori-Yasumoto, K.; Konno, K. (2020). Comprehensive analysis of peptides and low molecular weight components of the giant ant *Dinoponera quadriceps* venom. Biological Chemistry, Published online, 2020. 2.22, from doi:10.1515/hsz-2019-397ja-01.

**2019**

3. Esakkimuthu, S.; Nagulkumar, S.; Darvin, S. S.; Buvanesvaragurunathan, K.; Sathya, T. N.; Navaneethakrishnan, K. R.; Kumaravel, T. S.; Murugan, S. S.; Shirota, O.; Balakrishna, K.; Pandikumar, P.; Ignacimuthu, S. (2019). Antihyperlipidemic effect of iridoid glycoside deacetylasperulosidic acid isolated from the seeds of *Spermaceoce hispida* L. - A traditional antiobesity herb. Journal of Ethnopharmacology 245, 112170.

**2018**

4. Nugroho, A. E., Inoue, D., Chin-Piow, W., Hirasawa, Y., Kaneda, T., Shirota, O., A. Hadi, A.H.A., and Morita, H. (2018). Reinereins A and B, new onocerane triterpenoids from *Reinwardtiadendron cinereum*. Journal of Natural Medicines 72(4), 588-592.
5. Yasumoto, K., Sakata, T., Yasumoto, J., Yasumoto-Hirose, M., Sato, S., Mori-Yasumoto, K., Jimbo, M., Kusumi, T., Watabe, S. (2018). Atmospheric CO<sub>2</sub> captured by biogenic polyamines is transferred as a possible substrate to Rubisco for the carboxylation reaction. *Scientific Reports*, 8:17724, 1-10.

**2017**

6. Tokumura, T., Yoshida, N., Mori-Yasumoto, K., Shirota, O., Kurita, T. (2017). Degradation rates and products of fluticasone propionate in alkaline solutions. Journal of Pharmaceutical Analysis, 7(5), 297-302.
7. Kazuma, K., Ando, K., Nihei, K., Wang, X., Rangel, M., Franzolin, M. R., Mori-Yasumoto, K., Sekita, S., Kadowaki, M., Satake, M., Konno, K. (2017). Peptidomic analysis of the venom of the solitary bee *Xylocopa appendiculata circumvolans*, Journal of Venomous Animals and Toxins including Tropical Diseases, 23:40.
8. Paudel, M.K., Shirota, O., Sakamoto, S., Morimoto, S., and Tanaka, H. (2017). An immunochromatographic assay for rapid detection of salvinatorin A. Journal of Immunoassay and Immunochemistry 38, 438-448.
9. Nugroho, A.E., Okuda, M., Yamamoto, Y., Chin-Piow, W., Hirasawa, Y., Kaneda, T., Shirota, O., Hadi, A.H.A., and Morita, H. (2017). Apowalsogynes A and B, Two Highly Oxidized 3,4-Seco-Apotirucallane Triterpenoids from *Walsura chrysogyne*. Natural Product Communications 12, 1189-1192.

**2016**

10. Muhit, M. A., Umehara, K., Mori-Yasumoto, K., and Noguchi, H. (2016). Furofuran Lignan Glucosides with Estrogen-Inhibitory Properties from the Bangladeshi Medicinal Plant *Terminalia citrina*. Journal of Natural Products 79, 1298-1307.
11. Ishihara, Y., Fujitani, N., Sakurai, H., Takemoto, T., Ikeda-Ishihara, N., Mori-Yasumoto, K., Nehira, T., Ishida, A., and Yamazaki, T. (2016). Effects of sex steroid hormones



and their metabolites on neuronal injury caused by oxygen-glucose deprivation/reoxygenation in organotypic hippocampal slice cultures. *Steroids* 113, 71-77.

12. Nugroho, A.E., Chin-Piow, W., Hirasawa, Y., Janar, J., Kaneda,

T., Shirotu, O., and Morita, H. (2016). Daphnane Diterpenoids from *Daphne altaica*. *Natural Product Communications* 11, 1073-1075.





## Laboratory of Medicinal Chemistry

### Staff

#### Toshie Fujishima, Ph.D.

Professor since 2016

Associate Professor since 2004

#### Masayuki Morikawa, Ph.D.

Assistant Professor since 2016

### Research

#### Design and synthesis of the novel vitamin D receptor ligands

We have been interested in functions of the nuclear receptors modulated by small molecules, which can be critical to certain disease states. In particular, novel analogues targeted to vitamin D receptor (VDR) were designed and synthesized to understand how the subtype-free, singular VDR can deliver the diverse biological activities vitamin D, as well as to allow the development of potential therapeutic agents with selective activity profiles for the treatment of cancer or osteoporosis. Syntheses of the analogues were carried out by a convergent method using a palladium catalyst. Separate preparation of the requisite A-ring enyne precursors has developed from the 3-buten-1-ol derivatives. Modification in the A-ring, as well as in the side chain of vitamin D, resulted in exceptionally potent compounds with unique activity profiles.

### Publications (2016.4~2021.3)

#### 2019

1. Fujishima, T.; Komatsu, T.; Takao, Y.; Yonamine, W.; Suenaga, T.; Isono, H.; Morikawa, M.; Takaguchi, K. Design and concise synthesis of novel vitamin D analogues bearing a functionalized aromatic ring on the side chain, *Tetrahedron*, **2019**, *75*, 1098-1106.
2. Fujishima, T.; Suenaga, T.; Kawahata, M.; Yamaguchi, K. Synthesis and characterization of 20-hydroxyvitamin D<sub>3</sub> with the A-ring modification, *J Steroid Biochem Mol Biol*, **2019**, *27*, 27-33.

#### 2018

3. Suenaga, T.; Fujishima, T. The C4-functionalized 9,10-seco-5,7,10(19)-cholestatriene derivatives: Concise synthesis and characterization of novel vitamin D analogues with a four-membered heterocyclic ether, *Tetrahedron*, **2018**, *74*, 1461-1467.

#### [Review]

4. Katsuhito Kino, Taishu Kawada, Masayo Hirao-Suzuki, Masayuki Morikawa, Hiroshi Miyazawa. Products of Oxidative Guanine Damage Form Base Pairs with Guanine,

*Int. J. Mol. Sci.* **2020**, *21*, 7645.

5. Fujishima, T. Synthesis of novel vitamin D<sub>3</sub> analogues having a spiro-oxetane structure, *Kagaku to Seibutsu*, **2018**, *56*, 589-590.
6. Kino K., Hirao-Suzuki M., Morikawa M., Sakaga A., Miyazawa H. Generation, repair and replication of guanine oxidation products, *Genes Environ.*, **2017**, *39*, 21-27.
7. Suenaga, T.; Nozaki, T.; Fujishima, T. Synthesis of novel vitamin D<sub>3</sub> analogues having a spiro-oxetane structure, *Vitamin*, **2016**, *90*, 109-114.







## Laboratory for Molecular Biology

### Staff

#### **Hiroshi Miyazawa, Ph. D.**

Professor since 2004

Ph.D., The University of Tokyo, 1986

Previous position: Division of Cellular and Gene Therapy Products,  
National Institute of Health Sciences, Section Head

#### **Katsuhito Kino, Ph. D.**

Associate Professor since 2012

Instructive Professor (Lecturer) since 2004

M.S in Engineering, Graduate School of Engineering, Kyoto  
University, 1998

Ph.D. in Medical Science, Tokyo Medical and Dental University,  
2002

Previous position: Cellular Physiology Laboratory, RIKEN, Special  
postdoctoral researcher at RIKEN

#### **Takanobu Kobayashi, Ph. D.**

Lecturer since 2018

Assistant Professor since 2005

Ph.D. in Pharmaceutical Sciences, Tokyo University of Science,  
2015

Previous position: Graduate School of Pharmaceutical Sciences,  
Tokyo University of Science, graduate student

### Research

#### ***I. Gene expression analysis of mouse embryonic carcinoma P19 cells induced to form neural cells. (Takanobu Kobayashi and Hiroshi Miyazawa)***

Mouse embryonic carcinoma P19 cells are pluripotent cells that can be induced to differentiate into multiple cell types by cellular aggregation in the presence of differentiating agents. When aggregated in the presence of all-*trans* retinoic acid (ATRA), P19 cells differentiate into neural cells (including neurons and glia cells), whereas the same cells aggregated in the presence of DMSO differentiate into cardiomyocytes. These cells can simulate the molecular and morphological events occurring during early embryonic development, and have been used extensively as a model to study the molecular mechanisms controlling the process of differentiation into cardiomyocytes or neural cells.

To identify the genes associated with induction of neural differentiation, we carried out a transcriptome analysis of P19 cells induced to form neural cells by ATRA. We employed the DNA

microarray method, which can produce an accurate and detailed profile of gene expression. Numerous genes were activated in P19 cells in response to ATRA treatment. We compared the expression profiles from control (undifferentiated) and ATRA-treated P19 cells, which provided an abundance of information about the gene products involved in neural differentiation. We confirmed the sequential expression patterns of some genes over the course of differentiation. We are investigating the relationship between ATRA treatment and expression patterns of these genes, interactions with other factors, and functions in neural differentiation. These findings will provide useful clues to a more comprehensive understanding of the complex processes involved in the induction of neural differentiation. We are undertaking additional investigations to better understand the role played by these genes during the induction of neural differentiation.

Recently, we identified a candidate gene associated with induction of neural differentiation. We found that the expression of *Csn3* was induced by all-*trans* retinoic acid (ATRA) during neural differentiation in P19 cells from our study using DNA microarray. We describe the induction mechanism of *Csn3* transcription activation in this process. In conclusion, the *Csn3* expression is upregulated via ATRA-bound RAR $\alpha$  and binding of this receptor to the RARE in the *Csn3* promoter region. This will certainly serve as a first step forward unraveling the mysteries of induction of *Csn3* in the process of neural differentiation.

#### ***II. DNA Oxidation, Point Mutation and DNA repair. (Katsuhito Kino)***

The genome is constantly assaulted by oxidation reactions that are likely to be associated with oxygen metabolism, and oxidative lesions are generated by many of these oxidants. Such genotoxin-induced alterations in the genomic message have been implicated in aging and in several pathophysiological processes, particularly those associated with cancer.

##### *1. Guanine Oxidation*

Photosensitized oxidation of guanine provides various oxidation products, including 8-oxoguanine (8-oxoG) and imidazolone. Riboflavin (vitamin B2) is known to be an effective photosensitizer for the oxidation of guanine. We have demonstrated: the user-friendly synthesis and photoreaction of a flavin-linked oligonucleotide; the practical synthesis of hydroxyethyl-flavin from commercially available riboflavin; and the preparation of a flavin-linked oligonucleotide using a phosphoramidite of hydroxyethyl-flavin. To demonstrate the usefulness of this method, the flavin-linked oligomer was

synthesized. The flavin-linked oligomer and its complementary oligomer containing 8-oxoG were then irradiated under UV light (366 nm) at neutral pH. Enzymatic digestion of the irradiated mixture indicated that the 8-oxoG residue was oxidized to imidazolone. These results demonstrated that 8-oxoG is effectively oxidized to imidazolone by photosensitization of the terminal flavin via a hole-transfer mechanism, and imidazolone is formed by one-electron oxidation of 8-oxoG at neutral pH.

In addition, 8-OxoG was specifically oxidized by iodine with aqueous KI. Under acidic conditions, the major product was dehydro-guanidinohydantoin. Under basic conditions, two diastereoisomers of spirohydantoin were chiefly obtained. In addition, unstable diimine was detected for the first time.

## 2. Point Mutation by Guanine Oxidation.

The guanine base (G) in genomic DNA is highly susceptible to oxidative stress because it has the lowest oxidation potential. Therefore, G-C-->T-A and G-C-->C-G transversion mutations frequently occur under oxidative conditions. One typical lesion of G is 8-oxoguanine (8-oxoG), which can pair with A, and this pairing may cause G-C-->T-A transversion mutations. Although the number of G-C-->C-G transversions is rather high under specific oxidation conditions such as riboflavin photosensitization, the molecular basis of G-C-->C-G transversions is not known.

We have shown that Iz is a key oxidation product of G when 8-oxoG in DNA photosensitized with riboflavin or anthraquinone. Primer extension experiments have demonstrated that Iz can specifically pair with G in vitro. Thus, specific Iz-G base pair formation can explain the G-C-->C-G transversion mutations that appear under oxidative conditions.

Moreover, we found that guanine is preferentially incorporated opposite 2,2,4-triamino-5(2H)-oxazolone (Oz) by eukaryotic DNA polymerases alpha, beta and epsilon, and we first propose the chemical structure of an Oz:G base pair having hydrogen bonds. Especially, since DNA polymerases alpha and epsilon play an important role in eukaryotic DNA replication, our results indicate that Oz is the premutagenic lesion that causes G:C-C:G transversions. Our results first clarify the mechanism of G:C-C:G transversions in eukaryote, and we mention the chemical consideration in guanine insertion opposite Oz. Thus we believe that our present study has novel insights into the molecular mechanism of point mutations underlying the first trigger which causes several diseases.

In addition to Oz, guanidinohydantoin (Gh)/iminoallantoin (Ia) and spiro-imino-dihydantoin (Sp) are known products of oxidative guanine damage. These damaged bases can base pair with guanine and cause G:C-C:G transversions. In this study, the stabilization energies of these bases paired with guanine were calculated in vacuo and in water. The calculated stabilization energies of the Ia:G base pairs were similar to that of the native

C:G base pair, and both bases pairs have three hydrogen bonds. By contrast, the calculated stabilization energies of Gh:G, which form two hydrogen bonds, were lower than the Ia:G base pairs, suggesting that the stabilization energy depends on the number of hydrogen bonds. In addition, the Sp:G base pairs were less stable than the Ia:G base pairs. Furthermore, calculations showed that the Oz:G base pairs were less stable than the Ia:G, Gh:G and Sp:G base pairs, even though experimental results showed that incorporation of guanine opposite Oz is more efficient than that opposite Gh/Ia and Sp.

Next, we demonstrated that hNEIL1 and hNTH1 cleave Oz sites as efficiently as 5-hydroxyuracil sites. Thus, hNEIL1 and hNTH1 can repair Oz lesions. Furthermore, the nicking activities of these enzymes are largely independent of nucleobases opposite Oz; this finding indicates that removing Oz from Oz:G and Oz:A base pairs might cause an increase in the rate of point mutations in human cells.

## 3. Product analysis of photooxidation in isolated quadruplex DNA

(1) The formation of quadruplex structure changed the site reactivity and the kinds of guanine photooxidation products of d(TGGGGT). In quadruplex DNA, 8-oxo-7,8-dihydroguanine (8oxoG) and dehydroguanidinohydantoin (Ghox) were mainly formed, although 2,5-diamino-4H-imidazol-4-one (Iz) was mainly formed in single-stranded DNA. In addition, 3'-guanine was specifically oxidized in quadruplex DNA compared with single-stranded DNA, which depended on the localization of the HOMO.

(2) Guanine is the most easily oxidized among the four DNA bases, and some guanine-rich sequences can form quadruplex structures. In a previous study using 6-mer DNA d(TGGGGT), which is the shortest oligomer capable of forming quadruplex structures, we demonstrated that guanine oxidation products of quadruplex DNA differ from those of single-stranded DNA. Therefore, the photooxidation products of double-stranded DNA (dsDNA) may also differ from that of quadruplex or single-stranded DNA, with the difference likely explaining the influence of DNA structures on guanine oxidation pathways. In this study, the guanine oxidation products of the dsDNA d(TGGGGT)/d(ACCCCA) were analyzed using HPLC and electrospray ionization-mass spectrometry (ESI-MS). As a result, the oxidation products in this dsDNA were identified as 2,5-diamino-4H-imidazol-4-one (Iz), 8-oxo-7,8-dihydroguanine (8oxoG), dehydroguanidinohydantoin (Ghox), and guanidinohydantoin (Gh). The major oxidation products in dsDNA were consistent with a combination of each major oxidation product observed in single-stranded and quadruplex DNA. We previously reported that the kinds of the oxidation products in single-stranded or quadruplex DNA depend on the ease of deprotonation of the guanine radical cation (G<sup>•+</sup>) at the N1 proton.



Similarly, this mechanism was also involved in dsDNA. Deprotonation in dsDNA is easier than in quadruplex DNA and more difficult in single-stranded DNA, which can explain the formation of the four oxidation products in dsDNA.

#### 4. Chemistry of flavins

Photoirradiation in the presence of riboflavin led to guanine oxidation and the formation of imidazolone. Meanwhile, riboflavin itself was degraded by ultraviolet light A (UV-A) and visible light (VIS) radiation, and the end product was lumichrome. VIS radiation in the presence of riboflavin oxidized guanine similarly to UV-A radiation. Although UV-A radiation with lumichrome oxidized guanine, VIS radiation with lumichrome did not. Thus, UV-A radiation with riboflavin can oxidize guanine even if riboflavin is degraded to lumichrome. In contrast, following VIS radiation degradation of riboflavin to lumichrome, VIS radiation with riboflavin is hardly capable of oxidizing guanine. The consequences of riboflavin degradation and guanine photooxidation can be extended to flavin mononucleotide and flavin adenine dinucleotide. In addition, we report advanced synthesis; carboxymethylflavin was obtained by oxidation of formylmethylflavin with chlorite and hydrogen peroxide; lumichrome was obtained by heating of formylmethylflavin in 50% AcOH; lumiflavin was obtained by incubation of formylmethylflavin in 2 M NaOH, followed by isolation by step-by-step concentration.

#### 5. Radiateon hormesis' theory

It has yet to be determined whether or not the probability of developing cancer due to radiation exposure levels of low doses is proportional to the dose. Herein, for radiation hormesis occurring at low doses, mathematical models using functions that take a mountain-like shape having two inflection points are considered. The following perspectives were obtained: (i) When the probability of developing cancer decreases at radiation levels above the natural background dose, the radiation hormesis effect occurs up to  $\sim 12.4$  mSv. (ii) When there is a proportional relationship at  $\geq 750$  mSv, the radiation hormesis effect occurs up to  $\sim 225$  mSv. Thus, by performing studies at the molecular and cellular levels for radiation doses at  $\leq 16.8$  or 307 mSv, it is possible to investigate carcinogenesis resulting from low radiation doses.

#### 6. Implications for SARS-CoV-2

We describe base pairs that target the RNA-dependent RNA polymerase (RdRp) of RNA viruses and describe implications for the 2019 novel coronavirus (SARS-CoV-2): When products of oxidative guanine damage are adapted for the ribonucleoside analogs, mimics of oxidative guanine damages, which can form base pairs, may become antiviral agents for SARS-CoV-2. In addition, we described a strategy for finding new medicines against the novel coronavirus disease (COVID-19) derived from base pairing with DNA damages.

### III. Identification of novel low molecular compounds that inhibit binding of NF- $\kappa$ B to DNA (Takanobu Kobayashi)

The nuclear transcription factor- $\kappa$ B (NF- $\kappa$ B) is one of the central regulators of an organism's response to various stress signals. In response to an extracellular signal, NF- $\kappa$ B translocates into the nucleus, binds to DNA, and activates the transcription of specific genes. NF- $\kappa$ B regulates the transcription of a number of genes involved in immune and inflammatory pathways and in apoptosis. Dysregulation of NF- $\kappa$ B contributes to a variety of pathological conditions. Therefore, the down-modulators of NF- $\kappa$ B could have important therapeutic implications. One of the strategies for the down-regulation of NF- $\kappa$ B transcriptional activity is the specific inhibition of the DNA binding of NF- $\kappa$ B.

We have screened a virtual library using our structure-based computational screening method, thus enabling us to identify several compounds that inhibit DNA-NF- $\kappa$ B interactions. In our most recent studies, the inhibitory effects of the hit compounds selected from the virtual library were measured using fluorescence correlation spectroscopy (Olympus MF20) and an Electrophoresis Mobility Shift Assay. Using these methods, we found some compounds that inhibit the DNA-NF- $\kappa$ B interaction. We expect that these compounds may down-modulate the transcriptional function of NF- $\kappa$ B.

### IV. Regulation of DNA replication machinery (Hiroshi Miyazawa)

DNA contains the genetic information which can be viewed as the organism's vital plan. Maintenance and replication of DNA, and the expression of the genetic information in DNA are the bases for life. In addition, information units of more than  $10^9$  are packaged and condensed in the nucleus of living cells. The condensation/decondensation of DNA molecules is dynamically repeated in growing cells during development and differentiation, necessitating strict control of the expression of genetic information.

Our purpose is to elucidate the functions of DNA replication factors and the proteins interacting with replication factors, and to ask how these factors act in various reactions occurring in DNA, such as DNA repair or transcription. We are investigating the behavior of these factors in nuclear structure, and studying how the DNA replication machinery is regulated during the cell cycle and cell differentiation.

So far, we have found that the second largest subunit of DNA polymerase  $\epsilon$  (DPE2) interacts with SAP18, a polypeptide associated with the co-repressor protein Sin3. DNA polymerase  $\epsilon$  is involved in chromosomal DNA replication, DNA repair and cell-cycle checkpoint control in eukaryotic cells. The Sin3 complex consists of several peptides containing the histone deacetylases, HDAC1 and HDAC2. By deacetylating histones in the

chromosome, HDAC condenses chromatin structure, resulting in the repression of gene expression. The interaction of HDAC activity with replication factors predicts that DNA polymerase  $\epsilon$  is involved in the maintenance of chromatin structure and transcriptional silencing during DNA replication. Thus DNA polymerase  $\epsilon$  appears to be involved in epigenetic regulation. We are investigating how the interaction of DNA polymerase  $\epsilon$  and the replication complex with proteins involved in epigenetic regulation (i.e. DNA methyltransferases, histone acetylases and deacetylases, and so on) change in the process of DNA replication and cell differentiation.

---

**Publications (2016.4~2021.3)**

---

**[Original papers]**

**2020**

- 1 Hirao-Suzuki M, Koga T, Sakai G, Kobayashi T, Ishii Y, Miyazawa H, Takiguchi, M, Sugihara N, Toda A, Ohara M, Takeda S., " Cadmium down-regulates apolipoprotein E (ApoE) expression during malignant transformation of rat liver cells: direct evidence for DNA hypermethylation in the promoter region of ApoE." *Biochem Biophys Res Commun.*, 2020, 531(2), 215-222
- 2 Kino K. "The prospective mathematical idea satisfying both radiation hormesis under low radiation doses and linear non-threshold theory under high radiation doses" *Genes Environment* 2020, 42, 4
- 3 Kino K\*, Ohshima T, Kawada T, Kobayashi T, Miyazawa H "A strategy for finding new medicines against the novel coronavirus disease (COVID-19) derived from base pairing with DNA damages." *Glob J Infect Dis Clin Res* 2020, 6(1), 060-061.

**2018**

- 1 Hirao-Suzuki, M., Takeda, S., Kobayashi. T., Kino. K., Miyazawa. H., Waalkes, MP., Takiguchi, M., "Cadmium down-regulates apolipoprotein E (ApoE) expression during malignant transformation of rat liver cells: direct evidence for DNA hypermethylation in the promoter region of ApoE." *J. Toxicol. Sci.*, 2018, 43(9), 537-543

**2017**

- 1 Suzuki, M., Takeda, S., Teraoka-Nishitani, N., Yamagata, A., Tanaka, T., Sasaki, M., Yasuda, N., Oda, M., Okano, T., Yamahira, K., Nakamura, Y., Kobayashi, T., Kino, K., Miyazawa, H., Waalkes, MP., Takiguchi, M., " Cadmium-induced malignant transformation of rat liver cells: Potential key role and regulatory mechanism of altered apolipoprotein E expression in enhanced invasiveness." *Toxicology*, 2017, 382, 16-23
- 2 Kobayashi, T., "Expression and Regulation of *Tal2* during Neuronal Differentiation in P19 Cells" *Yakugaku Zasshi*, 2017, 137(1), 61-71
- 3 Kino K.\*, Hirao-Suzuki M., Morikawa M., Sakaga A., Miyazawa H. "Generation, repair and replication of guanine oxidation products." *Genes Environ.*, 2017, 39, 21

**2016**

- 1 Kobayashi, T., Tanuma, S., Kino, K., Miyazawa, H., "New scaffolds of inhibitors targeting the DNA binding of NF- $\kappa$ B" *Integr. Mol. Med.*, 2016, 3(5), 769-773
- 2 Suzuki, M., Kino, K.\*, Kawada, T., Oyoshi, T., Morikawa, M., Kobayashi, T., Miyazawa, H. "Contiguous

2,2,4-triamino-5(2H)-oxazolone obstructs DNA synthesis by DNA polymerases  $\alpha$ ,  $\beta$ ,  $\eta$ ,  $\iota$ ,  $\kappa$ , REV1 and Klenow Fragment exo-, but not by DNA polymerase  $\zeta$ ." *J Biochem.* 2016, 159(3), 323-329.

- 3 Kino, K.\*, Sugasawa, K., Miyazawa, H., Hanaoka, F.\* "2,2,4-Triamino-5(2H)-oxazolone is a Weak Substrate for Nucleotide Excision Repair." *J. Pharm. Negat. Results*, 2016, 7(1), 42-45

**[Book/Review articles]**

- 1 Morikawa M., Kino K.\*, Kawada T., Miyazawa H. "Localizations of the highest occupied molecular orbital and guanine oxidation by UV-light and other oxidizers." *Photomed. Photobiol.* 2021, in press
- 2 Kino K\*, Kawada T, Hirao-Suzuki M, Morikawa M, Miyazawa H. "Products of oxidative guanine damage form base pairs with guanine." *Int J Mol Sci.* 2020, 21(20), 7645.
- 3 Ohyoshi T, Kino K\*. "Epigenetics regulated by DNA damage repair protein TLS/FUS." *Hoshasen seibutsu kenkyu [Radiat. Biol. Res. Common]*, 2017, 52(3), 227-238.



## *Regulation of Immune functions through nuclear receptors*

### Staff

**Professor: Yoshiharu Ohoka, Ph.D.**

Associate Professor since 2005

Ph.D. Tokyo Institute of Technology, 1993

**Research Associate: Aya Yokota-Nakatsuma, Ph.D.**

Assistant Professor since 2006

Ph.D. Kitasato University, 2004

### Research

**Research Themes:**

The mechanisms of immune cell trafficking and the regulation of immune responses are our main themes to clarify. Especially, we study roles of nuclear receptor ligands including vitamin A & D and various hormones in regulating immune functions especially in mucosal systems including the gut. By pursuing these biologically fundamental questions, we set a goal to establish a solid basis of new remedies and drug discovery for various diseases.

**Recent Study:**

For efficient immune responses, immune cells with proper functions need to migrate into right sites in the body. T cells, known as the control tower of the immune system, patrol the whole body along with the blood vessels and lymphatic vessels. However, they cannot migrate into non-lymphoid tissues before they are activated with antigen in the secondary lymphoid organs. Once they are activated and become effector or memory T cells, however, they can migrate into non-lymphoid tissues. They tend to migrate into the tissue that is associated with the secondary lymphoid organ where they are activated. This type of migration is called "homing". For example, T cells that are activated with antigen in the small intestine-related secondary lymphoid organs, Peyer's patches (PP) and mesenteric lymph nodes (MLN), tend to migrate into small intestinal tissues including the lamina propria. In 2004, we found that vitamin A-derived retinoic acid is the physiological factor that imprints gut-homing specificity on T cells. We also found that subpopulations of dendritic cells (DC) in PP and MLN express the key enzyme of retinoic acid synthesis, RALDH (retinaldehyde dehydrogenase), and are capable of producing retinoic acid from vitamin A (retinol). They imprint T cells with the gut-homing specificity by delivering retinoic acid to T cells during antigen presentation. In 2006, we also found that a similar mechanism is involved in the imprinting of B cells with gut-homing specificity by a collaboration mainly with Dr. von Andrian's group and Dr.

Adams' group.

In 2009, we established a method for estimating the enzyme activity of RALDH in each DC, and identified the retinoic acid-producing subpopulation in MLN-DC and PP-DC. The RALDH2 isoform was mostly responsible for the activity. Depending on these results, we searched for the physiological factors that induce RALDH2 expression in DC in the gut or in MLN. We found that GM-CSF (granulocyte-macrophage colony-stimulating factor) plays a major role in the induction, and that retinoic acid itself plays a role as an essential cofactor. IL-4 and IL-13 exhibited effects similar to those of GM-CSF on RALDH2 expression, but are found to be dispensable by the analysis of their receptor-deficient mice. The stimulation through Toll-like receptors enhanced the RALDH2 expression in DC as well as DC maturation.

In 2007, several groups reported that the retinoic acid-producing DC also enhance the differentiation of Foxp3<sup>+</sup> inducible regulatory T cells (iTreg) and suppress that of pro-inflammatory Th17 cells. Accordingly, we found that GM-CSF-treated DC that expressed RALDH2 could enhance the differentiation of Foxp3<sup>+</sup> iTreg and suppress that of Th17. These results suggest that retinoic acid contributes to oral tolerance and regulation of immune responses to specific antigens. We have recently found that vitamin A deficiency affects not only the nature of T cells but also that of DC, and that MLN-DC in vitamin A deficient mice can induce oral antigen-specific CD4<sup>+</sup> T cells that produce high levels of IL-13 and tumor necrosis factor- $\alpha$  (TNF- $\alpha$ ). Under vitamin A-deficient conditions, although it has been generally known that antibody responses are reduced, we found that markedly high levels of IgG1 antibody responses and IgE antibody responses against oral antigens can be induced. It is likely that these antibody responses involve the above-mentioned new IL-13-producing inflammatory helper T (Th) cells. Currently, we are investigating the molecular mechanism of differentiation of these Th cells and their role in allergic and inflammatory diseases.

We have been also analyzing some other aspects of retinoic acid effects on immune functions and regulation, including 1) The molecular mechanism of retinoic acid effects on the expression of gut-homing receptors on immune cells, 2) The role of a retinoic acid-metabolizing system in the regulation of T cell functions, 3) Amplification and disruption of retinoic acid signals by RXR ligands and environmental chemicals, 4) The molecular mechanism of RALDH isoform 2 (RALDH2, encoded by *Aldh1a2*) expression in DC and the roles of a retinoic acid-bound RAR/RXR heterodimer and a retinoic acid response element (RARE) half-site at the proximal promoter of the *Aldh1a2* gene. The RARE half-site

in this gene promoter was commonly found in many animal species.

We found that, in vitamin A-deficient mice, dextran sulfate sodium (DSS) induced more severe colitis, and a higher rate of development of colorectal carcinoma with colitis following treatment with azoxymethane, compared with vitamin A-supplemented mice. Therefore, vitamin A is likely to inhibit the development of chronic inflammation and cancer. These vitamin A effects may also be dependent on retinoic acid production. As we mentioned above, GM-CSF and retinoic acid itself play important roles in the development of retinoic acid-producing DC, and Toll-like receptor-mediated stimulation enhances their maturation and retinoic acid-producing capacity. However, we recently found that Toll-like receptor stimulation also induced production of inflammatory cytokines. As retinoic acid-producing RALDH2<sup>high</sup> MLN-DC in steady-state mice do not produce inflammatory cytokines, we searched for a stimulation condition that can induce maturation in GM-CSF/retinoic acid-treated semi-mature DC and can enhance their RALDH2 expression without inducing inflammatory cytokines. We found that stimulation with immobilized proteins such as E-cadherin/IgG-Fc chimeric protein fulfilled the requirement. These proteins induced signals through integrin  $\beta$ 1 in DC. E-cadherin expressed on epithelial cells in gut tissues might contribute to the development of the RALDH2<sup>high</sup> DC. These DC induced in vitro could efficiently induced gut-homing iTreg, and could significantly suppress DSS-induced colitis.

1. Yokota-Nakatsuma, A. Retinoic acid prevents dendritic cells from inducing novel inflammatory T cells that produce abundant interleukin-13. *Yakugaku Zasshi* 137(12):1491-1496(2017).

---

---

**Publications (2016.4~2021.3)**

---

---

**2020**

1. Iwashita S, Suzuki T, Kiriya Y, Dohmae N, Ohoka Y, Song SY, Nakashima K. : Overcoming off-targets: assessing Western blot signals for Bcnt/Cfdp1, a tentative component of the chromatin remodeling complex. *Biosci Rep.* 26; 40 (6): BSR20194012 (2020).

**2016**

1. Yokota-Nakatsuma, A., Ohoka, Y., Takeuchi, H., Song, S.-Y., and Iwata, M.: Beta 1-integrin ligation and TLR ligation enhance GM-CSF-induced ALDH1A2 expression in dendritic cells, but differentially regulate their anti-inflammatory properties. *Sci Rep.* 6:37914 (2016).
2. Okayasu, I., Hana, K., Nemoto, N., Yoshida, T., Saegusa, M., Yokota-Nakatsuma, A., Song, S.-Y., and Iwata, M.: Vitamin A inhibits development of dextran sulfate sodium-induced colitis and colon cancer in a mouse model. *BioMed Res Int*: Article ID 4874809 (2016).

**[Review articles in Japanese]**

**2017**



## Laboratory of Pharmaceutical Health Sciences

### Staff

#### **Hiromi Nochi, Ph.D.**

Professor since April, 2013.

Associate Professor (April, 2006 - March, 2013)

Previous position: Lecturer at Faculty of Pharmaceutical Sciences, Health Sciences University of Hokkaido.

#### **Hajime Takeuchi, Ph.D.**

Associate Professor since 2013

Previous position: Postdoctoral at University of Zurich (Switzerland)

#### **Yoshimitsu Kiriya, Ph.D.**

Lecturer Since 2018.

Assistant Professor since 2005.

Previous position: Postdoctoral Researcher at McGill University Health Centre (Canada).

### Research

Research project: Analysis of the molecular mechanism by which extracellular acidification induces inflammatory responses in rheumatoid arthritis synovial cells. (Nochi)

The local acidification of extracellular pH is caused by augmentation of cell proliferation as observed in the cancer tissue and the inflammatory site. In RA, the proliferation of synovial cell is abnormally augmented and the pH of synovial fluid from RA patient is lower than that of normal synovial fluid. Therefore, we examined the possibility that the intraarticular acidification may affect the inflammatory responses and contributes to exacerbation of pathological condition in RA.

Research project: characterization of retinoid X receptor signaling on T cell differentiation. (Takeuchi)

Retinoic acid (RA) is an immune-modulating molecule, and its signaling is known to affect T cell differentiation. It can enhance differentiation toward regulatory T cell (Treg), and suppress that toward Th17. RA receptor is consist of two components, RAR and RXR. Although RXR has a ligand-binding domain, it does not bind RA at physiological condition. It is not well-studied whether RXR-specific signaling can affect T cell differentiation.

We found that RXR signaling actually played some roles on T cell differentiation. RXR signaling dramatically enhanced RA-mediated Treg differentiation. On the other hand, it suppressed

that of Th17 in cooperation with some nuclear receptor signaling. The effect of RXR signal was observed in vivo as well as in vitro. Thus, this finding can apply to develop new methods to regulate immune-response and inflammatory diseases.

Research project: Analysis of the molecular mechanism of Bile acids in the brain. (Kiriya, Nochi)

Bile acids (BA) are amphipathic steroid acids synthesized from cholesterol in the liver. They act as detergents to expedite the digestion and absorption of dietary lipids and lipophilic vitamins. BA are also considered to be signaling molecules, being ligands of nuclear and cell-surface receptors, including farnesoid X receptor and Takeda G-protein receptor 5. Moreover, BA also activate ion channels, including the bile acid-sensitive ion channel and epithelial Na<sup>+</sup> channel. BA regulate glucose and lipid metabolism by activating these receptors in peripheral tissues, such as the liver and brown and white adipose tissue. Recently, 20 different BA have been identified in the central nervous system. Furthermore, BA affect the function of neurotransmitter receptors, such as the muscarinic acetylcholine receptor and  $\gamma$ -aminobutyric acid receptor. BA are also known to be protective against neurodegeneration.

We found that Chenodeoxycholic acid (CDCA), which is one of bile acids in the brain, increased the expression of Monocarboxylate transporter 1 (MCT1) and vascular cell adhesion molecule-1 (VCAM1). MCT1 is related to the regulation of Long-term potentiation (LTP) and VCAM1 is related to the differentiation of neural stem cell. Further studies on the mechanism of the expression of MCT1 and VCAM1 by CDCA are under way.

---

### Publications (2016.4~2021.3)

---

#### [Original papers]

##### 2020

1. Kiriya Y. and Nochi H. Induction of PD-L1 by Nitric Oxide via JNK Activation in A172 Glioblastoma Cells. *Biol Pharm Bull.* 43(6):1020-1022, (2020)
2. Iwashita S, Suzuki T, Kiriya Y., Dohmae N, Ohoka Y, Song SY, Nakashima K. Overcoming off-targets: assessing Western blot signals for Bcnt/Cfdp1, a tentative component of the chromatin remodeling complex. *Biosci Rep.* 40 (6): BSR20194012, (2020)

##### 2019

1. Kiriya Y. and Nochi H. The Biosynthesis, Signaling, and Neurological Functions of Bile Acids. *Biomolecules.*9:6, (2019)

**2018**

1. Kiriyama Y. and Nochi H. Intra- and Intercellular Quality Control Mechanisms of Mitochondria. *Cells*.7:1, (2018)
2. Kiriyama Y. and Nochi H. IRole and Cytotoxicity of Amylin and Protection of Pancreatic Islet  $\beta$ -Cells from Amylin Cytotoxicity. *Cells*.7:95, (2018)

**2016**

1. Yokota-Nakatsuma, A, Ohoka, Y., Takeuchi, H., Song. S.-Y. and Iwata, M. Beta1-integrin ligation and TLR ligation enhance GM-CSF-induced ALDH1A2 expression in dendritic cells, but differentially regulate their anti-inflammatory properties. *Sci. Rep.* 6, 37914 (2016).
2. Kiriyama, Y., Kasai, K., Kino, K. & Nochi, H. Induction of the expression of GABARAPL1 by hydrogen peroxide in C6 glioma cells. *Integr Mol Med* 3, 675-679 (2016).
3. Kiriyama, Y. & Nochi, H. D-Amino Acids in the Nervous and Endocrine Systems. *Scientifica (Cairo)*, 6494621 (2016).





## Laboratory of Neuropharmacology

### Staff

#### Maki K. Yamada, Ph. D.

Professor since 2016

Ph. D. in The University of Tokyo, 1996

### Research

#### Main Project (Maki K. Yamada)

##### Seeing through the brain mechanism for memory using transgenic mice

###### Background

We showed that an F-actin stabilizing protein CapZ accumulated and stayed around synapses (spines) that underwent long-term potentiation (LTP) (Genes to Cells 2010), thus the place for memory-related change in neuronal synapses is expected to be labeled by EGFP-CapZ even in-vivo. On the other hand, we published another paper (Cerebral cortex 2009) suggesting that memory-coding neurons are included in a part of Arc-expressing neurons, thus, Yamada made the transgenic mouse of EGFP-CapZ driven by the Arc-promotor, Arc::EGFP-CapZ, to mark the memory coding synapses and neurons. In the resulting mouse having blight fluorescence and normal learning ability, the EGFP-fluorescence is mainly found in some of synaptic structure, spines, and the cell body.

Till now,

1. In-vitro confirmation; It was confirmed that the LTP-inducing stimuli increased the level of the green fluorescence in a part of the synaptic structure (spines) and the neuronal cell body in the hippocampus sections from the TG having Arc::EGFP-CapZ (AiCE-TG) as expected.
2. In-vivo observation; we observed that a small number of strongly green neurons emerged after the visually-cued learning in the primary visual cortex of the AICE-TG.
3. Ex-vivo analyses; we analyzed the changes of the green neurons and spines in the primary visual cortex and sensory cortex by making fixed sections from AICE-TG, 15-20min after unilateral visual or sensory inputs and then found the differences between right and left cortices of the brain. (SciRep 2020)

References from Yamada's group in Tokyo Univ.

###### 1. Cereb. Cortex

Experience-dependent, rapid structural changes in hippocampal pyramidal cell spines.

Kitanishi T, Ikegaya Y, Matsuki N, Yamada MK\*

Cerebral cortex (New York, N.Y.) 19(11) 2572-2578 (2009)

<http://cercor.oxfordjournals.org/content/19/11/2572.short>

###### 2. Genes Cells

Activity-dependent localization in spines of the F-actin capping protein CapZ screened in a rat model of dementia.

Kitanishi T, Sakai J, Kojima S, Saitoh Y, Inokuchi K, Fukaya M, Watanabe M, Matsuki N, Yamada MK\* Genes to cells : devoted to molecular & cellular mechanisms 15(7) 737-747 (2010)

<http://onlinelibrary.wiley.com/doi/10.1111/j.1365-2443.2010.0141>

1.x/pdf

### Publications (2016.4~2021.3)

#### [Preprint]

2019

**Kuboyama K**, Inoue T, Hashimoto-dani Y, **Itoh T**, **Suzuki T**, **Tetsuzawa A**, **Kinoshita R**, **Ohtsuka Y**, **Takara R**, **Miyazawa T**, **Gusain P**, Kano M, **Yamada MK**. (2019) Fluorescent Marker of a Plasticity-Related Change in Dendritic Spines. Sneak Peek (Preprint) doi: 10.2139/ssrn.3419080

#### [Original papers]

2020

1. **Kuboyama K**, Inoue T, Hashimoto-dani Y, **Itoh T**, **Suzuki T**, **Tetsuzawa A**, **Ohtsuka Y**, **Kinoshita R**, **Takara R**, **Miyazawa T**, **Gusain P**, Kano M, **Yamada MK** (2020) Traceable stimulus-dependent rapid molecular changes in dendritic spines in the brain Scientific Reports, **10** 15266 DOI :10.1038/s41598-020-72248-4 <https://www.nature.com/articles/s41598-020-72248-4>
2. **Kuboyama, K.**, **Shirakawa, Y.**, **Kawada, K.**, **Fujii, N.**, **Ojima, D.**, **Kisimoto, Y.**, **Yamamoto, T.**, and **Yamada, M. K.** (2020) Visually cued fear conditioning test for memory impairment related to cortical function Neuropsychopharmacology Reports 40(4):371-375 <https://onlinelibrary.wiley.com/doi/full/10.1002/npr2.12146>

2019

3. Tanga N, **Kuboyama K**, Kishimoto A, Kiyonari H, Shiraishi A, Suzuki R, Watanabe T, Fujikawa A, Noda M. (2019) The PTN-PTPRZ signal activates the AFAP1L2-dependent PI3K-AKT pathway for oligodendrocyte differentiation: Targeted inactivation of PTPRZ activity in mice. *Glia* 67. 967-984

2018

4. Suzuki R, Fujikawa A, Komatsu Y, **Kuboyama K**, Tanga N, Noda M. (2018) Enhanced extinction of aversive memories in mice lacking SPARC-related protein containing immunoglobulin domains 1 (SPIG1/FSTL4). *Neurobiol learning mem* 152: 61-70.

2017

5. **Kuboyama K**, Tanga N, Suzuki R, Fujikawa A, Noda M. (2017) Protamine neutralizes chondroitin sulfate

proteoglycan-mediated inhibition of oligodendrocyte differentiation. *PLoS one* 12: e0189164.

6. Fujikawa A, Chow JPH, Matsumoto M, Suzuki R, Kuboyama K, Yamamoto N, Noda M. (2017) Identification of novel splicing variants of protein tyrosine phosphatase receptor type Z. *J biochem* 162: 381-390.
7. Fujikawa A, Sugawara H, Tanaka T, Matsumoto M, Kuboyama K, Suzuki R, Tanga N, Ogata A, Masumura M, Noda M. (2017) Targeting PTPRZ inhibits stem cell-like properties and tumorigenicity in glioblastoma cells. *Sci rep* 7: 5609.
8. Kohnomi S, Ebihara K, Kobayashi M. (2017) Suppressive regulation of lateral inhibition between medium spiny neurons via dopamine D<sub>1</sub> receptors in the rat nucleus accumbens shell. *Neurosci Lett* 636: 58-63.
9. Nakahata Y, Eto K., Murakoshi H, Watanabe M, Kuriu T, Hirata H, Moorhouse AJ, Ishibashi H, Nabekura J. (2017) Activation-dependent rapid postsynaptic clustering of glycine receptors in mature spinal cord neurons. *eNeuro* 4: e0194-16.2017.

#### **2016**

10. Kuboyama K, Fujikawa A, Suzuki R, Tanga N, Noda M. (2016) Role of Chondroitin Sulfate (CS) Modification in the Regulation of Protein-tyrosine Phosphatase Receptor Type Z (PTPRZ) Activity. PLEIOTROPHIN-PTPRZ-A SIGNALING IS INVOLVED IN OLIGODENDROCYTE DIFFERENTIATION. *J Biol Chem* 291: 18117-18128.
11. Fujikawa A, Nagahira A, Sugawara H, Ishii K, Imajo S, Matsumoto M, Kuboyama K, Suzuki R, Tanga N, Noda M, Uchiyama S, Tomoo T, Ogata A, Masumura M, Noda M. (2016) Small-molecule inhibition of PTPRZ reduces tumor growth in a rat model of glioblastoma. *Sci rep* 6: 20473.
12. Ono Y, Saitow F & Konishi S. (2016) Differential modulation of GABA<sub>A</sub> receptors underlies postsynaptic depolarization- and purinoreceptor-mediated enhancement of cerebellar inhibitory transmission: a nonstationary fluctuation analysis study. *PLoS one* 11: e0150636.

#### **[Review articles]**

1. Yamada MK. (2016) Angiogenesis in refractory depression: A possible phenotypic target to avoid the blood brain barrier. *Drug discov ther* 10: 79-81.
2. Yamada, MK. (2016) A link between vascular damage and cognitive deficits after whole-brain radiation therapy for cancer: A clue to other types of dementia? *Drug discov ther* 10: 74-78.

#### **[Book]**

3. Maki K, Yamada, "Potential for Dementia Treatment in Blood Vessels and Blood Circulation"  
Journal of Kagawa Pharmaceutical Association  
"KAGAYAKU" 162 p39-41 July 2016

[Press Release] 2020.10.13 for the paper in Scientific Report.

---

#### Scientific Meetings (2020. 4~2021. 3)

---

1. Masakiyo Tawata, Kazuya Kuboyama, Miku Yoshioka, Toshie Fujishima, Maki K. Yamada,  
"Impairment of spine molecular plasticity induced by a hallucinogenic drug" 59<sup>th</sup> Annual Meeting of the Chugoku-Shikoku Branch of the Pharmaceutical Society of Japan, the Japanese Pharmacists Association, and the Japanese Society of Hospital Pharmacists Dec2020 (Presentation on the Web)
2. Maki K. Yamada, Masakiyo Tawata, Miku Yoshioka, Toshie

#### **Fujishima, Kazuya Kuboyama**

Phencyclidine-induced impairment of spine molecular plasticity shown in the AiCE-Tg mice  
SfN Connectome  
Jan 13, 2021 On line presentation P285.01



## Laboratory of Pathological Physiology

### Staff

#### Hiroshi Tokumaru, Ph. D.

Professor since 2012

Research Assistant Professor, Dpt. Neurobiology, Duke University, NC, U.S.A.

D.Sc. Kyushu University, Pharmaceutical Sciences, 1989

#### Hisayo Sadamoto, Ph. D.

Lecturer since 2014

Assistant Professor since 2005

Ph. D. in Hokkaido University, Biological Sciences, 2002

#### Suguru Kobayashi, Ph. D.

Assistant Professor since 2005

Assistant Professor, Sapporo Medical University

Ph. D. in Hokkaido University, Biological Sciences, 2000

### Research

#### Theme 1. The molecular mechanism of complexin (Hiroshi Tokumaru, Hisayo Sadamoto)

Action potential-evoked neurotransmitter release is triggered by  $Ca^{2+}$  influx through voltage-gated calcium channels located next to the active zone. The increase in  $Ca^{2+}$  concentration initiates rapid signaling cascades that lead to the exocytosis of synaptic vesicles containing high concentrations of neurotransmitter. Two soluble *N*-ethylmaleimide-sensitive factor attachment protein receptor (SNARE) proteins from the presynaptic membrane, syntaxin 1 and SNAP-25, and one SNARE protein from the synaptic vesicle membrane, synaptobrevin-2 (also known as VAMP-2), form a four-helix bundle (called the *trans*-SNARE complex or SNAREpin) that catalyzes membrane fusion. The synaptic vesicle protein synaptotagmin 1 (Syt1) serves as a major  $Ca^{2+}$  sensor for fast action potential-evoked synaptic vesicle exocytosis. The rapid interactions between Syt1, the SNARE complex and membrane phospholipids induced by  $Ca^{2+}$  are critical for membrane fusion.

The precise control of evoked neurotransmitter release requires several cytosolic proteins including complexin (also known as synaphin). Complexin and its binding to the SNARE complex are critical for fast neurotransmitter release, as demonstrated by studies in knockout mice and in *Drosophila* mutants. In addition, intra-presynaptic terminal injection of a SNARE-binding domain peptide that blocks complexin binding to the SNARE complex also

inhibits rapid neurotransmitter release. Despite this evidence, complexin's function remains controversial. Furthermore, recent studies suggest that complexin contains several functional domains that either stimulate or inhibit neurotransmitter release. Thus, the function of complexin is likely more complex than expected from its small size (134 aa for mammalian complexin 1 and 2).

Like Syt1-deficient mice, complexin 1/2 double-knockouts exhibit an impairment of action potential-evoked synchronous (but not asynchronous) neurotransmitter release. However, an important difference exists between the two types of knockout mice: elevated external  $Ca^{2+}$  can rescue synchronous release in complexin 1/2 double-knockouts but not in Syt1 knockouts. Thus, the functions of complexin and Syt1 in action potential-evoked fast neurotransmitter release are intimately related to each other yet distinct.

Biochemically investigating the relationship between the two proteins, we previously demonstrated that complexin directly binds to Syt1 even in the absence of  $Ca^{2+}$ . Because Syt1 binds to SNARE complexes weakly in the absence of  $Ca^{2+}$ , we proposed that complexin recruits Syt1 to the SNARE complex prior to  $Ca^{2+}$  influx. Recently, we examined the interaction between complexin, Syt1 and the SNARE complex using recombinant proteins. Our results indicate that Syt1 recruitment to the SNARE-driven fusion machinery by complexin is essential for vesicle exocytosis.

Syt1 bound weakly to complexin alone, but the addition of three SNARE proteins (syntaxin 1, SNAP-25 and VAMP/synaptobrevin-2) in combination, but not individually, markedly enhanced binding. Unlike full-length complexin (amino acid [aa] 1–134) and an NH2 (N)-terminally truncated complexin (aa 46–134), carboxy (C)-terminally truncated complexin s (aa 1–104 and 1–124) could not support Syt1 binding even in the presence of the SNARE complex. These results indicate that the binding of Syt1 to the C-terminal region of complexin promotes its recruitment to the SNARE-driven fusion machinery, and that this process is crucial for  $Ca^{2+}$ -dependent vesicle exocytosis.

#### Theme 2. Differential localizations of GKAP/SAPAP1 isoforms in developing hippocampal neurons (Hisayo Sadamoto)

Guanylate kinase-associated protein (GKAP) and SAP90/PSD-95-associated protein 1 (SAPAP1) proteins form complexes with PSD-95 and Shank at excitatory postsynaptic sites, and are implicated in synapse formation and synaptic plasticity. GKAP/SAPAP1 proteins, which displayed different N termini, have appeared as multiple alternatively spliced isoforms. However, specific functional roles of individual isoforms still

remain unclear. To understand particular functions of GKAP/SAPAP1 isoforms in formation and maintenance of synaptic connections, we here investigated expression and subcellular distributions of these isoforms in hippocampal neurons during synaptic development. First, we identified two isoforms of SAPAP1 (named as SAPAP1b and 1c) in mice hippocampus, which exhibited an alternative usage of two exons in the middle part of SAPAP1 transcript. Using primary culture of mouse hippocampal neurons and confocal microscope, we sought to examine localizations of each EGFP-tagged GKAP/SAPAP1 isoform (GKAP, SAPAP1, SAPAP1b or SAPAP1c). During synaptic maturation, GKAP/SAPAP1 isoforms were found to display differences in cluster formation at the dendritic spines. EGFP-SAPAP1 formed clusters at dendritic shafts on an early stage of synapse formation and did not change the rate of accumulation (clustering index) in mature dendritic spines at later stages. Clusters of EGFP-SAPAP1b and EGFP-SAPAP1c were also found to occur at an early stage, but tended to disappear during synaptic maturation. In contrast, GKAP clearly accumulated in dendritic spines at a later stage of synaptic maturation. These results suggest the possibility that each spliced isoform of GKAP/SAPAP1 has a specific function in synapse formation.

**Theme 3. Synaptic modulation and synchronous oscillatory network modulation in odor information processing (Suguru Kobayashi)**

Synchronous oscillatory activity is common in multiple cognitive and neural functions of both vertebrates and invertebrates. In the olfactory center of terrestrial animals, changes in the oscillatory frequency of the local field potential (LFP) are thought to be involved in olfaction-based behavior and olfactory memory. We study GABAergic and FMRFamideergic neuromodulation of oscillatory activity in odor information processing of the procerebrum (PC) in the land slug *Limax valentianus*. We found that GABA and FMRFamide are present in the PC and these modulatory roles are involved in the oscillatory neural network of the PC. A part of results for excitatory GABAergic and FMRFamideergic neuromodulation are published in J. Neurophysiol. (2012) and Eur. J. Neurosci. (2010). Other physiological study with fine histological analysis showed the presence of cholinergic excitatory modulation for PC neurons via nicotinic ACh receptors activation (J Comp Neurol, 2014) and feedforward inhibition in the cholinergic afferents from the tentacles to the PC. In comprehensive analysis with *in vitro* cultured PC preparation, the role of biogenic amines and cholinergic activation in synchronous oscillatory networks were discussed (Matsuo et al., 2016a, b; 2020; Kobayashi 2017; 2019). We use electrophysiology and optical recording methods to understand the role of oscillatory dynamics in odor recognition and memory storage.

Grant Support: Grants-in-Aid for KAKENHI from the Japan Society for the Promotion of Science (No. 20K06750).

Collaborations: With other universities.

---

**Publications (2015.4~2021.3)**

---

**[Original papers]**

**2020**

1. Matsuo R, Kobayashi S, Furuta A, Osugi T, Takahashi T, Satake H, Matsuo Y. (2020) Distribution and physiological effect of enterin neuropeptides in the olfactory centers of the terrestrial slug *Limax*. *J Comp Physiol A*, in press.

**2019**

2. Ishiguro M, Kobayashi S, Matsuyama K, Nagamine T. (2019) Effects of propofol on IPSCs in CA1 and dentate gyrus cells of rat hippocampus: Propofol effects on hippocampal cells' IPSCs. *Neurosci Res* 143, 13-19.
3. Kobayashi S. (2019) Cholinergic induction of network oscillations in the slug olfactory neuron in vitro. *J Physiol Sci* 69, S155.

**2017**

4. Kobayashi S. (2017) Synchronous oscillatory network and cholinergic system in the slug olfactory center. *European Biophysics Journal with Biophysics Letters* 46, S202.

**2016**

5. Matsuo R., Tanaka M., Fukata R., Kobayashi S., Aonuma H., Matsuo Y. (2016a) Octopaminergic system in the central nervous system of the terrestrial slug *Limax*. *J Comp Neurol* 524, 3849-3864.
6. Matsuo R., Fukata R., Kumagai M., Kobayashi A., Kobayashi S., Matsuo Y. (2016b) Distribution of histaminergic neurons and their modulatory effects on oscillatory activity in the olfactory center of the terrestrial slug *Limax*. *J Comp Neurol* 524, 119-35.

**[Books]**

- Mochida S., Tokumaru H. et al., (2015) "Presynaptic Terminals" Springer ISBN978-4-431-55165-2



## Laboratory for Pharmacotherapy and Experimental Neurology

### Staff

#### **Kouichi Itoh, Ph. D.**

Professor since April 01, 2004.

M. Sc., Showa College of Pharmaceutical Sciences graduate school of pharmacology, 1983.

Ph. D., Toho University, Sch. of Med. 1991

Previous occupation: The Tokyo metropolitan organization for medical research, Tokyo Metropolitan Institute of Medical Science, the division of pharmacology, Researcher.

<http://kp.bunri-u.ac.jp/kph02/>

#### **Taira Matsuo, Ph. D.**

Lecturer since 2015

Assistant Professor since 2009

Ph.D. Okayama University, 2009

#### **Rie Komori, Ph. D.**

Assistant Professor since 2005.

D.Sc. Nara Women's University, 2003.

Previous occupation: Department of Etiology and Pathophysiology, National Cardiovascular Center Research Institute, postdoctoral researcher.

### Research

#### **【Research aims】**

Our research goal is the novel molecular target for new antiepileptic drugs. To achieve this goal, we are working on molecular mechanism for the epileptogenesis of partial and generalize epilepsy through the several approaches such as pharmacological, behavioral, cell biological, biochemical and *in vivo* imaging techniques.

#### **【Research Scopes】**

##### **1. Prevention of status epilepticus-induced brain edema and neuronal cell loss by new antiepileptic drugs.**

Status epilepticus (SE) refers to neurologic emergencies that may lead to death or permanent neurologic injury. To avoid life threatening injury, patients must be properly and quickly treated. Furthermore, SE causes 3~5% of symptomatic epilepsy (~35% of epileptic syndromes), thus SE patients are at a high risk of developing acquired epilepsy (Hesdorffer, 1998; Temkin, 2003; Jacobs et al., 2009). The management of SE is important to prevent mortality and the development of post-SE symptomatic

epilepsy. Seizures must be treated as soon as possible and benzodiazepines (lorazepam or diazepam) are typically administered as first-line antiepileptic drugs (AEDs). However, when these drugs fail, second-line AEDs (phenytoin; PHT, fosphenytoin; fosPHT, valproate; VPA, and midazolam) are administered in refractory SE prior to giving phenobarbital; PB (Manno, 2011). Various clinical trials have indicated that conventional AEDs (e.g., DZP, PB, VPA, or PHT) suppressed acute seizures, but thus far there has been no success at preventing the development of post-SE acquired epilepsy under various conditions (Temkin, 2001; 2003; 2009). Although the mechanisms underlying the development of acquired epilepsy as part of the epileptogenic process are not well understood, the lack of efficacy of the AEDs suggests that the biological mechanisms of the acquired epilepsy process may be quite different from that of the established epileptic brain (Pitkanen et al., 2009).

Levetiracetam ([*(S)*- $\alpha$ -ethyl-2-oxo-1-pyrrolidine acetamide]) with broad-spectrum antiepileptic effects is an established second-generation AED that is widely used in patients with either generalized or partial epilepsy (Lyseng-Williamson, 2011). In addition, levetiracetam is one of currently available candidates as second-line AED for SE (Manno, 2011) and as an anti-epileptogenic drug (Pearl et al., 2013; Klein, et al., 2012). Animal studies have shown that levetiracetam possesses anticonvulsant activity and results in neuroprotective effects (Mazarati et al., 2004; Zheng et al., 2010). In addition, levetiracetam has been considered for the treatment of pilocarpine (PILO)-SE due to its anti-epileptogenic effects in basic and clinical studies. Two phase II clinical trials for levetiracetam indicated the possibility that it may decrease the risk of acquired epilepsy or prevent the development of acquired epilepsy (Pearl et al., 2013; Klein, et al., 2012). However, the previous evidence in SE animal models has been conflicting and whether levetiracetam can prevent or modify epileptogenesis remains controversial (Löscher et al., 1998; Glien 2002; Klitgaard, Pitkanen, 2003; Stratton et al., 2003; Gibbs et al., 2006; Brandt, et al., 2007).

Temporal lobe epilepsy (TLE) is the most frequent type (75%) of symptomatic partial epilepsies that originate from the limbic regions (e.g., hippocampus and amygdala) after an initial brain insult, such as SE, stroke, and traumatic brain injury (TBI). Additionally, it is also one of the most refractory forms of epilepsy with approximately 30% of patients being unresponsive to AEDs (Engel, 1996; Kwan and Brodie, 2000). In this present study, we used PILO-induced SE mice as a model of TLE to determine the effects of repeated administration of high-dose levetiracetam after

the termination of SE by DZP. We observed that repeated high-dose levetiracetam prevented the development of brain edema in the limbic regions at the initial period of post-SE, and the incidence of spontaneous recurrent seizures. In the present study, we determined the possible molecular and cellular mechanisms of LEV treatment after termination of SE. To assess the effect of LEV against the brain alterations after SE, we focused on blood-brain barrier (BBB) dysfunction associated with angiogenesis and brain inflammation. The consecutive treatment of LEV inhibited the temporarily increased BBB leakage in the hippocampus two days after SE. At the same time point, the LEV treatment significantly inhibited the increase in the number of CD31-positive endothelial immature cells and in the expression of angiogenic factors. These findings suggested that the increase in neovascularization led to an increase in BBB permeability by SE-induced BBB failure, and these brain alterations were prevented by LEV treatment. Furthermore, in the acute phase of the latent period, pro-inflammatory responses for epileptogenic targets in microglia and astrocytes of the hippocampus activated, and these upregulations of pro-inflammatory-related molecules were inhibited by LEV treatment. These findings suggest that LEV is likely involved in neuroprotection via anti-angiogenesis and anti-inflammatory activities against BBB dysfunction in the acute phase of epileptogenesis after SE.

## 2. Study on the relationship between blood brain barrier (BBB) disruption and epilepsy.

In recent years, it has been well recognized that the therapies for epilepsy by the AEDs, which is represented by valproate, have been definitely effective. On the other hand, no less than 30% of epileptic patients were intractable, so there are difficulties in achievement of high level of QOL for them. In order to dissolve this problem, the development of new AEDs with novel mechanisms is an important for drug-resistant patients. We aim to find out the novel molecular target for new drugs. Recently, we have focused the relationship between BBB disruption and generalized epilepsy. Although conventional evaluation methods of BBB disruption are to measure the diffusion of low molecular weight dye (ex. Evans blue) to brain parenchyma, they are not available in animals alive. In our laboratory, the spatial and sequential changes of the BBB disruption in PTZ-induced convulsive alive mice were elucidated by the technique of gadolinium-enhanced magnetic resonance imaging using the MRI for rodent (MRminiSR, 1.5T). In addition, we have investigated the involvement of NO in the BBB disruption in generalized epilepsy.

---

### Publications (2016.4~2021.3)

---

#### [Original papers]

##### 2021

1. Kenta Sakai, Fuyuko Takata, Gaku Yamanaka b, Miho Yasunaga a, Kana Hashiguchi, Kazuki Tominaga, **Kouichi Itoh**, Yasufumi Kataoka, Atsushi Yamauchi, Shinya Dohgu. (2021) Reactive pericytes in early phase are involved in glial activation and late-onset hypersusceptibility to pilocarpine-induced seizures in traumatic brain injury model mice. *J. Pharmacol. Sci.* 145:155-165

##### 2020

1. Masahiro Ishii, Ayako Senju, Ami Oguro, Masayuki Shimono, Shunsuke Araki, Koichi Kusahara, **Kouichi Itoh**, Mayumi Tsuji, Yasuhiro Ishihara. (2020) Measurement of the Estradiol Concentration in Cerebrospinal Fluid from Infants and Its Correlation with Serum Estradiol and Exosomal MicroRNA-126-5p. *Biol. Pharm. Bull.* 43:1966-1968

##### 2019

1. **Kouichi Itoh**, Ruri Taniguchi, **Taira Matsuo**, Ami Oguro, Christoph F.A. Vogel, Takeshi Yamazaki, Yasuhiro Ishihara. (2019) Suppressive effects of levetiracetam on neuroinflammation and phagocytic microglia: A comparative study of levetiracetam, valproate and carbamazepine. *Neuroscience. Letters.*, 708:134363  
<https://doi.org/10.1016/j.neulet.2019.134363>
2. Yasuhiro Ishihara, **Kouichi Itoh**, Ami Oguro, Yoichi Chiba, Masaki Ueno, Mayumi Tsuji, Christoph F.A. Vogel, Takeshi Yamazaki. (2019) Neuroprotective activation of astrocytes by methylmercury exposure in the inferior colliculus. *Scientific Reports* 9:13899 <https://doi.org/10.1038/s41598-019-50377-9>

##### 2018

1. M. Tanaka, Y. Ishihara, S. Mizuno, A. Ishida, C. F. Vogel, M. Tsuji, T. Yamazaki, **K. Itoh**. (2018) Progression of vasogenic edema induced by activated microglia under permanent middle cerebral artery occlusion. *Biochemical and Biophysical Research Communications*, 496:582-587.
2. Kotani, M., Sato, Y., Ueno, A., Ito, T., **Itoh, K.**, Imadae, M. (2018) Two non-cytotoxic type 2 ribosome-inactivating proteins (Sambucus Sieboldiana lectin and Sambucus Nigra lectin) lead neurosphere cells to caspase-independent apoptosis. *Biomedical Research* 29:1570-1577

##### 2017

1. Yasuhiro Ishihara, **Kouichi Itoh**, Miki Tanaka, Mayumi Tsuji, Toshihiro Kawamoto, Suguru Kawato, Christoph F. A. Vogel, Takeshi Yamazaki. (2017) Potentiation of 17 $\beta$ -estradiol synthesis in the brain and elongation of seizure latency



through dietary supplementation with docosahexaenoic acid.

*Scientific Reports*7: 6268| DOI:10.1038/s41598-017-06630-0.

## **2016**

1. Kotani, M., Sato, Y., Ueno, A., Ito, T., **Itoh, K.**, Imadae, M. (2016) A Novel Monoclonal Antibody against Neuroepithelial and Ependymal Cells and Characteristics of Its Positive Cells in Neurospheres. *Cell Mol Neurobiol.* 36:11-26.
2. **Itoh, K.**, Ishihara, Y., Komori, R., Nochi, H., Taniguchi, R., Chiba, Y., Ueno, M., Takata-Tsuji, F., Dohgu, S., Kataoka, Y. (2016) Levetiracetam treatment influences blood-brain barrier failure associated with angiogenesis and inflammatory responses in the acute phase of epileptogenesis in post-status epilepticus mice. *Brain Res.*, 1652:1-13
3. Kamada M., Mitsui Y., **Matsuo T.**, Takahashi T. (2016) Reversible transformation and de-differentiation of human cells derived from induced pluripotent stem cell teratomas. *Hum Cell.* 29(1):1-9







## Laboratory of Pharmacokinetics and Pharmacodynamics

### Staff

#### Yoshihisa Kato, Ph.D., Pharmacist

Professor since 2010

Visiting Professor of University of Shizuoka

Ph.D. University of Shizuoka, 1991

#### Kazutaka Atobe, Ph. D., Pharmacist

Assistant Professor since 2007

Ph.D. The University of Tokushima, 2007

### Research

1. Integrated study on pharmacokinetics and pharmacodynamics for efficient drug discovery and on the optimum drug therapy
2. Basic and clinical analysis of drug-metabolizing enzyme and transporters influencing pharmacokinetics and pharmacodynamics
3. Basic research on the toxicity mechanism of drugs, xenobiotics and their active metabolites
4. Curcumin and doxorubicin co-encapsulation liposome effects on cell growth, apoptosis, and angiogenesis

The elucidation of relationship between pharmacokinetics (PK) and pharmacodynamics (PD) of drugs is critical not only for the discovery of novel drugs but also for their optimum uses in clinical settings. The effects of clinically used drugs are influenced by drug-metabolizing enzymes and drug-transporters. Therefore, one of our major research projects is to push an integrated analysis of PK and PD for investigational drugs by characterizing *in vivo* drug-metabolizing enzymes and drug-transporters under physiological and pathological conditions.

We are also conducting the research of mechanism(s) for the decrease in levels of serum thyroid hormones by xenobiotics and their active metabolites, and the species difference and extrapolation to human in these compounds-induced alteration of the hormone levels.

In addition to these projects, we have also focused on simultaneous determination of polybrominated diphenyl ethers (PBDEs), hydroxylated (OH-) and methoxylated (MeO-) PBDEs found in marine sponge by atmosphere pressure chemical ionization tandem mass spectrometry (APCI-LC/MS/MS), and immunotargeting of liposome to tumor and endothelial cell expressed membrane type-1 matrix metalloproteinase

(MT1-MMP).

### Publications (2016.4~2021.3)

#### [Original papers]

##### 2020

1. Fujii, Y., Harada, K.H., Nakamura, T., Kato, Y., Ohta, C., Koga, N., Kimura, O., Endo, T., Koizumi, A., Haraguchi, K. (2020) Perfluorinated carboxylic acids in edible clams: A possible exposure source of perfluorooctanoic acid for Japanese population. *Environ. Pollut.*, 263, 114369.
2. Kimura, O., Fujii, Y., Haraguchi, K., Kato, Y., Ohta, C., Koga, N., Endo, T. (2020) Effects of perfluoroalkyl carboxylic acids on the uptake of sulfobromophthalein via organic anion transporting polypeptides in human intestinal Caco-2 cells. *Biochem. Biophys. Rep.*, 24, 100807.

##### 2019

1. Kato, Y., Tamaki, S., Haraguchi, K., Ikushiro, S., Fujii, Y., Ohta, C., Atobe, K., Kimura, O., Endo, T., Koga, N., Yamada, S., Degawa, M. (2019) Kanechlor 500-mediated changes in serum and hepatic thyroxine levels primarily occur in a transthyretin-unrelated manner. *J. Appl. Toxicol.*, 39, 1701-1709.
2. Fujii, Y., Tuda, H., Kato, Y., Kimura, O., Endo, T., Harada, K.H., Koizumi, A., Haraguchi, K. (2019). Levels and profiles of long-chain perfluoroalkyl carboxylic acids in Pacific cod from 14 sites in the North Pacific Ocean. *Environ. Pollut.*, 247, 312-318.
3. Yamada, S., Kuraoka, S., Ito, Y., Kato, Y., Onoue, S. (2019) Muscarinic receptor binding of fesoterodine, 5-hydroxymethyl tolterodine, and tolterodine in rat tissues after the oral, intravenous, or intravesical administration. *J. Pharmacol. Sci.*, 140 73-78.
4. Ohta, C., Yamamoto, K., Kato, Y., Fujii, Y., Haraguchi, K., Kimura, O., Endo, T., Koga, N. (2019) Metabolism of 2,2',3,4',5,6,6'-heptachlorobiphenyl (CB188) by rat and guinea pig liver microsomes. *Fukuoka Acta Medica* 110: 83-90.

##### 2018

1. Fujii, Y., Kato, Y., Kozai, M., Matsuishi, T., Harada, K.H., Koizumi, A., Kimura, O., Endo, T., Haraguchi, K. (2018) Different profiles of naturally produced and anthropogenic organohalogens in the livers of cetaceans from the Sea of Japan and the North Pacific Ocean. *Mar. Pollut. Bull.*, 137, 230-242.
2. Kishimoto, Y., Tsukamoto, I., Nishigawa, A., Nishimoto, A., Kirino, Y., Kato, Y., Konishi, R., Maruyama, T., Sakakibara, N. (2018). Data on COA-Cl administration to the APP/PS2 double-transgenic mouse model of Alzheimer's disease: Improved hippocampus-dependent learning and unchanged spontaneous physical activity. *Data in Brief*, 20, 1877-1833.
3. Fujii, Y., Kato, Y., Masuda, N., Harada, K.H., Koizumi, A., Haraguchi, K. (2018) Contamination trends and factors affecting the transfer of hexabromocyclododecane diastereomers, tetrabromobisphenol A, and 2,4,6-tribromophenol to breast milk in Japan. *Environ. Pollut.*, 237,

936-943.

- Fujii, Y., Kato, Y., Sakamoto, K., Matsuishi, T., Harada, K.H., Koizumi, A., Kimura, O., Endo, T., and Haraguchi, K. (2018). Tissue-specific bioaccumulation of long-chain perfluorinated carboxylic acids and halogenated methylbipyrroles in Dall's porpoises (*Phocoenoides dalli*) and harbor porpoises (*Phocoena phocoena*) stranded in northern Japan. *Sci. Total Environ.*, 616-617, 554-563.

## 2017

- Kato, Y., Fujii, A., Haraguchi, K., Fujii, Y., Atobe, K., Endo, T., Kimura, O., Koga, N., Ohta, C., Yamada, S., and Degawa, M. (2017). Possible mechanism for the polychlorinated biphenyl induced liver-selective accumulation of thyroxine in rats. *J. Toxicol. Sci.*, 42, 663-669.
- Endo, T., Kimura, O., Terasaki M., Fujii, Y., Haraguchi, K., Ohta, C., Koga, N., and Kato, Y. (2017). Growth-related changes in non-essential and essential metals in the liver of star-spotted smooth-hounds (dogfish) *Mustelus manazo* from the northern region of Japan. *Mar. Environ. Res.* 131, 156-161.
- Kimura, O., Fujii, Y., Haraguchi, K., Kato, Y., Ohta, C., Koga, N., and Endo, T. (2017). Uptake of perfluorooctanoic acid by Caco-2 cells: Involvement of organic anion transporting polypeptides. *Toxicol. Lett.*, 277, 18-23.
- Sakakibara, N., Igarashi, J., Takata, M., Konishi, R., Kato, Y., and Tsukamoto, I. (2017). Synthesis and evaluation of novel cyclopropane nucleoside as potential tube formation agents. *Chem. Pharm. Bull.*, 65, 504-510.
- Kawami, M., Deguchi, J., Yumoto, R., Sakakibara, N., Tsukamoto, I., Konishi, R., Takamo, M. (2017). Effect of COA-Cl on transforming growth factor- $\beta$ 1-induced epithelial-mesenchymal transition in RLE/Abca3 cells. *Drug Metab. Pharmacokinet.*, 32, 224-227.
- Baba, M., Toyama, M., Sakakibara, N., Okamoto, M., Arima, N., Saijo, M. (2017). Establishment of an antiviral assay system and identification of severe fever with thrombocytopenia syndrome virus (SFTSV) inhibitors. *Antivir. Chem. Chemother.*, 25, 83-89.
- Ohta, C., Fujii, Y., Haraguchi, K., Kato, Y., Kimura, O., Endo, T., and Koga, N. (2017). Metabolism of 2,2',3,4,4',5,6'-heptachlorobiphenyl (CB182) by rat, guinea pig and human liver microsomes. *Fukuoka Acta Medica* 108: 51-57.

## 2016

- Endo, T., Kimura, O., Ohta, C., Koga, N., Kato, Y., Fujii, Y., and Haraguchi, K. (2016). Metal concentrations in the liver and stable isotope ratios of carbon and nitrogen in the muscle of silvertip shark (*Carcharhinus albimarginatus*) culled off Ishigaki Island, Japan: changes with growth. *PLOS ONE*, 11(2):e0147797. doi: 10.1371/journal.pone.0147797.
- Kimura, O., Fujii, Y., Haraguchi, K., Ohta, C., Koga, N., Kato, Y., Endo, T. (2016). Effect of quercetin on the uptake and efflux of aristolochic acid I from Caco-2 cell monolayers. *J. Pharm. Pharmacol.*, 68, 883-889.
- Igarashi, J., Okamoto, R., Yamashita, T., Hashimoto, T., Karita, S., Nakai, K., Kubota, Y., Takata, M., Yamaguchi, F., Tokuda, M., Sakakibara, N., Tsukamoto, I., Konishi, R., Hirano, K. (2016). A key role of PGC-1 $\alpha$  transcriptional coactivator in production of VEGF by a novel angiogenic agent COA-Cl in cultured human fibroblasts. *Physiological reports*, 4, e12742.

## [Others]

- Ohta, C., Yamamoto, K., Tokutomi, M., Kato, Y., Koga, N. (2019). *In vitro* metabolism of 3,7,3',4'-tetramethoxyflavone by rat, guinea pig and human liver microsomes. *Bulletin of*

Nakamura Gakuen Univ and Nakamura Gakuen Univ Junior Coll 51: 89-96.

- Kato, Y. (2018). A possible mechanism for the polychlorinated biphenyl-induced liver-selective accumulation of thyroxine. *Endocrine Disrupter News Letter*, 21: 4.
- Ohta, C., Ogata, H., Yamamoto K., Haraguchi, K., Kato, Y., Endo, T., and Koga, N. (2016). *In vitro* metabolism of 5,7,3',4'-Tetramethoxyflavone by rat liver microsomes. *Bulletin of Nakamura Gakuen Univ and Nakamura Gakuen Univ Junior Coll* 48: 155-161.

## [Proceedings]

### 2016

- Kato, Y., Haraguchi, K., Fujii, A., Fujii, Y., Kimura, O., Ohta, C., Endo, T., Koga, N., Yamada, S., Degawa, M. (2016). Induction of hepatic T<sub>4</sub> transporters by polychlorinated biphenyl in rats. *Organohalogen Compds* 78, 873-876.
- Ohta, C., Fujii, Y., Haraguchi, K., Kato, Y., Kimura, O., Endo, T., and Koga, N. (2016). Metabolism of 2,2',3,4,4',5,6'-heptachlorobiphenyl (CB182) by rat, guinea pig and human liver microsomes. *Organohalogen Compds* 78, 870-872.



## Laboratory of Pharmaceutics

### Staff

#### Tadakazu Tokumura, Ph. D.

Professor since 2013

Previous position: Associate Professor of International University of Health and Welfare.

M.Sc. Graduated school of Agriculture, Kagawa University, 1981

#### Takaaki Shirahata, Ph.D.

Associate Professor since 2020

Ph.D. Graduate school of Pharmaceutical Sciences, University of Tokyo, 2006

### Research

We have the research philosophy for Laboratory of Pharmaceutics, Kagawa School of Pharmaceutical Sciences, Tokushima Bunri University. Research projects were chosen based on the philosophy. The selected projects and those results were as follows:

#### (1) Preparation and evaluation of liposomes with fluticasone propionate for inflammatory of the kidneys

Glucocorticosteroids were administered orally to patients with inflammatory of the kidneys, but due to adverse events, their use was limited. However, new formulations of glucocorticosteroids have been developed to reduce systemic action. Fluticasone propionate (FLT) is an inhaled corticosteroid with high anti-inflammatory potency, used for the topical treatment of asthma. The purpose of this project was the preparation and evaluation of a new liposome with FLT for patients with inflammatory of the kidneys. Liposomes with FLT were tried to prepare by a common method. However, it was found that the preparation of the liposomes with FLT in phospholipid membrane and in water vesicles were difficult. We have tried to prepare the liposome by the LibMec method.

#### (2) Cleaning validation for machines used in the dispensary of pharmacy

When machines used in the dispensary, for an example, a dividing and packing machine was applied for a granule or a powder, it was easily considered that the little amount of the granule or powder was left in the machine. Therefore, cleaning the machine was required. This cleaning will be performed according the procedure which is decided by each pharmacy. In

the case of a pharmaceutical plant, cleaning validation was required for machines for manufacturing pharmaceutical preparations by GMP. The purpose of this project is to introduce the concept of cleaning validation to pharmacies. The preparations indicating the higher residual percent were researched on the basis of the result of questionnaire for pharmacists, which were the preparations of pranlukast hydrate, ketotifen fumarate, acetaminophen, and nicotinamide. The residual amounts of drugs on the machines have been determined. In addition, cleaning effects of a cleaner with a dividing and packing machine, and cleaning using lactose on the amount of drugs in the machine have been examined. The determination methods in these studies were submitted and published. We developed a method to determine the amount of  $\text{Ca}^+$  ion on the machines and found a new cleaning agent which was applied for a patent.

#### (3) Development of new preparations with sildenafil for newborns in NICU

Sildenafil is a phosphodiesterase type 5 inhibitor that selectively reduces pulmonary vascular resistance in animal models and adult humans. Recent studies reported that the administration of sildenafil significantly increased oxygenation and reduced mortality with no clinically important side effects in infants with persistent pulmonary hypertension of the newborn.

A pharmaceutical preparation containing sildenafil citrate (SIL) for pulmonary arterial hypertension, Revatio Tablets 20 mg from Pfizer Japan Inc., is available for adults in Japan, whereas that for children was not. Therefore, when sildenafil was administered to infants with persistent pulmonary hypertension of the newborn, a Revatio Tablets 20 mg was ground in a mortar to make a powder. Lactose was added to the powder as a diluent, and was mixed well in the mortar. The mixed powder was packaged for each dose using an automatic packaging machine. The contents of the drug in the packages were determined by HPLC. The determination method by HPLC was submitted and published. From this study the decrease of the content of sildenafil in the powder was found, which was submitted and accepted. A method for preventing the decrease was developed and reported. In the studies, the decrease of the content of sildenafil in the powder was found. A method for grinding tablets was developed, which was published. Furthermore, a method for preparing an oral liquid dosage form from Revatio Tablets was developed. The paper was prepared and submitted for this finding. The same study was performed for Cortril tablets 10 mg.

(4) Design and preparation of tablets containing drug A

A pharmacist and a dentist needed a tablet with drug A. This tablet will be used for a clinical test. We tried preparation of a tablet and several kinds of tablets were prepared. From the data of these tablets the content of drug A in tablets was decided to be 30%. We designed a formulation and prepared tablets. We are preparing a new drug A's tablet which control the disintegration time freely.

(5) Design and preparation of tablets containing 8 kinds of vegetable powder

Preparation of tablets containing 8 kinds of vegetable powders was required. We tried to prepare tablets containing each vegetable and 8 kind of vegetable powders. Under keeping water content we obtained data with reproducibility. A patent for the preparation with 8 kinds of vegetable powders was applied .

(6) Analysis of nonlinear phenomena of mathematical models of neurons

2. Yamamoto H., Kawakami M., Kitada R., Yokoi K., Toyofuku Y., Kurita T., Senba Y., Yamamoto H., Tokumura T., (2019). Effect of tablet grinding methods on sildenafil content in each package prepared by an automatic packaging machine for patients in the neonatal intensive care unit. *Research Bulletin of Tokushima Bunri University*, 98, 1-7.
3. Shirahata, T. (2019) A numerical study of the bistability of a mathematical model of leech oscillator interneurons: the transient current pulse condition for inducing the switch from a periodic spiking state to a chaotic spiking state. *Advanced Studies in Theoretical Physics* 13(7), 319-326.
4. Shirahata, T. (2019) Characterization of the kinetic properties of tetraethylammonium (TEA)-sensitive potassium conductance in a mathematical model of snail neurons. *Advanced Studies in Theoretical Physics* 13(4), 189-194.
5. Shirahata, T. (2019) Evaluation of the difference between a transient voltage-dependent calcium conductance and a stationary calcium-inhibited calcium conductance in a mathematical model of snail RPa1 neurons. *Advanced Studies in Theoretical Physics* 13(1), 11-22

**Publications (2016.4~2021.3)**

**[Original papers]**

**2021**

1. Shirahata, T. (2021). Modulating the dynamics of a mathematical model of an electrosensory neuron by the membrane capacitance. *Advanced Studies in Theoretical Physics* 15, 1-7.

**2020**

1. Ikeda H., Takamoto A., Ikeda J., Kohno K., Nakatsuma A., Tokumura T., Mori K., Iihara N., Houchi H., Ninomiya M. (2020). Investigation of Successful Eyedrop Instillation Rates and Analysis of Drop Positions Using High-speed Digital Video Recording System. *YAKUGAKU ZASSHI*, 140, 1455-1462.
2. Kitada R., Kawakami M., Yamamoto H., Yamamoto H., Kurita T., Tokumura T., (2020). Developing an optimized method for grinding sildenafil tablets for children to use in the neonatal intensive care units, *J. Pharma. Sci. Tech. Japan*. 80, 307-314.
3. Shirahata, T. (2020) A numerical study of the relationship between the ghostbursting model and the leak current. *Advanced Studies in Theoretical Physics* 14(2), 65-72.
4. Shirahata, T. (2020) Membrane capacitance can modulate the regularity of bursting in a mathematical model of snail neurons. *Advanced Studies in Theoretical Physics* 14(3), 127-132.
5. Shirahata, T. (2020) The transition from a periodic spiking state to a periodic bursting state via a chaotic bursting state: a numerical study of a dynamical system in neurobiophysics. *Advanced Studies in Theoretical Physics* 14(4), 151-160.

**2019**

1. Tokumura T., Yasumoto A., Kurita T., (2019). A Validated HPLC Pranlukast Assay Method for Cleaning Validation on an Automatic Packaging Machine. *Sch. Acad. J. Pharm.* 8(1), 11-14.

**2018**

1. Tokumura T., Nishio K., Kurita T., (2018). Validated HPLC Theophylline Assay Method for Cleaning Validation on an Automatic Packaging Machine. *Sch. Acad. J. Pharm.* 7(9), 414-416.
2. Tokumura T., Yasumoto A., Kurita T., (2018). Validated HPLC Acetaminophen Assay Method for Cleaning Validation on an Automatic Packaging Machine. *Sch. Acad. J. Pharm.* 7(10), 438-441.
3. Tokumura T., Yasumoto A., Kurita T., (2018). A Validated HPLC Ketotifen Fumarate Assay Method for Cleaning Validation on an Automatic Packaging Machine. *Sch. Acad. J. Pharm.* 7(11), 460-463.
4. Tokumura T., Yasumoto A., Kurita T., (2018). A Validated HPLC Nicotinamide Assay Method for Cleaning Validation on an Automatic Packaging Machine. *Sch. Acad. J. Pharm.* 7(12), 470-473.
5. Tokumura T., Yasumoto A., Kurita T., (2019). A Validated HPLC Pranlukast Assay Method for Cleaning Validation on an Automatic Packaging Machine. *Sch. Acad. J. Pharm.* 8(1), 11-14.
6. Shirahata, T. (2018). The relationship between burst regularity and spike-generating sodium conductance in a mathematical model of snail RPa1 neurons. *Advanced Studies in Theoretical Physics* 12, 151-156.
7. Shirahata, T. (2018). Numerical study of the bistability of a mathematical model of neocortical pyramidal neurons. *Applied Mathematical Sciences* 12, 105-114.

**2017**

1. Tokumura T., Yoshida N., Mori-Yasumoto K., Shiota O., Kurita T., (2017). Degradation Rates and products of fluticasone propionate in alkaline solutions. *J Pharmaceutical Analysis* 7, 297-302.
2. Kawakami M., Kitada R., Kurita T., Tokumura T., (2017). A Method for Decreasing the Amount of the Drug Remaining on the Surfaces of the Mortar and Pestle after Grinding Small Amount of Tablets. *YAKUGAKU ZASSHI* 137(8), 1017-1025.
3. Shirahata, T. (2017). Dependence of the ghostbursting model's



dynamical states on the current injected into the dendritic compartment and the ratio of somatic to total surface areas. *Advanced Studies in Theoretical Physics* 11, 561-565.

4. Shirahata, T. (2017). A Mathematical Modeling Study of Dopaminergic Retinal Neurons under Hyperpolarized Conditions. *International Journal of Theoretical and Mathematical Physics* 7, 4-8.

## **2016**

1. Matsuyama S., Kurita T., and Tokumura T. (2016). Degradation Rate of Ebastine in an Aqueous Solution at pH 1.2 and the Effects of Cyclo dextrins. *Sch. Acad. J. Pharm.* 5(4), 87-91.
2. Tokumura T., Kawakami M., Kitada R. and Kurita T., (2016). Validated Assay Method for Fexofenadine Hydrochloride in Powder Preparations of Allegra® 60 mg Tablets to Develop a New Method for Grinding Tablets on Dispensing in Japan. *Sch. Acad. J. Pharm.* 5(8), 359-362.
3. Shirahata, T. (2016). The Relationship of Sodium and Potassium Conductances with Dynamic States of a Mathematical Model of Electrosensory Pyramidal Neurons. *Applied Mathematics* 7(9), 819-823.
4. Shirahata, T. (2016). Dynamics of a Pituitary Cell Model: Dependence on Long-Lasting External Stimulation and Potassium Conductance Kinetics. *Applied Mathematics* 7(9), 861-866.
5. Shirahata, T. (2016). Quantitative evaluations of the contribution of the excitatory ionic conductance to repetitive spiking in a mathematical model of medial vestibular nucleus neurons. *Acta Biologica Hungarica* 67(2), 215-219.
6. Shirahata, T. (2016). Dynamic Behavior Induced by the Cooperation between Two Different Ionic Conductances in a Mathematical Model of Vibrissa Motoneurons. *Applied Mathematics* 7(10), 1043-1048.
7. Shirahata, T. (2016). The Effect of Variations in Ionic Conductance Values on the Suppression of Repetitive Spiking in a Mathematical Model of Type-A Medial Vestibular Nucleus Neurons. *Applied Mathematics* 7(10), 1134-1139.
8. Shirahata, T. (2016). Evaluating Bistability in a Mathematical Model of Circadian Pacemaker Neurons. *International Journal of Theoretical and Mathematical Physics* 6(3), 99-103.
9. Shirahata, T. (2016). The Effect of Variations in Ionic Conductance Values on the Dynamics of a Mathematical Model of Non-Spiking A-Type Horizontal Cells in the Rabbit Retina. *Applied Mathematics* 7(12), 1297-1302.





## Laboratory of Pharmaceutical Health Care and Sciences

### Staff

#### Masaki Ninomiva, Ph. D.

Professor since 2008

Doctor of medical science, University of Kagawa, 1995

#### Naomi Iihara, Ph.D.

Professor since 2011

Ph.D. University of Okayama; Pharmacist

#### Hiroaki Ikeda, Ph.D.

Professor since 2016

Ph.D. University of Hiroshima; Pharmacist

#### Hitoshi Houchi, Ph.D.

Professor since 2020

Doctor of medical science, University of Tokushima

#### Akira Nakatsuma, Ph. D.

Lecturer since 2017

Ph. D. University of Okayama, 2001

#### Taketo Okada, Ph.D.

Assistant Professor since 2013

Ph.D. Graduate School of Medical and Pharmaceutical Sciences,  
Chiba University; Pharmacist

### Research

#### **(1) Patient–Healthcare Professional Relationship**

Patients accept or refuse their medication therapy based on their personal beliefs. We analyze relationship between patient's perceptions of medication therapy and their behavior such as medication adherence.

We developed Medication Acceptance, Preference and Adherence Scale (MAPAS), which assessed each patient's beliefs, values and ideas concerning their acceptance and preference for medications and treatments. We found that patients' dissatisfaction consistent determinants of intentional non-adherence to medication, but not unintentional non-adherence. In addition, we found that cancer patients prefer aggressive therapies, even when self-estimations of ADR endurance are not very high, especially if they have been receiving chemotherapy for a short period of time.

#### **(2) Real-World Data Analysis to Evaluate Medications and Encourage Proper Use of Medications**

We are analyzing real-world medical information, including claims data, to evaluate the effectiveness and safety of medications, to encourage proper use of these medications, and to identify new therapeutic effects of existing medications (drug repositioning).

Using the National Database of Health Insurance Claims and Specific Health Checkups of Japan (NDB Japan), we clarified the following: (1) patients who used driving-prohibited and/or driving-cautioned medications accounted for approximately 70% of outpatients 25 years or older to whom medications were administered; (2) these medications were often used at dosages exceeding the recommended limit for older patients; (3) an older patient concomitantly used 20 driving-prohibited medications per month; (4) in relatively healthy older patients, 840,000 people/year experienced fractures, 350,000 people/year experienced fragility fractures, and approximately 20% of older patients experiencing fragility fractures received hospitalized care (restricting patients to older patients experiencing femoral neck fractures, approximately 80% received hospitalized care); and (5) concomitant use (i.e., polypharmacy) of central nervous system agents linearly increased the risk of experiencing fragility fractures, and the increased risk was even more prominent as age increased. The findings from (3) to (5) were supported by JSPS KAKENHI (grant no. JP15K08121).

#### **(3) Chem- and Bio-Informatics of Traditional Medication Systems, and Their Related Medicinal Resources**

We perform the informatics and computational science based on evidences related to medical and pharmaceutical issues. This research has been mainly demonstrated by chemical and biological experiments, database construction, and multivariate statistical analysis. In recent studies, we focus on the theoretical analysis of a traditional and an empirical medication system in *Kampo* (traditional Japanese medicine), and the transcriptome and metabolome analyses of medicinal resources related to *Kampo*.

#### **(4) Modulation of multi-drug resistance related protein transport by interaction with dietary supplements**

An interaction is taken to be the situation in which administration of a drug or substance induces changes in the pharmacokinetics of another simultaneously administered drug – by increasing either the plasma or intracellular concentration of the latter, and thus giving rise to the possibility of an adverse reaction.

The ABC-transporter superfamily, which functions as a drug efflux pump, is known to limit the absorption of a variety of drugs. We investigated the effects of food extracts on anticancer drug transport by the multi-drug resistance related proteins (MRPs). MRPs are efflux transporters expressed in human glioblastoma cell

line T98G. The effects on MRP mediated transport were also evaluated using calcein, which is the substrate of MRP. Acute exposure to kaempferol caused a concentration-dependent decrease in the extracellular efflux of calcein compared with the control. As for the simultaneous exposure to kaempferol and cisplatin, the cytotoxicity of cisplatin was expected to be potent because MRP and glutathione *S*-transferases (GST) are both inhibited by kaempferol. However, the cytotoxicity of cisplatin decreased.

Western blot analysis and reverse transcription–polymerase chain reaction (RT–PCR) showed that treatment with 10 and 20 μM kaempferol for up to 72 hr was able to significantly lower MRP2 expression, whereas increased expression in a concentration-dependent on GST mRNA and protein levels. Furthermore, GST was strongly activated in T98G cell treated with kaempferol.

The results of the study also point to possible kaempferol–drug interaction, especially when the cytotoxicity of anticancer drugs are dependent on glutathione *S*-transferases and MRP-mediated transport processes. Hereafter, these possible efficacies need to be examined under in vivo conditions in detail.

---



---

**Publications (2016.4–2021.3)**

---



---

**[Original papers]**

**2021**

1. Tatsumichi T, Tanaka H, Okazaki T, Takahashi K, Suzuki K, Kawakita K, Houchi H, Kuroda Y, Kosaka S.(2021) Uterine sarcoma with posterior reversible encephalopathy syndrome associated with pazopanib. *J Clin Pharm Ther* 46(1) : 223-226.

**2020**

1. Ohara E, Bando Y, Yoshida T, Ohara M, Kirino Y, Iihara N (2020) Central Nervous System Agent Classes and Fragility Fracture Risk among Elderly Japanese Individuals in a Nationwide Case-Crossover Design Study. *Biol Pharm Bull.* 43(2):340-347
2. Ohara E, Bando Y, Yoshida T, Ohara M, Kirino Y, Iihara N (2020) Fracture risk increased by concurrent use of central nervous system agents in older people: Nationwide case–crossover study. *Res Social Adm Pharm.* S1551-7411(20) : 30581-7
3. Ikeda H, Takamoto A, Ikeda J, Kohno K, Nakatsuma A, Tokumura T, Mori K, Iihara N, Houchi H, Ninomiya M(2020) Investigation of Successful Eyedrop Instillation Rates and Analysis of Drop Positions Using High-speed Digital Video Recording System. *YAKUGAKU ZASSHI* 140(12) : 1455-1462
4. Tanaka H, Atagi K, Tatsumichi T, Yamaguchi K, Takahashi K, Kaji M, Kosaka S, Houchi H.(2020) Relationship between epidermal growth factor receptor mutations and skin rash in non-small cell lung cancer patients. *J Chemother.* 32(2) : 83-87.

**2019**

1. Iihara N, Ohara E, Bando Y, Yoshida T, Ohara M, and Kirino Y (2019) Fragility fractures in older people in Japan based on the national health insurance claims database. *Biol Pharm Bull* 42(5):778-785

2. Iihara N, Ohara E, Baba K, Nagao S, Bando Y, Yoshida T, Ohara M, and Kirino Y (2019) Decreased risk of fragility fractures associated with statin use in the older Japanese population: a nationwide case-crossover study. *BPB Reports*; 2(3):35-38
3. Yamakado S, Cho H, Inada M, Morikawa M, Jiang YH, Saito K, Nakaishi K, Watabe S, Takagi H, Kaneda M, Nakatsuma A, Ninomiya M, Imachi H, Arai T, Yoshimoto T, Murao K, Chang JH, Chen SM, Shih YC, Zeng MJ, Ke LY, Chen CH, Yoshimura T, Miura T, Ito E.(2019) Urinary adiponectin as a new diagnostic index for chronic kidney disease due to diabetic nephropathy. *BMJ open diabetes research & care* 7(1) e000661

**2017**

1. Iihara, N., Ohara, E., Nishio, T., Muguruma, H., Matsuoka, E., Houchi, H., and Kirino, Y. (2017) Patient Preference for Aggressive Medication Therapies with Potentially Stronger Adverse Drug Reactions Revealed Using a Scenario-based Survey *YAKUGAKU ZASSHI* 137(9), 1161-1167

**2016**

1. Iihara N, Bando Y, Ohara M, Yoshida T, Nishio T, Okada T, and Kirino Y (2016) Polypharmacy of medications and fall-related fractures in older people in Japan: a comparison between driving-prohibited and driving-cautioned medications. *J Clin Pharm Ther* 41(3), 273—278
2. Okada T, Afendi FM, Yamazaki M, Chida KN, Suzuki M, Kawai R, Kim M, Namiki T, Kanaya S, and Saito K (2016) Informatics framework of traditional Sino-Japanese medicine (Kampo) unveiled by factor analysis. *J Nat Med* 70(1), 107—114
3. Watabe, S., Morikawa, M., Kaneda, M., Nakaishi, K., Nakatsuma, A., Ninomiya, M., Yoshimura, T., Miura, T., Ito, E.(2016) Ultrasensitive detection of proteins and sugars at single-cell level. *Commun Integr Biol.* 9(1) e1124201
4. Okada T, Takahashi H, Suzuki Y, Sugano S, Noji M, Kenmoku H, Toyota M, Kanaya S, Kawahara N, Asakawa Y, and Sekita S (2016) Comparative analysis of transcriptomes in aerial stems and roots of *Ephedra sinica* based on high-throughput mRNA sequencing. *Genom Data* 10, 4—11





## Laboratory of Pharmaceutical Education

### Staff

#### Takayuki Ohshima, Ph. D.

Associate Professor since 2008

Ph.D. Graduate School of Agriculture, Tsukuba University, 2001

#### Shoji Ueki, Ph.D., Lecturer

Ph.D. Graduate School of Human and Environmental Studies,  
Kyoto University, 2002.

### Research

#### Theme 1. Functional regulation of proteins by post-translational modifications (Ohshima)

Post-translational modifications such as ubiquitination, phosphorylation, and acetylation regulate the function of many proteins. Recently, a number of ubiquitin-like proteins (Ubl) have been identified that are covalently linked to lysine residues in target proteins. One Ubl, SUMO-1, also known as PIC1, UBL1, sentrin, GMP1, and SMT3, is an 11-kDa protein that is structurally homologous to ubiquitin. SUMO-1 modification plays an important role in altering the function of modified proteins, including transcriptional activation, nuclear localization, and decreased turnover. SUMO-1 is conjugated to proteins through a series of enzymatic steps. Initially, the ATP-dependent formation of a thioester bond between SUMO-1 and the E1 enzyme complex (SAE1/Uba2) is formed, and SUMO-1 is then transferred to the E2-conjugating enzyme Ubc9. Finally, SUMO-1 is conjugated from Ubc9 directly to a lysine residue of target proteins. The E3 ligase that conjugates SUMO-1 to target molecules in vitro and in vivo has only recently been identified. One group of such E3 ligases, protein inhibitor of activated STAT (PIAS) family proteins homologous to the yeast Siz family protein, has a conserved RING-finger domain, which regulates transactivation of many transcription factors by conjugating SUMO-1. In order to understand the molecular mechanisms by which transcriptional regulation through SUMO-1 modification, we focus the transcription (co)factors involving in cell growth, differentiation, immortalization and attempt to define the biological significance of sumoylation in carcinogenesis.

**Theme 2. Analyzing the molecular mechanisms by which human T-cell leukemia virus type-1 (HTLV-1) infection is the cause of morbidity and mortality in adult T-cell leukemia (ATL) (Ohshima).**

Human T-cell leukemia virus type 1 (HTLV-1), a human retrovirus, is the causative agent of adult T-cell leukemia (ATL), an aggressive malignancy of CD4<sup>+</sup> T lymphocytes. HTLV-1 is also closely related to HTLV-1-associated myelopathy or tropical spastic paraparesis (HAM/TSP). Although most HTLV-1-infected people are non-symptomatic, approximately 4% of patients develop ATL after a long period of latent infection (over 50 years). To date, there are few effective therapies available for ATL patients, possibly due to a lack of detailed information about the molecular mechanism of cell growth regulation by HTLV-1.

HTLV-1 basic leucine-zipper factor, HBZ, which is encoded in the complementary strand of the HTLV-1 genome, has been identified. HBZ is a nuclear protein that contains a transactivation domain and a basic leucine-zipper (bZIP) domain in its N- and C-termini, respectively. HBZ interacts with cellular bZIP proteins, in particular with the AP-1 family of transcription factors, and regulates their transcriptional activities, resulting in the control of viral gene transcription from the HTLV-1 promoter. In contrast to other viral protein, HBZ is constitutively expressed in all ATL patient samples because its 3'-LTR is conserved and unmethylated in ATL cells. HBZ may play a central role in the pathogenesis of ATL, however, its function has not yet been understood.

#### Theme3. The Study of the structure and the dynamics of proteins by means of site-directed spin-labeling ESR

The spin label reagent attached to cysteine residue tells us its environment and the structural information of the protein through the ESR spectrum. In other words, the spin label acts as a reporter. In the case of two spin labels introduced into a protein, we can get the distance between two labels by the spectrum. The merit of this method is that we can monitor only the spin label whatever the sample condition is. So we can measure the membrane protein in lipid for example, that is difficult to measure by other spectroscopic method.

### Publications (2016.4~2021.3)

#### [Original papers]

#### 2021

1. Hagihara, R., Umeno, T., Ueki, S., Yoshihara, D., Fuchi, Y., Usui, K., Sakuma, M., Yamada, K. and Karasawa, S. (2021) Push-Pull Bisnaphthyridylamine Supramolecular Nanoparticles: Polarity-Induced Aggregation and Crystallization-Induced Emission Enhancement and Fluorescence Resonance Energy Transfer. *Chem. Eur. J.* 27, 3039-3046.

#### 2020

2. Tanaka, Y., Mukai, R., Ohshima, T. (2020) HTLV-1 viral oncoprotein HBZ contributes to the enhancement of HAX-1 stability by impairing the ubiquitination pathway. *J. Cell. Physiol.* in press.
3. Iwamoto, M., Sano, W., Nishioka, K., Ohashi, H., Sugiyama, R., Ryo, A., Ohki, M., Yun, JH., Park, SY., Ohshima, T., Suzuki, R., Aizaki, H., Muramatsu, M., Matano, T., Iwami, S., Sureau, C., Wakita, T and Watashi, K. (2020) The machinery for endocytosis of epidermal growth factor receptor coordinates the transport of incoming hepatitis B virus to the endosomal network. *J. Biol. Chem.* 295, 800-807.
4. Kino, K., Ohshima, T., Kawada, T., Kobayashi, T., Miyazawa, H. (2020) A strategy for finding new medicines against the novel coronavirus disease (COVID-19) derived from base pairing with DNA damage. *Global. J. Infectious Disease and Clinical Research.* in press.

#### **2019**

5. Zhao, C., Somiya, T., Takai, S., Ueki, S. and Arata, T. (2019) Structural dynamics of the N-extension of cardiac troponin I complexed with troponin C by site-directed spin labeling electron paramagnetic resonance. *Sci. Rep.* 9, 1-13.

#### **2018**

6. Morishita, K., Ueki, S., Fuchi, Y., Murayama, S., Kaneko, T., Narita, N., Kobayashi, S., Hirai, G., Aoki, I. and Karasawa, S. (2018) Self-assembled biradical ureabenzene nanoparticles for magnetic resonance imaging. *ACS Appl. Nano Mater.* 1, 6967-6975.
7. Abe, J., Ueki, S., Yamauchi, S., Arata, T. and Ohba, Y. (2018) Double quantum coherence EPR reveals the structure-function relationships of the cardiac troponin C - troponin I complex regulated by Ca<sup>2+</sup> ions and a phosphomimetic. *Appl. Magn. Reson.* 49, 893-910.

#### **2016**

8. Mukai R., and Ohshima T. (2016) Enhanced stabilization of MCL1 by the human T-cell leukemia virus 1 bZIP factor is modulated by blocking the recruitment of cullin 1 to the SCF complex. *Mol. Cell. Biol.* 36, 3075-3085.
9. Klionsky, D. J., et al (including Ohshima T.). (2016) Guidelines for the use and interpretation of assays for monitoring autophagy (3<sup>rd</sup> edition). *Autophagy* 12, 1-222.



## Center for Instrumental Analysis

### Staff

**Professor:** Kentaro Yamaguchi, Ph. D (Apr. 2004) (LAC)

**Associate Professor:** Hajime Takeuchi, Ph.D. (Apr. 2013) (LPHS)

**Lecturer:** Kazuaki Ohara, D. Eng. (Apr. 2010)

Educational History:

Graduated from Graduate School of Tokyo University  
in Mar. 1992

### Research

#### Observation of the giant molecules by means of mass spectrometry:

Mass Spectrometry (MS) has been developed and adopted to wide variety of analytical chemistry in recent years.

Although MS was basically developed for high molecular weight substances in the field of biochemistry, the measurement of huge molecules over 10k Da is still very difficult. This is caused by the ionizing problems, stability of the compounds and the existence of various impurities.

We develop some new techniques to overcome these problems by using newly equipped FT-ICR mass spectrometer.

#### Crystalline Sponge-Laser Desorption Ionization:

Recently, crystalline sponge (CS) method was discovered to analyze non-crystalline compounds by means of X-ray crystallography. The laser desorption ionization (LDI) mass spectrometry (MS) is first adopted to use this CS as a matrix for ionization. Since then, this new ionization method (CS-LDI MS) has been developed in this laboratory.

### Publications (2016.4–2021.3)

#### [Original papers]

##### 2020

1. \*Danjo, H.; Masuda, Y.; Kiden, Y.; Kawahata, M., Ohara, K.; and Yamaguchi, K. (2020) Preparation of cage-shaped hexakis(spiroborate)s  
Org. Biomol. Chem., 2020, 00 1-7
2. \*Ohara, K.; Hayashi, Y.; and \*Yamaguchi, K. (2020) Laser Desorption Ionization-Mass Spectrometry of Linear Diphenylenes Encapsulated in Crystalline Sponge  
Bull. Chem. Soc. Jpn. 2020, 93, 963-968.
3. Ohara, K.; and \*Yamaguchi, K. (2020) Combined Analysis Based on a Crystalline Sponge Method

Analytical Sciences, 2021, 37, 167-175

##### 2019

1. Hayashi, Y.; \*Ohara, K.; Taki, R.; Saeki, T.; Yamaguchi, K. (2019) Crystalline sponge-laser desorption ionization (CS-LDI) of unsaturated cyclic organic compounds encapsulated in different electronic environments in pores  
Analytica Chimica Acta, 2019, 1064, 80-86.
2. Ishizuka, T.; Kogawa, T.; Makino, M.; Shiota, Y.; Ohara, K.; Kotani, H.; Nozawa, S.; Adachi, S.; Yamaguchi, K.; Yoshizawa, K.; and \*Kojima, T. (2019) Formation of a Ruthenium(V)—Imido Complex and the Reactivity in Substrate Oxidation in Water through the Nitrogen Non-Rebound Mechanism  
Inorg. Chem., 2019, 58, 12815-12824.
3. \*Tominaga, M.; Kunitomi, N.; Ohara, K.; Kawahata, M.; Itoh, T.; Katagiri, K.; and \*Yamaguchi, K. (2019) Hollow and Solid Spheres Assembled from Functionalized Macrocycles Containing Adamantane  
J. Org. Chem., 2019, 84, 5109-5117.

##### 2018

1. \*Tominaga, M.; Iekushi, A.; Ohara, K.; Kawahata, M.; Itoh, T.; \*Yamaguchi, K.; \*Azumaya, I. (2018). Crystallization Processes through Self-assembled Materials Dependent on the Substituents of Tetrapodal Adamantanes  
Chem. Lett., 2018, 47, 1279-1281.
2. Hayashi, Y.; Ohara, K.; Taki, R.; Saeki, T.; \*Yamaguchi, K. (2018). Combined analysis of 1,3-benzodioxoles by crystalline sponge X-ray crystallography and laser desorption ionization mass spectrometry.  
Analyst, 2018, 143, 1475-1481.
3. Hirao, T.; Kim, D-S.; Chi, X.; Lynch, V-M., Ohara, K.; \*Park, J-S.; \*Yamaguchi, K.; \*Sessler, J-L. (2018). Control over multiple molecular states with directional changes driven by molecular recognition. Nat. Commun., 2018, 9, 823.
4. \*Tominaga, M.; Ando, H.; Ohara, K.; Itho, T.; Yamaguchi, K. (2018). Crystal Formation of a Coordination Cage through Spherical Particles Derived from a Tripodal Ligand Containing Adamantane Moiety and Silver(I) Salt.  
Chem. Lett., 2018, 47, 315-317.

##### 2017

1. \*Tominaga, M.; Takahashi, E.; Ukai, H.; Ohara, K.; Itho, T.; Yamaguchi, K. (2017). Solvent-Dependent Self-Assembly and Crystal Structures of a Salen-Based Macrocyclic.  
Org. Lett., 2017, 19(7), 1508-1511.

**2016**

1. \*Tominaga, M.; Kawaguchi, T.; Ohara, K.; Yamaguchi, K.; Katagiri, K.; Itoh, T.; \*Azumaya, I. (2016). Vesicle Formation of Three-dimensional Trinuclear Silver(I) Complexes Built from Tris-NHC Ligands Bearing Long Alkyl Chains. *Chem. Lett.*, 2016, 45, 1201-1203.
2. \*Tominaga, M.; Noda, A.; Ohara, K.; Yamaguchi, K.; Itoh, T. (2016). Synthesis, Hollow Spherical Aggregation, and Crystallization of an Adamantane-derived Azacyclophane Containing Triazine Rings. *Chem. Lett.*, 2016, 45, 733-775.
3. \*Ohara, K.; Tominaga, M.; Masu, H.; Azumaya, I.; \*Yamaguchi, K. (2016). Adamantane-based Bidendate Metal Complexes in Crystalline and Solution State. *Anal. Sci.*, 2016, 32(12), 1347-1352.
4. \*Kawahata, M.; Komagawa, S.; Ohara, K.; Fujita, M.; \*Yamaguchi, K. (2016). High-resolution X-ray structure of methyl salicylate, a time-honored oily medicinal drug, solved by crystalline sponge method. *Tetrahedron Lett.*, 2016, 57, 4633-4636.
5. Sawada, T.; Yamagami, M.; Ohara, K.; Yamaguchi, K.; \*Fujita, M. (2016). Peptide [4]Catenane by Folding and Assembly. *Angew. Chem. Int. Ed.*, 2016, 55, 4519-4522.
6. Ishizuka, T.; Watanabe, A.; Kotani, H.; Hong, D.; Satonaka, K.; Wada, T.; Shiota, Y.; Yoshizawa, K.; Ohara, K.; Yamaguchi, K.; Kato, S.; \*Fukuzumi, S.; \*Kojima, T. (2016). Homogeneous Photocatalytic Water Oxidation with a Dinuclear Co<sup>III</sup>-Pyridylmethylamine Complex. *Inorg. Chem.*, 55, 1154-1164.
7. Wang, S.; Sawada, T.; Ohara, K.; Yamaguchi, K.; \*Fujita, M. (2016). Capsule-Capsule Conversion by Guest Encapsulation. *Angew. Chem. Int. Ed.*, 55, 2063-2066.
8. \*Tominaga, M.; Kawaguchi, T.; Ohara, K.; Yamaguchi, K.; Masu, H.; \*Azumaya, I. (2016). Synthesis and crystal structures of twisted three-dimensional assemblies of adamantane-bridged tris-NHC ligands and Ag<sup>I</sup>. *CrystEngComm*, 18, 266-273.



## *Laboratory for Neural Circuit Systems* *Institute of Neuroscience*

### Staff

#### **Takashi Tominaga, Ph.D.**

Associate Professor since 2005

D.Sc. in University of Tsukuba, 1994

#### **Yoko Tominaga, Ph. D.**

PostDoctoral Researcher since 2020

#### **Makiko Taketoshi**

Research Assistant since 2016

#### **Ai Taniguchi**

Research Assistant since 2019

### Research

Since the expansion of the Institute of Neuroscience, Tokushima Research areas of the laboratory

I. Study of neural circuit mechanisms of learning and memory with optical recording methods

The primary interest of the laboratory is the neural circuit mechanisms of higher cognitive functions, such as learning and memory, in the brain. A measurement method that makes the laboratory unique in the field is an optical recording method that uses voltage-sensitive dye (VSD) with electrophysiology. As one of the leading laboratories in the use of this technique, we have been continuously developing the method since the 90s and have provided established tools to colleges throughout the world.

II. Analysis of the electrophysiological control of excitable membranes in connection with ciliary structures.

By focusing on the role of information integration in the membrane potentials of cells, we have used the model organism, paramecium, which is the simplest single-celled animal, to study the mechanisms of the membrane potential control of cilia.

Specific research aims

Area I

1. Neural circuitry mechanisms of the limbic system: Optical study. The limbic system is a brain structure that is critical for emotion and declarative memory. The limbic system consists of many areas, including the hippocampus, amygdala, and associated cortical systems, such as the entorhinal and piriform cortices. We are analyzing the function of these circuits by visualizing neural activity with the VSD optical recording methods.

We have revealed reverberation circuits and information

integration mechanisms in the deep layers of the entorhinal and piriform cortices in association with the hippocampal neural circuit (Science, 1996; Neurosci. Res., 2008) with Professor Toshio Iijima's group at Tohoku University. In addition, we have found that neuronal signals from layer III of the medial entorhinal cortex are critical for temporal association memory formation (Science, 2011) with Professor Susumu Tonegawa's laboratory at the Picower center for learning and memory at MIT. We have also revealed information integration processes in the entorhinal cortex (Eur. J. Neurosci., 2007) with Dr. Riichi Kajiwara and Dr. Ichiro Takashima's group at AIST Japan. We showed that the D-current plays an important role in the integration of neural activity in the entorhinal cortex in collaboration with Dr. Riichi Kajiwara (Japan Society for Neuroscience, 2012; Society for Neuroscience, 2012; supported by KAKENHI).

2. Development of an optical measurement microscope: stimulation pattern with a confocal microscope system and a new optical measurement.

The optical recording method with VSD requires high-speed and low-noise imaging. This requires new special optics. We have been developing special optics that meet these requirements (J. Neurosci. Methods, 2000; now commercially available as THT-microscope, BrainVision).

We have also developed special new ultra-high-speed and low-noise confocal optics (submitted; supported by JST tansaku, A-STEP). We have developed a microscope that allows us to conduct light stimulus patterns to the neural networks (SFN abstr., 2011). Recently, we have started a project to develop a special chamber that is suitable for these experiments (Supported by JST A-STEP, 2012-2013).

3. Mechanisms of late-onset brain dysfunctions caused by early transient exposure to chemicals and drugs.

There are several lines of evidence that indicate that the early transient exposure to certain chemicals during brain development results in the malfunctioning of cognitive function in adulthood. The neural mechanisms of these effects are largely unknown. We are evaluating these neural mechanisms with our optical recording methods as part of the research team that is supported by the Ministry of Health, Labour and Welfare (2008-, 2015-).

We have shown that the administration of valproic acid, which is the first-line drug used in the treatment of epilepsy, during pregnancy causes a collapse of the balance of excitation and inhibition in children born to these mothers (Japanese Society of Toxicology, 2012). This study is joint research that is being

conducted with Kentaro Tanemura sensei of Tohoku University, Dr. Yoshikazu Nakajima of Nara Institute of Science and Technology, and the teacher Katsuhide Igarashi of the Japan Institute of Health Sciences. We organized a symposium at the Japan Neuroscience Society in Kyoto in June 2013.

4. Study of the Application of optical measurement methods to test ES cell function.

This study was initiated in 2012 and is intended to use the optical recording method with VSD to characterize cells that are differentiated from human ES cells. This is joint research that is being conducted with Prof. Katsunori Sasaki, Shinshu University [supported by KAKENHI (A)].

5. Visualization of cell-specific membrane potential responses by the introduction of voltage sensitive fluorescent protein (VSFP), which is a new membrane potential-sensitive protein.

In collaboration with Dr. Thomas Knopfel at RIKEN BSI, we have succeeded in detecting optical signal-specific hippocampal pyramidal cells by introducing a new VSFP from 2012. The detection of cell-specific signals are made possible in specimens in vivo by the further development of this technique.

6. Detection and use of the optical signals from neural excitation with a polarized light microscope.

This is joint research that is being conducted with Dr. Tomomi Tani and Dr. Oldenburg of Woods Hole MBL. In this study, we aim to detect changes in nerve optical properties, such as polarization, that are caused by nerve excitation. In March of 2013, we will visit the MBL for this purpose.

7. Studies of the mechanisms of regulation by a variety of factors and the neural responses of hippocampal neural synapses.

We are collaborating with various laboratories to apply our method in order to examine the neural pathologies of diseases, such as Alzheimer's disease, and other factors (J. Neurosci., 1996; Neurosci. Letters, 1997; J. Neurosci., 2002; PNAS, 2004; Neuropharmacol., 2005).

8. Regulation mechanisms of neural activity by inhibitory synapses in the hippocampus.

The unique feature of VSD imaging compared to other biological imaging methods is that it can measure hyperpolarization and, thus, inhibitory neural responses. From this point of view, we found depolarizing GABA responses in area CA1 in response to tetanic stimulation (J. Neurophysiol., 2002; Pflugers Arch., 2010). In addition, we found perisomatic inhibitory actions with feedforward inhibition (Neurosci. Res., 2009).

#### Area II

1. Physiological studies of osmoregulatory mechanisms and contractile vacuoles of Paramecium.

For the first time, we have applied electrophysiological methods to the study of the Paramecium organelles, the contractile vacuoles, and have revealed the membrane dynamics that are involved in this

periodic activity (J. Exp. Biol., 1997a, b; 1998a, b; J. Cell Sci., 1999; J. Exp. Biol., 2005).

2. Physiological studies of membrane proteins and cilia of paramecium response mechanisms.

The use of recent techniques of RNA interference knockdown in combination with the whole genome project of the Paramecium has enabled us to knock down particular proteins that are associated with cilia disease (so-called ciliopathy). We have found that the absence of some molecules that have been thought to be structural proteins induces behavioral changes. By applying electrophysiological methods to this mutant, we have examined the relationship of that behavior and the membrane responses and found that some of these "structural proteins" are actually involved in membrane potential-mediated signal transduction (e.g., Eukary. Cell, 2012). This is joint research that is being conducted with Prof. Hori of Yamaguchi University.

---

---

#### Publications (2016.4~2020.3)

---

---

#### [Original papers]

\*Corresponding author

#### 2021

1. \*Ishida M, Hori M, Ooba Y, Kinoshita M, Matsutani T, Naito M, Hagimoto T, Miyazaki K, Ueda S, Miura K, Tominaga T. A Functional Aqp1 Gene Product Localizes on The Contractile Vacuole Complex in Paramecium multimicronucleatum. J Eukaryot Microbiol. 2021;e12843. PMID: 33501744

#### 2020

2. Hayase, Y., Amano, S., Hashizume, K., Tominaga, T., Miyamoto, H., Kanno, Y., et al. (2020). Down syndrome cell adhesion molecule like-1 (DSCAML1) links the GABA system and seizure susceptibility. Acta Neuropathologica Commun 8, 206. doi:10.1186/s40478-020-01082-6.
3. Kajiwara, R\*, Tominaga, T. (2020). Perirhinal cortex area 35 controls the functional link between the perirhinal and entorhinal -hippocampal circuitry BioEssays <https://dx.doi.org/10.1002/bies.202000084> (Featured cover)
4. Kawano, M., Tominaga, T., Ishida, M., Hori, M\*. (2020). Roles of Adenylate Cyclases in Ciliary Responses of Paramecium to Mechanical Stimulation Journal of Eukaryotic Microbiology 67(5), 532-540. <https://dx.doi.org/10.1111/jeu.12800> (Featured cover)
5. Luyben, T., Rai, J., Li, H., Georgiou, J., Avila, A., Zhen, M., Collingridge, G., Tominaga, T., Okamoto, K.\* (2020).



- Optogenetic Manipulation of Postsynaptic cAMP Using a Novel Transgenic Mouse Line Enables Synaptic Plasticity and Enhances Depolarization Following Tetanic Stimulation in the Hippocampal Dentate Gyrus *Frontiers in Neural Circuits* 14(), 24. <https://dx.doi.org/10.3389/fncir.2020.00024>
6. Koike-Tani, M., Tominaga, T., Oldenbourg, R., Tani, T.(2020). Birefringence changes of dendrites in mouse hippocampal slices revealed with polarizing microscopy. *Biophysical Journal* 118, 2366–2384, May 19, 2020  
DOI:<https://doi.org/10.1016/j.bpj.2020.03.016>
7. Tominaga, T., Kuhn, B. (2020). Cutting-edge brain research from a biophysical perspective: symposium synopsis of Session 1SCP at BJS2019 in Miyazaki, Kyushu, Japan *Biophysical Reviews* 12(2), 261-262.  
<https://dx.doi.org/10.1007/s12551-020-00637-0>
- 2019**
8. Saito, H., Hara, K., Tominaga, T., Nakashima, K., \*Tanemura, K.(2019). Early -life exposure to low levels of permethrin exerts impairments in learning and memory with the effects on neuronal and glial population in adult male mice *Journal of Applied Toxicology* <https://dx.doi.org/10.1002/jat.3882> (Featured cover)
9. Tominaga, Y., Taketoshi, M., Maeda, N., \*Tominaga, T. Wide-field Single-photon Optical Recording in Brain Slices Using Voltage-sensitive Dye. *J. Vis. Exp.* (148), e59692, doi:10.3791/59692 (2019).
10. \*Kajiwara R, Tominaga Y, Tominaga T (2019) Network plasticity involved in the spread of neural activity within the rhinal cortices as revealed by voltage-sensitive dye imaging in mouse brain slices *Front. Cell. Neurosci.* doi: 10.3389/fncel.2019.00020
- 2018**
1. Tominaga, Y., Taketosh M., Tominaga, T.\*, (2018) Overall assay of neuronal signal propagation pattern with long-term potentiation (LTP) in hippocampal slices from the CA1 area with fast voltage-sensitive dye imaging *Front. Cell Neurosci.*, 12:389 doi: 10.3389/fncel.2018.00389
- 2016**
1. Yoshimura, H., Sugai, T., Kato, N., Tominaga, T., Tominaga, Y., Hasegawa, T., Yao, C., and Akamatsu, T. Interplay between non-NMDA and NMDA receptor activation during oscillatory wave propagation: Analyses of caffeine-induced oscillations in the visual cortex of rats. *Neural Networks*. 79:141-149 (2016)
- DOI: 10.1016/j.neunet.2016.03.012
2. \*Tominaga T and Tominaga Y (2016). Paired burst stimulation causes GABAA receptor-dependent spike firing facilitation in CA1 of rat hippocampal slices. *Front. Cell. Neurosci.* 10:9. doi: 10.3389/fncel.2016.00009





徳島文理大学 香川薬学部

**第 15 号**

2021 年 3 月 31 日 発行

発行：徳島文理大学 香川薬学部

〒769-2193 香川県さぬき市志度 1314-1

電話 (087) 899-7350 (代表)

FAX (087) 894-0181

<http://kp.bunri-u.ac.jp/>

